明治三十七年二月十九日第三種郵便物認可　明治四十二年十一月十五日增刊（每月一回一日發行）

家庭日記



臨時增刊　五年十五號

女子文壇

報酬確實

若き婦人

原稿募集主意

女子文壇の來年の第一增刊は「若き婦人」と定まりました、材料は凡て清新なる思想を持つて居られる世の婦人諸君に仰ぎ、記者は之を誠實に選拔し、斬新に編輯しやうと思ひます。**募集原稿の範圍は極めて廣い、**廣いから自然投稿の方法に於ても**極く自由**です。出來得る限り所謂若き婦人の代表者とも見るべき雜誌を編輯したいと思ひますから、諸君も亦出來る限り、忌憚なく、自由に、其筆を振つて頂きたい。**創作に得意な人は創作に於て、新らしい思考を抱いて居る人は言説に於て、隱れたる事實を知つてゐる人は記實に於て、**それ〳〵思ふ通りの原稿を見せて下さい、記者は必ず現下の**若き婦人界を代表した好雜誌**が出來るであらうと信じます。なほ參考の爲め投稿の概略的分類と、報酬の方法とを左に揭げて置きます。

當選報酬

一等	金貳拾圓	（壹人）
二等	金拾五圓	（貳人）
三等	金七圓	（參人）
四等	金五圓	（四人）
五等	金參圓	（五人）
六等	金貳圓	（拾五人）
七等	金壹圓	（貳拾人）
表紙	金五圓以下	（壹人）
口繪	金參圓以下	（壹人）
スケッチ	金貳圓以下	（拾人）

贈與の方法

▲一等、二等及び▲表紙、口繪の當選者には正金にて呈す▲其他は價格相當の吳服物にて呈す▲贈呈の期日は發表の翌月下旬▲等位は投稿全體を通じ最も優勝なる原稿を一等とし以下之に準ずべし

投稿の概略分類は次頁を御覽下さい

發行所 女子文壇社 東京市京橋區大鋸町

（其の一）

女子文壇第四增刊
家庭日記
目次

附録

最・近・の・日・記

◎「若き婦人」募集原稿の種類（前頁と對照あれ）

創作
小說。詩。散文。和歌。俳句。
其他凡ての文學的作品

告白
今の時代は動搖してゐます、多少の自覺を持つてゐれば持つてゐるだけ今の女性も動搖してゐます、逆境に居ても、順境に居ても、周圍に遲れて始終動搖してゐる筈です、其暗い方面と、明るい方面とを問はず自己內心の動搖を有りのまゝに告白して下さい、偽らざる身の上話をして下さい、文飾をしないで有りの儘に書いても澤山です、最も眞實に、最も自由に現在の境遇に於ける心持を語つて下さい。

觀察
多少自己中心の態法から遠ざかつて、批評的の態度て、婦人界の現狀を觀察するとか、女子教育家の意見を論ずるとか、世論に反した考を述べるとか、自分の理想を訴へるとか、實驗上から家庭問題を提供するとか、文藝上の評論を試みるとか、凡て感情一方に走らぬ論理風の文章を指すのです、問題は小さくても關ひません、女らしい意見を發表して頂きたいものです。

實驗
遊學時代の經驗談、各種の試驗に應じたる實際談、運動會紀念日などに働きたる實話、友人との交情より得たる經驗、男性より受けたる刺戟或は誘惑、盜病水火其他不時の災厄に罹りたる時の實驗談、和洋料理の實地應用、音樂繪畫習字裁縫、編物造花園藝テニス遊戲競技等一切の家事又は遊藝の實驗談、文學上の修養談、結婚の準備、新婚當座の經驗、髮の結方化粧法衣服の着方寫眞の撮り方など凡て身廻りの實驗談、旅行談、冷水浴海水浴深呼吸等身體健康法に關する各種女子衛生上の經驗、女敎師女子事務員其他百般の女子職業當事者の實驗談、其他。

事實
一技一能のある婦人、變つた婦人、名望ある婦人、各種婦人團體の實況、一個人の出來事、各地女學校及び女學生の現況、各地婦人の風俗、迷信、習慣、年中行事、山村漁村僻地の生活狀態、女子就職界の現狀等、都會及び地方の婦人界の現在の事實を明瞭に書く事。

表紙
本號に應用すべき表紙、石版着色四五度刷、寸法は縱七寸四分、橫四寸九分以內、畫學紙に描くこと、圖案は隨意。

口繪
本號に挿入する口繪、和洋畫何れにても宜し、人物を表はすこと、着色石版五六度刷、寸法は縱五寸五分、橫三寸九分同じく畫學紙を用ゆること。

スケッチ
本文の中に挿入すべきコマ繪、毛筆畫、雁皮或は遊戯の類に認むること、寸法は二寸の三寸以內。

注意
▲原稿は凡て振假名をつけること。
▲長短は隨意なれど、一行二十四字詰にすること（但し二百行以上に渉る原稿は採用せず）。
▲和歌、俳句は一人二十首以內に限る。
▲原稿の封筒の表と原稿の端とには必ず『若き婦人原稿』と書添へること。
▲紙上の匿名は自由なれど、原稿の一端に住所本名を明記すること。

投稿は十二月廿五日最終便本社到着の分を以て締切る

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇 第一 第二 第三 増刊 （好評嘖々）

新美文

全一冊美装
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

口繪 入選作家十二人寫眞 及石版彩色樂聲三隅筆 密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を親んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附錄

◉小寒の日記……薄川泣菫
◉裏家……吉江孤雁
◉憧憬……小川未明
◉一轉機……高須梅溪
◉女床屋……兒玉花外
◉捨て犬……岡田八千代
◉火葉……澤村胡夷

女子名文 新作家



口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人寫眞光澤紙密刷

全一冊美装
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

若き女子が大懸賞應募の小說、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

附錄

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

短篇小說

全一冊美装 二百頁
當選作家十一人肖像原色版
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

懸賞傑作

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

●破疊……秋葉清子
●女客……加藤貞子
●町の出水……赤崎愛子
●桃代……佐藤増子
●朝顔……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評等豐富滿載

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 （振替口座東京第壹七貳九番） 賣捌全國書店

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

來る四十三年一月一日發行

女子文壇

紀念號

滿五周年

わが社、女子文壇發行の事業を企てゝより、雜誌界獨創の聲名を博し、愛讀者間に信用せらるゝこと日に厚うして、未だ嘗て一回も發行の期を謬らず、號を逐ひ、巻を重ね、早くも來る明治四十三年一月一日を以て、創立滿五個年の日に相當す、顧れば五年の星霜長きにあらずと雖、其間着實なる發展を遂げ、本誌の今日あるを得せしめたるは、一に親愛なる讀者の眷顧に基くを思ひ、感激の情禁ずる能はず。玆に聊か其欣びを表はさんが爲め新年發行の第六巻第一號を以て滿五周年紀念號と爲し、本誌空前の大册を發行せんとす。

内容の詳細は女子文壇十二月號を以て發表すべきも、其の計畫の一般を言へば、先づ紙數例號二倍三百二十頁となし、記事の方面に於ては大家の小說其他の創作に純文學の精華を拔き、併せて一般の婦人が要求せる健實なる讀物を供し、更に別に色彩燦然たる美人を描ける洋書の大附錄を添へ、意想外の新材料を捉え、以て全誌血あり脈ある生きたる雜誌を編輯せんとす。冀くば滿天下の婦人諸君、此紀念號を逸して憾みを遺さゞらんことを。

紀念號に限り定價金三拾錢　郵税貳錢九厘

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社

ダリア



材料滿溢

九巻貳拾五號

趣味津々

男女學生

秀才文壇

最好伴侶

口繪

▼十一月十五日發行◉懸賞 青年文壇壹百餘頁には毎號新作家の大筆戰あり……

▼正價（一冊郵税共金拾四錢）＝（六冊同金七拾八錢）＝（半年同金壹圓七拾錢）＝（一年分金參圓貳拾八錢）

發行所 東京神田旅籠町壹丁目 振替口座九五一五五 文光堂

賣捌 東京堂 東海堂 ○北隆館 良明堂 ○上田屋 至誠堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添をこふ

見よ立身出世疑なき良書を

近刊豫告　目下印刷中

資本不要 出世の秘訣

△生存競爭の激しくなるにつれ**獨立自營**の道愈々困難を加へ世間有爲の青少年諸君が徒らに遠大の志望を抱きて陋巷に蟄居しつゝあるを慨し、如何にせばよく資本なくして**實業家**たり事業家たるを得べきか、如何にせば金滿家と同じく社會に介在して縱横に其の**敏腕**を振ひ**志望**を**達**するを得べきか、如何にせば、思ふが儘に**活動**し亦よく手にしてよく巨大の**資金**を得べきか等の問題を分ち青少年に必要なる**東西古今實際的成功の根源**を究め、**百五十項**に區別して**丁寧親切**に**指導**せる**良書**なり請ふ坊間に販賣せる杜撰なる愚書と同視する勿れ

大町文學士序　長谷川天溪君閲　天風編

成功良栞 立志訓（五版）

△正價金二十錢　郵税二錢

大町文學士中内文學士序　文學博士本居豐穎先生閲　松風編

古今名家 短文軌範（五版）

△賣價金三十錢　郵税四錢

高濱虚子撰序、鳴雪不折兩氏口繪（木版書入）（虚子廿四句）

最新版 新選俳句集 附俳文評釋

△賣價金四十錢　郵税六錢

（中付の二）

發兌元　東京市神田區旅籠町一丁目　文光堂　（賣捌）　東京堂○北隆館○至誠堂　東海堂

當選作家（一）



臼井花子君

梅本龍子君

杉山かへで君

酒匂こし子君

當選作家（二）



菊池りう子君



建部香時君



原田滓子君



黒澤みえ子君

當選作家



名無し草君

前島優梨子君

筒井みち子君

伊達まつ子君

和平



女子文壇の讀者は本社より御申込の節は其旨御書添を乞ふ

作文之最良材

女子文壇社編輯局選

懸賞文集 文壇の花

●大判二百五十頁　特賣價金拾錢　郵稅一錢五厘

女子懸賞文集 第二

●中判五百頁　特賣價金貳拾錢　郵稅六錢

（各書本は僅少なり賣切れると絕版す）

懸賞文集 文壇の光

●大判二百四十頁　特賣價金拾錢　郵稅一錢五厘

世に作文書多しと雖も、妙齡花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東宮侍講本居豐穎先生題詠、文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌　國學院學士小森松風君編

美文作法

●大判二百卅頁　特賣價金貳拾錢　郵稅四錢

（殘本僅少賣切れると絕版す）

美文の作り方を最も明瞭に解說し、加ふるに大家の名文を模範として舉げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者 中村木公君著

實地精査 女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

特賣價拾五錢　郵稅四錢

（殘本僅少賣切れると絕版す）

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社出版　（振替口座東京第七九弐番）　賣捌 全國書店

家庭日記

女子文壇第四增刊





お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ

吉田紫花

九月五日、晴、五時起床、六時朝食、隣の源さんが目の覺める樣な若々しい女郎花を澤山、露ながらといつた樣な手付きをして持つて來て呉れた。早、今朝山の畑へいつた序に取つたのださうな、妾は只たて續けにマア〳〵と云つてゐる間に源さんはもう歸つた。お父樣は患者を診る際に、それを離れへお生けになつた、妾がいじるのには女郎花など分に過る、樫か椋の枝で結構、昨日から仕掛りの冬物、朝の內に出來なければ死んでも正午の御飯にはせぬといふ覺悟でかかる、自分丈ならい〻けれど親兄弟迄乾干にする憂があるのでわき目もふらず一心に縫ふ。魚屋來る、時間潰しとは思ふけれど仕方がない、魚を見る、一尾四錢五厘といふ太刀魚を五尾貳拾錢に降伏させて買ふ。裏の松田樣より名付の赤飯贈らる〻名は初子、おやハイカラと思ひながら八寸に移すと、山潮が湧た樣にグサ〳〵と崩れて仕舞つた、赤飯は上出來だが入れ方がまづいからだ、頂戴して批評するのは相濟まぬけれど、入れた時に重の四隅へさへ充分に詰め込んで置けば中は少々ざるくても斯んな事には成らない、米一粒身動きもしない筈だ。兎に角何子々々と子付けの流行に驚く、然し

百姓田吾作娘初子ては何だかチヨン髷に結つて紙履いてゐる樣な氣もする。

仕立物は存外早く出來たので無事午食、妹千代學校より歸ると父上に從ひ親類へ祭禮に行く、新調のリボンと下駄とて頭も足も振り立て〳〵大得意て出かけた、留守中投藥用の紙袋を貼る、中學の弟より端書來た、此の次の土曜は遠足故歸省せぬと云ふ報、又脚袢を舞ひ込まして居りはしないかと氣になる。午後八時父上、妹歸る、留守は妾一人なればお土産は大當り、暫時雜談。十時就床。

九月六日、晴、五時起床、六時朝食、今日は北隣岡本の納屋の棟上げてある、昨日の夕方棟梁が鉋を叮嚀に洗つてゐたと思つたら今日はもう鉋の音など一切せぬ、お正月の外はきれいに髮を結つて居たことのないお内儀さんも、今日は笄貫かして丸髷に結つてゐるお秋さんといふ娘も新築の納屋の廂にまけず劣らず大廂をつき出して、赤い襷て芋よ午蒡よと忙しそうである、父上今日の棟上げの欣にはお酒二升と、一圓の封と、どちらが好いかといふ御相談、お酒は外々からも貰うだろうし、消え安いもの、それよりは金封の方がといふのてそれに決して早速千代に持たせて遣る、今日の患者は女市てあつたので午前中騷々し。午食後山の畑へ芋の蔓上げに行く、久しく外出しなかつたので氣がのび〳〵する、一人て秋季遠足を氣取つて歩く、初秋の風に搖れる前掛に過ぎし紫袴の昔を忍ぶ山の畑は四畝程てはあるけれど隨分色々なものが取れる、芋も去年は四十貫かとれなかつたが、今年は五十貫はとる心算ては居るけれど、理想は空想なり三十貫にならねば結構だ。四時頃歸る、採集品、いんげん豆一升餘、茄子三十、秋蕗豆、御所柿十七、茄子半數程早速漬ける、千代、學校より歸る、採集の御所柿過半横領される、父上往診に行かる、車は通れぬ山越しなれば殊に老軀の心配一方ならず、隣てはもう棟が上るといふので餅拾ひに集つた近隣のたれかれ、今か今かと皆上を向いてゐるので自然口が開く、白痴の寄合見る樣てある、一つ二つ餅が飛び出すと急ち戰場だ、角の餅が飛んだ時などのひしめく光景のすさまじさ、恐ろしい程てある、妾も門先の稻むらの陰から此光景を見てゐたのだが、主人か棟梁かが見付けたのだろう、不意に無數のお餅が矢玉と飛んで來て、髮も顏も所きらわず打ちたたかれる、きまり惡さに居たたまれず、拾ひも得せず一旦は走り込んてしまつたが、暫して又

走り出し前掛に拾ひ集めて歸つた。机の上に並べてよんで見たら二十二ある、丁度妾の年と同じ數だと思うとお餅の一つ〳〵皆妾に、緣ある樣に思はれる。本場へ乘り込んでゐた妹は兩袖重さうにして歸る、四十拾つたとて威張る、大方拾つて貰つたのだらうと冷評す、半分位は貰つたのだと白狀する、父上點燈頃病家より送られて歸らる、夜棟上のお餅にて善哉する、九時半就床。

九月七日、晴、四時前千代を起して米を搗く、例ならば三千は搗かないと充分でないのだが、今日は小臼にしたから二千五六百なら上白になるといふので、千代は一生懸命數へてゐる。一ツ二ツと順に數へては單調で飽いて來るから、色々に數へ方を返更して見る。百から一ッまで逆落しにするのが最も早い樣な氣がする然し數へるのを氣にして足が留守になつてさつぱり駄目だ、百から一までがスラ〳〵數へられいて何になると、一ついじめうと思つたけれど、可愛想だから止した、五時過ぎ搗き終へる、搗いた米の仕末をする、湯を沸す、髮を結ふ、六時父上と共に朝食、千代は今日學校の掃除當番だと云ふので大急ぎで登校、朝の內玄關の患者の會話を聞きながら弟の羽織を縫ふ、入時頃、六十餘りのお爺さんが腕を擦り〳〵入つて來たので、どこが惡いかと誰れかゞ尋ねると、お爺さんは大聲で、わたしア此節左の腕が痛いのでリヨウマチになると困るから、片腕の內なら早う癒ると思ひましてと云ふ。違ひない、片腕ならまだカタマチかいと誰かゞ云つたので皆々大笑ひ、妾も思わず笑つた。九時半、午食の用意にかゝる、昨日取つて來たいんげん豆など入れておすしを拵らへる、父上、加減よしとて賞し給ふ、お米は苦しいから小臼にしたのだが、秘密に葬つてあつたのに千代に素破拔かれる。午食後父上德島市へ行く、お祭りの買物が主意なり、留守を千代に託して、つい近所のおてる婆さんの家へ、晝のおすしを持つて見舞に行く。病と老衰とにて身動きならぬ身にも片時も忘れず主家を思ひ吳るゝ誠心を感じ折々のわが心付けを、彼れ又我母在世の昔日を忍びて泣く今日も二人して存分に泣いた。色々慰さめて歸る、夕方父上馬車にて歸らる、筍の籠詰。鳴門わかめ、金時豆等、望みし品々殘らず求め給ふ。夜、祭禮案內の端書七枚書く、就床前門へ出て見る、滿天の星影冴え渡りたる下に、見渡す限り稻は豐かに穗を垂れて明日の日和を靜に待つてゐる。（入　賞）



同じ女と生れながら陰と日向の違つた身の上

名なし草

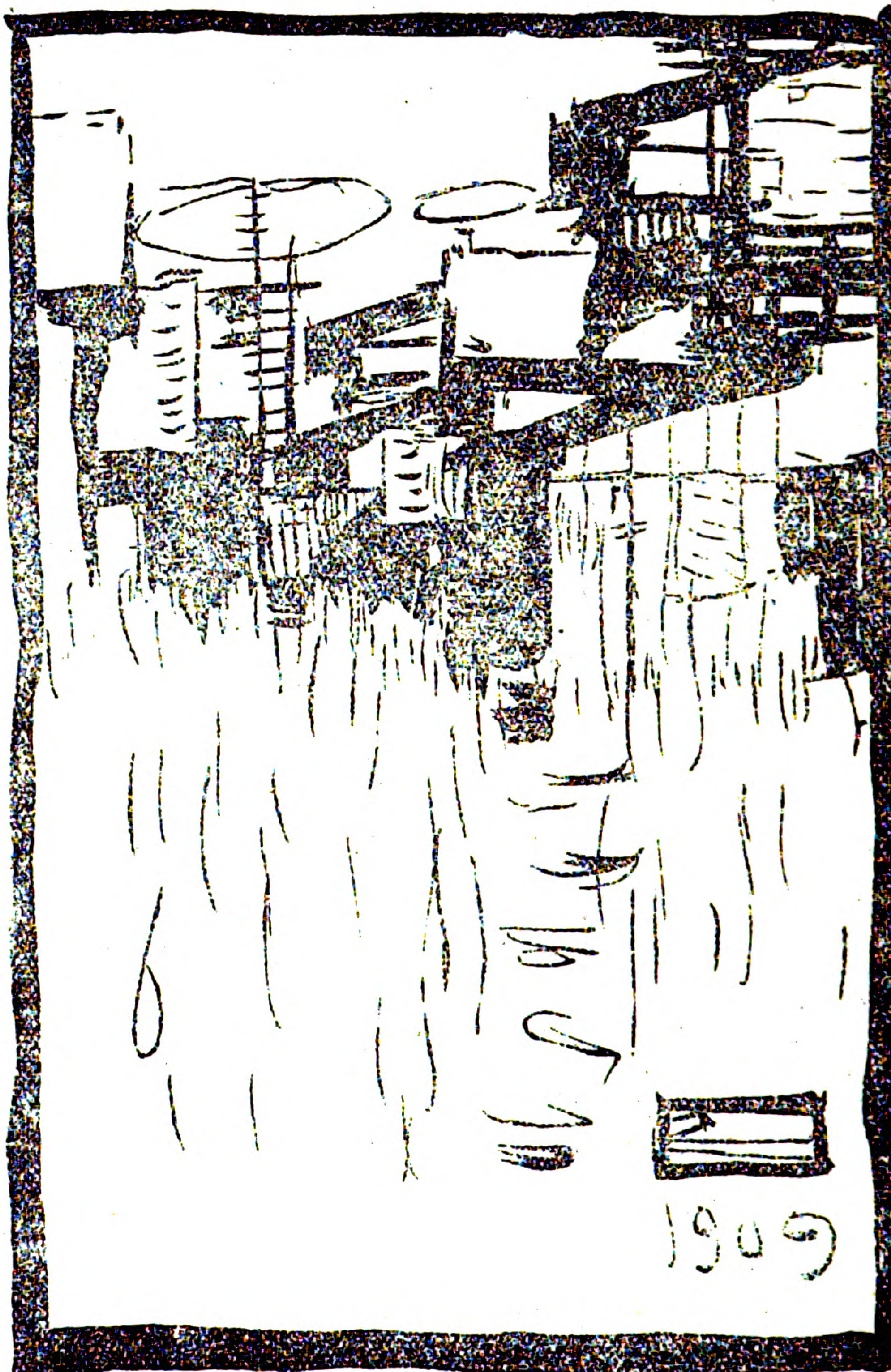
八月廿日

吁思ふまい〳〵、假令どうされたつて高があれぎりの着物だもの、といくら思ひ直しても又意久地なく思ひ出す、未だ來てから幾何にもならないのに簞笥の中の物は大方變つてしまつた、それのみか八丁堀の伯母樣より度々氣をつけて送つて下さる物さへ、柄のよい物は皆鷹子の物になつてしまつて其代りとして妾の身に着く物は土地の御店で求めた質味な樣な物許り、殊に昨日はあれ許りは一度位身に着けてからで無くては手離したくないと始終思つてた妾が此所へ來る前の日伯母樣が三越へつれてつて下すつて妾に一等氣に入つたのを買つて下さつた彼の御召の御納戸絣、まだ仕立もしないのを鷹子の二三度きた樸素な御召と派手できせられないと云ふのを口實に、宜い樣にかへつてこされてしまつた。いくら派手だとて妾の大切のあの絣をと思ふと恥しいが泣かずには居られない、伯母樣も一度は彼を着て寫眞を撮つてお送りよと云はれたけれど！吁而しそれもあきらめ樣、彼の時買つて戴かなかつたと思へばあきらめもつく譯だ。それを同窓會迄に仕立てゝくれと云はれたので一生懸命にぬつてると、鷹子がトン〳〵二階を上つてやつて來た。派手な縮みの浴衣に淡紅色縮緬の扱帶をしめた寢着姿で一昨日結つた島田はガクリと前後が反對になつて鬢や前髮のほつれ毛は棚と厚化粧の頰にかゝつて居る。「姉樣もう今日は出來るの」と袖の片を持つて肩へかけたり裾へあてたりして居たが「鷹さん御飯だよ」と伯母樣に呼ばれて下へ行く、續いて妾も！每朝伯父樣と二人の兄樣と鷹子の四人は朝ねして十時頃朝御飯を認める其御給仕

は妾の役々のだから、たとへ歸省中とは云へ女學校の三年生にもなつてこんな眞似して居られる鷹子はほんとに幸福だ。十一時頃髮結さんが來る。伯母さんが小枝さんと御呼びになるので急いで行つて見ると鷹子は頰をふくらして壁に爪で筋をつけてすねて居る、其兩側へ二人がよつて何か一生懸命すかしてる樣子「ねー小枝さん鷹子は島田が似合はなくつて」と被仰るので束髮の方がどの位似合ふかと思つたけれど、まさかそうも云へないので、否ほんとに鷹さんは島田がよく似合つてよ」と心にも無い御世辭を云ふ、伯母樣は御氣嫌て「ホラ御覽誰ても似合ふつてじやないか、自分一人て似合はぬと決めてるんだもの」それでも聞かないのをやつとなだめて島田に上げさせる、鷹子は金澤村の吉村樣の御子息で慶應大學では此家の大兄樣と同級の方の所へ世話する人があつて、明日は其見合ひをする日なので、上手に出來たけれど何だか髮許目立つて變だ、鷹子はさすが何とか思つてか「姉樣見憎いわ」としきりに氣をもんでるので「いゝえ餘り鷹さんには似合ふので妾も結つて見たいつて云ふ樣な氣がするのよ」氣休めの積りて云つた言葉が、ふと伯母樣の御耳に障つて此方をヂロリと凄い御眼て御覽になる、困つた事を云つたと思ふた。夜は皆樣の後で御湯をすませた平日の通りさくと二人で夜なべをする、奧の間からはたへず談笑の聲がもれて居たがそれも十時頃にはぴたりとやんで皆御自分の室へ戻つた樣子、妾も休まうと思つてると鷹子が「姉樣達に御上んなさいつて」と御小皿を二つ持つて來て妾とさくの前へ置く、見れば小さく切つた林檎と羊羹が二片宛盛つてある「有難う」と云つた妾の胸の中はもへる樣で、熱い涙が頰を傳ふ胸が一杯で食べたくないので其まゝさくにやつて了つた。戶じまりをして部屋へ入つてから机にもたれたまゝ暫し泣いて居た、が之てはならぬと氣を取り直して直ぐ豆ランプへ火を點けて、日光へ避暑中の八丁堀の伯母樣と兄樣へあて手紙をかく。でも兄樣は同じ食客でも八丁堀の伯母樣の所に居るのだから仕合せだ、元通り大學へ通ふ事も出來るし、夏は避暑にさへ行かれる身だ。妾は只兄樣の卒業をまつて、伯母樣と妹と四人樂しく暮す時をまつてゐる許りの哀れな身の上てある手紙を書き終へると十二時今は夏の最中てあるるのに庭てはチロ〳〵と虫の聲が哀れに聞へる、淋しい夜てある。

八月廿一日

今日は曙樓て鷹子が見合ひの當日だ、其故か伯母樣も鷹子もそは〳〵して居る樣だ、朝御飯の時髪結が來る。妾は皆さんのぬぎすてた物の御洗濯にかゝつた、涼しい朝風は早や廣庭の木立から蟬の聲を傳へて來る御洗濯をすませてさくと御晝の用意をして居ると、伯母樣が御呼びになるので、急いで化粧部屋へかけてくると、あゝ伯母樣も鷹子もすつかり御支度が出來て！御用は鷹子の帯をしめてくれと被仰るのであつた。見れば鷹子は桔梗色にパッと目さむる許りの白百合を染出した絽縮緬の御振袖、艶々しい文金の高島田の後にギラリと光る銀簪一つ、前ざしのあでやかなる相對して一入奥床しく見せるのである。それに引かへて自分の



（一等）町の裏　京橋　くに子

装はどうだらう、洗ひ晒した浴衣の上へ、メリンスの皺くた帯、髪の毛は亂れて夜叉の如く頬にかゝつて居る褪紅色の厚板の帯を持つ手は荒れて、白魚の様な指と云はれたのはいつの頃だらう。中指にはめた眞珠入りの指輪が氣の毒の様だ。奥の手を出して低い所へ小さく立矢にしめてやる、スラリとして姿見の前に立つた鷹子は、何處の令嬢と云つても恥かしくない立派な御嬢様ぶりになつた、二三年前迄は鷹子の田舎娘に比べて何の位垢ぬけた江戸ッ子だらうと皆に云はれた妾の姿は女中同然、御母様の御葬式の時の妾の姿が丁度こんなだつたらう、八丁堀ノ伯母様が其時妾をだきしめて、こんな立派な子を今日限り田舎へやつてしまうのかと御泣きなされた事を思ひ出して、胸が又一杯になる。伯母様も絽の御紋付におみ帯は綾波織の粋なのを結ばれる、始終にこ〳〵して被在る。暫くまつ中に車が來たので、二人は美しい裾をさばいて車にのられる、鷹子が白の高襟パラソルをパッと開くと同時に、二輛の車はガラ〳〵と敷石に音たてゝ門の外へ出る。「行つて被來いませ」と手をついた妾は暫しぼうぜんと坐つて居た。何と鷹子は幸福のかぎを握つて此世へ出て來たのだらう。金持の一人娘に生れて來て右と云へば右、左と云へば左、何一つ自分の思ふ様にならぬと云ふ事なく、何の苦勞も知らずに、自然にまかせて起きて寢て食べてさへ居れば、自然は女學校へも上げてくれる、良い縁談にもありつかせてくれる、かくして幸福なる令嬢は、幸福なる夫人となつて、浮世の荒風は何處を吹くかと云はん許りに榮華な一生を送るのである、それに反して縁談のきまる様な年頃に、妾の様に逆境に立つて居る者は、一生の不幸であると思ふ提燈釣鐘の様な所へ嫁ける筈もなければ、矢張り身分相應な所へしきや行けないで、又一生生計の苦勞迄して行かなくちやならない。こんな事を考へると又胸がつまる、吁妾はいつかこんな事迄考へる様になつてしまつた、東京に居る頃は學校でも家でも快活な子として多くの人に愛された妾が……矢張り年につれて逆境に立ち居る妾は、いまわしいひがみ根生が出來て來たのではあるまいか。伯父様も午後から御出かけになるので、家は兄様方に妾とさくの四人になつてしまうお八つの時兄様方が餅菓子をおごつて散々しいつけられて澤山頂戴した、兄様方も御胸の中では氣の毒な者と思召して、下さるか知ら、と思ふと同時に吁妾は食物さへ隠れなくては食べられぬ身かと熟々自分の身が

哀になる、伯母様方は夕方御歸りになる、今日の御話など色々あつて至極御機嫌が可い、兄様は鷹子に「どうだ落第になりさうでもなかつたか」なんて御からかひなさる、續いて伯父様も御歸り、たか子と妾に絞り羽二重の御對の帶を買つて來て下すつた、皆様に幾度も御禮申上げて頂だいする。

夜は安彦さんは御友達の所へ遊びにいらしたので、大兄様と鷹子は妾等の夜なべの所へきて色々の御話する、何かで活人畫の話が出てたか子が「妾の級で須郷さんつて人が衣通姫をやつたのよ、其人の美人つたら姉様なんてもんぢやないのよ」と云ふたので大兄様も又そんな事被仰らなきやよいのに「おや御前位か」なんて被仰るもんだから、たか子はグッと怒つてしまつて荒々しく立ち乍ら「いゝわよ兄様、人をぶじよくして下さらなくたつてホヽヽヽ、兄様と小枝さんはおかしいわ、兄様はいつだつけ、妾蔭で聞いてたら幸田さんが御遊びに被參つた時、二人で小枝さんは美人だつて大層にほめていらしつたは、皆妾母様に告げてやるわ」と捨ぜりふして境の戸をピシャリとしめて行つてしまう。兄様は苦笑して被在るけれど、妾は躰中がふるへて來る幾度か口の中で「だつて妾は別に心に暗い所が無いんだもの」と一人でくりかへした部屋へ歸つてからぽつねんと机に頰杖突いて考へてると我知らず熱い涙がハラ／＼と頰を傳ふ。寂寞とした夜の淋しさを破つて時計が十二時を打つ、石垣の間でこうろぎが淋しい聲を出して鳴いて居る。ガタンと障子の開く音におどろいて振りむくと、三寸許り明けかけた障子の、外から大兄様が御顏を出して、未だねないの、先の事など氣にかけちや不可ないよ、僕が惡かつた、鷹は御前も知つてる通り我まゝ者だから堪忍してやつてくれ、伯父様もみんな承知だから決して心配する事はないよ、僕も男だ、いつ迄も小枝さんに苦しい思はさして置かないつもりだから腹の立つ事もあらうけれど今暫く辛捧して居てくれ、實僕が惡かつたんだから、けれどそんな事氣にしてはいけない、もう遲いから早くねなくてはいけないよ」と云ひすてゝ向ふへ被行る吁……妾は足音の消ゆると同時に前後も知らず聲を張り上げて泣いてしまつた。悲しいのか嬉しいのか自分には分らなかつた。（入　寅）



大呉服店のバーゲンデー

かへで



十月十五日　朝

今日はバーゲンデーなので女店員一同は納戸地へ破れ格子の御揃の袷殊に私と水野さんとはリボンから帯から半襟まで同じなので皆羨まし相な妬まし相な顔して二人をじろ〳〵見くらべてるそれが又何となく小氣味が好かつた。二人並んで多辯ながらとん〳〵と階段の中程迄上ぼつて、一寸上を向くと、三階の昇降口の欄にもたれて光さんが、例の女方形役者の出來損ひの様な生白い首を突き出し、眉をひそめてにらめて居たはて今日は二百二十日だなと思つて、光さんお早うございますと特別に今日はございますだけプラスして云つて見た、すると豈計らんやお早うございもいゝけれどもサ、今日バーゲンぢやないか、今日の様な日だけも早く來て呉れなきや困るネ、笑談ぢやないよ」といきなりのケンツクだもの、惡いとは知りつゝ逐口返答もしづには居られない、するとまた「何だつけ、そうそう女學校へなんぞなまじい通つた娘は始末にも、へちまにもならないとさ、フフーン」と小憎しい捨文句、影顔ぢやない日向頭の三つ四つもはつてやりたかつた水野さんも勝氣だからなか〳〵默つては居ない「フフーンだつて、ハヽヽ勝手にフフーンとでもハツクショとでも仰つしやましだワ、何んだつて小池さんの様な桃割は罪がないが、芋の葉をかぢつた様なハイカラはあんまりぞつとしない！武井さん彼方へ行つてあんな事言つてるは、二人の當こすりなのよ、自分こそ男のくせにいくら番頭だつてあんなヂョナ〳〵した風をして、あれて御本人様は素的なやさ男氣取りなんだから可笑しいワ、コンニャクの白あへが柳盛座の馬の足にも劣りだワ」といま〳〵し相な口惜し相な食ひ付き相な顔をして。

（壹）段階口の武どん久どんが恰度今戸燒の福助の樣にいらつしやい〳〵て頭をさげる度に御客はどん〳〵やつて來る、こうなると至つて平氣の平左衛門、どんな美しい令孃が前に立たうとも、羨ましいともはづかしいとも感じやしない、有がたう存じます〳〵と機械的におじぎの三つ四つゞけ樣にしたからつて格別其人に見さげられた樣な氣もしない、マー早く云や私達の目からは蛾のとんどん參り位にしきや思へない、ワイワイ〳〵やつた來ちやア、てんですきな勝手な物をより出しほじくり出していくんだ者、とは云ふものゝまるで桶の中の里芋の樣にごろ〳〵押し返し押返されてる大勢の人のむしくさい息で、もうテンデ頭はテコヘンに上ぼせあがつちまふ、其上シユー〳〵ガツチン〳〵と電送器のきしる音、ハントリの金切り聲、階下へ下ろす運送器はごろ〳〵〳〵、扨ては食堂の蓄音機こんな中に立つて口から出まかせ、御世辭を振りまくんだもの、とても三本や四本の手じや、やり來れない、と云ふのに御客樣は至つて呑氣なもの、あんな形の煙草入はないか、こんな模樣の紙入はないかつて、さんざん冷かしたあげく、オイ娘さんも五十錢均一かだなんて、隨分人を馬鹿にして居る…だものいくら御客だとは思ひながらも十度に一度はギユウ〳〵やり込めてもやりたくなる……。

（夕方）五時頃になると大勢の人も次第に減つて三階も數へる程になつて來た、三人連の學生が、君、このレターペーパー二箱、嫌に氣取つた風をして居るが、パスから二錢銅貨や五厘錢やなんぞをころがりだして面食つた樣子は奴だこ以上だつた。一廻りしてガローチヤリングの陳列箱の前に立つて、一人が、君これを買つてつてやらないか喜ぶぜつて振り返へれば、中のが、よせよ…と云ひながら私をヂロリと見て變な笑ひ樣をすると又後のが、ヲイ〳〵高調子に云ふなよ聞へるぜ、私はひどく馬鹿にされた樣な氣がして、いま〳〵しくつてならなかつた。知らん顔をしてクルリと向きなほると、袋物陳列の處に西洋人がしきりに品物をいじくつてた、どうしようかしらと途方にくれたけど度胸をすへて、如何でございますつて云ふと、先方では英語でしやべり出す、大に困つちまい、思ひ切つて小聲で、アイキヤンナツトスピークイングリシとずべらぼうにやつて見たもの、先でも可笑しいと見へて笑ひこけてる、暫時、互に無言の行、折々は妙チキリンな感動詞を使ひながら三十分もしてどうやらフ

ペラパック三つ買つた。

西洋人の去つた後、今まで蔭聞して居た口惡の民どんが、アイキャンナット〳〵つと云ひながら、帳場をふれ廻る

（晉）バーゲンの御馳走とあつて私ャ水野さんも食堂の隅に小さくなつて居た、雀連中多辨るのなんのつて。「今朝は隨分あはてちやつてよ、御茶漬をかき込んで飛んで來たの、そいてお晝には食パンを買つたらぼろ〳〵〳〵してまづいつてたべられないんですもの、困まつちやつたワ」そんなに今更グチをこぼさないつていゝワ、それよりか御飯粒でもこぼさない樣に御蔭樣でお茶がこぼれちやつたワと食べかけの親子丼をテーブルの上へ置いたり持つたり、一寸〳〵吉田さん今日ネ角帽があなたの事をあの人は麻布から通ふんだらうつて聞いてよ、と割ばしを割りながら冷かすやら笑ふやらで、大勢の話は糸の樣にこんがらがつて、取しまりも居ないので誰れも誰れも鬼の居ない中御洗だくと云つた樣。

「私ネほんとに氣味が惡くなつちやうワ」「どうして」「だつてネ此間のチャンコロがね、昨夜も停留場にまつてたのよ、そうして名刺を呉れなんて云ふんですもの」と何時も永代さんはこんな事を平氣で云ふ。

「それやきまつてるは、ビューなんですもの、おのろけも無理とは申ません、支那人をもチャームする御まなざしに於をやですもの」さすがの永代さんもぶりぶりして歸つてしまつた、まづいのうまいのつて文句は云ふものゝ食べずに歸る人もない、私等の食堂を出る頃に入つて來た人たちは、まづい上に冷へきつたのを食べるのかと、思ふと、何となく氣の毒な樣な感じもした。（入　貸）

十月十七日。午前、社の醍川君と澤村文學士と三人で上野の公設展覽會を觀る、澤村君は『國華』の記者をしてゐるだけに、日本畫に就いて詳しい說明をしてくれる、日本畫に就いて智識の無いわれ〳〵にも實地に就いて聽くと啓發する處が多い。私は菱田春草氏の落葉と云ふ繪を最も興味に惹かれて觀た、澤村君は國觀氏の油斷が最も好きらしかつた。平和と題した田舍の牧場の繪があつた、それを見物に來て居た一兵士が熱心に見つめて、之は好いと獨言して居た、軍人が平和の繪を見て感心してゐるのは面白いじやないかと澤村君言ふ。われ〳〵は日本畫を見るのに約二時間半を要した、日本畫から直ぐ西洋畫に移ると、もう頭腦が疲れて居るので、はつきりした印象を得難い、西洋畫は西洋畫だけを別に見に來ることゝして、そこ〳〵に會場を出る、醍川君は梁川會があると云つて急いで牛込の方へ去つた、三人とも山下で別れた、自分は一直線に家に歸つた（醉茗）

憚る處なき女學生の境遇

花子

火曜日。きのふ「いつも始業の鐘がならなければこないのよ」と云はれたので、けふは思ひきつて早く出掛たらやつぱり四人ほど來てゐらつしやる。どんなに早くお出掛になるのだらう。

漢文の時間に、數學の宿題して來なかつたから、漢文の本をひろげたまゝて、すまして宿題した。こんな時は後の席は都合がよい、數學、先生がお尋ねになると、出來ませぬの一點ばり、定理一つ教へて頂く。

おひる休みに卒業した××さんおみえになつた、いつ見ても××さんのハイカラなこと。學校に在學しつた時は、眞黒なお髮を前だけわざとちゞらして、マガレットに五吋のリボン、はてな紫がすりのお召て、ふるひつきたい程よかつた。今は女子大學の家政科とやら、あの方にも似合ない英文科にてもお入學なされゝばよいにとは、誰かさんのよけいな心配。

花壇のわきに集まつて、こんな話しに夢中になつてゐると、始業の鐘が一しきり……「もう始まつたの」「でも此度は遊戲よ」「あらそう」とみんな一時に屋内體操場に。

遊戲は、ランサースとコチロンのおさらひ、足が痛いので參觀する。Kさんの氣どる事、Uさんはクラスで評判の氣どりやだけれどまさかこんなとは、思はなかつた。Kさんはいつも御上手だからと、私も出來るならあんなにしてみたい。終るとみんな整裝室へ……Kさん、何してゐるかと思へば、まあ鏡に向つて、お熱心にスタイルの研究、思はず笑つたら「まあいやな方」とにらまれた。

歸ると机の上に手紙が二本、親友たかさんと文子樣からだ。私は手紙の來るのが一番たのしみ。

夜食事が終つてから、學校の話しが出て、私がKさ

んの樣に遊戯がしたいと云つたら、其の風でそんな事望んだつて、とみんなに笑はれた。私だつて十四貫もあつて出來ないとは思ふけれど、やつぱりそんな事、望む方が無理だらう。

文子樣に長き〳〵お返し文かいた。

水曜日。途中で電車がとまつて、遲刻れやしないかと隨分心配した。それでもやつと間にあつて、ほんとによかつた。

理科の時、あきてしまつて、いやになつた。みな樣を見ると、みんなねむそう……お隣りのSさん、いつの間にか筆記の字がまがつてきたと思つたら、フラフラと頭が動いて、後の机にトンと當つて、びつくりした樣に眠そうな眼をあけて方々を……あんまりをかしくつて、でも笑つては惡いと眼をそらしたら、折惡くSさんをみてゐたKさんと目が合て、思はず吹き出した。Sさんをみると眞赤になつて、下向いておられる惡かつたと思つたけれど、あやまれもしないし困つた。

英語の時、まさか今日は來まいと、たかをく〳〵つてさらわずに來たのに、まわつて來そうで大心配、早く鐘がなればよいと、時計を出してみる事五度、それでもまだ十分ある。南無大慈大悲の觀世音、どうぞ英語に指されませぬ樣と祈つたかひもなくTさんと……神樣も隨分なと恨んだところで仕樣もなく、そう〳〵さらつて來ませんも云えないので、大苦しみてやつと答へた。いつも、はつきりわからない時、豫習して來ない時は、きつと指される。先生におわかりになるのかしら？

けふの英語きもにめいじて、歸るとすぐに英語をさらふ。僅か二頁なのに辭書をいく度ひいたか知れない英語は一番時間がかゝつていや。

まだ一頁しかひかないうちに、もう夕食、夕食が終るとぢき、よし子さんがこられたので、辭書と首引はおやめ。よし子さんは例の通、氣焔萬丈、私などはとても當るべくもあらずだ。私が「けふ英語の時實際心配してよ」と云へば「小さき胸をいため給ひ」なんててんで茶化してゐらつしやるのだもの、「ヴアヰオリン今度ぜひ聞かして頂だい」と願ふと「えゝ、いつでも、其の變り頭痛劑を用意して下さいよ」とうそばかり、よし子さんのヴアヰオリンと來たら、ほんとうにお上手なのに。此の間おほめにあづかつたので、また栗まんを御馳走するぞ。お歸りになッたらすぐに九時、うたゝねしないうちにとすぐに床にはいッた。

木曜日。缺席だッたAさん出席、裁縫の時間にまた例のお自慢、今度こしらへたお召は、わざ〳〵京都から取り寄せたの、帯は今羽二重と絽が流行だから、それをこしらへたの、こんどは洋傘は仙女香で八圓からかゝつたのと大變な話、御自分の自慢の種がつきるとその次はクラスのみなさんの髪の批評、あゝも云たいものかしら? え〳〵と聞いてゐればいゝ氣になつて、もう耳にたこが出來るわ



（二等）　布巻き　紀伊　粹田みつ子

そのくせ御自分の髪と云つたら形なし、それでも大變な自重て、此の間もKさんが妙な形ねと云つたら、怒ッて泣いて翌日はお休みした。

修身の時女の虚榮についてのお話さぞAさん耳が痛かッたらう。

おひるの休みには、例の通りみんなよつてお話、「あの退學したMさん此の間醫學士へ嫁つてよ」

「あらそう」
「醫學士と云へば、あのAさん醫學士てなければ、嫁かないつて云ッたのですつて」
「まあ？あんな奥様背負込だら大變だわね」
「きものとお化粧て一日くらして、よく學校へ來る時ある事ねえ？」「シッAさんがきてよ」
「かまはないわ」と勝氣なKさんが云ふ。
「てもあんなスタイルおやお氣の毒みたいね」
「あら、あれてなか〳〵御自慢なのよ、私なんぞいつも、一所に歸りて當てられるわ」と大さわぎ、其うち誰云ひ出すとなく、Aさんにお目出度と云つてやりませうと云ひ出して、忽衆議一決、隅の方て相變らず自慢話に夢中なAさんを呼んで、みんな一齊に「Aさん、お目出度」「何？」「何てもお目出度」「未來の醫學士令夫人」と誰かゞ。Aさん眞赤になつて「まあ隨分」と怒つて居る。こんな騷に鐘のなつたのも知らずにゐると「先生！」と當番の方の一聲、びつくりして列になつて、先生がお出になると、今迄のさわぎとは我關せずと云ッた樣にすました顏して、をかしい。
授業中時々Aさんをみなさんがのぞくので、後の私は大迷惑。

お掃除當だつたけれど、歸りに三井屋へ寄るからかへて頂いた。巾廣のリボンと、後の櫛を買つた。またこれあしたさしてゆくとAさんが、けなして下さるだらう。おやつ空也餅大好きなので澤山頂く。
夜T子さん手紙をかいて居たら、お隣りの家て琴を彈いて、すんだ聲て歌つてゐらつしやるのが、實によかつたので、手をやすめて窓に倚りかゝつて聞いて居るうちつひうと〳〵として、目が覺めたら九時すぎ、とう〳〵手紙半分書きかけたまゝ、抽出にしまつて床にはいつた。（入　賞）

大地震當時の虎姫村

武藏　初子

八月十五日　世直し〳〵と言つゞけて、一晩皆を寢さゝなかつたお民さんが、やれ〳〵嬉しや夜があけたと言つて蚊帳の外へ出てしまつた。妾も起きやうかと思つたが身躰中が痛んで仕樣がない、痛いのも無理はないので、桑畑に莚を敷いたばかりの上に寢たのだもの、あゝ夢てはないかと思つてひよいと起き上つたら

外はもう薄明るくなつてお民さんとこの潰れ家が見えたのでぞつとした、お民さんは家の側の柿の木の蔭に立つて心配さうに見て居る、また伸び上つて東の方を見るとやはり、夢ではなかつた、本家と十藏とが、昨日のまゝ壞れて居るのが見える、蚊帳の外には藪蚊がやかましく唸つて居る、こんな大事のあつたのを知らないのか、きり／＼すがあちらにもこちらにも憎らしいほど清い聲で鳴いて居る、妾も蚊帳を出てしまつた桑の木に掛けた提灯の灯も消えて居る、蚊帳のぐるりには草履が雜亂に脱いてある、溝へ陷つて居るのやら蚊帳の下になつて居るのやら。

急いで顏を洗つて來て御飯を炊きにかゝる、昨日お父樣が石油の空罐を切つてお竈さんをこしらへて下さつたから、それに鍋を掛けた、けれど薪がない、お父さん薪が何もないのですが何うしましやう、と言ふと、むく／＼と起きて來て、少しでもすいて居る樣なとこから何とかして出せんかいな、と言ひながら壞れて居る納屋の周圍を覗いて歩いて下さつたけれど、何うしても出せそうにないので、そこらにある竹や、椽の下の板など出して割つて下さつた。

妾も畑に落ちて居る桑の木の枯枝などよせ集めて炊きにかゝると、あんたとこは好いお竈さんをこしらへて貰ひなさつたと、通る人毎に羨やましがる。その內に御飯が出來た、早速浴衣の袖をなべつかみの代用して、畑に落ちて居た小さいあめ桶の蓋が鍋据のお代りをして吳れた。さあ早く御飯にしやうと思つたら後ろの方でちん／＼と鈴がなつた、倉掛をまたがした上へ莚を掛け、其下に床木を置いて、其上へ三軒の佛樣のお掛物を風呂敷に包んだまゝ乘せて、善助さんと音吉さんとお父樣とが今お經樣を始めかけていらッしやる後ろにお民さんがつくねんと座つて居る、妾もそこへ座つたがお經の聲を聞くと何となく淋しく思ふに、あゝ家は倒れてしまつたし、お掛物までこんな畑へ出してあるしと思つたら、何れを見てもこれを見ても堪らなく悲しくなつて、俯向いてしまつた。またちんちんと鈴がなつたので、俯向いたまゝ拜んで居ると、お父さん頭に澤山付いて居ますから取つてあげましようと不意に弟の聲がしたので驚いて目を明けて見た、いつの間に起きて來たのか中の弟が、座つて拜んで居らつしやるお父樣の半はげ頭のごみを叮嚀に抓み取つて居る、はあこれは先きに割木を取りに行つた時に付いたのぢやなと仰しやつて二三度手でぽい／＼と拂

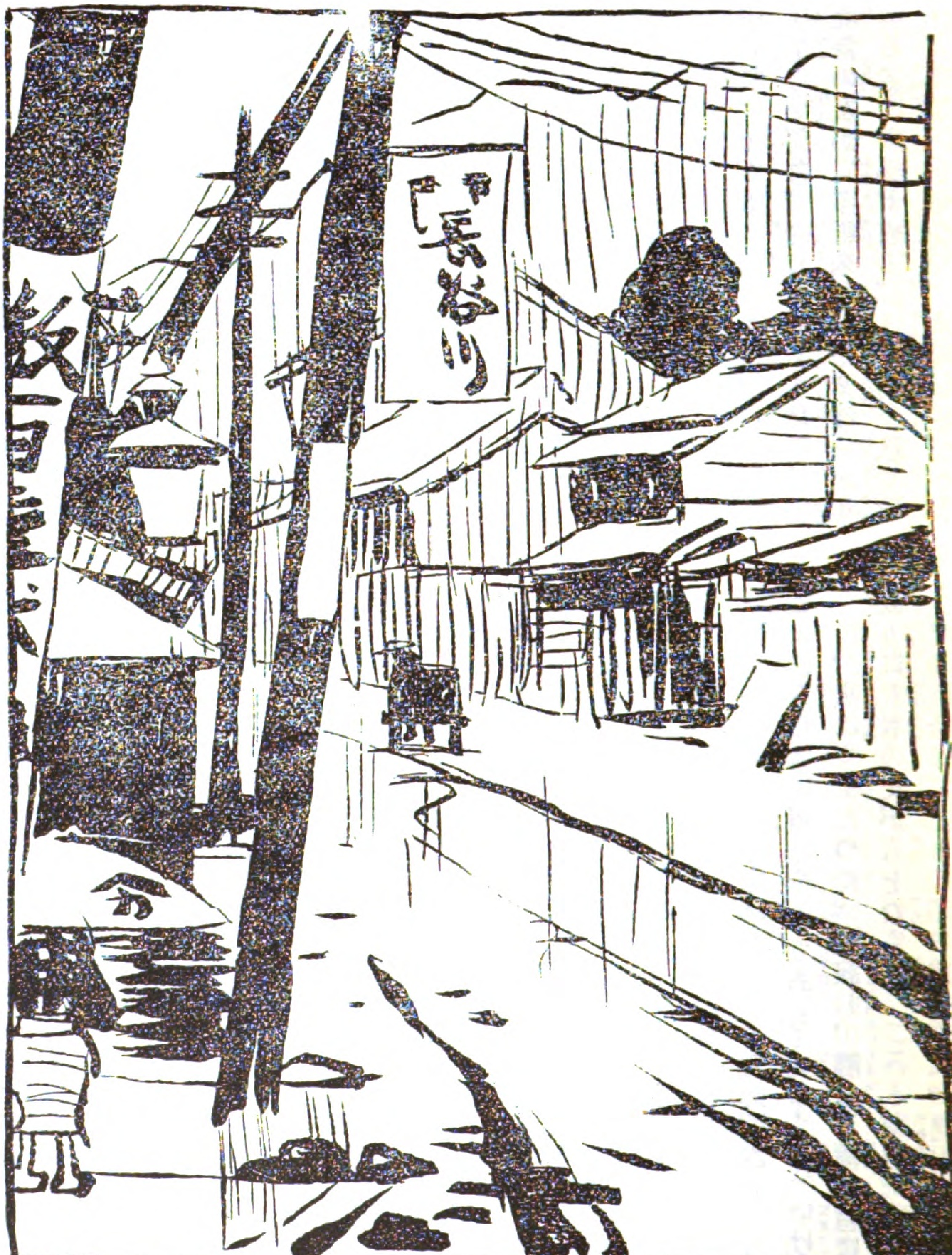
ひなさつた、ほんとうにお氣の毒なお父樣だと思つた。後ろ向くとお民さんが、御飯食べる場が無いと言つて蚊帳を退けて掃除をして居る、妾が昨晩皆のお茶碗を重ねて莚の隅の方へ押しやつて置いたら、お民さんが氣を利かして音吉さんの野邊行きの笠でふたして置いて呉れた笠を取つたらきたない蛙がぽい〳〵と幾つも飛んで出た、はつと言はうとしたが氣が付いたので、皆の見て居ぬ内に、そつと手桶に水を汲んで來て、こそ〳〵と洗つて、知らん顏して皆の前へ並べた、其時又どうどうと地が響いて來たので、はつと驚いたが、直ぐに小さい 弟が走つて來たので抱いてやつた、あちらの畑からも、こちらの畑からも女のさけび聲、子供の泣き聲大の男までが世直し〳〵と大聲を擧げた妾等の畑ではお民さんがひとり顏色變へて、世なーをしと言つて立ち上がつた、すると音吉さんが(夫婦)こんな假小屋に居て何處へ行くんぢやい、と叱り付けて引き座へてしまつた。 其内に地震も止んで御飯も濟んだお父樣が東倉は何うもなつてないかしらと行きなさる其後から大きい弟も中 弟 も小さい 弟 もちよこ〳〵と付いて行く、妾は恐いから幼い 弟 とこちらの方から見て居る、お父樣は倉から書院の方へ廻つて來て障子を明たりしめたり仕て居らつしやる、終ひには柱を押したり突いたりしてゐるので大きい 弟がお父さん危いですと言つて止めて居た。假小屋の方ではこんこんと音さして善助さんと音吉さんとが、日光の射さぬ樣にと言つて假小屋直しをして居る、お父樣が澤山薪をこしらへて下さる、大喜びて妾も手傳つて居ると誰か知らお見舞に來た、其人が歸ると其次々〳〵と妾等の知りもせぬ人までがお金だとかお魚だとか言ふものを思ひ思ひに持つて來て呉れる、妾は嬉しかつた、斯う言ふ時に親切な人か不親切な人かと言ふ事が直ぐに解ると思つた。

二三日の間に定まる運命

萩花

九月廿三日。今日から兄樣のお袴をぬひ初める。手帖と首引ー初め後布に後奥をぬひ合せ……——一針ぬつちや手帖を見ても其でも男の袴は宅で誰も縫へる人が

ないのだから有難い思つたより容易いので面白くてせつせと急いだ母様は大喜び其はよいが前布を二寸程短かく切つて了つた。是ではとても二尺二寸の紐下になりつこはないさて、困つたと襞半分とりかけて考へてるとさあ大變母様にめつかつた。「其布一つ大變短いぢやないかい」



（三等）　雨ふる日　　赤坂　夢みる人

「え、あの少し……布の都合で……」自分作らつく〳〵呆れかへつた。布の都合とはよく云つた物だ。數時間の思案も短い布が長くなり様はない。幸同じ布があつたので面倒だけれど仕方がない、かけはぎをしてごま化した。かつ子といふ當年四歳の菓子屋の子、（こまちやくれて、追分でもかつぽれでも何でも唄ふ）廓近く育つた故幼い乍ら女の嬌態も知つてる。私の針箱の傍へ座つて、「姉ちやんお猿造へて下ちやい姉ちやんお猿を……」と何度も〳〵いふ。實は私、お猿はてきぬ。困つた。夜叔母様に其事をいふと「お猿だつて縫つてみなけりやならない物です。お嫁になつて小姑の幼いのから姉様お猿をなどいはれて知りませんとても云はふ物なら姑に、内の嫁は小さいのが猿を造へてくれといつても知りませんと慳貪に云ひ升よ、抔といはれる物だから」と仰有る。嫁といふ者はみじめな者だと思ふ。

二十四日、お中日だ。雨てお寺詣りもお流れ。雨てお詣りをせぬのは信ない證だ。今日はお針も休み。朝から手紙書き。北海の友から手紙來る。卒業後一ケ年も家に凝として居る者には必ず來るべき煩悶。私も數ケ月前迄は人知れず此煩悶をやつた。女は結婚すべき物である。暖い家庭の人となるべき物だとつく〳〵此頃ては悟つた。私は切に友に結婚を進めてやつた。三十にもなつて獨身て居る女は必ずどこか偏してる。こんな人の居る家庭は決して幸福でない。けれど窃に思ふ。私も又こんな事をいふ様になつたからなあ！女は齢によつて主義も何も動搖する物である。去年の今頃盛に獨身論を唱へて、噫夢に醉つてた。けれど華やかだつた。去年の今日である。此筆て誓つたのは。然も其人の文は、人知れず朝に夕に厨にたつ毎、焚火の中に葬られて。私は過去の秘密を葬つて新たなる家庭の人たるべく務めてるてはないか、女の誓ひ程危い物はないと彼人のいつたのをやつきとなつて否定した私が……。けれど秋雨靜な窓によつて火中に投ぜんとしてくり返す昔の文……。いくら今の私でも。胸が痛いすまぬとも思ふ。涙も零れる。噫――皆因果だ。情死を企てる程の想ても、運命なれば叶はぬ物か。却つて見も知らぬ遠人と親が定めるのも、皆此頃說敎てきいた前世からの定り事とやらてあらう。すまないけれど……。火はもえたつた。「秋寂し、靜けき雨の窓に居て故りにし君の文がらをたく」

私の運命は二三日の間に定るのだ。過去は過去に葬

つて、以後の私は父母の心を安らげ、貞操を固持して行かふ。昔の人よ！幸なれ！夜、雨戸をしめる時風呂桶の下で螽斯がないてた。弱つた聲て。峠の知人から落栗貰ふ。がら／＼煮たつたのを笊にすくつて父樣も交つて圓形になつてお初を頂く。

二十五日、女中と朝飯の仕末を終へて何心なくお座敷に行くと父母樣と森樣とが彼話の最中、退くに退かれず、困つた所に出た物だとよん所なく默禮して忍足に退つた。蔦の葉が色づいた。噫、私の此家に居るのはもう幾何……。一月に足らぬか……又は數ケ月となるかいづれ今月で定つた筈。今は只一日でも長く／＼父母の膝下に居たい。お父樣もお母樣も上氣嫌。其を見ると尚更吐息が出る。不安！不安！親を養いたい頃には親はないとはよくいふた物。去年迄は如何かして家を離れたいと思つたが、漸く孝行の孝の字を知り初めた今日、もう此家に止るべき人でなくなつたのか。午後呉服屋來る。私は部屋に埋まつて泣いてた。同じクラスの方でも、もはや母とならうとしてる人もある私は其姿を見て噫もうお終ひと思つた。私の放縱な生活も終りに近づいてる。夜父樣にお酌をし乍ら色色お話を承つた。聞けば聞く程難かしいのは世の中、恐しいのは世間！噫……。針箱の引出から半襟のお古が澤山出たから女中にやつたら、ころり待遇が違つた。人は淺間しい物と思つた。夜袴出來上る嬉しい事！苦心した文章が成就した時と少しも變りない。今迄私は此樂しみをみ出さずに侮蔑して居たのである。

二十六日。小母樣と祖母樣と話して居られる姿をつく／＼みて噫私もこんなに衰へるのか知ら、厭だなあ私は永久今の樣で居る物とはまさか思はないけど、然しこんなになる共思つてない。此人々ても死あるを知つても自分の近き死は思つてなからう。母樣は美しい衣を縫つて居られる。近き日か遠き日か私にはまだ知れないのである。母樣も父樣も其は此頃からお優しい結婚前の子はとに角親に可愛がられる物である。尚更離れたくない！一針毎に物を思ふ。某書店に行つて本月のは幾何あり升かときくと三十圓許りあつた。兄樣が休暇で來られてたから。母樣は父樣に知らすまいと窃と十五圓を拂はれた。噫母樣は陰になり陽になりして兄樣の身を守護して居られるのに、今頃兄樣は都の空でよく、學んで居られるだらうか。燈火親しむべき秋の夜も都には多くの心をひく華やかな者があるといふに。私のは女子文壇四と少女一きりてよかつた。頂

いた圖書切符で花つみ日記を買はふと思つたが、料理の本でも買ふ事にする。遂私もこんな心になつたから驚く。其にしても同じく迷つた友は如何してるだらう又都の空に放浪してるだらうか。妙な事から互に便もしない。けれど早く〳〵醒めて平凡な女に歸る事を私は祈る。君には欺かれ、少なからぬ傷をおはせられたけれど尚私は君の心を哀むと共に、涙を持てる。元より君も、人も私を欺いた行爲を告げなかつたけれど自ら文も送らずになつた。よく私は君等の行爲は解つてるけれど咎めぬ。此記を讀て友よ、心安らかなれ、雨の夜、月の夜、よく私は背かれたる友を思つてる。

二十七日。三十九年度からの日記が四冊ある。每日幾枚づゝかをよんで焚く事にする。詩や歌を筆記したのも、なまじひにと思つて皆捨てた！そして割烹や何かを筆記した。苦心して調べた文學史も……。よしさらば過去は、暗き罪深き過去は悉くされ！後の我は新らしき生涯に新らしき人を友に清き生を渉らう。噫、けれど感慨は無量！此日記も私の過去と共に前半期を葬るべき物の一つだ。さらば、詩に活きしは束の間であつた。さらば母君は袷も召されずに私の仕度。此記ももう長くもなつたしこれて筆を止めてお手傳ひを致しませう。さらば我最後のふて最後の思ひ出…さらばよ!!

母に氣を附けられて日記を試む

葦原瑞穗

甲の日。白百合始めて開く、朝顏の花日每に多くなり今朝は珍らしい大輪の花三つ朝日を受けて咲く。牛込の小さい從兄弟から舟の繪葉書頂戴と片假名づくめのハガキが來た。一寸讀づらいがどんなに苦心して書いたかと思ふと可愛くつてならん。漸く二年の一學期を修めた計り、此子は身體が弱いが斯んな子にありがちの成績は良く通信簿には全甲。お褒美に神樂坂の繪葉書屋へ買ひに出掛けて夜返事を出してやつた。明朝になつたらどんなに喜ぶでせう。歸り途に一寸雜誌屋を覗いて見たら小僧が勢よく「いらつしやいと云つたので素手で出憎くなつた。種々新刊雜誌の中で一番氣に入つたのが女子文壇の增刊……森田先生のお

作を拜見したくなつたから一部買つた。一冊でも小僧はお世辭よく「おあいーす」と尾長に云つて客を送る

今日になりて菊作らうと思ひけりと同じ意味の日記になつた。家庭日記の募集に應じて見たくなつたのは先兼ね兼ね母に「お前も子供でもあるまいから少しは先の事を考へてみたりするのも稽古ですよ」といはれるから、しむみり家庭の事に氣を付けて書いてみる心に成た。十時頃でした。戸締りをして寢る積りで玄關へ行くと興津の民子樣からの手紙があつた。「……K樣からT樣の丸髷姿を見たなどと御知せがありました」と床の中で繰り展げる、「變れば變るものですね。同窓の人も散り果てゝから少し顏を見ない内にお嫁になる方もあれば、雜誌記者におなりになる方もありますのに二人はまだ家庭の人ですね……」などゝ讀むで來た。母の辭と思ひ合せて何となく目が冴えて動悸が止まぬ到頭十二時の音を聞いた。

乙の日。隈なく晴れて蟬取の子供門の側に集る。お向の家へ移つて來した方のお孃さんが女子大學へいらッしやるといつて兄が好奇心に、間がな隙がな觀察して居る。お飯の時にきつと其報告を聞かされる。「例の女子大學かと思つたら襷をかけて井戸水を掬むやらお勝手でゴト々々働いて居るのは感心だ。昆や菫や權利義務でも喋々して居るかと思つたら夢かとぞ思ふ思ひきやだ。お前はそれから見るとデクの棒だね」。

などと仰しやる。チト癪に障つたので、

「お挨拶ですことね。後の文句は餘計ものだわ」。

といつたら思はぬ方からお目玉頂戴して了つた。

「それ、それだから。お前も子供ぢやあるまいに。いつも云ふ事だがお嫁に行つたら此娘は屹度姑と喧嘩するよ」と母にきめつけられた。母は古風の教育法の型に嵌つた人で新空氣を吸つた者とは少々肌合が異ふ。束髮よりも島田を結はせたい方で今にも私を嫁にやる樣な事を仰しやる。

丙の日。百合の花數を增す。蟬と露西亞パンの叫が喧しい程。朝の涼しい内に子供の復習を監督する。

お父樣と兄樣と二人將來の目的に就て意見の相異の點があつたと見えて鎬を削つて辨じ續けられお正午迄立板に水の有樣。お晝飯の注進で漸く休戰狀態となつた。お父樣は未だ若いから私のいふ事か分らぬのぢやと仰しやる。兄樣は私は經驗はあなたより少ないから書生議論だといはれるのは無理もないが、あなたの頭が少し古い樣に思はれます。然し御意見は篤と考へて

みますとお答へになるとお父樣はそれがよかろと云つて笑つて居らッした。暴風雨の後に日の光を見る樣に其時は其時でも皆一所に快く食卓をすませて夕刻迄坐つたきりで針仕事をする。母より色々經驗上の注意を受くお父樣は夕飯後子供と緣日へお出掛けになる、すると兄樣が水瓜をかつぎ出して留守居の者には福があるなどゝ仰しやつて母樣と私に御馳走なさいました何時買つて入つしたのか少しも知らなかつた。

氷の樣に冷たくつて結構な事！田舍の人には珍らしくもないが都人には珍重されるも無理はない。

「餘りパクツイちやいかんよ」と仰しやつてお自分は中々お盛なもの。妙な兄樣。お腹を惡くなさらん樣に。

丁の日。朝の涼しい內に子供の復習を爲てやる。十時に終つたら間もなく兄樣のお友達が入らつしやる。合憎兄樣の湯にいらつしやつた時なので御歸りまで御相手に出よと母に無理無體に强いられて座敷へ出るは出たが急に顏が上氣つて氣候の挨拶も夢中で云つたやら云はぬやら。お茶を屢取りかへて話をさけて居た。兄樣がお歸りになつてほつと息をつけば汗びつしより後で母には世事なれないから稽古をせねばなりませんといはれ立つ瀨がないの。

今日は日が惡いと見えてお小言づくめ「學校出の奧さんは三度三度のお總菜ごしらえに不自由する。料理の事は本さい見れば直ぐ分ると思つて居るから少しも覺えて居ない。その癖口は達者の方が多い」だの「一本の通りでは一寸實用ではないから自分で茄子や大根を切つたりして襷をかけて精々と働かなくては一人前の女になれぬ」などゝ小言かお說法か分らなくなつて了つた。衣食住の內食は一番六ヶ敷い樣に思はれる。

今日も子供がお隣の黑塀にチョークで怪しげな畵が書いてあるなど話をしたのを聞いて、そんなものは決して決して書いてはなりません、若し書いてあつたら消して置くものですよと訓へてやつた。

さよ子樣へ御返事を夜遲くまでかゝつて書く。氣候の工合やら御無沙汰伺ひやら近狀を知らせた。暑い爲か到頭陳腐な手紙になつた。鼠が棚の上でコトコト騷いで居る。

十月二十三日。用事あつて團子坂の方へ行く、菊人形の設々緊通りする、菊人形を欣んで見る人は普人に相違ないと思ふ。元來人形は生きてゐないけれど、菊は生きてゐる、生きてゐる菊を犧牲にして、死んだ人形を飾るのだから、隨分間違つた咄だけれど、其間違つたことに氣が附かずに面白さうに見てゐる人は普人に違いあるまい。（醉茗）

引越の日

大口巨樹

九月三日。今日は愈々引越と私は大へんな元氣で、うす暗い中に起き、まづお天氣はどうだらうと、眞先障子を開けて見る、何だか怪しい空模様なので落膽して「また所天雛かしいのよ」思はずから眩やくと、夫が起きていらして「何に大丈夫だよ、朝曇りだから」と獨りて定めて安心し〳〵いらつしやるので、私は危ぶみながらも、急いで朝飯をすまして、後片付迄柰然終つてから、種々相談して「雨が降らなかつたら、二時間て歸つてきて越してしまはふ」と定めて學校へ行つた。するとまあ、幾重も〳〵重なつてた雲が、次第にちぎれて其切間から薄日がさしてくる。私は引越の事より外何にも考へてゐなかつたので、嬉しいやら氣があせるやらして、二時間の授業も殆んど引越に氣を奪れて急いで歸つて、袴をとつてゐる所へ、上り口から「やあ、いゝ天氣になつたな、あたつたらう」と夫も勇んで歸つていらしつた。

それから、一休して向ふの家へいつて様子を見ると向ふでも盛んに運んでいらつしやるので、私達も徐々運びだした。すぐ近くなので、本や、ごた〳〵した物をさきに風呂敷に包んでは兩手に下げて運んだ。二度宛運ぶと晝になつてしまつたので、かねて用意しておいたお握飯を食べる、其おいしかつたこと、たしかに平常のおすし以上であつた。

「親が死んでも食休つていふ事があるから」と暢氣をいつて休んでゐると、頼んで置いた極心安い樋口先生が、手傳に來て下すつたので、お茶を出して上げて又皆して運びだした。其所へお隣の富美ちやんが「先生私にも運ばせて頂戴」つてきたから「えゝお願ひ」つていつてゐると、又其後から「先生俺にも運ばせておくれや」「俺にも〳〵」と近所の男の子が二三人這入つてきたので、これは恰好よい幸だとおだて上げてどんどん運ばせてやると、よろこんで運んで呉れる。子供もかういふ時には、都合のいゝものだと思つた。運べる物は大概子供に任せる、今度は大物を運ぶのに、良人は車かこないかと見て來やうかと思案していらつしやると、樋口先生は「何に車などいるものか、二人でかつげば大丈夫だ、車にのせたり下したりしてゐる間にはかついでいつてしまふにね、それか一等早いどれ棒

を聞いて見やうか」とすぐ大きな聲で「おい子供ら、和郎達の家にはかつぎ棒はないか、あつたら貸してくれんかーつておつしやると、お隣りの男が得意顏して「俺の家にある、あの父さんな繭かついだのある」といふが早いか、パタヽヽとかけて行つて、すぐ持つてきて貸してくれたので、樋口先生と夫と二人して、御祝儀の時のやうに掛聲て運んで下すつた。子供は子供て細々したものを、足まめに幾度となく運んでくれたので一時大雜混を極めたが、間もなく大概運ばれてしまつた。

　其所へ、車が暢氣さうにかた〳〵やつて來たので「もういゝから」つて少しばかりとらせて、其まゝ歸してやつた。そうして空家になつた家を全然掃除して雜巾迄かけて立ち退いた。昔變死のあつた家だとか、惡い家だとか聞いたり、又濕けて困りぬいた家であつだから。格別別れ惜しくはなかつたが、きれいな水のよく出る井戸だけはおいて行くのが惜しい樣な氣がした。向ふの家へ行つて見ると、床が高くて門があつて陽氣な家で這入つた計ても心持よかつた。そうして部屋は三間ある、奥の六疊を夫の書齋にし、三疊を自分の部屋にし、それから口もとの六疊を客間にすれば恰好都合がいゝ、早く整理して見たい、假住居でもこの位の家に住んでゐれば誰が來ても恥かしくない、と思ふと嬉しくて自然と微笑が浮ぶ。私はまづ、始めての勝手て湯々沸かして、清々した座敷で子供達にやつた皆喜んで氣儘に、笑つたり話したり食べたり飲んだりして滿足して歸つた。

　さてやうやう一定りついたのでゆつくり休まうと、座敷で心ばかり引越の御酒をだすと時計が三時をうつた、時計の音まで浮き立つて聞えた「まあお陰樣で思ひの外早く濟んで有難うございました、車も頼まないで」と夫がお禮を申し上げると、樋口先生は「いや何私より子供が働らいたんだ、子供つてふ者は調法な者さ……」つて例の通り快活にお笑ひなされる、私がお禮にでると御酒を召上りながら種々な面白いお話をなされて皆して笑つた、午後五時半頃樂しくお祝もすんで、樋口先生もお歸りになつたから、私も夕飯をすまして後片付から整理迄大概にして終ふと、もう外は眞闇になつて居つた。

　お座敷へ來て見ると、夫は熱心に書齋を整理していらしつた。何時だらふと思つて時計を見ると、七時半てあつたからお茶を入れて上げた。私は何だか無暗に

嬉しくて堪らず「まあ今日は簡單な引越てしたわね」って申上げると「ほんとうさ、子供は面白かつたね」とやつぱり喜こんでいらつしやる「それにこゝはいゝ家だね、床も餘程高い



（四等）　牧場の朝　　京橋　くに子

だらう、淸々しているじやないか、こんな家に居れば脚氣になんかならなかつたに」と私の感じた通りに感じていらつしやる、私も何だか心から淸々したやうな氣がして、この家に居れば二人の躰も必ず健康になるやうに思つた。此家へ越したのもこの爲であると、私は前の不幸を考へ出して、どうかこの後一家健全になる事を祈つた。

明日は土曜日だから、總ての整理を休にゆづつて、鄕里や其他二三の人に住所を通知する葉書を書いて、床をのべた、布團迄大へん乾いた樣な氣がして、心持よく滿足して午後九時寢についた。

新しい畫室と新しい少女

田中英子

其一日　六時前に起きたら、最早昨夜の少女は。起きて婆やと一緒に働いて居た。今朝見ると仲々佳い子だ。十四だと聞いて居たが、何方かと云へば小柄な方で。雪國育ちの色白な質。目に愛嬌がある。少と水仕などをさせるには、いぢらしい樣な纎細な姿をして居る。國は遠くに出て來たのであるが、今麴町に居て苦學をして居る此の子の兄と一緒に、大變私を慕つて、如何か女中になりと使つてくれと、再三云つて來たのを、斯の道で立つのは中々容易でない事を說いて思止まらせようとしたが、終に幸一といふ其の兄が、私を訪ねて、泣かぬ計りに、賴むので、私も少なからず、動かされた。が、何しろ、私が此町の寺住居をして、居たので、思ふ樣にもならずに居る中、今度父の一件で、母樣と一緒になるに就いて、此地に引移つたので丁度宜いから、幸一の處へ問ひ合せてやつた。すると他家へ行つたが、思はしくないので伯母の家へ歸つて來て居たので、早速夜汽車でやつて來たのだ。伯母といふのは險相な嫌な女だつた。亡母の腹違ひの、妹だとか、才があるか如何か知らねが、熱心だから骨を折つて見ましようと思ふ。二階の十疊と、四疊半とを、掃除して、書きかけのものや道具などを整理する四疊半の違ひ棚には、一輪ざしと香爐をおく。琴は其まへに立掛ておく。外に黑檀の本箱と机が並んだ限り

机には従兄が松島から歸つた時呉れた硯石を出してのせた、階下の座敷にピアノをおく。例の無名の山水を此室へ掛ける。違ひ棚には料紙箱と盆栽。書室には故意と装飾をしない。しきみの香のする寺のほの暗い居間も好きだが書くには矢つ張り此ういふ家の方が宜い殘らずガラス戸にしたので、大變明るくつて氣が清々する。家の中の何處にも新木の香がプンとする。周圍にも可成りゆとりがある。婆やは裏へ畑を作ると云つた。磯（少女の名）は私などネルを着て居るのに、白地の洗ひざらしに毛繻子の三寸巾をちよんと結んで居る。お午飯の時、客の取次にも見つともないから、昨夜きて來たのに着かへる様に云ひ付ける。紺絣に紅地の帯をしめたのを見ると、何となく、他人の子ではないやうな氣がする。あゝ此様な親身が、一人ほしい。

少し暑いのでお召のひとへにかへて停車場へ行く。母様のお迎ひにてある。言つてお寄越しなすつたのより一汽車おくれて、お着き遊ばす。荷物を人力車に乗せて、家まで歩いたのが、仲々お苦しさうだつた。今度の事で母様もめつきりお弱くおなりなすつたのだ。婆やの手料理て、久方振の樂しい夕餐を食べた。

其二日　朝食前に、母上と近邊を散歩して、此邊の人情や、口碑などを、御話し申上乍ら、一回りして歸つてくると、ネルを着た人が二人、頻りに家の中を覗いて居る。私達の足音に、ひよいと振返ると、

「や。貴女だつたんですか、さう云へば表札に八木と書いてあつたんだつけ。僕等は又誰方の別莊かと思つた。」

「此様な處で遇ふとは思なかつたね。兎に角奇遇だ。」

Ａ様とＭ様てある。Ａ様は、此頃大變活動し出したので、私も影ながら喜こんで居た。何だか、今度執筆る長篇物のモデルの令孃が、昔住んだといふ家を見に來たのだらうて、Ｍ様は、保養がてらお供といふ格だ。私のＨ町時代を、云ひ出して中々興は盡きない。Ａ様は放浪しただけに、大分例の狂熱思想は失せたが、Ｍ様は相變らず樂天的だ。

「彼の時分よく、Ａ様は私を冷やかだ冷やかだといつては、怒つたのねえ。」

「だが實際、彼の時代が花てすに、熱せられなくなつちア、人間は御終ひだ。」と、Ｍ様は、

「二十九て老ぼれちやア早いさ。其調子ぢやア、四十位になると腰が曲るぜハッ……」と大きな聲て笑ふ。

「併し全く貴女は成功者だ。僕等は大いに恥ぢ入る譯

だね。」

「さう悲觀したものでもないさ。僕等だつて成功する時もあるよ。」

大いに自信のあるやうな口吻。甘くもない朝飯を快く食べて、Y旅館に居るのだから、是非とも、一度は來てくれと、云つて歸る。TC雜誌の記者だといふのが又來て、何卒か是非共、來春のに繪端書を畫いてくれと云ふ、何しろ雜誌が雜誌だから、とても間に合いさうもないと云つて體よく斷はる。伯父の雜誌へ寄稿する小品を書き上げる。遠緣の家や、友の處へ、取敢ず轉居の通知を書く。

其三日。四時頃に起きて貰つて一番で東京へ行く。出品のにかゝると、一寸手が拔けなくなるから、母樣に、お留守居を願つて、四五日東京に居て用事を濟ませて了はふと思ふので……新橋からすぐ片町に行く。出京來た時は、何分願ふと頼んであるので、又以前の部屋へ通された。矢張り、住みなれた處はなつかしい今後此寺にこふして暮す樣な事は又とあるまい。けれど此寺は、私の永遠の家である。或は今日も、茶菓を運んで來た彼の小坊主が、此寺の住職になつて、私の爲に念佛を唱へてくれるかも知れない……。

又久濶來られなくなるから、墓の掃除をして美麗にしておく、先は皆、彼方此方に散々てあつたのを、つい先頃、此處に集めて石碑も大きくしたので、肩の重荷をおろしたやうに嬉しくも誇らしい。午後から、濱町の姉樣の家へ行く。義兄樣には、敷島。姉樣には半衿と、帶止め、高利と花子（姉の子）には、おもちやとリボンを土産にする。皆々大喜び。

今夜泊つて明日は一同で青山の墓地へ行く心意にする。夕方から兩國へ散歩に行つて、川升へ入る。歸りに橋上で摺れ違つたのは、たしかに通ちやんだつた。つと顏をそむけて、濱町河岸に、流れるやうな、提灯の光を追ふて、浴衣にひつかけた袷羽織をかき合せた手の細さ。白さ。意氣ないてふ返しの根がくづれて、あゝたしかに通ちやんは、此近邊に居るに違いない、若い男に、連れられて居た。

十月二十四日。暖い日だ、垣根の傍のふしだらな菊の枝に一本一本竹を添えて居ると、兒玉花外君が來た、暫く話る、君は明日から信濃へ旅行するさうだ、君も變つた生活をしてみたいやうなことを云ふ、單獨に倦んだのであらう。君を慰藉するものは詩と、酒と、友人ばかりだ、君はいつも友人の家々ぐる〳〵廻つてゐる、その友人も大抵は極つてゐる、酒を飲まない私と、酒が大好きな君と、氣の合ふ處のあるのは妙なものだ、（醉茗）

晩秋の記

ほつえ

十一月十日、落葉にしめ〳〵した村の小道から、林を出て畦道を行くと、折れ伏した枯草の上には、まだ霜が解けなくて爪先が冷たい、遠く連なつて居る川添ひ並木と、野の池を繞つてゐる葦の白い穂が、はれて行く朝霧の前に際立つてはつきりとして、其處此處に働いて居る菅笠の人は何れも忙しさうだ。今朝は家が一番おそかつたと、急いで母樣と稻を扱き初めると、柔かい晩秋の朝日が眞紺色の手甲にさして、〆めて結んだ帶の模樣が赤く映えるのが嬉しくて、重さうな稻穂を扱き落す音に、搖れる空氣の匂ひに堪へられないで、私の微笑んだとき母樣も嫣然した。

晝の鐘は靜な野にひゞいて來た。負けないやうにと心の中で競爭して居たけれど、母樣は十一把、私はまだ九把しか扱かない、莚を棄て圍んでお座敷をこしらへて、其中で辨當を開いた、副食物は桝干に茄子漬きりだけれど、倦氣ない位食べてしまつた。小休みの間にてもと思つて持つて來た雜誌を見ながら、鉛筆の折れを鎌で削つて晩秋の歌など書いて見た。籾を蓆にひろげて乾かすと、赤い日が實の上に落ちて顆々から立つ淡い匂いに、晩秋の感じが切に野乙女の胸を刺した、扱き捨てた屑の上に身を横へて、温い秋の日を皮膚に吸はせやうと、菅笠の紐を解くと撫てるやうな光が肉に觸れて、大野のま晝の靜けさに、甘いかなしみが胸に湧いた、夕方、作男が籾を運びに引いて來る鹿毛が遠くて嘶く、其聲が私はいつもなつかしくて堪らない、鬣のあたりを撫でゝやりたいやうだけれど、傍へ來ると如何しても恐くて荷を付る間、手綱を持たせられた時逃るやうに身構へして、やつと端を握つて居た。

俵を背負ふた馬は靜に赤楊の並木に消えてしまう、黄昏の靄がズーッと山の方から流れて來て、稻扱き歌はもう何處にも聞えなくなつた、家には今頃風呂が沸いてゐるだらう、明日は遲れないやうに來ませうと、蓆をたゝんで母樣に從いて歸る、堤へ來ると一としきり落葉の音に、逝く秋が叫ぶやうに襟に泌みる風がうす寒い、最早晩種も盡く刈りとられて、廣い田の面が尚開けて遠い。冷たくはれた空を隈なく照らす半月の光と、まばらなる星のきらめきに、地上には今霜か結び初めて居るのだらう、二人の影が長く刈株の上に引かれて、並木の隙に見えたり隱れたりする。

—野乙女日記の一節—

いまの女

さつき

忌憚なく思想通りを發表すれば生意氣と云はれる、さうかつて默り込めば陰氣だと云はれる、さうてせう、まるて空虚ならそうても有りませんけれども幾分か、新らしい空氣を吸つて見れば云ひ度ひ事もあり、望ましい事もある、表はしたい感情も少くはありません、のに、それをたゞ沈默しやう、否、させられ樣とするのですもの、何處かしら陰氣臭くなるのは無理てはございますまい。

とてもたゞ思ふ事、望む事それは理想にとゞめるものと悟つてたゞおとなしく縫ひ物をし、お料理をし、機械的に動く下婢と何の撰ぶところなく働かうといふ、其處まで決心つけるのは、實際容易の事ではないのです、つまり美しい夢を半分て醒まして實の世に入る樣な氣がして、誠に名殘惜しいものなのです、がまあてうでもしませんと、世の姑などいふものゝ氣には入りません、そして初めはつとめて左樣しました事もいつとなしに習慣になればそんな俗務を後生大事とつとめます、否、後生大事誠に結構ですが、それのみに拘はつて、もう一向他の事は顧みる暇がなくなるのです、かくしてもとは相應に理想もあり抱負もあつた女も、平凡て、夫には叱られ、姑にはにらまれる子には泣かれる、て涙さへ容易には出ない煮汁がらみたいな人間

になる、といふのが教育うけた女の結局であります、一部の人は申します、日本の女は、主義もなく、主張もない、千人よつたら千人同型、つまらない事此上なしだ、と、通されない主張なら持つだけ苦痛です、主張あるが爲に厭がられ、批難されるなら、自ら棄ぐ爲に主張は捨てなければなりません、こういふ考からして餘儀なく捨てた女と主張ない女と合せて千人同型なのでせう、

蛋白質が、などゝうつかり云ひ出すと姑に長い間の惡口の材料にされ、はてはそれよりそれと如何やら嫁の位置、動き兼ない樣な世の中ですが、時にむつかしい事を問はれて何やら聞いた事がある樣だと思つても糠味噌の臭に消されて思ひ出せない、と何が爲に書物をよんだ、とすぐ反古紙の樣に云はれてしまふ、つまらないのは今の女です。

つまり今の女はあまり負ふ荷の重いのに苦しんで居るのです、昔の人からは學問があるから、と學問で經驗を丸呑にでも出來る樣に見られる、が實際は左樣は行く筈がない、僅か許りの學問が却つて批難される種となつて寧、今迄十年の辛苦は、いさぎよく思ひ切る決心を得ただけが賜、位に考へて詩を作るより田を作らんとして居るのに向つて今の人は詩が下手だと云ふ、あたらずさはらず時に應じて處置をとるより仕方がないのです、そうして幾分、それに成功した女を一部の人は迎合主義といやしみます。

嗚呼、女、呪はれたる女はかうしていつ、安心な境界に達するでありませう、弱い意志も感情もかすかな知識もたえず、揉まれて荒らされて、辛うじて得た信仰はおろか、生存に於けるかすかな悲哀さへ墓場まで持つてゆききれずに皆影を失つてしまひます。

理を以て勝たうには力弱く知慧うすく、實を以てあたらうには經驗足らず、煩悶して遂に沈默に終るあはれな女の狀態、丁度赤子の泣寢入の樣な。

穗のぬけた筆の軸を片手にまだ握りながら、削りあがらない箸を片手にうらめしく眺めて居る、さびしい女の姿を、男は嘲けり、年老いた女はいやしみ、そして女自身はもう泣くのにも疲れました。

あゝ呪はれたる女、安らかな域には、いつの日達しられる事でありませうか。（天　霞）

鉛筆

山村龍子

○鉛筆をけづる刃物のあやまちて我が指切りし君故に戀ふ

○この髪の黒き間は人戀はむ白くしならば何かを戀はむ

○五人の少女子の中後よりうつむき行くを見初め給ひぬ

○妬むてふ淺き心も持てる故女はすべて愛でらるるよし

○他のことも少し思はむかく思ふ傍らなほも君を思ひぬ

○相逢はば相抱きつつ相泣かむ唇相吸はむ相死なむ

かも

○たゝなはる山の姿は朝霧にしろくもつゝめ伊賀はしづけし

○我れ戀ふと告ぐる男を悉く許さば神はいかにさばくや

（天　眞）

潮

伊達まつ子

○泣くほどの悲しびもなく灯の影に只默し居ぬ行く春の宵

○遠の丘白花咲けばなつしかき君とありにし日の浮びきぬ

○滾々とつくることなく湧き出づる泉の如き我がよろこびよ

梅の木に實のなる頃は古里の遠なる潮の音もなつかしき

○

靜やかに耳に入りくる春の潮の響と共に君思ひ出づ

○

人どよむ巷にあれどこゝろなほ寂しさに居て涙するかな

○

なつかしき君思ひ居れば青海のはてと思ふに月あらはれぬ

夜の室

梅本龍子

ひとりにも增せる寂しさ覺えけりふたり寐し夜の室の寐ざめに

○

いつしかに戀の掟を破りたるつぐなひとしておとろえを受く

○

百年も忘れずといふいと強き心に戀はれすこし寂みしく

○

み心ははかりがたかり世の常の女も共に愛て給ふゆゑ

（入寅）

○ 名古屋 原田琴子

今日もまた開けて我を入るとせぬ空屋の門に泣きに來しかな

ゆく時は神にひかれてかへる時獸に我は送られて來ぬ

二十四時物思などいふことをして遊ぶかな少女子なれば

我が心こはれしときに藥もてあだかも君がつぎに來しかな

み名あまた書きつらねてぞ消息すそれより外に事しなければ

心ゆく方に行かむとおもへどもよろしき靴を持たぬ我ゆゑ

日輪に照らされて居ぬその外に記すことなく今日も暮れにき

○　熱海町　木村稜野

白をよし紫をよし緑よしと三人はいへり女はらから

おほらかに戀てふ者を語り出る女を厭ふ我なりし哉

大海の眞砂の中にいと小さき穴堀すめる小がになる哉

こゝに遊ぶ七人の子は聊かの異ふ思に生たちてゆく

御地藏失せし吾子によう似ると十人百人皆云ひあひぬ

○　みつば

色々の紙の胡蝶を軒先に釣るして子等と吾もよろこぶ

君思ふ思ひを去らばこの心うつろとならむ胴穴の如と

さらさらと秋の夕ぐれ雨すれば故知らぬ涙頬を傳ひぬ

僞りに吾殺さむといふ君の御手によりて微笑めるとき

○　飛彈　眞砂子

恐ろしき魔のすむと云ふおん胸の扉に双手そとふれて見ぬ

まことすら云ひ得ぬほどの弱き子を疑ひたまふ淺ましき性

○　麻布　江森美子

人も家も草木もあらぬ大空ぞ君と語らんよきところなる

君戀ひしと送りし文の返へしにも戀ひしとありて胸安きかな

○　尾張　明子

相見る日明日とせまりぬ厄日の前夜の空をながむるこゝろ

船にして一つ〳〵に町の灯の消えゆく見れば涙流れぬ

○　麻布　花子

百人の男子は知れど我が思ふ君に似し影なきを悲しむ

ゆふに來て影の如くに丘にたちさだめかねては落

日恨みぬ

○　大阪市　木村花子

楢林葉と葉縺れて黄ばみたる月光に絶えず散るが寂しさ

あゝ倦みぬ吾に等しき執着を君は女の七人に持つ

○　下総　月沖さゆり

ほのかにも山茶花にほひ霜白う日影冷たき神無月來ぬ

落葉木に霜白き朝胸の毛の紅き小鳥は森越えて來ぬ

○　ほつ枝子

女てふ生命を知らぬ少女等の誇りの中に涙ぐみぬれ

一日の生を偸みしほゑみに足らひし如しさびしみの湧く

○　金澤　むらさき女

ひたぶるに君一人をぞ天地の中に頼める我にもあるかな

なよやかに少女小指をつゝましくかゞめて持ちぬ薄茶のうつは

○　熊本　眞崎幸子

戀せられあるは戀する人を得て胸の大野は歡喜にみちぬ

あゝ今日の日のひねもすをしめやかに降る雨きゝつ死を思ひけり

○　信州　その丸

しづけさやこしかたおもひいまおもひ來るべき日のかなしさに泣く

夢のはなほのかにゆるゝ朝戸出の袂に吹くかなよやかの風

○　門司　若山朝海

要もなき男の子なれども否みたる我言おもひさびしゆうなりぬ

我胸はいと廣ごりぬそのかみは一人の君が御座なりしかど

○　佐渡　緑葉

清らなる胸に抱ける紅ばらのかざし欲りする人をし憎む

小さなる心の我にいと大き事をのたまふ君なりしかな

歌ふにも書くにもはるかまさりたる少女の胸を君は知らなく

○　大阪府　寺部君子

夜の神の髪やとくらん春雨の香しづかに降るとしもなく

湯よりすくま、白き肌はしら百合のそれにもまして美しと見ぬ

○　和泉　金田香雲女

装いて處女の街を曲る時月あきらかに照らし出しぬ

我が心君知りてより亂れたる髪をもとかず沈みてありぬ

○　島根　白百合

君よ我が胸中に咲く紫の花はとこしへ匂ふと思へ

戀といふ罪ををかせる若き子を入るゝ獄は花もて作れ

底澄みて動かぬ水の死の海に君といだきて沈みける夢

神の息月の息をも合せたる風は吹きゝぬ湖にして

○　大阪市　久我孝子

とりとめて思ふことなきながき夜のすさみにかろく死など思ひぬ

沙原の松に交りて君が帶うつくしうみゆ遲れて歩めば

足もとに高まりきたる白波に死なむと君はやすげにぞ云ふ

僞りてむこゝろの限り僞りてむこのさびしさに堪へがたきかな

○　弘前　川村露子

離りたる男はいみじ疑ひのするどくわれをうとましくしぬ

こと更にわれのまへをば聲あげて語りゆきける二人の男

○　福島市　露草女

一滴の母の涙にかちえざる我れを弱しとあざわらふ君

われも又をとめなりけり夕ぐるゝ小窓のうちに君をしも戀ふ

古沼のあしの葉かげに白きとり今日も飛びけり夕ぐれにして

晝の町丈高き人とひくき人一つ乙女をふりかへり見ぬ

やさ姿にくしといひて見かへらぬ男子も今日は美しと見ぬ



草生水日記

蒲原早蕨

八月二十九日。晴。百日紅の梢がめつきり紅くなつた。お祖父様の百個日も近づいて、いつしか秋らしくなつた。

白い雲のゆきゝを仰ぎながら寂しい庭の垣側の「火井」堀る櫓の下に出た。シャツ腹掛の彦市や、向う鉢巻の作次や、皆して騒いで斗り居て仕方がない、頭はどうしたのだろう。

鳴子の音が聞える。夕顔の花を一ッ摘んでだまッて奥へ戻る。

八月三十日。晴。ちつとは風がさむい。叔母上とお仕事、袷。裁板の上でごし〱篦じるし付けて居ると、東京鑛山監督署から、鑛業明細表を至急出せと云ふ催促狀が來た。××ひろ子殿、私の名だ。奈何したらよいのでせう、だッて私わからないもの。と投げるように云ふたら「だから言はぬこッちやない、お祖父様の生きて居被るうちに、お手傳して覺えるようになさいと言つたのに、新體詩が習ひ度いの、和歌を習ひたいのとばかし……」とまた候叔母上に小言を並べられた。馬鹿らしい、鑛業の方は齋藤が居るのに。でも仕方がないから呼ぶと「あッ忘れてました、六月と十二月とには明細に監督署へ報告するのでしたがつひ……」と齋藤はやたらに白髮のびんを掻いて居る。期限も外れてるし後見の叔父上へはお手紙をやることにして、二枚書かせる。

鑛山位置、新潟縣○蒲原郡○○町大字草生水。鑛業權者、自分。鑛種、石油。鑛區面積、○○○坪。採鑛高、○○○○○。販賣高○○○○○。と一枚は手控に、一枚は早速書留で發送。あゝ一人でも兄弟が有つたら……と口迄すべり出たのを漸つと喰ひとめた。「早く聟さんを貰うと、……私だつて家へ歸宅たいぜ」と叔母上に皮肉れるのがこわいから。

夜、火井掘人夫使傭覺を調べて居たら、、、、おきよが來て、今日、通りの人が、○○家ぢや家内中死に絶えて孃さま一人だつちうのに、屋敷の中へ迄鑿井櫓を立てたぜ、ゑらいなあ。と噂して居たとはなす。

八月三十一日。曇。むし暑し。月末でもあるし、一と月後れて盆拂も有つたので朝から決算に掛かる。叔父上は縣會の選擧で來られないとのと、で齋藤と二人て、加せたり減いたり調べる。

出。

一金九拾參圓五拾貳錢五厘、八月分當座小遣〆。

一金貳百貳拾七圓六拾七錢五厘、八月分納稅〆。

內譯。貳拾參圓四拾九錢五厘、農會費。貳圓貳拾壹錢五厘、自用人力車稅、附加稅共、百參拾七圓○七錢五厘、第二期縣稅。六拾四圓八拾九錢、第二期町稅。

一金百五拾參圓。

內譯。火井用、鐵管、シュー、ツルス、ボートー費。及び人夫賃銀支拂。

一金八拾七圓五拾錢。雇人給料。

內譯。五拾九圓、男達。二拾八圓五拾錢、女ども

一金五百拾參圓○六錢五厘、奥より出す、

內譯。六拾九圓八拾八錢、醫藥料。拾圓、醫師禮。貳拾七圓參拾五錢、小間物屋。百參拾圓七拾九錢大丸。五拾參圓參拾錢、太物屋。拾壹圓八拾五錢醬油屋。九拾七圓五錢、酒屋。四拾貳圓九拾參錢魚徳。拾參圓、菓子屋、貳拾九圓參拾壹錢、いそ物屋。拾八圓、材木屋。七圓八錢、表具師手間錢貳圓六拾錢、叔母の煙草。

合計一金千○七拾四圓貳拾六錢五厘也。

入。

一金貳百四拾圓、八月分石油賣上高。

一金七百貳拾圓、殘米、百五拾俵賣上高(一石、拾貳圓の割)

合計、一金、九百六拾圓也。

差引、百拾四圓貳拾六錢五厘、支出超過。

足らないだけは銀行預金利子の方から出しておく。

たうとう豫算から出ましたな、と齋藤が苦笑する。お祖父樣も矢張さうだつた、十二月の勘定には草生水山からも、居掛からも金納が入るしいゝが、八月は例年も苦しい月だとこぼして居らしッたけ。

頭がもう〳〵したので硝子戸越しに外をぢッと見つめる、いつのまにか雨が降つたらしい。椽先の桐の破葉からバラ〳〵と雫が飛散る。絲瓜が靑ぐろう成つてぶらさがつて、もう採らねばなるまい。渡り鳥の影が、つとさした。

午後は從妹の靜ちやんに葉蘭を活けさせた。

味噌藏掃除の監督、裏木戸を出て茄子畠をあるいて居たら夕暮になつた。

九月一日。雨。いつ迄も夜が明けぬやうな朝だ。女子文壇來る。雲井の君入賞、アラおめでとう、と思はず大聲に獨りごと云つたので婆やがクス〳〵笑つて居る。

銀瓶作破……の評語はよめない。

來客、叔母上出て下さい、と云うといつまでそんなと睨まれて、いゝわと、ぷいと立つて應對に出る、保險會社からだつた。女世帶で何もわかりませんから近日中に後見が參りますと、しつかり御返事申上ませうといゝかげんに斷はる。

新屋の叔母上、讓さんを連れて入來る。あつちの油井ても、こつちの油井ても、成功祝、口立祝て煮賣茶屋も大あたりだとか、皇太子殿下が、熊澤油井塲（草生水山）へ御幸になつたのは、いつだつたけ、とか石油の話でもちきり。讓さんはまた、草生水油脈と、柄目木油脈とは續いて居ないの、何號の鑿井ては晝夜て、五十石噴くのと、得意滿面に受賣說なさる。

私はお晝飯の御馳走の天ぷら揚げしなに「花守」を讀みさした儘そばへ置いたら、よう詩人だね。とにくらしい、いつの間にか讓さんがうしろに立つて居らした。

夕方、うちの火井四十間餘り下つたので、瓦斯が大分强くなつたとの事。七十間位で仕あげにしたいがどうなるか、一日平均二間位づゝしか堀れぬのだから、まだ十五日足らず掛かろうとおもふ、成功れば風呂も台所も、七輪も、洋燈も瓦斯が使へるから、一年には百圓からの利益だが抔と思つて見る。

九月二日。晴。離れの庭へ籠の虫をはなしてやる。カンナの花を白い蝶がめぐつて居て、松の枝の上に楓の紅いのが散つて居た。

廻り廊の窓から爪立てゝ外を見ると、秋葉山の上に

水のような朝の月が拔けそうに出て居た、あかい空。
午過ぎ、〇〇氏入來。草生水山、前谷へ油井三坑契約する。對談金は一坑〇〇十圓。期限七ヶ年。地荒し料は所納一坪に付年五合（米）の割。石油が出れば其一歩を取ることゝ定める。去年の春頃に比べると倍ねだんだ。一坑〇〇〇圓に騰貴たら芝居を叔母上におごる筈だが、戯談もどうやら實際になりそうだ。

九月三日。晴。本箱に有る筈の「塔影」が見えぬ、あちこち掻き廻したが見えぬ。ぶり〳〵ぢれて居る處へ、「これおひろ樣のでせう」と、とみやが持つて來た「何處に有つて」お庭の燈籠の笠に」と云ふ。しつとりと濡れて、表紙のクロースが重たくなつてゐる。きのふの夕方忘れて來たので有ろう。

すぐ近所の工場が落成したので、鑿井機の地響や、發動機の震動やら、今日はことさら餘計に頭痛を感じる。

鑛業組合會へ名代に齋藤をやる。

九月四日。晴。葉書二枚來る、一ッは××叔父上から、七日の祖父樣の百ヶ日には、入らつしやるとのこと。も一ッは××技師（工學士）より、草生水山から昔堀り出した琵琶を明日見に上るから、ぜひ見せて：：とのことてあつた。

何代か前に、琵琶とお經と皿とを山から堀り出したそれはうちの寶物だぞ、とお祖父樣に聞いたことはあるけど、つひぞ見たことはなかつた。家内中惣掛かりて奥藏を捜索したが見つからぬ、婆やは一番年長だし昔のことは知つて居よう、と聞くと浦島の太郎話のようてきけばおもしろいけれど、結局…どこにありますかねえ」と云ふ。

朝から半日もさがしあぐんだあげく、漸つとのことうす暗い壁ぎはから、穢い黒い煤だらけの箱をめつけた。十文字にからげた眞田紐もほつれて、箱もよく〳〵いたんで居る。えたいの知れぬ赤い皿と青い石と化石した青ぐろい貝と、ぼろ〳〵に性を失つた紙とが出た。

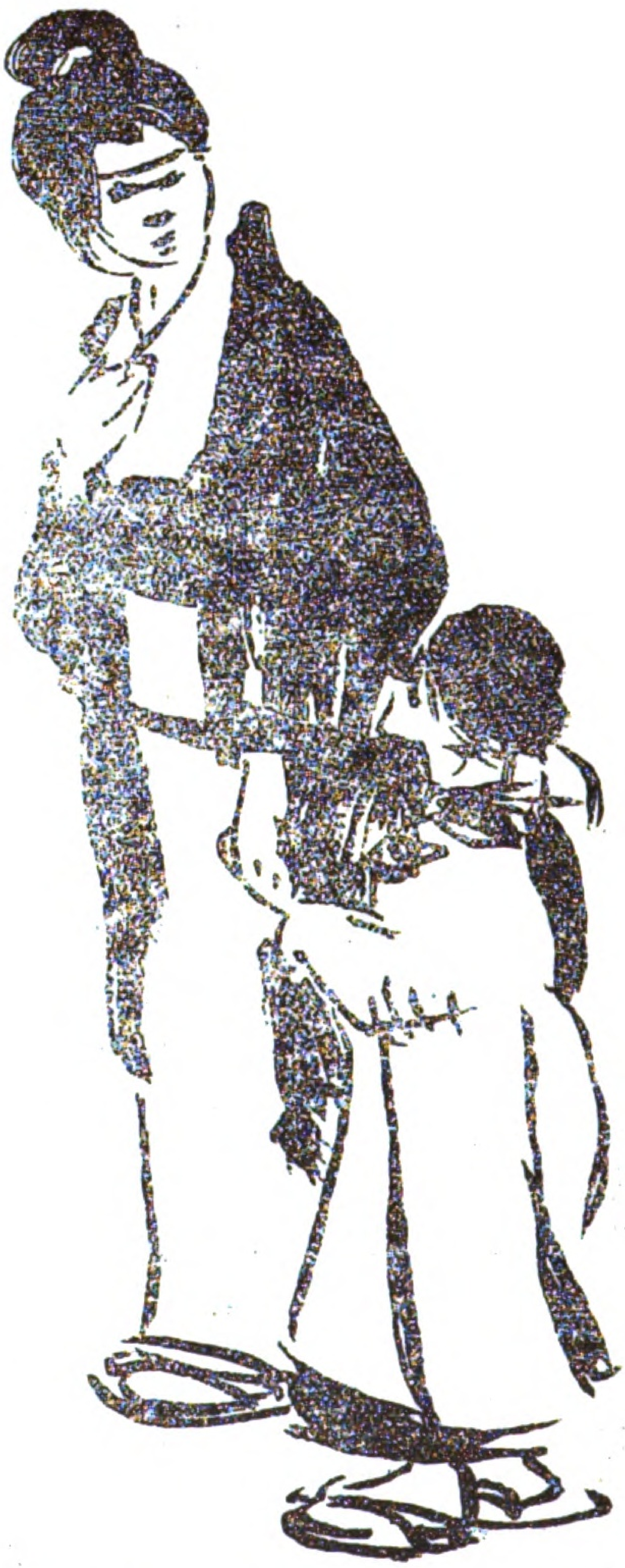
草生水には御經油井、貝油井、琵琶油井、皿油井と名のみ殘つて居るだけで、井戸は雜草の繁みにかくれて居ると云ふのに、琵琶と御經とは三百年の塵と共に朽ちたのてあろう。たうとう見つからなんだ。

（入賞）

開放したる心の扉の記

若杉小夜子

初秋の日影は朗らかに、百日紅や紫苑が流石に淋しい面影をして咲き亂れて居る、時々悠暢な車の軋りがカラ〳〵と緩やかに響いて行く。私は朝寢の腫れぼつたい顔を白い水の中に浸すと、丁度寢亂れの姿して海の空氣に觸れた時の朝の心地が思ひ出される。薄暗い家の中には、燈明がいやに赫く強く光つて居る、電話の鈴がけたたましく鳴るかと思へば、矢鱈に調子外れの三味を掻き廻す者があつて、「アハヽヽヽ」と浮摺つた聲で家中が笑ふ。眉を寄せて、座敷の隅に居づくまる私を「鬱々した人だね」と母が云ふ「どうして彼おんなに陰氣なのでせう」と誰かの聲がする、時計は、



（五等）　貰ひ物　青森　松尾千代子

もう一時に近い、手紙を書く者もあれば、小說を讀むものも、たわいなく寢て居るのもある。藝者屋の午後は亂雜だ、唯母と下女と半玉許りがくる〳〵と動いて居る、歸省したのを機に、もう放すまいとの考へか、母は頻りに機嫌を取つて吳れる、あゝ實に氣の毒な、然し何故斯う自分に不相應な周圍であらう。

十三日、晴、

持病の喘息起る、呼吸迫る事烈し、夕暮注射してより幾らか苦しみを逃る、午後六時、枕邊に英樣の葉書を見る、君も同じ病氣起り、南町の病院に入るとあつた。案外、空想は現實に、何等の關係もないと云ふ事を、近頃私は自覺して來た、もう夢の女でない、昨日よりも病輕し。

唇も舌も爛るゝ火の酒に觸るゝもならぬ女の悶え。

十五日

蟋蟀の泣く音と爪彈きの哀音とは、私の靈を暗い〳〵草も無い水も涸れ盡した常闇の、空漠たる荒原に誘ひ込んで行くのぢやないかしら、――此の寂しい胸。

あゝ羽後のりうさんは！、共に〳〵抱き合つて日本海の怒濤の中に、この春を葬らうと迄誓つた、同性の戀人は、五月此の方音絕えた！いゝえ〳〵皆私の罪惡から、前半生の一面は燃ゆる夢の樣に、又一面は悲壯極りなき悲劇であつた。何の順序もなく冷熱が無茶苦茶に戰つて居たのだ、此の纖弱な少女の身で、何を好んで、生活の渦中に飛び込まうと云ふのか、罵られ嘲けられ冷たく一瞥を與へられて、何れは氷の樣な胸を抱いて、苦闘！に行く女を、……人は云ふだらう彼の女は危い理想の影を追ひ、戀人を慕つて獨立とか奮闘とか體のいゝ事を云ふのだと。蛇度淺薄な解釋を試みるてあらう、何でもいゝけど、勝てるか？勝てるか！赤い淚の色、黃泉の兄樣！妹は仆れる迄苦闘します、唯意義ある生を終りたい、刻々と死の近づきつゝある如な養父母の面を見ると、勇氣は失せて、咽び泣く許りて、遂には十八の秋も暮れやう。

十六日、單調！

誘はれて自己を欺きたる戀は罪惡である、如何に熱烈に愛すと云ふとも、その言葉を受けるのは罪の源である、と今更自覺しても過去となつた。

戀すてふ僞り言を許さんか
死なんと云ふを冷く見んか

十七日、雨ふる、

黃昏、灯をともしてより久々に十三絃に爪をふれて見

る、餘りに今の心にはじれつたい響きてある、寧ろ萬物の破壞されるやうな痛快な音が聞きたい、是ても女かしら。

十八日、今日も雨、

欺かざる自己を告白すれば、操の無い女の血脈が通つて居る上に、生後間もなく最低の位置に落されて、侮辱の中に拗ねくれた性癖を作り上げんと云ふ迄て、燃ゆる樣な虛榮と誇りを、意地と云ふ輕羅一重に包み切つて、リボン一つ寶石一つ飾ろうともせぬ自分て自分は解し難い。

十九日、

彼れ見やしやんせ海安寺儘よ立田か高尾ても及びやせぬぞへ紅葉狩——細い咽喉は十六！八重ちやんだ！粹に粹をきかした端唄だときく丈に其の節廻しは眞似も出來ぬ。母は德川時代に江戶名所を唄つたものと云ふけれど意味は解らぬ、八重ちやんは唯「知らないわ」とのみ、懷中の淋しい時と、戀人の音づれの絕えた時より哀愁を知らぬ少女てある。悲慘な運命の許に三絃をかき鳴らして世を渡るとなら是程詩的な生涯はあるまいに、女のあらゆるものを賣つて、倘苦しみつゝ、自覺もせずに其の日其の日を笑つて暮す、寧ろ幸福な人々てある。餘りに現實を暴露した周圍ぢやないか、彼等は黃金の前に許り顏の形を種々にして生きて居る、喜怒哀樂を粧ふと云へは僞るやうなもの、彼等程よく人間の慾望を正直に曝露して居る者はあるまい、もう十二時半だ、遊里の燈火は疲れ切つた樣にまたゝいて、按摩の呼び聲と苦學生らしいのが！あゝ波さんよ波さんよ……と不如歸の歌を唄つて居る許り。靜寂として花柳病院の白壁が暗に染めぬかれて居る宵の笑ひ聲や三味の音や盛な華瓦斯は影もなく、昔の光り今いづこ……と云ふ歌を思ひ出させた。こんな深更迄單衣一枚て立つて居るのは今夜許りだ。

二十日

太陽は傾きかけて日影の鈍い平原を、あてどもなく步き廻つて日光街道の松原を越すと栃木縣の野木村に出た、宿端れの丘に立つと西は一脈の連山が紺青の色をして居る、東は筑波の裳裾迄さへぎるものもないかと思はれる平原てある！あゝ麓なる人！如何にましす！お手に縋つて凡てをお訴へ申上ぐる折もあろ！此處から筑波は眞つしぐら一走り麓まて譯もなささうには見えるけれどどうして此の弱い細い足て！莊嚴な慈母の樣なみ山の姿を仰ぐ度に「唯純なれ」のみ言葉に

對して！私の胸は迫つて行く。秋の夕陽は弱い者の小い胸に云ひ樣のない悲哀を刻みつけてをごそかに〳〵杜の底に沈んで行く。自分獨りを涯しもない荒野に殘して筑波も夕陽も消え去るのか……あゝ沈む〳〵、東京の兄樣は英樣は！羽後の酒田のりうさんは！いゝえ〳〵自分は眞の獨りである。

入選

都會生活の一面

道江女史

□□日。曇。(木曜日)

今日は市ケ谷八幡の祭禮と見えて、神樂の囃子など、遠音に聞える。末の子に乳房含ませながら、三人の子供を學校に出した後で、暢びりと座敷に横になる程、心持の良い事はない。この夏中は、何によりこれが樂しくつて、その儘不覺轉た寐の夢に入る事もあつた。

末の子はもう乳房握つたまゝ眠りかけてゐる。折々思出したやうに、ぴちや〳〵吸ひかける。いつも乳房含ます毎に、國木田さんの事が聯想されてならない。治子さんは末兒の哲ちやんを里にやつた當時は、毎夜乳が張つて眠られないで、器械で吸出して外に捨てられたさうだ。而して乳房與へてすや〳〵眠入哲ちやんの顏が目先にちらついてならないと、よく齋藤さんの處へ來ては話すさうな。

「乳捨てに出づれば朧月夜かな」

と紅葉さんがよまれた句を想出して、漫ろに治子さんの事が想はれて、これから赤阪のお宅まで見舞に訪れやうかなど考へた。

斯な事を考へてゐると、斯うやつて轉た寐をしているのがもつたいなくなつて、密と寐かし付けて、其傍で仕事を初めた。今日は蟬もぱつたり鳴止んで、庭の隅のコスモスは未だ花こそ持たぬが、活々として秋を待つてゐる。

遠神樂の音も斯る日には、心深き囁きと聽かれて、物寂しく、默つて子供達の袷を縫ふてゐるのが、何となく寂しくつて寂しくつてならない。一層能く眠つている末兒の目を覺まして、泣かして賑かにしてやらうかとも思つた位いだ。

□□日。小雨、後霽れ。(金曜日)

茨城縣の水海道町の郷里あつてこの夏以來病養されてゐた增田とく子さんが逝れたとの報知が來た。

あゝ私は一人の信仰の友をうしなつたのだ。遠く離れてゐるので、せめて亡き友の追憶を想ふまゝにしたいと思ふて、今日も末兒を寢かし付けてから、窃と書齋に這入つて手箱の中から增田さんの寫眞二葉と數のしれない手紙や繪端書を散亂した。限りなき悲痛は私の膝の四邊を繞つた。

あゝとく子さんの寫眞……一葉は青山女學院に在學中、今一葉は名古屋淸流女學校に在職中の寫眞だ。せめての慰悼と思つて「うるわしの白百合」の一節を微吟した。續いてとく子さんが學校に在る頃、常に愛誦されたのばかり拔いて唱つた。寫眞の前、とく子さんは、未だこの世にある如く、愛苦しい笑顏をもつて私の讃美歌を熱心に聽いて、下さるやうに想はれてならない。

夕方、子供が揃つて、トマトが眞赤になつたから見に來てくれと騷ぎ立てるので、皆なに取捲かれて裏の菜園に出ると、たつた一箇だけ赤味を帶びて來たのを大騷ぎやつてゐるのだ。

□□日、晴。(土曜日)

今日は午后一時から敎會堂て、お伽會があるとかで子供達は小波のお叔父さんが出るからと云ふので無理に連れてゆかれた。

有繫に小波さんはお話が上手である。滿場破れるばかりの喝采をもつて迎へられた。暫らくは壇上でにこにこ笑顏で默つて居られる。そのうちに靜かになると小波さんは先づ渡米についての「告別の辭」を述べられた。四百に餘る少年少女はみんな泪を浮べないばかりに暫くのお別れを惜んでゐる。小波さんは早くもこの子供の悲し相な顏色を見取つて、いつの間にか告別の辭もお伽噺に化して了つた。一例を上げてみると、

「皆さん、私は今日は某所に渡米についての送別會があるので、忙しい軀であります。それだから能く走る四ツ足のものに乘つて來ました、皆さん何てせせふ?」と云ふと、今まで默つてべそをかいてゐた子供が、口口に「馬てすか?」「馬車てせふ」「自動車てすか?」と矢のやうに尋ねられるのを、例の如くにこ〳〵笑つて聽いて居られたが最後に、

「否や、二人曳きの人力車てす」と應へると、わつと再び大喝采、今度は又にこ〳〵しながら、

「それて愈々近日むかでのやうなものに乘つて橫濱ま

て往きます』と云ひ切らないうちに、『汽車々々〳〵』と叫び出した。すると又にこ〳〵して、『皆さん、能く當りました。それから眞黒な鯨のやうなものに乘つて太平洋へ出るのです』と云ふと、『汽船々々』『ミネソタ號』など叫びだした。

私は心から感じた。小波さんは實に能く子供の心の底まで深く深く研究されてゐなさる。とても何十人の子供を待つた先生でも、小波さんにはかなはない。お影で今日は好い事を覺えた。

□□日。快晴。(日曜日)

今日は朝から家内中て、向島へ秋草を見に往く筈てあつた所、急に良人が早稻田の野球の試合を見に往かうと云出した。道雄は大喜びだが、澄子も靜江も大ふさぎだ。とう〳〵早稻田の大隈さんのお邸の秋草を見せて頂くと云ふ歸途の約束付て出掛けた。

プレーヤースベンチにはもう小杉未醒さんが來られて寫生帳を握つて棒立ちになつて居られる。平塚さんも來られて良人と一緒に夢中になつて、まるで子供のやうに騷ぎ廻つて居る。連れて來た子供の方が反つておとなしい位いだ。

押川さんや水谷さんはいつも元氣な事。あれて自宅へ歸ると筆を執るかとは思はれない程だ。良人も遂に堪え切れなくなつて飛出して了つた。打手になると、口の惡い平塚さんが『蚊の脛パツター』と冷笑す、吉岡さんまで調子に乘つて『ヘビーバツター』と銅羅聲を上げるので私は不覺眞赧になつて了つた。さも〳〵私が平生まづい物ばつかり喰べさせてゐるやうにしか見られない。私あんな耻かしい事はなかつた。

ある朝、ある午後、ある夜、

千とせ

、、、、九月三日(朝の一節)　誰か呼んて居るやうに思はれて玄關へ行つたら意外、實に意外「マア藤井さん」と云ひば云つたが若やと自分の目を疑つた「暫くてしたわねー」きゆつと私の手を握つてほろりとなさる、日頃會つたらあゝもこうもと思つて居た恨言も餘りの意外さに何から云ひ出したらいゝか分らぬ、暫は呆然して居た、が漸く話しが進むと共に此の三年間の疎ましさを

詰つたので、其事情を涙ながらにお話しなさつた、けれどその事情が何の事やら一向要領を得ない、其内にお暇すると仰有る、止めたがきかない、デハ御住所をと尋ねてもさつぱり分らぬ、ては是へ書いて頂戴と巻紙を出すと、見て居ては厭だと仰有るので、袂て顔を掩つて居る内に、藤井さんは居なくなつて了つた、オヤと驚いて巻紙を見ると、是は又○だの□だのが澤山書いて有る限り傍に居た弟にきけば、今お歸りなさつたと、直後を追ふて通へ出て右か左かと



（六等）ゆく秋　紀伊　稗田みつ子

眺めたが影も形もない、大方こつちだろーと右へ折れて息の續く限り、駈けて〱いつの間にか元の藤井さんの家の方へ行たら、向ふにちら〱夫らしい姿が見える、先づ嬉しやと宙を飛で追ひ付いて漸くお肩を捕へた、「何を成さるのお放しなさいよ」「厭、住所を敎へない内はどうしても放しません」「どこに居やうといゝぢや有りませんか……執拗」突然り私の手を捩つてストンと一間も先へ放り出して、きつと睨んで立つた物凄さ、アッ氣が狂つてかと驚いて起き上ろうとすれば、又跳り掛つて襟がみ取つて引き倒し、怪我してはならぬと一生懸命に抵抗するが、とても怪力に叶はぬので「誰か早く……」と助を呼んでも自分にさへ聞えぬ程の小さな聲、悶えて〱喉も裂けよと聲を振り絞ると「どうしたの、今頃魘れて」輕く肩を搖られて、ハッと目が醒めたら母樣であつた、アヽと太息した儘胸へ手を當ると、ハッハと息が切迫んで額にびつしより冷汗をかいて居る「どこか惡いの……寢てお出な」と氣遣はし相に仰有る「イーエ起きませう」と勢よく飛び起きて椽へ出て、色取々に美しい籬の朝顏を眺めて居ると、あの涼やかな細い眼をきりつと釣り上げて睨だお顔が目先へちらついて仕樣がない、まさかとは思ふけれど若や若やの念に目を閉ぢて暫時夢を繰り返して居た、が、母樣に幾度も幾度も促されるので、漸く楊枝をくはへて嗽に行くと、ひよいと木戸を押して這入つて來たお隣の房ちやんが突然り、姉さん、とかじり付く、「姉さん今お嗽するの、ジャー是から御飯たべるんでせう、隨分遲いはねー」指で押したやうな笑窪を寄せて懐かし相に私の顏を見る「イーエ私はね御飯が濟でから嗽するの」と戯れに云へば「マア私は夫と反對よ」圓らな目を殊に瞬つて、さも驚いたらしい樣が可笑くつて思はず吹出して了つた。

五日（午後の一節）纖い柔い雨がしと〱降り出して來た、只さへ此の五六日は、妙に氣が欝して仕樣がないのに、暑い中にも冷やりと身に染みる初秋風が、ちらほら咲き初めた紅萩のたわ〱した枝を搖がせる每に、白い透き通つた露の玉がころ〱と零れて碎ける夫を凝と見て居ると、もう譯も無く悲敷成つて來て、人の居ない處で聲を放つて泣いて見たいと思ふ、何故私は折節斯麽妙な氣分に成るのだろう、何一ッ是と云つて泣くべき原因がないのに、若しや病氣ではなかろうか、……誰か思ふ樣叱つて吳れたら、はつきりして惡夢から醒めたやうないゝ心持に成るかも知れぬが、

外出する勇氣もないので、せめて本でもと好な樗牛全集を繙いた、第五巻の思ひ出の「春雨に我は老いて、六歳は旦暮の如く立ちぬれ共一あたりを讀むと、病軀を抱いて世を儚み、故郷に離れ親に別れて、遠く流離ふ薄倖の詩人を、戀でなく、愛で無く、野心でなく、清い／＼み空に澄む月のやうな、淨い聖い同情を以つて、及ぶ限り慰めて上げたなら、としみ／＼考へた。

八日(夜の一節) 誰彼なしに人が煩いので、部屋へ這入つて獨で裁縫を仕て居たら、母様が「百花園へ秋草見に一緒に行かう」と頻りに仰有る、大方私の勝れぬらしい樣子を御心配成さつてのお思ひ立ちだろう、と思へば辭む譯にも行かずに、進まぬながら髮を結び直して衣服を改めて玄關へ出た、とたんに車が止まつた、一寸幌の内を覗き込むと「アラお祖母樣」自分ながら疑ふ程冴えた聲でお手を取つた、京都からは一昨日お歸りなさつたそうな、夫で「お前に嘸よく似合うだろうと思つて」と柄のいゝ西陣織を下さつた、思ひも寄らぬお土産に何ともお禮の詞に困つて、只幾つも幾つもお叩頭をした、晩餐を一同で賑かに了へて、尙ほ京のお話を伺つて居る内にもううと／＼遊ばす、すぐお床をのべてお腰を揉て上げると、いゝ心持相にすや／＼寢付いてお了ひなさつた、私はお祖母樣と並んで床に這入つたが十二時聞いても寢付かれないで、何だか此頃になく氣が晴々して、嬉しさがわく／＼と胸の底から湧いて來るやうだ、何がこんなに嬉しいのだろう？、あの反物がかしら：：私は一體衣裝にはごく淡泊りした質なので、あれが欲しいの是が着度いのと強請つた事は一度も無い、夫丈買つて頂いても嬉敷ない事は無いが、さして悅ばない、夫を今日の計りは幾度も／＼出して見て皆に笑はれた、矢張私は衣裝に寄つて慰められる女かしら：：餘り平凡だ、と思ふと如何にも自分が蔑れて厭な氣がする、否是が他の人で無いお祖母樣に頂いたのだから嬉しいんだろう、そうだお祖母樣は御自分のお小使を割いて迄も私を悅ばせやうと思召す其のお心が嬉しくつて／＼：：：くるつと寢返りしてお祖母樣のお顏の側へ枕を寄せて、そつと搔卷の上から抱くやうにして、熟々寢顏を眺めると、お歲に合せてはお窶れなさらないふつくりした頰の、殊に枕に付けて被入る方がぽてつとふくらんで、前齒の無い小さなお口が今にもホヽとお笑ひなさりさう：：、あゝお祖母樣のお胸には、何の苦も無い悶もない：：恐らくお若い時から、憂い事、辛い事を知らずにお歲

を召したては有るまいか……。

家事のひま〳〵に讀むツルゲーフ

鈴木春子

八月五日、晴、

夜、母樣と、久し振りて、白ひげの緣日に行く。カンテラの赤い灯に映えて、赤い花や青い葉が小さい瞳を見張つて居る。ぐるりと一廻りして、灯の光が櫻の葉裏に、ぼーつと白く擴がつた堤の上から振り返ると、幾軒もの、玩具屋、おでんや、飴屋、簪屋などが、灯のなかに黑い影を描いて、白浴衣が、ちら〳〵其影に吸込まれたり、吐出されたりしてゐる。

十三日、はれ、

今日はお盆なり。いつも寢坊の弟三人、珍らしく薄暗い內からふと姿見えずなり、朝餉も終へて、窓格子の影、鮮かに疊にさす頃、手も足も、泥まみれになりて、意氣揚々と、かへつてきた、さて、其獲物は、鎗んぼ、蓮の花紅白、みそ萩、稗、ちんころ、夜、お迎火すまし、茶を供へやうとすれば、佛壇の口に〆飾の如くせる鎗んぼの花粉、ばら〳〵と結びたての髮にかゝりて、いくら頭をふりても落ちず。

父上、(だから、二百三高はイケナイ。)と、笑ひ給ふ。

いと、口惜しくて。

十五日、はれ、

供物、

朝、——飯、味噌汁、香の物、

晝、——新芋甘煮、

三時、白玉、夕方、團子、

母上、後日の參考の爲、お團子の製法記し置けと仰せらるゝまゝ左に、

まづ、團子の粉を熱き湯にてこねて丸め、蒸籠に入れてむし、すーつと湯氣の上りてより、凡十分半程、其まゝふかすなり。

入替り、立替りの訪客にて、晝間、三ページしか讀み得ざりし、ツルゲネーフ短篇集、襷外すも忘れて、ランプの下に、覗き居りしに、「さあ、お前もお念佛なさい。」と母上、藍勝の提灯ほの暗き佛壇の、木魚の前に引張りてゆき給ふ。

土器の線香立より、縷々とほの白き幾條の烟、かたみに、もつれては、何處にか消えてゆく。其烟のひまに見ゆる代々のおいはい祖母様のゝみ金色に光りて、新らしき涙催さしむることよ。

廿九日、晴天、

椽近い、濃緑の橡の木の蔭に、裏の畑から堀つて來た雁來紅を植えたら、ぱつとして、火が燃え初めたかの様。

火、火！其よ、この胸の希望の火。

九月二日、晴、

　蟬は、

から〳〵、みん〳〵、つく〳〵法師いと、哀なり。何をか惜む。何をか悲しむ。

あゝ、もの皆深き〳〵洞の内へ、吸込まるゝが如き夕暮の色かな。

大聖の寂するを惜む、木々の搖ぎ、悲しみの曲をかなづる木の葉のこゑ。……

三日、はれ、

私は、叉針を持つ。幼妹が、萠黄蚊帳の内て、小さな、いびきをかいてる外には、物音一つない。

今朝、一番てお立ちなさつた母様は、今どの邊を歩いて、ゐられるてあらう。よく此頃、新聞に、衝突だの、脱線だの……、いゝえ決して其様な事ありやしない、ありやしないと思ふても、矢張り氣にかゝる。どうして、私は、かう苦勞性なのだらう。けれど、誰ても、かうなのかしら。

一人、二人、三人、四人、今朝からの植木のお客が、八人、内金五人、これ、たれ、釣錢の額、いくら、いくら。石のお客、一人、内金、いくら、と、新聞紙の期米相塲の上へ、大きく書いて置く。こうして置けば、大丈夫。いつも、忘れて、母様にお小言頂戴するのが、恐ろしいから。

もう今日は、誰も來さうもない。成田つて、どういふ所てあらう。早く母様お歸りなされはよいのに、……チク、タク、と、時計の音の間に、汽車の窓から、珍しさうに、外の景色を見てゐられる母様のお顔が、はつきりと浮ぶ。が、だん〳〵ねむうなつて、其輪廓が朦朧となる。…　これてはならぬと、吃と、目を見ひらく。裁板もある、縫かけの袷もある。格子を透して、ぐいつと、庭を見る。あの様に、青葉は、生々してゐるてはないか。糸鷄頭の花は、眞赤な緋房を、地に垂らして、もの皆を、溶かさうと、してゐるてはな

いか。凡ての物象は、生々と、活動してゐるてはないか。何故、自分は、ねむい。馬鹿らしい。布を見つめて、針を走らす。

しばらくすると、又、ぽーつとなる。遠くの方から、いろいろの物の音が漂うてくる。……

チン／＼／＼と三時を打つた。お茶にせねばならぬ。

私は緣側て、父様をよんて、留守居して頂いて、植木場に、馳けてゆく。近所が近い故、餘り大きな聲するが、恥かしいので、一々各々の仕事してゐるところを廻る。縱横に走つた小徑を、どん／＼かける。青い色が、ぐる／＼私と、すれ違ふ。赤い所も、交つて居る。私は、發狂せる人の心理狀態は、ほゞ斯樣のものじやあるまいかと、ふと思うた。此刹那の自分の心の内には、平常の習慣も、理性もない。

銀行の出勤日記

秋葉清子

▲八月二十六日。木曜日。晴。胃の工合がわるいので朝飯を食はずして出勤。今日は武田の妹娘の葬式だ。笹岡さんが支配人代理て早くから行かれた。立派な行列てあつたが、多くの會葬者が、莨をふかしたり、ゲラ／＼笑つたりして後から從いて行つたといふ、當面の事實に遮られて、若くして逝ける人に對する同情も起らずに終つた。晝飯も食せず。午後、上海の帝國領事館へやる手紙を書きかける。嚴格な父にでも對するやうて、どうして筆がのびない。とうと「以書面御照會申上候」と書いたきりて松並さんに讓つた。四時頃角の氷屋に女の泥棒があるといふので、ペンを持つたまゝ走つて見に行つた。二十四五の、色の黒い女、丁度町内の顏利らしい男が、黑山のやうに集つた人中てその女を眞裸にして身體を檢べてゐた。氷を食べにはいつて、氷屋の主婦が便所へ行つてる間に、店の賣上を袂へ入れた所をめつかつて、五十錢程は出たけれど、まだ少しどこかへ隱したに違ないんだといふ。間もなく巡査が來て引致していつた。あとて其女を裸にした人が、腰卷を取つたら下に猿股をはいて居たので、こいつは仕事師だと思つた、と話してゐた。デスクへ戻つて、ボンヤリと今の女の事を考へた。平氣てスラスラと衣服を脱いだ態度。ピシと平手て頰を打たれてチロリと其方を見た眼。悠々と巡査の前に立つて

行つた後姿。更に、錢箱へ手を入れた時の顏。眼。想像は想像を生んで、一時間稼仕事が手につかなかつた。六時歸宅。行水の時、何氣なく水から先へ盥に入れたのを、死水だと言つてくどく義姉さんに叱られた。死水であらうと何であらうと、自分が使ふ湯を自分が汲むだのだ。自分さへよければそれでいゝぢやないか。死水と言へば人は嫌ふにきまつたもので、もし他人の湯をとる塲合には、さういふ事はすべきではないといふのなら分つてゐる。またその位の事は言つて貰はないても知つてゐる。特に好んでさういふ事をする必要はないが、したとてそれを兎や斯う言ふ必要は更にないと思ふ。餘程それを言うと思つたが、また何とか理窟をつけられて、つまりは八十番の常識論へすべつてしまひさうなので止めた。夜おそくまで外で涼む。



（七等）　同窓會　青森　松尾千代子

▲八月三十一日。火曜日。晴。八時出勤。もうみんな來て居られたのには驚いた。急いで仕事にかゝる。今日は電車の響も、何だか忙しげに聞える。晝前、銀行へ引出に行く。子供が一人も居ないので巳

むを得ず。澤山な人で容易に番が當つて來ないので、大分暇がとれた。小拂に使ふのだから千二百圓だけ。歸ると金庫の今井さんが『隨徳寺をきめこんだんぢやないかと思つて心配して居ましたよ』と言つて笑つてゐる。傍で水谷さんが算盤をパチパチやり乍ら『可哀さうに、せめて萬といふ聲がかゝれば俺でもやり兼ねないが』などゝ言つてゐる。早くしまつて四時歸宅。散歩に出て電氣館を見る。脚色したものはいけない。どうしても風景か風俗の實寫がよい。いくら見ても飽かない。目が充血して頭がヅキヅキしてゐても、もつと見たいといふ慾がある。歸りがけ、富中組の前を通ると、勘定日なので、親方は家の中でパチパチ算盤を彈いてゐると、人足が五六人、地べたへ腰をおろしたり、ブラブラ歩いたりして勘定を待つてゐる。それをまた家で待ち兼ねたものとみえて、子供をしよつた妻さん達が二三人出て來て、女同士、沁々とした世帶話などしてゐる。種々な事を考へ乍ら家へ歸つた。寢てから、そつと電燈の紐を長くして、『中央公論』の八號を讀む。森田草平氏の『離合』には感心されなかつたが、眞山靑果氏の『楔』はいゝと思つた。主人公が發狂するに至つた動機が分らぬといふうらみはあるが、其發狂後の心理的經過は、實に羨ましい程氣持よく描かれてゐる『これも本心から云ふのではない、邪魔を防ぎたいばかりに強いて斯うも云ふのだと、自分でも知つて居た』の一句、眞靑な顏をして、納屋の中で物理學書を讀んで、『絶えざる自動を以つて、級數的に熱と光線を産出して行く器械』を發明した助七を眼前に見るやうな氣がした。

▲九月十四日。火曜日。晴。八時まで朝寢した。九時俥で出勤。今日は水谷さんも大井さんも休んでゐる。晝飯の時、松並さんが『これ僕に來たんです』といつて、女名前の手紙を見せてくれた。何流といふのか、隨分氣取つた字で卷紙に一間程なすつてある。馬鹿に月並な艶書だ。この人は廣島縣の豪農の娘で、どこかのミッションスクール出ださうだ。双方まだ顏は知らないので、松並さんの寫眞を或機會で見て、それで始めてこの手紙をよこしたのだといふ。しまひの方に、『眠る間もさめての後も胸苦し心ひとつに君を思へば』といふ歌がある。これといふまとまつた仕事もせず、四時歸宅。島田貞之助氏が來てゐられた。留守中に十三になる妹さんが脊髓病にかゝられたのを、迷信家の兩親が祈禱屋などにかけてゐた爲に、とうと身躰の內

部がドロ／＼に腐つて、悲惨な死に様をせられた事をつぶさに話した。男だけに、涙を浮べ乍らも極めて平氣に詳しく話されたので、一層われらの心を動かした。父上に手紙を書く。妙見の縁日。『文藝倶樂部』の古本二冊五錢で買ふ。泉鏡花氏の『夜行巡査』と江見水蔭氏の『女房殺し』。此間借りた田岡嶺雲氏譯ゴリキーの『三人』を讀む。各々異つた性格を持つた三人の少年が、同じ軒下に起臥しつゝ、それ／＼に生ひ立つて行く所を讀むと、何とはなしに『たけくらべ』を思ひ出さずには居られない。十時就寢。此頃は床下の虫の聲が耳について容易に眠られない。幼い時蚯蚓が泣くのだと教はつたが、蚯蚓ならばあんな泣き方もしやう。靜夜、何の律も調もない、あの眞率な泣聲を聞きつゝ暗い土の下にウヂ／＼としてゐる小さな虫の生涯を思ふと、立つても居ても居られない樣な氣がする。『家庭日記』に送るべき短篇の事など、考へるともなく考へる。得る所なし。十二時を聞いて眠に入る。

一生懸命になれ

盛田そえ子

九月一日、晴。今日は畑で草取りをした、午後六時頃に歸宅してお湯に這入つた、もう此の頃はそよ／＼と秋風が吹く、風呂の中に居ても氣持がよかつた、それに初めて勞働したので、身體のぐあいがよく、力も出るし、勇氣も出るし、これなら、父樣が道樂をして毎日遊んでゐても、少しも恐れることはないと感じた。何んの畑の草位は、私と弟で充分取りきれると思つた。そんなことを思ひながら風呂を出ると、またお母樣が嘆いていらつしやる。何ですかと尋ねると、お父樣がまたお錢を持つてお出てになつた、とのこと、私は返辭もせずに、自分の部屋に這入つて了つた。暫時、机に凭れて種々のことを考へた、さつと吹き込む風に愕いて、窓の戸をしめ、昨夜買つて來た女子文壇をみた、歌を學びたい心が、頻りに起つたが、無理に打ち消して床に這入つた、十時十分。

二日、晴、微風あり。

今朝は少し早く起きて、畑へ行かうとすると、お母樣

に停められた、そして、御父上が歸宅したら、私も一緒に御意見申上げてくれとのこと、私はそれをきくと、心持が惡くなつてきた、そのことや文壇に關することは、忘れよう忘れようと思つて、それで畑に出るのに、父樣に御意見などゝは思ひもよらない、私は固く退けて、さて弟をつれて家を出た。そして畑に行く、道すがら後悔した、私でさへ父樣の不行績をみるがつらさに、かうして畑にばかり出ようとの考慮、それを眼前に家の傾いて行くのをみてゐる母樣は甚麽であらう、と思つて半日過ぎた。

この日私は、お晝飯を草に腰打ちかけて食べた、その時は一生恁うして送りたいと、否さうしようと考へた、少しの間休んでゐると、遠くて大砲の音がした、直ぐ傍の大道を異人が夫婦で馬に乗つて通つた、私は獨歩の筆が。縱横にゆきとゞいてゐるのに、つく〴〵感じた、今日も身體のぐあいは非常によい、家に歸ると、まだ父樣のことを嘆く母樣が、私には心得違ひのやうに見えた、私はさつさと、自分の部屋にきて、八犬傳を讀んだ。文壇はまるめて紙屑籠に入れて了つた。十時就寝。

三日、晴天、昨夜、睡られなかつたので、今朝は眼がさめても起きずに、床の中で庭をみてゐた、白々と咲き初めた草花や、梧桐の葉の一葉づつ散つてゆくのが、めづらしく感じられた、すぐ傍の障子も、今朝は何となく白くみえて、昨夜、蚊帳を仕舞つたことを思出すと、たゞ寂しい氣がした。今日が蚊帳の別れ日、來年まで蚊帳の中にねることは出來ない、壁も、唐紙も、天井も、初めて住んだ家にでも居るやうに感じられた、畑へ行く氣は出なかつた、一人部屋に引籠つて八犬傳を讀んでゐた。すると、母樣の聲て、女中に何か語るのがよく聞える、

耳をすましてきいてゐると、母樣は遠慮もなく父樣のことを女中にお話しになつてゐる、それが少し絕えると、早、お隣へ行つて話してゐる、それをきいた私は讀書も何も嫌になつた、感情に動いて行く涙もろい母の性が哀れてならなかつた。私は獨でます〳〵氣がいら〳〵して、忘れよう忘れようと、思つてゐたことまて考へ出して、何するともなく、一日を暮して了つた、今日も父樣の歸宅はなかつた、十時半、就眠。

四日、曇。今朝は朝顏の種を取つた、朝飯をすまして畑へ行つた、例の如く草を取つてゐると、突然、家から迎へにきた、急いて歸つてみると、お友達の靜子樣

てあつた。自分の部屋で、種々な談話が取り交された、靜子樣の云ふことは、大概、女子文壇に關したことばかり、和歌だの、美文だの、小說だの、と皆私が捨てゝ顧みなかつたことを語られて、私にもおやりなさいと、いろ／＼薦められた。けれども私には、出來ないと云つた。そして靜子樣の容態が限なく、羨ましく感じられた、滔々とその作法を說くところ、少しもさわがず、悠然として、ゐる處など、とても私達の及ぶ處でないと思つた。靜子樣がお歸りになると私は、一度紙屑とした文壇を、また出して來て一生懸命に讀んだ。靜子樣の被仰つた通り、熱心にさへやれば、きつと出來るに相違ない、と思つて一度仕舞込んだ、美文作法、和歌作法など、悉く机の上に積み上げた、急に氣が晴々として、心持よく床に這入つた、十一時半。

五日、晴天。今日は別に出來事はなかつた、畑へも行かなかつた、たゞ昨日靜子樣の云はれたことを、繰り返し、繰り返し、考へてゐた。

もう半年からの父樣の道樂、家も傾きつゝあるに、今また私が、文章や和歌に迷ふてゐたら、如何なることであらう、と思つた。けれども、一生懸命にさへなれば、きつと出來ると、靜子樣の云はれた言葉が、什麼考へても、うそとは思へない。さすれば私は滿足をするのである、和歌でも、文章でも、うまく作れさへすれば、それで私はいゝので、と家のことは打ち消して了つた。そして今日迄自分の行ひが限なく、賤しくみえた、女のくせに、百姓などして悅んでゐるとは、實に、賤しいと自分を哀れだと思つた。

この夜私は、一生懸命に文章を書いた、自分の今迄附けた日記を出して、種々と推敲し、推敲し、して、やつと作りあげた。それをみて微笑んだ、たゞ日記と云ふものは、必ず附けて置くべきものと思つたので、これよりはます／＼と、心に誓つた。そして明日からは母樣にも孝行して、と、何となく心が引きたつた。

猫の嫁入

香野

三日、今日はいよ／＼小猫のお輿入の日だ。私は早朝から緋縮緬の小切で涎掛を縫つて、鈴をつけて掛けるばかりにして置き玉子のあき箱を母樣に頂いて、小猫

のおちようづ場をこしらえてやり、それから赤と白との毛絲で可愛いらしいまりを作つた。これは小猫のおもちやにと思つてゞある。口惡家の從兄は、まるで全くのお嫁さんがくるやうだなんて。だつてもほんとうなのだもの。ホヽ小猫が私の家にお嫁さんにくるのだわ。そちこちして居る中にお嫁さんは初音樣の懷にだかれて、ニヤアーゴと云ふてはいつて來た。まあまあ可愛い、なんて〳〵容貌のよい猫でせう。目はぱつちりと鈴をはつたやうで、毛なみはよし實にこの猫等はきつと猫仲間での美人でせうよ。ほんとうに何とふ可愛い猫だらふ。甜め度い位いだわ。母樣も父樣も、口惡家の從兄も流石に「まあ可愛い猫だ」つて、だけど竹やは「おや猫ですかまあ」つて、さも〳〵やつかい者がふえていやに成つちまふなあ」てな顏して居る。そんな顏せんでもいゝわ。どうして、〳〵、あの樣な心無しの竹やなんかに世話させるものですか。それこそ必二言目には此の奴め。ポカン位いにきまつてるわ、早速さつきの涎掛を掛けてやつたらまあよく似合ふこと。白斑の所へ赤てうつりのいゝ事。實にいゝわ、チョコ〳〵と歩ゆたむびにチリ〳〵鈴が鳴るのでオヤ變な音が何所だらふ」といふやうな顏してチョッと頭をかしげてはキョト〳〵と目を見る樣子の無邪氣なつたら私は取つて食べ度い樣。あの竹やまてが「まあ可愛らしい猫だ」つておや〳〵今日はまあ朝から晩迄小猫騷ぎて騷ぎ暮して仕舞つた。

四日。日頃朝寢の大將の私も猫の顏が見たさに皆より一番先にしかも目ざましの鳴らないうちに起きたそして椽の方に丸くなつて尻尾をなめて居つたのを抱いて來てあのふく〳〵した頰にキッスしてやつた。猫は驚いてニヤンと一聲私のほゝを引掻いて一散に逃げて行つて仕舞つた、あとで鏡を見たらまあ直徑二寸程みゝずばれに成つて、ぴり〳〵してなか〳〵痛い。下女がはた〳〵と掃除を始めたら、いつしよになつてピョンピョンと、恰も小野道風の蛙よろしくといつた風に采配に飛びつく終にとう〳〵竹やに怒られてコツンとされた。まあ、あんな金の棒の樣な手でさぞ痛かつただらう、私はすぐと猫の頭をなでゝやつた。そしてキユッと一つ竹やを横目で、にらめつけてやつた。

六日。名を命るのまだ忘れてたので呼ぶに「猫や〳〵」だの「みいや〳〵だのつて皆勝手な事いつて噴き出して仕舞ふ。て今日は皆して名をつけることにした。なか〳〵よい名が出ない。ついに母樣が此の猫はふじび

たいの様にひたいの所が斑になつて居るから「フチ」とつけたらとの御說。皆誰もゲーともスーとも云はないので早速「フチ」と命名した、これて無事に小猫の命名式もすんだ。ためしにフチや〳〵と呼んでみたがフチは誰の事だか平氣てケロリとした顏して相變らず座敷中あれ廻つて居る。十日。朝早くからフチの便所のお掃除をする。なか〳〵臭い。こんなくさい思ひをして掃除をしてやつてるにフチは有がたうともいはて、私の裾にからみついて遊んて居る、此頃は最早フチ〳〵と呼ぶと、人間なら「ハーイ」返事をするのと同じなのだらう「ニヤーゴ」と何所に居ても愛らしい聲をして返事をする。フチの可愛さは日増にますばかり然しいたづらの增すにはホト〳〵降參。今日フチが來てからの障子と唐紙の破れを數えたらまあ大小取りませて廿四。

良人の留守居する圓滿なる家庭

玉露女

九月廿一日。今日は氏神の御祭とかにて此あたりは殊に賑はし、油煙に汚れし空氣の中の織るが如き人通りに塵をあぐる其下にて夜商人が並ぶる品々、小さき籠に身を囚はれの松虫鈴虫、昨日の野邊を戀ひてや泣らむ、如露の水にうなぢ打たれて臥す草花、物のあはれは何處にもこそ、女中逹は見物にとてつかはしぬ。

女學世界の增刊に出せし滑稽文。修練たらずと評せらる。彼の文はあや子大病にて東京病院にありし時、附添しいとまに急ぎ書きしなるを、家持ち子持ちの筆とる事も思ふにまかせぬこそ口惜しけれ、

九月二十四日。夜六時半の急行にて夫は台灣に出張の途につかる、新橋迄妹と二人にて見送る。赤坂表町の〇〇家の前に三越の車をろして番頭の何やら數多き反物取り出てゝ門内に運ぶを見き、去年の春歌舞伎座

にて逢ひまゐらせし、麻の葉形の大島召したる美しき令嬢は此御邸の君とか、など思ひつゝ過ぐる車の山王下にかゝりし時、年老いしきせる直しの見苦しき衣服着て古き車ひけるに逢ひぬ、いたわしの人の運よ、さま〴〵の浮世よ。幸に事欠かず生れ得し身の我儘やをごりはゆめなすまじとつく〴〵と思ひ込みて「ひどくしほれたね」と笑はれぬ。

九月二十六日。二十六日は父の命日、殊に今日お彼岸なればとて母君妹等はあや子連れてお寺へ、まゐらる。あや子が父君の御墓近くまゐりしは今日初めてなり、世に御座さば、御膝にすがりて祖父さまとィヽお顔など見せ参らすべきに……と一人家にてはかなみぬ。

夫は今日玄海の荒浪如何にこえ給ふらむ幸い空しづかなれば少しは心やすけれど作りしお鮨など父君が御寫眞と夫の寫眞に分けて供ふ。夫が航海中はかげ膳すえて松魚節供へ居るを健兒の見て「お父様はかつほぶし召しあがつて猫見たいだ」と笑ふ。

九月二十七日。朝より篠つくばかりの烈雨なり、今日は曉に台灣へ着き給ひし筈なればまづよかつたとは思へども……。

正午夫よりのお手紙來る。船中の事どもいと委しく門司より發せられしものと覺ゆるが、航海の面白さ見るが如く記されぬ。

九月二十八日。日記とて特に記す程の事もなき生活なれど夜のまとひの折々は可笑しき事もかず〳〵あり。五才の健兒のませたる物云ひ大人の如き口眞似には皆々大笑ひす。今日も私がなせし事の自分の氣に入らぬとて「お母様は何時そんないやな子になつて呉れたの……情けない……お母様は健坊の孫だやありませんか、それだのにちつとも云ふ事をきかない……」自分の祖母君に云はるゝまゝをつぶやくもをかし。鼻にきのこの生える病ありと人々の話すのを聞きて、健坊のお鼻にはチイタケは生えてないの?。

夜に入りて夏目先生の三四郎を讀む、みね子の性格羨ましう思ひぬ。夏目先生の小説は最も我が意を得たるものにて人物が意味深く動く様の殊にうれし。夜眠ねがけに一人つぶやきぬ「我は我とがを知る……」とにかく昔は烈女貞婦とやらむと理想として生きたる大和女子の今はみね子の如き女子となりて安らけき大平の惠みに暮す。時世の變遷は女子の心理作用を似てもつかぬものと變らしめたるにこそ。單より復に入

り粗より密に進む。女子の進歩なるべし。

九月二十九日。二十九日は我等に紀念とすべき日にて名づけて錫の日と云ふ。御馳走するを例とせるなれど主人留守なればたゞ栗のきんとん作りしのみ。私いつも作れば栗の芋あへとなるを今日は母様作りたまひしゆゑほんとのきんとんとなりぬ。錫の日とは何の故ぞとのたまふか?、たゞ答へむ三ッ組の盃持つ手もふるひ初島田のたゞ、たゞ、恥かしかりし十八才の昔の紀念とのみ、六年後の今日は二人の子のお母さん!。さりながら。我ながら。氣樂者のたゞ子供は母君のお世話にのみなりてお母さんはまるでお友達のやうなるぞ不甲斐なき。

早お晝すませて、妹と共に醫師の許に行く。妹は腎臓病の由。尿の試驗と云ふもの始めて見たりしが丁度ミルクセーキの如く二個のコップ形の器に入れて早く早く廻轉し急行列車の如き響を發してやがて止るよと見れば、火をつけて試驗するなり、尿も此位價値がつけば大したものなり、歸りの電車の中にて年老いし老婆の革に下りてありしを我等も其後より乗りて矢張り席なかりしかば、痛ましとは思ひつゝも其まゝにありしを、五番町にて



（入等）出郷　赤坂　ゆめみる人

若き紳士の席を立ちて、我等にゆづらむと云ひたまいしかば、喜びて彼の老婆に掛けたまへと云ひしに其紳士は「あなたにゆづつたんです」と小聲にさゝやき給い老婆は「いゝよ草臥やしないよ」と口惜しげに云ひぬ、人の心は淺ましきものよ。若き内は高潔なる考へを持ちたく、老いて後はひがまぬやうにしたきものよと思ひつゝ席につきぬ。妹は傍にて冷き微笑を浮べ居たりき。

神戸なる藤子樣より細やかなる御文參りぬ。生活の苦を知らぬ身もつく〴〵と涙してよまれぬ。藤子樣は二十五の未亡人。しかも三人の御子持ちたまひて女の手して生活したまふなれば御心の辛さは御筆の外にも猶たとへがたかるべし。御傍に居れば何とか致したきを、こなたも女の身の思ふまゝに振舞ひかねるが殘念の極みなり、御子樣方にまた何ぞ送り參らせむ。

今夜は十五夜の筈なれば晴れたらば如何にうれしからましを生憎の雨なるは、これも憂き世か?、

原稿〆切もはや明日にせまりぬ。書くいとまもたぬ身は心ならずもこれに筆とめむ。

午前には縫ふ午後には買ふ

藤　花

日光に照り榮えてる菊は赤くまだ露の消えずにあるので一入の眺めてある。小雀が白菊を一片ちらしてお隣の鬼瓦の蔭に隱れた。書齋の時計が八時を報じたので裁縫のお稽古に行く事例の通り。午後は松屋呉服店に行くから、一所にくるやう、そして先方て待合せると母樣が仰有るので其積りて出かけた自分も乘つた滿員の電車がゴー〳〵と風を切るやうにして通る裁縫の先生は姉時代から敎を受けた深切な方なので、わざわざ下町迄電車て通ふのてある。先生の内には同輩五六人の話聲が洩れる。稽古を初めない内そつと今日早歸りの理由を先生にお願ひして置く、妹の袷を縫ひ初める、絹物のせいか絲の滑りもよく且縫ひよい弟の着物はもう眞平だ、木綿のごつ〳〵ばかり。午後から出かけると、氣がそは〳〵して時計ばかり氣に掛る。先生が笑ひながらお待兼ねてすねと仰有る。氣まりが惡か

つた、仲好の山田さんは今日お仕上げになるとて御自分のお召を根よく背中が圓くなる迄俯いて被居る。先刻から裁物して被居した野澤さん、席におつきになる途中郵便よと妾の袂の中に紙切を入れる又例の滑稽書だらうと思ひながらそつと縫ひあげの着物の下で見ると、鉛筆の走り書きて、今朝無線電信がかゝつて！と書いて、わきにぽんち畫いろ／＼、母樣におねだりしてゐる妾の姿、可笑しくなつてよく笑はせる方と思はず吹き出す、何！何！とお隣も其隣の人もきゝたがるので、そつと畫を見せると、一人笑ひ、二人笑ひ、だん／＼廣まつて笑聲は一層高くなる。大分お賑やかですねえ、と先生が仰有つたので暫時靜になる。晝食は皆と一所に終へ、一日の内で一番話題のはづむ食後、話もせずに出かけた。銀座迄歩いて尾張町から電車にのる、丁度よい鹽梅に空いた電車がくる。大門返しと見えて人は三人ばかり見えた、中央に席をしたがもう魂は松屋の店に迷うてるやう。買物はあれど、これ、あれ、など、思はず微笑んだ。母樣は先方でお待ち兼ねか、まだ／＼妹の學校終へてからだから大丈夫と心づよく思ふ、時計を見ると自分の方が後れたやうて、氣ばかりいそぐ。電車の進行迄も遲く感じる。軈て今川橋――と聲高に云ふ車掌の聲と共に降りる。松屋の入口には國旗を飜して景氣よく「バアゲンデー」と筆太に書してある。まづ第一にお母樣をさがさねばならぬので、視線は人にばかり注いだ。二階に行く、こゝは二割引の場所なので人が多い、お下げ丸髷銀杏返し、中々數へ切れない。時節柄の品ばかりなので中々の混雜、土曜日とて角帽も大分見うけた。自然と變化するこの「コントラスト」裁縫の野澤さんに話したら又例のポンチ畫が出來上るだらうと思ふと、明日の話題が思ひやられる。今朝出かけに母樣は黒縮緬のお羽織、妹は洋服と仰有つたので、着物ばかり目に注いだ、三階迄行く、似寄の着物はよく目につくが、人は違ふ、絶えず人にばかり氣をくばるので目ばかり疲れる、此混雜を豫想しながら、唯松屋の中でとは迂濶と後悔する。時計を見ると三時に近い、若しや急用でも出來て御出ましはお止め……など、想像は種々の方面に移つて不安の念が高まつた。またもとの二階にくると見張の番頭、注意怠らず腕ぐみしてゐるのにばつたり二度も顏を見合はした。思はず厭な氣がした。堪らなくなつて一目散に電話室へと驅け込む。せはしく鈴が鳴るので少し待つてゐる。あなたは肺は御丈夫て

すかと新參者らしいのに、古參の電話掛が頻に聞いて居る、商賣とは云へ流暢なる電話の辨舌、中々上手なものだ、お待ちどう樣でと挨拶も待ち兼ねて、中央の電話器で掛ける、得意先からの注文話、變る〴〵人が這入て來て兩隣の鈴を鳴らす。馴れぬ場所とて耳がアん……として聽耳器を以つたまゝ立つて居た、自分の方は中々通じない、聽て弟の聲らしく遠くでもう母樣は三時間前に御出ましと終の句は混線して斷れる、お出ましときいたので、嬉しかつた、品物を見ながら階段の方にくると、突然頭の上で姉樣――と妹の聲がしたので「あら」と云つて馳せ寄つた。母樣も三階迄ゐらしておさがしになつたとの事、電話室へ駈け込んだ事など話して後では大笑ひ、まあよかつたと思ふと、急に足が懶いので休憩室で休む、可愛らしい小娘が禮儀よく茶を進める、刻一刻と客は殖えるばかり、よいかげんにして買物の選擇を初める、我先によき品を得ようとする○○家の女將らしい、こゝへ來ては一番巾をきかして居る、大の得意か知らないが番頭は頭ばかり下げて居る、他の客に無遠慮も甚しい、休憩室の入口に茫然と立つて居る角帽三人、互に君今日は駄目だねえと話してるのも可笑しく、退紅色の博多丸帶、平常締によいのを選んで居ると、拔目のない番頭最新流行とやらの花緞子を進める、御平常にはお德用といろ〳〵とき立てる、商人の口一も經濟二も經濟と仰有る母樣にはお德用ときいて一番お氣に召したので、コバルト色のに定める、序に夏のショールと格子のお召を買つて戴く、格子は思ひきり縦の太いのを選ぶ、妹は友禪縮緬に黄八丈、後はチル地セル地で五六反、先刻から待ち兼ねてゐる妹の玩具を買ふ、之は如何と硝子箱から女店員が人形を出すと、ぱつと電氣がついた。人形の目も光つた。時計は六時過ぎて居る。先刻の人は夢のやうに下に降ると客は五六人、店員ばかり目につく、入口はもう閉されて店員は早く仕舞ひたさう、母樣と二人で反物を持つて電車で歸る。弟には本の土産小供こゝろと新日本島、望の本なので大よろこび、もう自分の部屋で讀むでゐる、堂平と茶の間に坐つて母樣と包を廣げて買物の品評して居る。弟は不關焉と讀みつゞけて居る、お座敷では例の碁客、今日は天狗連のお集りて賑やかてある。

女中の代り

梅香女

八月十五日、今日は地獄の釜のふたも開くと云ふ日、今日から三日間下女に暇遣る、母様たれかその間頼むとお仰つたけど、私稽古になるからつて私其間令孃兼下女と云ふわけ、今日は歩兵隊の軍旗祭で御兩親ともお出になる、跡片付て一としきり轉手古舞やれやれと火鉢の前に座ると何時も向ふに座つて被入る母樣の被入ないので、何んとなく淋しい新聞見てると御免下さい、ハイと出て見ると知らない人、エ、私は髪結の亭主で御座ます、毎度御ひいきになりまして有難う存じます、エ、先日は小兒のを失くしました節は御丁寧様に御香典を頂きまして有難ふ存じました、一寸と御禮に……、何と云ふて好か、わからないから、どう致しまして、御さんざんて御座いました御丁寧に有がたうと云ふて歸す、きまると常にむだにきく三分の一も云ふ事の出來ない、母様がむだ口きく程用の口がきけたらとお仰るのも決して無理とは思はない、お晝は淋しく獨りで濟して、扨今夜の御馳走は何んにしやうか、今朝枝豆と胡瓜を買つたから、中肉もあるし、ビーフシ



（九等）　ぐるり打つ　　青森　立花とも子

チューと胡瓜もみ、枝豆の鹽湯煮で奴豆腐にしやう、縫ひ懸けの單衣を初めたかと思ふと、もう三時半そろ〳〵晩の仕度に懸ろふ、初胡瓜をはやす、なか〳〵上手くは出來ない、厚いのうすいの、私コックじやないから仕方ないワ、鹽振つてねかしておく、枝豆湯煮る間に牛肉と、玉葱と、馬鈴薯を五分角位に切る湯出上つた枝豆には鹽を振つておく、シチユーはフライパンにラートをとかして、牛肉を入れていため後で玉葱馬鈴薯を入れ鹽胡椒三盆砂糖を適宜に入れて、よく火が通つたらシチユーパンに移し水をひた〳〵位に入れて暫時煮る、其間に胡瓜をよくもみ水にて洗ひ、しぼつて甘酢につけておき暫時たつて皿にもる、肉の水が少になつたら火から下して、フライパンにバタ大匙一杯とかしメリケン粉同量入れてよくいりトマトソース大匙二杯程入れ、前の肉の汁を少しつゝ有丈入れて煮て裏ごしにして肉を皿にもりたる上よりかける、食卓を出して拭いてると御兩親とも御歸りになる、御母様オ、御馳走が出來ましたね、とお仰る、豆腐やが來たから一つ買つて四角に切つて冷水にとり皿にもつて花かつをと醤油をかける、食卓を皆んなならべる、五時親子三人水入ずの晩餐は開かれた、母様は獨りてよく此様に早く出來たね、父様は美味〳〵と一本のビールに心地よくお醉になつて、庭に腰掛もち出して蚊遣たきながら、涼み臺よくぞ男に生れたる、てな様子して、母様は衣服の跡片付、私も手早く臺所をしまつて、お琴さらう時分には父様と母様とお庭でうちわの手をはたらかせながら一生懸命お話しに花咲かせて被入る九時半戸閉りをして一同床に入る、遠くに盆踊りの勇ましい太鼓の音が聞えた。

十六日、四時起床髮結ふて顔洗つて、御飯とお汁こしらえて跡母様にお願ひしてお琴のお稽古に行く、歸つたらもう食べる許りになつて居た、母様さぞお忙しかつたらふ、御飯はどんなに出來たかと心配したけど先上出來て安心した、父様七時御出勤、朝の用終つたのが八時少し前、何時も下女は九時頃までかゝつてるが何にしてるやら、ものは順序よくすれば決して手間のとれるもんではない、頭が動かないせいだらう、魚屋が御用聞に來たから中鯛一枚とつておく、涼しい内にお手習する、十時頃になるとそろ〳〵暑くなり出して來た、今年は氣候が大さう順になつたからさぞ豊作だろう、私の浴衣を洗濯する、手の皮もむかずにすんだ東京新聞が來たので讀んで居ると、母様が御飯だよと

お仰る、午後は裁縫する、氷やが來たので買つて母樣と食べてると父樣お歸り、おれにもくれとお仰つて三人てたちまち器はからにしてしもふ、ジー／＼と暑苦しい蟬の聲を聞ながら又一しきり裁縫、今日は暑いから西洋料理はよして、鯛のチリーでもこしらへやう、あらは潮煮にして、酢のものは長芋と梅花玉子にしよう、などと思ふてると時計は遠慮なく四時を打つ、吃驚して御料理にかゝる、火をおこして熱湯を作る、鯛の片身をとつて刺身の樣に作り紙をのせ上から熱湯を懸け手早く涼水をかけて紙を取り、皿に雪を入れて硝子のすだれをかけ上に美麗にならべ、つまには人參の花形に大根下しと胡瓜の線、これは醬油と酢目量にしたものをつけて食る、あとはブツ／＼切りにして鹽振つておく、玉子を湯煮して皮をむきふきんに包んで前後をしばり箸五本をまわりに程よくあて、紐てきりきりと巻き付る、長芋を一寸位に切りうすくへぎて線に打つて鹽につけ、暫時して皿にもり玉子筋のついたら出してうすく切つて前につけ甘酢をかける、玉子は丁度白梅のやうに見えて美しい、潮煮は鯛を笊にならべて熱湯をかけ、鍋の湯が煮立つたら切身を入れ味のたらぬ處は醬油と味淋にて程よくつける、五時半晩餐、例の如く父樣ビール召し上る、美味／＼とお仰りながら御機嫌よくお濟しになる、跡片付する頃には方々に盆踊の太鼓が聞え初める、父樣おれが留守してやるから見に行けとお仰つたので、父樣のお床のべて出かけやうとしたら雨が降りだしたので止めにしたら程なく太鼓も聞えなくなつた、盆踊々々と一年間を待つてた人たちさぞ口惜しい事だらふ天も一年にたつた一度の安息日に降らせずともよかりさうなものを、お察しのないにも程がある、お琴さらへて九時ねる、雨はまだどん／＼降つてる上時々雷さへきこえる、明日は下女の歸る日だが今頃はなにして遊んで居るだらう。

誕生日

岩田清子

九月二十三日

今日は私の御誕生日だ、御父樣は割引電車で日本橋へ半月とつみ入れ等わざ／＼御親切に買ひにいつて下さる、私は今日髮が惡く出來ると心持が惡いから念入りに結つた、大層よく僻も直つて近來稀といふとおか

しいが甘く出來てうれしい」おつくうにならぬ内に齒いしやへいつておいで」と母樣、オヤ御誕生日でも休まして下さらない、セルに縮緬の帶しめて、姿見にうつしたら髮はいゝし着付けがきちんとして、じーと見つめてあゝ寫眞が撮りたいなあと思つて御座敷へいつて母樣に願つたら、とやかくしてとう／＼母樣の方が敗けて寫す事になつた、行く時に寫して歸りに齒いしやへ行く、齒いしやを出て考へた、どんなに寫つたろう、一週間なんて私またれやしないわ、あゝいゝ日に寫した、無意識だけど丁度十八の誕生日、なんて一生記念すべき日にとつたのだろうと、自分でほこりやかに覺えて、歸つて母樣に話したら「それぢや今日は私が敗けた方がよかつたねえ」とおつしやる臺所でゴト／＼皆して御祖母樣まで出かけて何かしてゐなさる。私は一人平然と構えこんで座敷へ机を出して、東京の御友達へ私が大口あいて御飯を食べてる所を書いて、此のはがき着次第を裏へ書き五六枚出す、御晝は十疊の本座敷へ集まつて例の通り大車座に黑塗の御膳が出る、それてにぎやかにすました。

午後私齒がだるくて困るわ、といつたら皆して大笑ひ、山田さんの御伯母さんが見えないから、御料理を御重へつめて、例の髮を突き出して、白い縞の洋傘さして、畑の方の道をとつて出かけた、見晴山へ出て海を眺めて道草三十分ばかりした。寫生してる人が二人ゐた、一人は油畫で一人は水彩畫、どちらも御納戸色の空の海、遠く房總の山々、灰色に低く淡く見え、白帆が幾つとなくはしる所を寫してゐるのだ、畫筆をはこぶ手許と、景色とを等分に見つめてかくして三十分以上たつてしまつたのだ、山田さんへいつて御菓子を頂いて話して歸りには電車で歸つた、家へ入つたら五時半、五月女さんはがきがとゞいて學校歸つてすぐに來たといつて座敷に座つてゐる、うれしくてかけよつてキッスをしたら精ちやんに笑はれてしまつた。

夜御父樣と精ちやん、五月女さんと四人で昨日開業した寄席へいつて、ころげて笑つて歸つたのが十一時。

三十分ばかり人間先天的好物たる食べ物の話して床につく……。然も五月女さんと一所にねて夜具の引つぱりつこして大さわぎして、やがて夢路にたどつた。

記念となるべき十八の誕生日はこんなにして暮してしまつた。

壓倒

秋葉清子



或夜三人は店へ集つて、深更まで談合した結果、愈々話を受けてゐた隣家の橋本の電話を買ひとる事に決めた。翌日、野島が隣家へ談判に行つたが、結局二百圓といふ事で双方話が纏つた。

日露戰爭が大方終局に近づいた頃、三人はこの店を起した。大森、田川、野島、お互にさう大して深い關係のある仲ではなかつた。野島は其時分やつと三十、故郷で種々な事業に失敗して、知己のさる呉服店に、食客半分の番頭などやつて居たが、かねてこの内外物産委託問屋をやる志はあつた。大森は四十一、相當な洋服商て、野島の友達て彼の郷里へ養子に來てゐる人の兄だ。田川は一番年長の五十三、或る保險會社の古い勤人である。野島の居た呉服店のすぐ隣に、細君が家賃取に煎餅屋をしてゐた。こんな事でそれ〳〵心易くなつて、野島は兎も角も、豫ての志に取付く事が出來た。大森が資本主で代表者、野島が營業主幹、田川老人は單に營業顧問といふ、樂なやうな、頼りないやうな役で、店には、二階に田川、階下には野島が住つた。店員はみな通勤であつた。

かうして二年の年月が經つた。大森は飽く迄野島を信用して、營業に就ては一言も容喙しない。假令儲かるにしろ儲からないにしろ、店務一切、思ふ存分に一

人で切つて廻して、野島の甚だ得意なのに引かへ、田川は此頃、何となう心細いやうな氣がしてならない。元來この事業に就ては、自分は一厘も出しては居ない實務もとらず、會社の俸給以外に月々の手當、それに家賃はいらない……けれども何だか心細い。店の樣子を現に毎日見てゐるので、野島の腕が恐ろしい。老人を顧問などゝ體のいゝ方へ祭り上げ、何も知らない大森も手の內に丸めて、一人甘い汁を吸つてゐるやうに思へてならぬ。『野島だつて鐚一文出してやしないんだ』といふ事を、又しても又しても考へた。

橋本へは二百圓、小切手で渡した。そして愈々名義を切替へる段になつて、田川老人は、それは俺の名義にして貰ひたいと言ひ出した。大森は勿論、野島すらもそんな事は夢にも思つて居なかつたので、『そんな事はせんでもいゝだらう、最初の約束上、この店は三人の所有なので、從つて電話でも何でも三人の所有に相違ないんだから、今更そんな可笑しな事をせんでも、代表者の大森でいゝじやないか』と二人は別に深い考があつて言つたのではなかつたが。老人は聞かなかつた。もう此所でなければ踏張る所はないと思つた。店の名義は大森になつてゐるし、實務は野島がとつてゐるのだから、せめて電話なりと俺の名義にしときたいといふやうな事を、露骨に口に出して言ひもした。二人は流石にそれでもとは言ひかねた。磊落な大森は別に氣にも留めて居ないらしかつたが、野島はだまつて下唇を嚙んでゐた。『よし！さういふ了見なら……』と彼の眼が語つて居たのは、田川老人にも幽に認め得た。

其翌日、野島は手續をしに郵便局へ行つたが、晝頃に歸つて來て、すぐ二階へ上つた。田川の細君は、長火鉢の前に坐つて、頻に煙草をふかしてゐた。年は三十五六、よく肥つた大柄な女だ。

『もう濟んだの？』と言ひ乍らニッコリ笑つた。

『所がうまく行かないんです、やれ此所が違ふとか、其所はさうするんぢやないとか言やがつてね、馬鹿に面倒なもんですよ』と言つて急に眞面目になつて

『濟みませんが實印を一寸借して下さいませんか』

『實印を？持つて行くの？』と細君は氣輕に立上る、

『えゝ』と野島は頭を撫て乍ら『もう向ふの言ふ通りにしてから印形を捺さなくちや、いつ迄でも片付きやしませんからね』

次の間で、チン〳〵、チン〳〵と箪笥の錠の鈴がなつてゐたが、やがてサックに入つたまゝのを出して來て

野島に渡し乍ら、
「もうこれて店も便利になるわね」
「さうですとも、他家のを借りるのはもうつく〴〵厭になつた。あんなうるさいもなあありませんよ」
「ほんとにね……これから私も一つ稽古してしませう、まだ一度もかけた事はないんだから……」
「はゝゝ、思ふ存分やんなさい、……ちやこれ、確かに借りて行きますよ」
野島は勢よく梯子段を下りた。
一時間程して、野島は手續をすまして歸つて來た。自分の席にドッカと腰を下して、兩手を腭に支つた儘ぢつと机上のものを眺めてゐたが、やがて抽斗の中をゴソ〳〵かき探し乍ら、美濃型の赤い罫紙を二三枚出した。手には田川老人の實印をシッカリ握つてゐた。
二階では無暗に煙草ばかり呑んでゐると見えて、折々煙管をたゝく音がするのみてある。野島は暫く四邊をキヨロ〳〵見廻して居たが、思ひきつて罫紙のいゝ加減な位置にベタリと捺した。別段かはつた心持もせぬ。無意識にベタ〳〵ともう二枚だけ捺した。淺黑い顏に稍青みがかつて、癖て下唇を嚙んでゐた。
其夜、野島は夕飯を食つて、紫檀の机によつた。晝間の罫紙をソッと前へ置いて、頻りに筆の先をしがんでゐる。細君は火鉢の傍で、せつせと裁縫をしてゐる地方の女學校出で、田川老人の世話で漸く去年貰つた所である。一寸頭を傾げて前髮に針をあて乍ら
「どうしてそんな事を言ひ出したんでせう?」と思ひ出したやうに小聲で聞く。
「どうしてだか……」野島は耳にも這入らない風で、吸ひつけられたやうに罫紙の面を見てゐる。
「今自分の名義にしといて、ね、まさかの時にこれは私のもんだつていふ意りですわね、きつと……」
「さうかも知れんな……」
二階はひつそりしてゐる。やがて一日の勤に疲れ切つた田川老人が、一杯機嫌の勢のない聲で、近頃やりかけた「壺阪」をうなり始めた。硯の乾いた所に種々な樂書をし乍ら、野島は聞くともなしに聞いてゐた。
（天賞）

●●●●●●十月二十六日。伊藤公爵がハルビンで暗殺されたと云ふので、號外が市中を飛ぶ、英雄らしい末路だと思ふ。しかし伊藤公爵は英雄らしき神秘的英雄でなく、人間らしい英雄であるだけ其處に追慕の情も動く。
●●●●●●十月二十七日。午前島崎藤村氏を訪ふ、信州旅行中で不在、夫人が張物して居られた、午後、紫明社に窪田通治君を訪ふ、これも不在。（醉茗）



門の柳

みどり女

お種の一家がこの路次の奥に引移つたは、今年の春柳が芽ぐむ頃であつた。

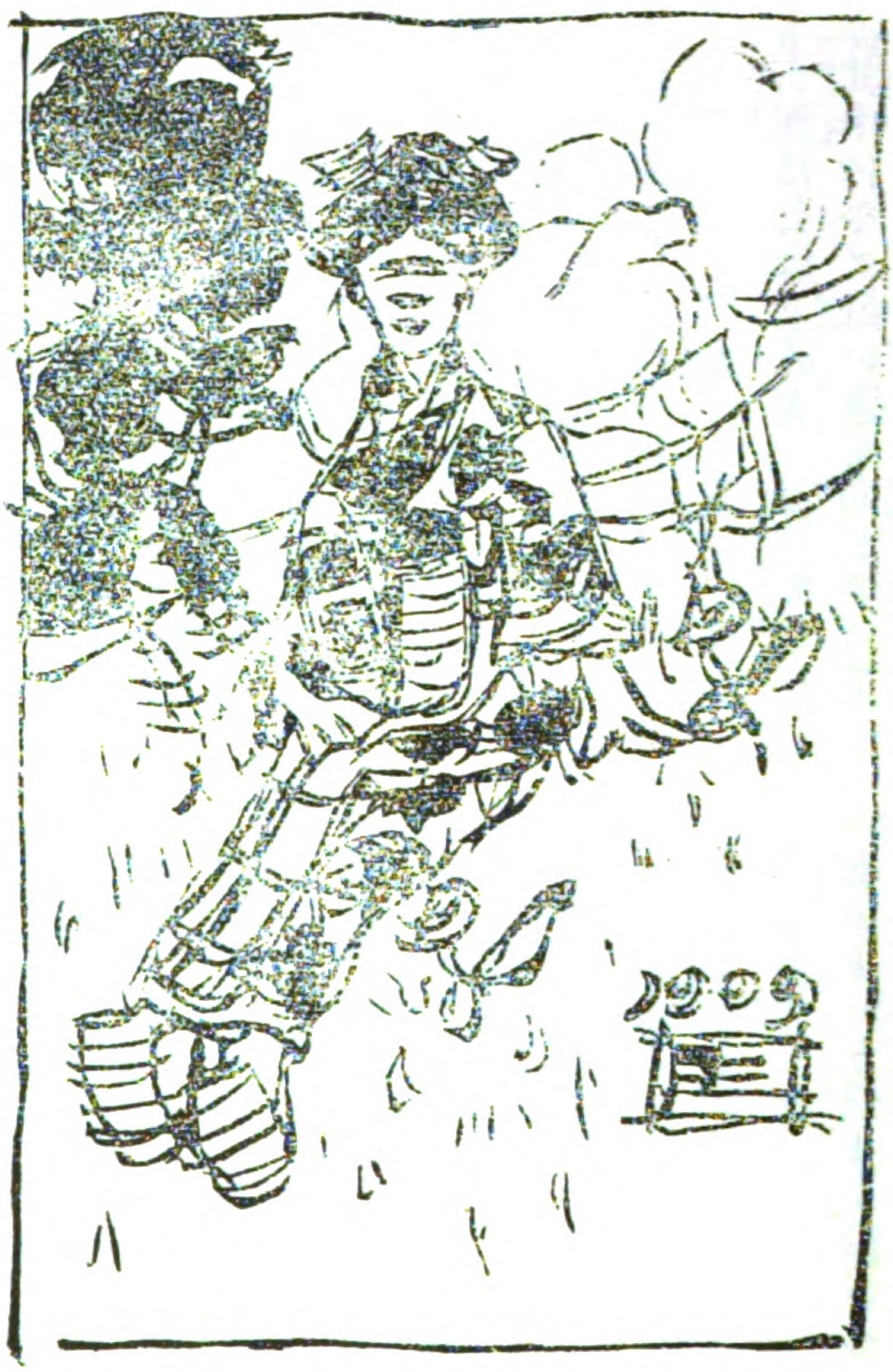
其頃は未だ爺さんも達者で、怎麽に天氣が好からうと、必らず傘を抱へて足駄をはいて、こつ〳〵と路次を出入りするのを、相長屋の人は朝晩見た。爺さんは淺草の門跡樣の門内の床店を借り、代書やら、八卦やら、風邪藥なども並べて居た。點燈夫が店の前の、ウヅラ石鹼の廣告燈を點火に來るのを相圖に、さつさと店を片附けて、首に掛けた財布を内懷でしかと抑さへて、こつこつ足駄を鳴らして菊屋橋を渡る。左側の杉の枯葉を吊した居酒屋の、古いのれんをくゞる時、爺さんの顏が初めて輝く。例の通りに一杯引掛けて、心持よく微風に吹かれつゝ路次口まで來ると、大抵は婿の角藏に出會ふ、「儲かつたか」と双方一度に聞き合ひ亦、「なアにあぶれさ」と答へあふのが常であつた。爾うして相互に探るやうに眼を見交して、夫ツ限り無言で溝板を傳ふ。井戸端で蚯蚓を堀つてた民吉が見付けて走り込むと、お種は直ぐ糠味噌の蓋を開けた。

薄暗い四疊半で茶碗と箸のみが鳴る。やがて茶が濟んで煙草を二三服吸つて、角藏は大儀さうに草鞋をはきだす。「齒代位の目的は有るだらうな」と爺さんが言ふと、「未だ知れねえ」と振り向きもせずに出て行く。角藏は山下で人力車を挽いて居た。

柳の青々した枝が井戸を覗き出した頃、爺さんはふつと眼を患つて、僅半月足らずに兩方とも潰れて了つた。折も折とてお加代と言ふのが生れる。民吉の殘飯買ひに行くのも稀になつた。夜おそく青い顏して歸つて來る角藏は、先ほどには愚痴も言はず、今日乘せた別嬪が斯うしたとか、河岸店にも美いのが居るとか言ふ事を、さも面白さうに話して聞かせる。夫でお種が

悋氣がましい事を言ふと、一だつて考へても見ねえ、爺さんは眼が潰れてから一文も入れねえし小兒は生れる、己ら一人で遣るんぢやねえか、些少位の樂みもなくつてよ」と薄笑ひする。お種は「來月にもなりや何か內職初めるから何卒後生だから辛抱してくれ」と拜むやうに言つた、爺さんは聞かぬ振りして夜晝寢通しの布團にくるまり手拭に包んで腹に卷いた、大きな財布を抑へて居た。

柳の枝は短く刈られた。或日お種は、例のやうに問屋へ鼻緒を受けに行つたが、不景氣だからと斷られたので、むしや〳〵しや腹で歸つて來ると、何やら口を動かして居た民吉は、姿を見るなり素早く逃げ出した。妙だなと思つて障子をあけると、惡酒の香がむつと來



（十等）暖かき日　筑前　坪井よし子

る。爺さんは慌てゝ隠さうとして茶碗を打ちまけ、見えぬ眼をむいて袂で拭いた。お種は傍の手拭包を冷たい眼でじろりと見て、

「お父つアン、お前さんの眼は酒毒で潰れたつてえのに、未だ隠れて飲むんだね」

爺さんは默つて悲しい〳〵顔をした。

「那麼錢が有るんなら些少でも食料を入れるが好いやね、家の困つてる事も能く知つてる癖に」

斯う言つてざら〳〵とあけた。銅貨や白銅の中から大きな銀貨を撰り出して

「濟まないが二十錢だけ貸してお呉れよ、問屋の仕事が無いんだからね」

と優しく言つた。さうして直ぐに風呂敷を持つて出掛け乍ら、眞白なお米を見るのは幾月振りだらうと考

へた。

爺さんは足音が遠ざかると手探りに財布を引寄せ、一枚〱に撫てゝ見て、其儘仰向けに倒れ、をい〱聲を立てゝ泣いた。其夜妙な寢言を言つたが、急に老けて了つた。

日に〱柳が瘠せて來た。角藏は仕事に出たまゝ遂〱歸つて來なかつた。五日目に堪へ切れなくなつて親方の所へ訪ねて行くと、先方でも車を持ち逃げされたので、方々へ手を廻してるとの挨拶、お種は人目も恥ぢず泣き喚いた。「旦那敵を討つてお呉んなさい、畜生私を騙しやアがつて……彼奴の爲にやア甚麼に……土浦に居る時だつて好いお客が有つたのを………畜生〱如何するか……旦那捕へてお呉んなさい」としどろもどろに叫び狂ふた。親方は逃れられぬはめになつて、飛んだ災難だとこぼし〱、夫でも親切に探して呉れたがどうしても行衛は知れなんだ。「仕方が無い斷念めるさ、なア、亦其中にやア好い運が向かア。兎に角此儘ぢや爺さんに困るだらう、好いや何とか工夫してやらう」と紙幣を一枚投げて呉れた。

三日目に養育院へ入れて貰ふ事になつた。前晩お種は心ばかりの馳走をこしらへた。暗い二分心の下で箸を持つた爺さんは、俄に頓狂な聲をあげて、

「やッ魚が有る〱、へゝ魚々」

と涎をたらして嬉しさうに手で摑んだ。そして暫時ひねり廻して一寸舐めて下に置いた。民吉は羨ましげに見て居たが、手早く摘んでごろりと寢た。爺さんは亦取上げて鼻の先へ持つて行き、

「美味いな魚、へゝ骨の無い魚、骨の有る魚」

と舌打ちした。お加代に添乳して居たお種は思はず泪をこぼし、

「眼が見えたらねえ」

としみ〱言つた。爺さんは頓着なく、美味いな魚」を繰返す。

勝手元を片附けてから、火鉢の前で煙管をはたくと聞きつけたと見え、

「煙草が欲しいな」

と匍ひ出した。

「あいよ」と快よく吸ひつけてやり「お父つアん、お前ね、養育院へ行つたら能く皆の言ふ事を聞いてね憎まれないやうにおしよ。ね、好いかい」

と膝へ手を上せて言つた。爺さんは「あ、あ」と矢鱈に合點をして居たが、

「育養院へ行くと、酒も飲めるし白い飯も食へるし。あ、美味い魚、骨の無い魚、うふゝ嬉しいな」
と手を叩いて笑ひ初める。お種は、「お父つアん」
と叫んだまゝ泣き倒れた。初めて『親』と言ふ感じがひし〳〵と胸に應へた。
幹ばかりの柳に二十三日の月が上つた。（地　賞）

夕飯

浅草　みつば子

暮色は蒼然として迫つて來る。早川の家では、今やつと、夕飯の仕度を終へた處なんで。
お玉が、食卓の上に、茶碗や小皿やそれから今こしらへたお菜や何かを、並べて居ると、お豊は窓の戸を閉めたり、流し棚の上を形付けたりして居たが、濡れ手を、前掛てふき〳〵食卓の前にドサリと座り
「あゝくたびれた」と兩の手を膝の上にグナリと置いて、嬉しげにお玉の顔を凝視めて居る。
女暮しの寂しさを、廿八から今年四十五迄、お玉一人を生命の的に、わがよる年波を、時には氣づかぬでもなかつたが、きかぬ氣で通して來た、この十八年、きつしりそろつて居た歯も、三本は拔けて、頬の肉は落ちた。終日側目もふらず働くのもお玉の爲めと考へた、それが樂て、今は二百と三百は貯蓄も出來た、かうした間に生活して居るお豊には、何よりもこの夕飯が樂しいので、毎夕食卓に就く毎に、かう迄、お玉が美しく大きくなつたのかと、つく〳〵思ふのである。
お豊は絶えずニコ〳〵しながら、あたりを見まはし火鉢の傍から、煙草入を引きよせて、煙管をとりあげ煙草をつめて居ると
『今晩は』と裏口の方で、
『オヤ誰れだらう』とお豊が頸を延ばして覗くと、お玉は振り返つて、
『アラ、叔父さんだよ、阿母さん』
『晩くなつてから來て氣の毒だが、今日は泊めて貰はふと思つて』といひ終らぬに、早や雑巾盥に水を汲んで足を洗ひ始める。
『ご飯が足らんがの――、店に餅は殘つとるかえ』といふお豊の聲は低くない。
『惡憎、今日は皆賣れて了つたが』とお玉は困つた顔をする。
『ほんとに仕樣がねえよ、今時分來てサ』

お玉は少し考へて、

『ナニいゝよ、私一膳位で止めとけば間にあふから』

『ほんとに仕樣がねえよ、今時分』と同じやうな事を繰り返す。その間に、お玉の叔父なる客は、ノソリノソリと入つて來て。食卓の一方に陣取つた。お玉は立つて、ランプを持つて來て點けた――とパッと明るくなつて、人の好ささうな日に燒けた黑い顏と、優しいやうて、どこかきりりと締つたお豐の顏と、色白の元氣のいゝお玉の顏とが、一種興深い何者をか意味してるかの如く、一時に輝いた。

お玉は、後の戸棚から、茶碗と箸とを出して、叔父の前へ置いた。叔父は、食卓の上を見廻しながら

『筏に乘つて來たら、晩くなつて歸れなくなつちやつたんて、すまねえとは思つたが、來たのてあア』

『そしてあとの人達はどうしただえ』と何とも思はぬらしい顏して、お豐は、弟の顏を見る。

『俺のやうに親類のあるものはないんて、皆安旅籠にとまつただ』

食卓の上に上るべきもの丶皆上つた時、お玉は、火鉢の鐵瓶の中から、二合入位の德利を上げて

『サア阿母さん』と注がうとする。お豐は何ともいはずに、盃を出して注いて貰つて、ペチヤ／＼と舐ぶるやうに飮んで、舌打ちし

『アヽお玉叔父さんにも盃をおあげ』

『オヤまあ、迂濶して、サ』と笑ひながら、戸棚の抽斗から、一つ出して叔父の前に置く

『どうも御馳走さんて』と叔父さんが頭を低くして盃を出すと、お玉はそれに、なみ／＼と酒を注ぐ。

お豐と叔父は、チヤビ／＼さして酒を飮んて居る。お玉は、飯を盛つて食ひ始める。三對の箸は、チヨイチヨイ中央に置いてある烏賊と芋との煮付の入つてる丼や、香の物の入つてる皿の中に、出入りする。

お豐は手杓で盃になみ／＼と注いて、盃に注がれてゐた眼を叔父の顏に移して

『まだお前さんには知らせてないが、お玉の婿も九分通りは、定つたてナ』と盃を口の端まで持つていつて

『今ぢや傳ちやんもお玉てなくちや厭だつていつてるんだからね』と和笑して、お玉の方へ眼を移すと、お玉は、つと伏向いて赤くなつた。

『フーム、御目出度てんて』と叔父は眼を細くして微笑んだ。そしてツーと鼠のやうな音さして盃をほした

二分心のランプは、三人の面を照して、小さい此の

まとゐは、如何にも、美しく樂しく見える。
「お前さん、もつとこれおあがり」と箸の先て、お豐は煮付を指して、自分ても、烏賊一切を口の中に投り込んだ『此奴は大變甘い』と叔父さんが取つて食ふ。お玉が、飯のすんだ頃には、お豐の顏も、叔父の顏も、ホンノリと赤くなつて居て、如何にも愉快さうにニコ〳〵して居る。
ランプの焔を、見つめながら、恍惚と何事をか考へてゐるお玉の頬は、美しく紅に燃えて居た。

養女

京都　名無し草

お初が歸つて來ると、養父は一杯氣嫌て、何か國自慢を云つて居た。婆やは、へーへーと上の空て聞いて居たが、お初を見ると好い時機に、臺所へ去つた。「えらい遲かつたぢやあないかな」と、どろんとした嫌味な上目て見乍、にやにや笑つて居る、お初に對すると何日も彼樣てある。お初は、苦笑したまゝ無言つて、衣服を着替た。お膳に向ふとたべられない、やつと、一杯丈食べて庭へ下りた。養父と婆やは、「えらい少くないな」と、不思議がつて居た。婆やが流元で、後始をして居る時、養父は煙草盆を持つて、縁へ出て來て「萩が大分咲いたぢやろうがな。」「ゑゝ。」「是て家て花見が出來るぢや…きれいぢやろうがな。」「ゑゝ」「お初は萩の下蔭に、後向にしやがむだまゝ、四方の草や木の葉を、むしつたり小さな虫をつついたりして、五月蠅相にして居た。養父は、しきりに、灰吹を叩いて居たが、思ひ出した如に、「えらい遲かつたぢやないかな、彼て買物丈かな」。と曇つた聲て聞いた。「ゑゝ……少し、まごついたもんてすから。」と、低い聲て答へた。重て、養父が何か云はふとした處で、表の格子が開いた。
お初は、養父の袷を縫つて居たが、どうしても、奥の話が、氣に掛つてならないので、そつと次の室から盗み聞て居ると「ほゝう、相でげすかい。」と、慥に客の聲。「だて切角てすがな。」「はあ、はあ成程、そりやご最てげすなあ。」お初は、何の話だか、さつぱり分らないから、もつと聞かうと思つて息を殺して居ると、ポンポンと手を打つた。はつとして立上ると、彼方て婆やが、「は……」と答へた。が、夢中て自身が出た。見ると、家主の一名世話治さんてある。「いらつしやいま

し」と、笑顔もせず、輕く一禮すると、「や孃さん、お暑うござい」と、芝居めいた聲色を出す。「火を一つの」と、養父の出した煙草盆を、無言つて受取つて出ると、婆やが居たから、澁しちまつて、又、暗い處に身をかゞめた。彼が、火を持つて來た時、冷としたが好い鹽梅に見付からなかつた。茶をすゝる音がして、「お何歳てげすかな」と、客の聲。「はあ娘てすかい。」「いゝや其。」「はあ許嫁てすかい。許嫁と聞いてお初はぎよつとした。「はあ〳〵左様で。」「ふゝ、其男は其……何ても、娘に三つ上てすぢやて、……あ、すると廿一てすぢや。」「はゝあ成程」お初はぞつとして、「まあ、あんなそらぞらしい事」と、幽に呟やいて、忍足て室へ返ると、ばつたり、俯伏して泣た。此夜遲く世間が寢靜まつた頃、お初は、そつと、卷紙を廣げて、墨黒々と、筆を、ふるはして書た。其中て、「お母樣、いくら貧乏ても、やつぱり實家が好いわね、そりや此家のお養父樣は何てゝも買つて下さつて、可愛がつて下さいますけども。……お母樣、私淋しくつてよ、……お父樣のお日には、是非呼んで頂戴よ、お供物持つて行ますから。」が一番明書いて有つた。

＊　＊　＊　＊

「いゝぢやないか食べて行つたつて。」と、五分刈頭の若い男は笑作ら云ふ。「いゝえ、夫ても先日大層遲つて、しかられましたから、……夫に今日は、一寸の買物てこんな常着のまゝ出たんてすから。」と、お初は心配相に、時計を見乍歸り支度をする。「だつてさ、妹がまた歸らんのだらう。」「てすけども……又、伺ひますから。」と、上り口の障子を開ける。後に立つた男は、下駄を突つ掛たお初の、少し曲つた髷を見乍ら惜し相に「さうかね、……ぢやあ仕方がない、又、近い内に、きつとお出よ。」「えゝ、有難う是非ね。」と洋傘を取ると、男は思ひ出した如に、「あ今日は琴の方は休んだんだね、妹がさう云つて居た。」「えゝ一寸、……お腹が痛かつたもんてすから。」見上て、柔笑したが、「さよなら、」と、腰を曲めた。「さよなら、又、きつとお出」と輕く會釋して、いそ〳〵と出て行くお初の後姿を、ぼんやりと見送つて居た。

＊　＊　＊　＊

指折數へて思ひ詰めてた今日が、其實父の命日。母からは何とも云つて來ない。「あんなに賴んどいたのに。」と思ふと、もうたまらなくなつて、養父に賴む、僞の口實を、彼かかうかと、考へ〳〵作つて居る内、

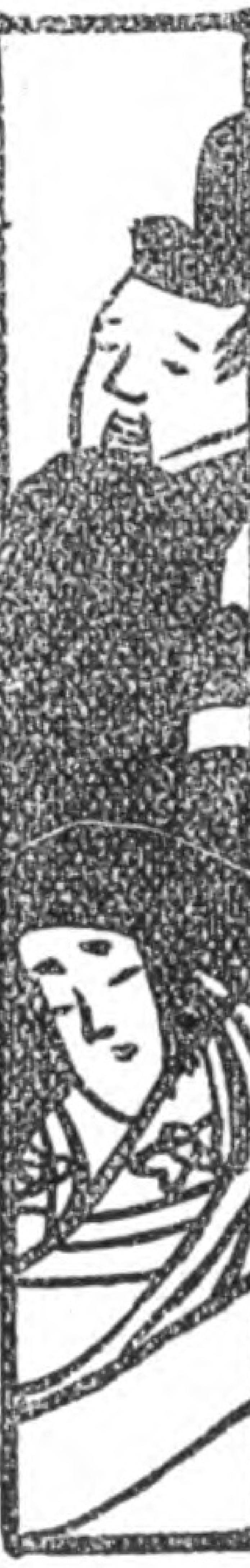
早や、淋しい秋の日は暮て終つた。悲しい夕空を白眼んだ時も、夜具をかぶつた時も、したゝか目を痛めて出る涙を、わざと、頬に傳はして、じだんだふむで泣た。二三日して、母から、薄い封書が來た。お初の胸は踊つたが、後で、養父が呼び寄せて「お母樣からなあ、時候見舞が來たのぢや、別に何も書いては無いがな、……うむ——」と、一寸、詰まつた如て。火鉢の端を撫て乍「只、宜敷賴むてじや。」と、尻上りに云放つて、ひよいと、お初の顔を目鏡越に見遣ると「ハヽ、ヽ」と、そら〳〵しい笑方をした。此時、お初は全身、ぞうつとした。翌朝、お初が、琴の稽古にとひよつくり、裏口から出たら、井戸端で、婆やと、近所の妻さんが、何か、首を振り立て、饒舌つて居たが顔を見ると、はたと止めて終つて「本當に、お初さんは、いつも美しい事なあ。」と、にやにや笑乍、わざと云つた。婆やもにやにやし乍ら、こゞんで居た。お初は無言つて苦笑したが、すた〳〵と行過ると、はーと長い吐息をして、すぐ、目をうるまして、俯むいて歩いた。

十月十七日。夜、有樂座に山村流の舞を觀る、東京で踊ると云ひ、京阪では舞ふと云ふ、其音樂の如く、踊ると云ふ形式と、舞ふと云ふ形式には自ら相違がある、踊つた方は勢ひも好く、生氣もあるけれど、露骨だ、舞ふ方はしとやかで、タラシカルで、婉曲で、美術的だ。踊りは現代的だが、舞は現代を離れて居る、私は此夜山村流の舞を觀て、成程斯う云ふ空想の世界もあると感じた、蝶と云ひ、花と云ひ、鳥と云ひ戀と云ふ、それらの心持を音樂に合せて、微かに發現するさす手ひく手は空想の世界であるまいか。舞踊はなまじひ現代的の東京の踊より、ずつと時代を離れた京阪の舞の方が、藝術としても價値があるやうに思ふ。

十月二十四日。今年は山の手の庭の廣い家でコスモスが眼に着くほど澤山咲いて居る、二三年前まではこんなに盛んでなかつた、庭や、玄關先や、垣根に白色のコスモス、紅色のコスモスがゆら〳〵と搖めいてゐるのは、秋の心持が動いて居るようで快い。道を歩いても小學校の生徒や、女學生や女中やが能くコスモスの一束を提げて居るのを見かける、電車の中でも見かける、花屋の車の上にも載つて居る、全く今年から眼に着いて多くなつた。元來コスモスは、白色と、紅色に限るやうに思ふが、好んで赤い色のコスモスを作つて居る人がある、赤いのは嫌だ。

十月二十八日。夜、濱口白羊君來る、次て三木露風君來る、詩談が盛んであつた、

十月二十九日。吾家の緣側から二本の大きな樹が能く見える、一つは姿の好い松の樹で、一つは高い公孫樹である、風の吹く日、松は靜かにしてゐるが、公孫樹は絕えず動搖してゐる、風が烈しくなると銀杏の葉が飛ぶ、公孫樹の動くのが面白いので、いつも夕方になると其れを眺めて居たが、太い幹のところからすつかり伐られて了つた、秋の雲が淋しくなつたやうだ。夜、外島君來る。（醉茗）



夜のかぐら

（お大事におかへりなさい）（はッ）私の返事は聲に出なかつたのです。下駄をはく、荷物を右の手にのせる。（さよなら）（あッ）目禮をなされる。碁石の白いのを一ぱちりぱちりと、碁盤の角ではじいて音を立てさせながら瞳なゝめに、まぶしい、暖かに輝く男の笑をたゝへて一人は玄關を見る。一人は肩をそびやかして、碁盤の右に心をそゝいでゐられるらしい。燐火をすつて提灯につけた。するすると開いてチンと鈴がなる格子戸をくぐつて外へ私は出ました。月無き二十日すぎの宵だから、もとより外はまつくらである。河原をいてゝ家の前に出る。思は只今の人を追つて、かがやかにまぶしかつた眼を思ひ、りんりんと餘韻のひびく心地に醉ふやうに思ひ、なほ物に、手厚い心づかひをしてくれる事を思ふて、うれしくなつた。と、氣がつくとむかうの森の方から、どどん——どどんと響いてくる。其の音につれて私の心は氣强うなるのです。女ですもの。夜の道はこわかつたので。とぼとぼと足音がする。（姉さん一寸お提灯の火をお見せなはれ。お金を貰つたのに見るのを忘れて。ははッ）とお爺さんは笑ひ乍ら提灯の傍へ、ひよろげるのを見ると五圓の紙幣であつた。（まちがひでございませぬか。）問ふてあげると、（ははッ年老るとな。ははッ）と、すたすたと通りすぎました。と、どどん——どどん——とひびいてくる。熊野神社の夜のかぐらである。華表のまへへきたとき見るとぼつと拜殿の彼方が明るい。私はどんなにしてゐるのだらう見て來う！と思つて華表をくぐる。十間の回廊をとほつて、拜殿をしづかにすすむ。そしてひざまづいて、拜んで本殿の方をながめると、向ふて右がはに、くちなし雪洞がほのぼのとともつてゐる。左には、かべにもたれてがつくり頭をたれた、うでぐみをしてゐる、黒衣の若人が端座してゐる。神主は純白——ぼんぼりの明りに美しいちはやの袖、かんむり、何とか「おのつと」をあげて、どどん——どどんどん、おかぐらを重々しい調子でうつてゐる。わたくしは恍然と見入つてゐます。提灯の火は、和かう板敷をながれてゐる。どんどん、どどんどどんどん——。

私の身うちは、しんとして、すくむやうに感じました。どどん ——どんどん。

我にかへつて回廊まで出てきて吐息をしました。まつたく醉ふてゐたのです。

長曾我部菊子



月光の下

露女

よるへ泣く月光の下に
静かにたてる我影の黒きを見る
萬象は寂として音もなくなげかひもなし
たゞ冷き我心臓のかすかなる音をたてゝ――
やゝ亂調に……身うち打ち顫はすを覺ゆ。

そは短き夏の一夜
店頭の燈火流れて美しかりし
ゆきゝ織る銀座街
白牡丹、仙女香
眼もあやなるさま〴〵のよそほひ、
カラコロと音たてゝそゞろありきは涼しかりき
夫婦の君とわれと君、
絶えず快活に語りしは君
とある樓上にアイスクリームのコップ手にして
若く語れる御頰のあたり瓦斯に映じて美しかりき
寂しきは我性絶間なくもの思ふ性
銀座の街はふさはぬと識る

淺薄にも我につくす人々ようらまるゝ哉
我はしたふ靜寂の月光の下
いひしらぬ深きおもひ――しかすがに
若き血潮は涸れはてざれば――
身も顫はせん、涙もやせむ
かくて寂しさを切に覺ゆとも
藻の花の水に浮くながめ
あとなき蜃氣樓の歡樂に醉はじや。

あゝ燦たる華燈の下に
空虚なる形骸幾個
そが中より逐はれて
月下にさまよふ、――心地よし靜夜
よし人は、あざ笑ふとも、我が爲になげくとも
こゝに我戀しき天地あり
かぎりなく澄める香にぞむせぶ。

ふたゝびあらぬ若き日を
われや、いつはりの笑に泣くまじ　（入選）

心の野

伯爵　佐々木かほよ

いまこそ心の大野
追懐の、寂しき匂ひ
いづちとも知れぬ香に
我れ立てり、
秋の野は、つとこそよぎれ
幻の影、面ほてり
そのたまゆらに若き日の
美しき夢は消え果てゝ
果しなき旅に疲れたる魂は
夕日の影をしたへども
ちからなく日は衰頽へて
ああ鮮な
暗く冷めたき四方の景
草も木も深く默して
もの凄く月はのぼりぬ
戀の輪の白き月の暈
限りなき寂寞のしゞま
このなかに、たゞ聞ゆるは
虫の聲、月の暈の
消えゆく遠に虫の聲
哀怨の胡弓の調
夢路にかよふ
我れはいまこの思出の
野に立てり、月に亂るゝ
花すゝき、夜は靜かなる
野の廣さ、この妙音の
奏樂に、泣きて聞き恍る。

秋の夜二題

和泉　金田香雲子

夕の沼

夕月はほのかに照りて
靜寂の水面にあはく
森の木の影はうつりて
死の國の林に似たり、
蓮の咲く沼の汀の
若あしの繁みの中に
いと細き蟲の聲して
亡き人の話しと思ふ。
石ひろひ水に投ぐれば
死の國の沈める鐘を
聞く如く――小さき音して
波の輪は月を碎きぬ。
靜寂の水面にあはく
死の國の林のうかぶ
古沼の堤に立ちて
我が胸は悲しき思ひ。
鳴く蟲の聲を聞きては
我が胸に石はころがり
樂しみと喜び滿てる
美しき玉をくだきぬ。

鏡の月

人氣なき秋の夜の化粧の間
何となき淋しさおぼえ
美しき金文字入りの

化粧の小本小さく閉ぢて
なす事もなく、小窓開き
香油のにほひこもりたる
薄黄ばむ鏡の面に
　銀の月を宿して
麗しき影を眺め
愛する人と瞳を會す心地して
我が胸はやさしき思ひ。
人氣なき秋の夜の化粧の間も
樂しみに靜かに更けぬ

もがりの夜

日暮里　細谷鏡子

しめやかに讀經終りて、
高僧は靜かにさりぬ、
燈心の光小暗き室のうち、
灰色の壁にうす〳〵と影のうつれる
は、
叔父君の遺骸よ
細目に開し窓より、
吹き入る風にかけし衣の、
から〳〵とゆらめけど、
魂ぬけしあゝ今ぞ空洞軀、
金べうぶの、
さかさに立てる淋しみよ、
み顏おほひし白布を、
とらむとすれば手ぞふるふ、
たやさじと立つる線香の煙は、
ゆら〳〵とたゞよひて室にぞこもる
やがてとりし布の、
間よりみ顏みつむれば、
いますが如くおはせども、
寂しいかな、
靜かに額に手をおけば、
しん〳〵としみ渡る冷やかさ、
ふと衣づれの音するに、
身をひきて見返れば、
若かき叔母がきり髮の、
うれひこもれる顏の色、
あゝまたおつる涙かな。

秋の愁ひ

麻布　花子

雨は夕方てやんだ
夜に入たら、雲がしきりに飛んだ
其の中に洗た樣な月が出た、
妾は、光りを浴てる庭の濡葉を
長い間縁側から眺めてゐたら、
淋しい秋の感じが身躰に泌み〳〵
と泌み渡つた……
……鋭い神經の疲勞たる……
悲しい嘆きの聲もきこえる――
――秋の月はあざけるやうに
光つてゐる……
あゝ顫える、緑の樹立も……
妾の胸も……この思はなんだろ……

落葉

仲仙道　廣子

野分吹く
紅葉ある林の中にして
君と相逢はむ事あるも
今は
破りし琴絲なれば

風——自らさわがしき
破調の嘆きは——得洩さじ
大樺の白き骸は
夕映に——
裸の胸を高はれど
老い果てし幹なれば
何を誇らんかたぶりぞ
永久の——今は——
許らね——黄ぞり葉の
枝よりして囁きを
風にうらみぬ　落ちてゆく
あゝこの命——この命——
拾はん術はあらざりしを
執念くも故にしが
萬葉もあらば
只その儘に任せなむ
いさぎよく散り——　只——
散らん葉もあれやうも
趁ふべくはあらざるか
幾千度
まなざし清き乙女子の
姿も終りになよびしを
秘事もまよなかなれば
誰か解かむ——
幻影なればこそ——移ろひぬ
しかすがに
落葉よ——汝に香あり——
とく……
歡樂の夢さめて
憂愁に——乾けども
幽寂の——只何となく
囁く香

消えゆく生命

信濃　ほつ枝

靜なる！　靜なる！
雲迷ふ野の遠、夢に入る低き森よ山よ、
うごめける影、たゞ黑し
かけり行く靈のたゆたひ、——
あゝ、そは戀か？。
夜——、
地球の面、冷へはてゝ
風、朽ちたる土に死し
暗き熱、地殼に沈む、
その中に、狂ひ叫べる火の山の
毒烟吸ひて、われは立たんか、
若き血しほの狂ひ、たゞ快し、——
青色はさびたり
新月の冷たき光、髮に落ちて
罪惡を鏽られし、千條のみだれ、
をのゝきの胸、乳房いだけば、
紫に肌の腐れ——
肉の香ぞ饐ゆる——
月光よ——
ふとも見る白刃のひらめき
わが黑髮の、誇りを斷たん
愛の星——
鋭き針の尖端のまたゝき
あゝ刺されぬ、柔胸の戀の形骸。

あはれ、若き生命の消ゆる一と時、

白い光

尾張　服部　霞磬

うすら/\
流るやうに、
白い光りが
緑の木々に――あゝ濃緑の色を――
甘いやう――
はた、たへがたいやう
榛の木立の緑の香よ
――夢のよろこびの――。
白い光り
――眼の底――
あゝ脳の奥へ……
かつふかく。
緑の木立、
赤きはた、紫の花
咲き出たる紅の花
そが上を、冷たき――はた
静かなる
光りよ……そが吐息……

坑夫

秋田　きよ子

鑛道のなか
晝夜のわいだめもなく
地獄の如き闇の世界
鼻をつく硫黄のむしれ
カンテラの焔のかげに
力ある腕をあげて
愛執の鶴嘴をふり
鑛の塊くだきゆく
冷やかなる
緑なす水の滴り、
カチカチと音す鏨の
ひくやかに囁く聲す
熱く蒸す。汗はあらはなる
むくろを流れ流れて
されども業はおやみなく
じり/\と焼く如き鑛内にて
かくてなほ
冷たき劫の世界に
いやふかく銅の脈を
たどりつゝ美しきかげ
求めんとほりつゝゆく
暗の世、青白き顔して
むす鑛の臭ひの内に
何の光明も望もなく

或夜

坂東　良子

なんといふいやな晩だらう
外には朝からの小雨がしと/\と
雨戸にぴゆう/\あたる
其とぎれ/\の間から――
韓人の衣うつ音が
遠くさびしくきこえて
番所の方ではいつも鼠が
こと/\と……
なんだか氣がめいりそうだ
ランプはたいくつそうに
ぢい/\/\つと
音をたてゝ私の影を
黒く大きく横のかべにうつした
なんだかこのまゝ――
心も身体も一所にとほくに
やられるのではないかしら



湯殿の姿見

萩花

新しい槇の香漂ふ新湯殿。正面にはあたり輝く大鏡。それから左と右に柱掛と小鏡とが露を含む周圍の玻瓈に反射して外の青葉が匂ふ位いき／＼とうつつて。あゝ　五尺の黒髮を元結はず、純白の素肌に纒はるにまかせた自分の姿が、乳房の邊からしつくり刻んだ樣にうつつたのを見ました時は思はずあ！と叫びました。我ながら――否、たまゆらは我も彼もない、只美しき像よ!!　やゝおちつくと噫此姿は我、我ながら何といふ美しい神秘な。恍惚として私は、ラインの岸の妖姬を思ひ又は美しき詩人が夢の中なる星の少女、繪の少女又は誰やらが刻んだ天女を思つて只茫とした。三月の病に頰こそやせたれ、血汐の色こそやゝ青味を帶びたれ、双頰に刻まれた我生命の翳深う。瞳は星の如く、はた清すめる泉の如く――、噫如何なれば神樣の愛兒。私はかく許り美しき姿を賜つたかと、鏡の前にたふれて暫し感謝の祈りを捧げました。幼い頃母のみ胸に抱かれて浴びた其香と同じ、白いふわ／＼した湯氣の中に私は身を深く沈めて胸に手をくんで深い想に耽りました。噫我前には一として敵する者はありませぬ。幼兒は笑をたゝへて抱かれ。若き男はこぞつて我瞳の色を買はんとこび。如何なる人も冠をとつて我前にひざまづく。十八年の今日迄かつて人に我誇を碎かれた事はありませぬ。此黒髮の漸く延び此腕のやゝに白くなつたまだ十四の頃から。そをふりほどき／＼十八を清い處女て、頰に巡る血は、人はいざ、神の御手にもふれずにきました物を……噫私は天地に明い華やかな、何といふ幸福な身でございませう。けれど明日の歌宴――明日の歌宴にまゐらば　心に誇る此黒髮を黃金の主の腕にまかれて了ふのではなからうか、我病いゆる日をのみ切にまつて開かるゝ明日の歌宴にとて、綾羅の小袖に錦の帶。揚羽蒔繪の金の爪箱、曲は花爛熳の春の曲との御懇望。少女一世の晴に萬人の羨望の瞳は我瞳に集りませう。噫明日の歌宴に我前にひれ伏す多くの蜂の樣な若い男――。其等を我足下に見下した其時の心地は！　けれどもしや黃金の君に其儘囚はれたら――此儘に囚人となるは――噫囚はれの身となる位ならば今の今、此儘萬人の胸に深く銘した儘の處女て靜に眠りたうございます。此美の老ひず衰へぬ春の間に、さらずば永久

華やげる美しい處女て夢に醉ひ、群がる蝶蜂を狂はして醉はして〳〵身は野の花の自由の園に老ひず、朽ちず活きたうございます。青葉のかげに緑色した湯にとつぷりつかつた肌は桃色に、廣い靜かな湯槽の中は森の出湯の樣。私は眼を閉ぢて明日の歌宴には萬人の心を醉はして、かつ囚はれずに永久の美しさつやゝかさを保つ樣にと神樣にお祈りを捧げました。（天　眞）

お目見へ

優梨子

春の宵だつたと思ひます。桐の御紋が仄暗い瓦斯燈の影にぼんやり見へる大本願の門を這入つて、長い敷石の上を、本家の芳がお姉樣と二人、叔父樣と後をついて靜かに參りました。

しーんとした廣い玄關に立ちますと、お髮の眞白なゆつたりとした執事のお爺樣が出て來られまして「さあ何ぞ此方へ」と先に立つて行かれました。

私と芳お姉樣は始めてゞすから、何だか恐い樣な氣がして、長い廊下を俯いたまゝ叔父樣の後をそつとついて參りました。薄暗い廊下に、芳お姉樣の桃われと私のお下げ髮が、うつすり、淡く寫つて居た樣に思ひます。一段上つて曲りますと、向ふの方にぼつと燭臺の灯が床しく見へました。

腰高の障子をすーつと明けて「さあ何ぞ」と執事のお爺樣が仰有いました。私は叔父樣の後へ小さく座つてそつと面を上げますと、ぱつと射る燭臺の兩側に、ずらりとお綺麗な尼樣が列んで被在いました。

「只今お目見へ遊ばされます」と仰有つて二人の尼樣が緋の房のついた唐紙に手をかけられました。私達はピタリと手をついて、凝と面を下げました。

どうしてか、それからの事はよう覺えません。

お襖が左右に開かれて、する〳〵と捲き上げられた御簾の中に、緊と紫の御法衣召したお二方の上人樣も、神々しうてよくは拜せませんでした。お優しいお言葉など掛けられた樣に思ひますが、それさへも今は忘れて居ります。

只一ッ其折戴きました、お上お手製の飾り箱――愛らしい眠り猫の押繪のついた――が毎年桃の節句に飾られて、朧ろになろうとする幼い記憶を深く〳〵と刻んで居ります。

其後、御回向のお稚子に、何宮樣のお給仕にと度々上りますけれども、彼の時の樣な深い印象は決して〳〵與へられません。（地　眞）

雪降るまで

九輪草

浅緑に小さい畑菜が込みあつて生へてゐる。その畝の間を横に歩をうつしながら間引いてゐた。日和つゞきに、畑の土はボロ／＼塊つて、踏む度に素足の裏がいたい。

先刻から下向いてばかり居たので、立つたら、頭がボッとして瞳がしばし据らなかつた――腰が痛いので胸を張つた途端に晴れてる空をみた。羽のうすいとんぼがつい／＼とびかふてゐる。



秋風　和獣山　かたばみ

みるとまだ七畝目、あとは三畝だが、まだ向ふにある菜畑をも間引かなければならない。少し休まうと思つて、畑を出て、豆畑の間の狭い徑をゆくと、黄ばんだ葉のかげから、はぢけさうな莢がちよい／＼目についた。

隣との境にある栗の木の切株に腰をかけた。隣で何かの木をひき切つたと見えて黄いろい鋸の粉が、そこらの草にふりかゝつてゐる。

蕎麥畑は白い花が咲き揃つて、そのうへを白い蝶がひら／＼してゐる。眞向ふの木のかげから茅葺屋根の端ばかり見える、――姉様は歸つてゐるらしつてるかも知れない、――鳥渡でもいつてみたくなつた――。

紫苑

淡紫の丈高う、うこぎの生垣に添うて、紫苑が咲いてゐる。白い蝶やら美しいあげはの蝶がきて花にとまつてはしづかに翅を開いたり、閉ぢたり、はなれては、ひら〳〵高く舞ふ。私は稚かつた時、姉とあの花を持つて、お墓詣りにいつた事があつた、――あの時の日の色――心持をまだ忘られない。彼岸日和の眩しいやうな明い日で、空は冷かに碧かつた。お寺にゆくまでの、あちこちの家にも紫苑が咲いてゐたつたやうに思ふ、――歸途にはもう歩き倦んでしまつた。私の小さい柔かい手は汗ばんでむづ〳〵する。さつさと歩く姉様の後について、稚さいながらも、いら〳〵した泣きたいやうな氣持になつて、赤いメレンスの襦袢のも〳〵する肌觸りが、引張りたいやうだつた。
あの時の心持が、紫苑の花さへ見ると思ひ出される。

鬼灯

蜜柑色をした殼を裂くと、紅絹で張つたやうな丸い實がついてゐて、指先でくる〳〵揉んでゐると、白い小さい種がすいて見えて美しい、――その苦いやうな匂ひ、――たまらなく、なつかしくて、ふるひつきたいやうになる。……机のうへの懐中鏡の上に殼のまゝの鬼灯がのせてあつた。――いつか――友の室で――冷めたい鏡の面に映つてゐた眞赤な殼の色、見るより目が覺めるやうだつた。なかには、どんな實がついてゐたか。友は何の氣もなくしたのだつた。
今年も、白い糸に繋いて、居間の柱釘にかけておいてと、思ふ。雪の降るまでも。（人　實）

梅吉

白蓮女

梅吉と云ふと何だか藝者か何かの様ですが當地で誰知らぬ阿呆です、最三十近くなるでせう、夏でも冬でも煮〆めた様な手拭を破り、着物の裾を帶の間に挾んで籠を背負ひ人を見てはニヤリ〳〵と笑つて居るのです、梅吉は一種の色情狂なのです、彼は失戀の結果發狂したのです、梅吉の過去の事はまるで小說です、彼の戀は實に淡いものでした「梅ちやん、おまへの女房はあるの」と聞くとニヤリ〳〵と笑つて「おいら女房は美い女だぜ、日本中捜したつてありやしない」口癖の様に云ふのです、梅吉の女房と云ふのは成程好い女です十人並以上です、しかし現在の人ではありません過去の人です、去年の春死にました、其時は人の妻であつたのです、梅吉の女房は一片の紙に映つた寫眞です、梅吉は其の寫眞を自分の妻だと信じて居るのです、非慘な歷史は此の寫眞が源です、梅吉の家は此の邊でも中流な家です、梅吉は高等小學を卒業してから一心に家業を勉めて居りました、梅吉は中々勉强家です、梅

吉の家は下駄屋です、其の時代の梅吉は戀も愛も知らない男でした、梅吉の初戀は十八の時でした、戀人は或る富豪の令孃でした、しかしとても成らぬ戀です、梅吉は多少自暴自棄しましたが發狂する程ではありません、二度目の戀は其の時でした、戀人は自分の家の下職の娘でした、此の娘こそ寫眞の主です梅吉は非常に此の戀には熱心でした、手紙の數は何本でしよう數へきれません、拙い筆を振つたのでした、娘は始の内は非常に冷かでした、出す手紙の重なるにつれて其の熱心にほだされて多少梅吉に心を寄せたのでした、梅吉は此期を外さず見事に我物としたのでした此の時の心の中は如何でしたでせう、之が梅吉が喜びの絶頂でした、梅吉は意を決して父に話して直接娘の父に結婚を申し込んだのでした、すると娘の父は二三日待つて呉れと云ふ、此二三日が梅吉に取つては千秋の思ひがするのです、娘の父は慾にまよつたのです、或る豪家の若旦那の妾となる事を約したのです、其の心の醜くさ……梅吉は失望の結果發狂しました、彼の小さな心は破裂して了いました、梅吉は狂ひまはり彼の名を口走つて居りました、其の時心の内は如何でしたでせう、娘の名は永久に梅吉の頭から離れる事は出來なかつたのです、梅吉はついに或る腦病院に入院しました、獄屋の樣な部屋に幽閉されても娘の名を口走つて居るのです、青春の男は心だけ此の世から奪ひ去られて了ひました、室の窓につかまつて娘の名を口走つて泣いた事もあつたでしよう、腦病院に入つてから益々惡くなる計です、彼は先天的の狂人となつて了つたのです、永遠にほうむられたのです、梅吉は何處から見つけたか娘の寫眞を取り出しニャ〳〵と笑つて居るのです、其の時は娘は本妻に直つて居りました、其の時は娘を見ても分らなくなつて了ひました。

髮を燒く

菅　愛子

思ひ見れば昨年の春である。車馬の響、下駄の音、地盤のうめき、それらが皆漸く夜の神の手にをさめられて、さびしい上野の鐘が物凄く響いてくる深夜に、私はいつになく讀書に耽つて居たが、疲れの身の不知不識睡魔に誘はれていつか夢の人となつた。うと〳〵してゐる頭の中を、何者かゞ行つたり來たりする樣でツト眼がさめた。そして何心なく頭を押へてみて驚いた、頭があつい、よく見れば室内が烟つてゐる。氣を落付けるどころかランプで髮を燒いたのだと氣付くや、夢中になつて、お父さんとか、お母さんとか、何んとか叫んだ。その急激の聲に驚いてかけ込んだ父母は、周章たゞしく窓を開ける、頭を拂ふ、藥劑師に走るやら家の中は不意に大騷ぎになつた。やがて母さんは私を隅にすはらせて、物怖ぢするやうな手つきで、悲惨に荒れ果てた髮を櫛で靜かに解いて下さる。私は悲しくなつて膝に結んだ我が手をぼんやり見つめて居る

と、焼殘りのゴム櫛やゴムぴんなどが、バラ〳〵落ちてくる、あゝ情けなや、今まで房々としてゐた前髪があはれに燒けちぎれて、一櫛毎に一かたまり二かたまりと新聞紙に山をなすをみて、思はずも胸はグッと引しめられて、悲歎の聲を漏らさずには居られなかつた。お前眠つてゐたのだらう、本統に大變の事をしたものですね、とさま〴〵問はれても、私はわが過失を深く〳〵恥ぢて、たゞ俯向いたまゝ答ふる言葉がなかつた。今頃でも時々は月夜を惜しみ、虫の音にきゝ沈んで思はず夜を更すことある時は、いつもこの夜の歎きを思ひおこして、そこ〳〵に眠つてしまふのです。

土藏のかげ

明石　落葉子

いつもの樣な、力ない姿で土藏の壁に、ひたともたれた。雨に赤くなつた白壁を、一層赤く見せて居た夕日は、とつくに落ちた。

あゝこの壁は冷たい。けれども私にはこの上もなくなつかしい。

見あげた空は、高く高くくつきりと澄み切つて、白い鳩の羽の樣な雲が、ふはりふはりとんで居る。故ありげに――「あの美しい色」と空に見入つて居ると、ひらと、黄色な柿の葉が、痩せた私の肩を辷つて、はては、から〳〵と悲しい聲をたてゝ、散つて行く。私は二歩三歩追つかけて行つて、一葉拾つて、頰にあてゝ見た、矢張りつめたい。けれど決して無情な者とは泣かなかつた。

私はイむだまゝ夢心地、水晶の搖籃にでものせられた樣。美しい美しい人になつて居る。

私は、ぶるとふるへて、忽ちすくんだ。何でもない柿のおちた音に。私の足下には透きとほつた珠の樣な、柿がころんで居た。拾つて懷に入れた。そして「どの枝から落ちたのだらう」と枝を透す樣にして見た。けれどどの枝をはなれたのか分らない、鈴の樣になつた眞紅の實は見えるけれど……。

小さな私の胸には、何ともいえぬ淋しみを感じた。

この時私の思は、早足に、――早足に、過去にかへつた。

私の目には、何もうつらなかつた。なつかしい過去計り。

私は思はず、淋しい笑？を洩した。靜かに空を見て……。

さう〳〵今日の樣な夕方、何時だつたか忘れたが、何でも澤山柿のなつた年だ、木登りの上手な與八が、帶に綱をつけてかごをさげて、するすると木に登り、山盛りに柿をのせて、「ソレ」のかけ聲で、さげる。下では菊に、雪、姉樣に、私、「ハイ」と一聲にかけて、「私が、私が」と大騷ぎで、うける。こんな事をつづけて下の大きな籠に、山盛入れて四人で、「よいさ〳〵」とかいて緣側にあげて、皮をむいてくれるのを、父樣か

ら母樣姉樣から私、みんなが笑ひながらおいしさうに食べたものだ。

それから、も少し寒くなつてからだ、梯子をかけて、與八が廂の下から繩を通して、下では菊が大根の尻端をきると、雪が與八に渡す。與八はそれを几帳面につむ。大騷ぎて乾大根をしたものだ。あゝあの時分はこの土藏の影も賑やかなものだつた。

あの頃は、私のこの髮、まだ肩までとどかなかつた。よく前垂で髮を結つて貰つた。濟ちやんが一番上手だつた。この倉のかげで日のよくあたるときは、飯事もよくした。いつもよく母樣になつた、ちづちやん。それに姉樣が好きだつた八千代さん。今は皆どうして居らつしやるかしら。目かくしをすると、何時もよく鬼になつた君ちやん。あの頃は私もみなに、うらやまれたものだ。

母樣はあり、この土藏には一ぱい美しい着物もあつたのだもの。母樣には逝かれ、一人しかない姉樣は遠い國に行かれた、今私は父樣と二人暮、菊も、雪も、その後どうしたらう。與八は時々訪ねてくれるけれど、昔に變らぬ心がほんとに思ひ出になる。

「夕暮靜かに祈りせんとて」ピアノに合せた、讃美歌の聲、君さんだ。あゝと吐息をついて力なく見あげた空に、きら／＼金砂をまいた樣星がかゞやいて居る。今夜は大變賑かだ。あの空も淋びれることがあるんだらうに。

人なつかしき朝

横濱　ひまはり

雨のさゞめきかと思つたら水道の水をくむ音、床の中で好いお天氣だなと思ひ乍ら起きた。昨日からの雨はあとなく上つて居た。秋晴れの美しい朝、さはやかな風がふく、亂れ髮をなぶるがまゝに任せて、南の窓に凭つた。淡碧のそらをうすい白い雲がすうとすぎる、何かうれしいことがあるよ、と心の底で誰かゞ囁いた何とはなしに心地いゝあした、今迄にえしらぬ晴れやかな朝の心だつた。きつと好い印がある、と小さい聲の叫ぶがまゝ、今朝は珍らしくいそ／＼と立ち働いた七時、八時、事もなく時は流れる。朝の思ひは永く續いた。しかし何か待たるゝものがあるやうで落ち着かなかつた。部屋に歸つてけふ訪づれる友をまつべく机の上など片づけて萎れた花もとりかへた。しかし心にまつ者はその友ではなかつた。帶を結び直さうと鏡の前に立つたとき、袖長い華やかなわが姿に人知れず微笑んだ、暗黒い影など晴れやかな今朝の心には宿らなかつた。强ひて思ふまじと勉めてゐるとも拭はれたやうに和らいだ心をおそふともしなかつた。どこかで可愛い雀の聲がする、鳥がとび出す朝だもの、私も外へ出たくなつた。ちよつと行つて來やう、と心ははや近所の友の住居にとんだ。綠色の絹傘を肩にかざして、雨あがりのしめつた地を踏んで步いた、思ふてもなし

思はぬでもなし、無心の瞳をふと上げると、あゝ思ひ掛けない、影も心にきざさなかつた人が來る。間は遠くはなれて居た、むかふの衣服の色があさぎの無地に見えたばかり、瞳が四つちらと觸れて擦れたにすぎない。其ものごし、黒い帽のかたち、慥かにその人と知つては再び眼を上げなかつた。何者とも知らず待たれたのは或は此人ではなかつたらうか、血の躍る胸を抑へて私はつと右の横みちにそれてしまつた、人の瞳がわれに注がれてゐるか如何か今一度見たいと思つたが例へ一目でも戀人のかほを正視することはできなんだことに行き交ふ人の手前、笑みもゑしやくもなくそしらぬ人のやうに行きすぎるのは辛かつたのだ。ああ轟く此むねは、而し見たのが一瞬なれば、胸のさわぎも永くは保たなかつた。平和な胸はすつかりかき亂されたが又も元の靜かさにかへつた。いためられた胸の惱みが油然とわきいでゝ、そゞろ涙の散る程の淋しさと佗しさを感じた。

石炭

交野小萩

あま多の工夫が、勞力と時間とを費して、堀り出した黒い石は、昨日迄前のあき地に城を築いたやうに、積み重ねてあつたが、何千噸積の汽船が入港したと云ふので瞬くひまに取去られてしまつた。石でさへぎられてゐた眺めはここに再び私の眼を喜ばせる事になつた。今日は雨あがりの上に舊暦十日と云ふので河口の潮が川水の領地まで浸入して水かさがいつぱいて向の川岸に立並んでゐる家々は、水の上に浮いてゐるやうだ。自分が今、立つてゐる所も向の岸から見たら、やはり浮いてゐるやうに見えるであらう。こうやつて西の空をみてゐると暮れてゆく夕日の色が刻一刻と變つてゆく。それにつれて川面の色も變つてゆく、自分は此美しい何ともいへない自然の景色の變つてゆくのを眺めてゐると、舟歌が低く高く川面を辷つて耳にひびく暫く立つと歌がやんで左の川筏の影から舟が現れた。ねぢ鉢巻をした黒い顏の男が艫の音ゆるく河口へとこいでくる以前の歌の主は此人であらう。舟に積んだのは石炭である。山から堀り出されて……川に運ばれ……大船につまれそれから海に……外國の陸に上げられる。幾多の人を乘せて行く汽車の機械をうごかすのもこの石、軍艦や汽船の釜の下にたかれて海上を走らせるものもこの石だ此石が多くあつかはれる處ほど都會になるのだらう。とそれからそれへ廻り廻つて考へてゐるうちにいつか舟のかげを見失なつた。あたりはもう薄暗い、振返つて見るともう表の瓦斯燈に火がともつてゐるので薄墨で書いた繪のような美景を殘してうちには入つた。

ぶどう

土佐 桃の花

ふと覺めた、周圍はからつとしてまばゆく、もう何時かしら、お隣の輪替屋の槌の音がだいぶだるそうに聞える、もう正午近くだなと思つて身を起すと、いつもは塵の積つた盆へ茶瓶二ッとコップとよりしか無い枕頭に、朱塗の盆にまだ水々しい紫のぶどうの房を盛つたのが置いてある、「まあ葡萄!! まあ」と私は飛び起きた、目も心もカラッとして何とも云へぬ嬉しみが湧く、妾は唯何とはなしに暫くジッと手をついて見入つた、然して其一房をそつと取上げて三ッ兒が珍らしそうに見る樣に先程しぼつた其房をたらして頰にあてた何とも云へぬ懷かしい香りがする、妾は久振りに戀しい人に逢つた樣な心地がした。私は夏の果物で葡萄が一番好きです。かすかに、かすかに覺えてゐる、まだ三才になるかならぬの「ト丶」「カ丶」「バ丶」をやつと云はれる頃の事だ此棟先から、今は胡瓜の花が黃色く咲いて、萎へた葉の間々にテカ／＼光つてる茄子の實の見ゆる向ふの畑まで大きな葡萄棚だつた、五月雨のビショ／＼降る頃はつるは思のまゝにのび、椽へ出て妾の赤い襦袢縫ふて下さる祖母樣は靑葉の重なり合つた其棚を仰いでよく聞い／＼と仰言つた。七月の初めからは靑い實が日增に紫がゝつてゆく、妾は祖母樣の背て一ッ二ッと其色付いたのを數へながら數をかぞへる事を習つた。晝寢から覺めるときつと枕頭へ其頃神戶の叔母樣からのお土産の菓子の空箱へほんとに取りたての活々したのを入れて置いてある、其れは皆祖母樣の葡萄好きな孫へのお心盡であつた。妾は之が眞に嬉しかつた、葡萄のある頃は寢覺めに泣いた事は無つた。妾は夕方はよく泣いた淋しくてか悲しくてか、けど祖母樣に負はれて頭へ屆きそうに房の垂れてる棚をあちこちしてる間には其甘い香に醉はされた樣に「カチ／＼山の小兎は」の子守歌の音を遠く聞きながら眠つた。妾は誰よりも祖母樣が一番好きだつた、祖母樣も妾を一番可愛がつて下すつた、そして妾は祖母樣は寢覺に葡萄下すつて可愛がつて下さるものだと樣に思はれた。

翌年の春は何樣したものか一本も芽を出さなかつた、枯れて終つて。祖母樣は何と仰言つたらう!? 妾は泣いたらうか!? 春も暮頃からは祖母樣は胃がんを病んで丁度よそは葡萄棚の下賑やかな七月廿二日の十時に遂に息を引取られた。妾は病中はうちの程は甘く無い買物の葡萄食べながら夜も晝も同じ床にお伽した、けれど祖母樣は一露も吸はれ無つたので子供心にもそれが悲しく無理に齒の無いお口へ押し込んで、母樣に頰を打たれた、妾がワッと泣き出すと、オ丶好い子だ／＼と祖母樣はやせた手で頭を撫て下すつた。妾は之だけはハッキリ覺えてる。それからは祖母も無く葡萄棚もなく寂しく十六の今日まで育つた妾は葡萄をみると何となく懷しい、見知らぬ家でも葡萄棚ある家はやつぱり三つばかりの子供が居て祖母樣がある樣に思ふ。スーッと涼しい風が流れ込んだ、淡い夢の樣な追憶の夢は

破られた、目の前には美しい葡萄が盛られてある、何となう唯何となうお祖母様!!と呼んだ、「オヽ芳や起きたかへ」と抱いて下さる祖母様を懐ふて――。

現實

京都　若葉

嗚呼さけさうに苦しい胸を如何しませう。優しい御情をふり注いで下すつた人や無二の親友の光子様までも捨てゝ世の波にこぎ出た私は果して幸福でしたろうか、今となつてはもう何も申しますまい。

私はあまりに世間知らずで御座いました、社會と云ふものを思ひあやまつて居ました、社會の制裁と云ふ大きな怪物は私等の様な弱い人間の一人や二人の力ぢや



京橋寫生　赤坂　ゆめみる人

迚も動かす事は出來ない、況して人並ならぬ心も身躰も弱く生れた女の無理に出した表面許りの力ぢや一歩も進み得ないのを今始めてさとりました。

が其覺りはもう遲う御座いました、我れから絕ち切つた情の綱てすもの、今更何所へ縋りませう、あゝとう〳〵私は眞の一人ぼつちとなつて了いました、嘗て嘆いた悲しみは乙女心の淡い涙に過ぎませんてしたに社會にもまれもまれて此から淪落の生涯を送らねば成らぬかと思へば胸はせき上げて來ます、袴は同じ色ながら斯ふして淺間しい務めに通へと誰が敎育して下すつたか……思ふ度に悔恨の情に堪へませぬ。

恰度去年の春の暮てした、光樣のオリーブの洋傘と私の紫のとがおもかげ橋の上に並んだのは。

夏らしい靑々とした若葉に包まれた世界はいき〳〵して、行手の小徑には眞白なつゝじや、黃色い山吹が咲き亂れて、快よい感じを與へました。川の中に二十人許りも子供が足を水にひたして淺い瀨に遊んで居ました、中て一番大きな十二三にもなる男の子が、皆を追かけて一人て威張つて居るのを眺め乍ら、ふと光樣と顏を見合しますと淋しさうに御笑ひなすつて「あゝ矢張り强者の世てすわえ」としんみり仰ひましたつけ、私にはよく其意味が取れませんてしたので氣にも止めず「左樣ねえ」と口で云つた限りてした。

今となつてやつと解する事が出來ました、隨分悲慘な境遇を經ていらしつた光子樣は其時分からもう自分は弱いものだと云ふ事を自覺していらしつたのてせう、暖かい風に許り包まれて世の制裁などは夢にも知らなかつた私は思へばどんなに幸福てしたらうに。

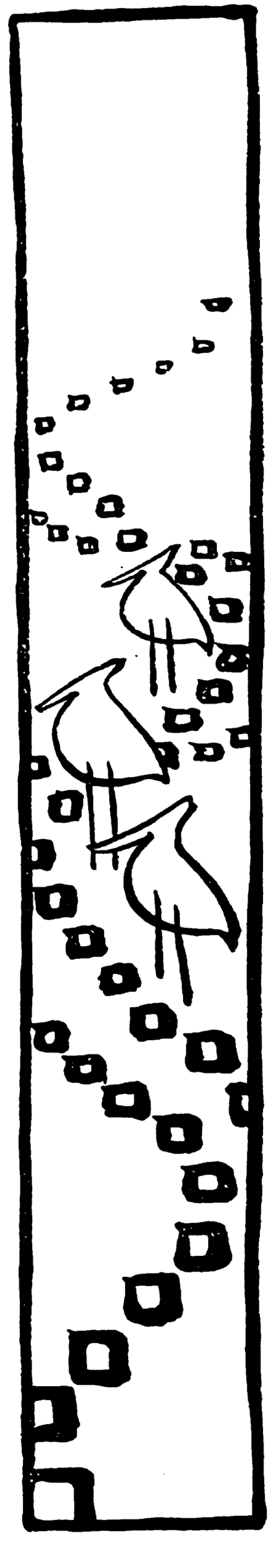
「ドールスハウス」のノラをよんては胸をおどらし自由！自由とさけんだ私の燃えた胸はもう冷たくなつて居ます、此冷え切つた胸にしみるのは、親の情てす、あゝたつた一人の父樣は、每晩お眠みなさるのも稀れだとある人からきゝました、今でも歸れば屹度父樣は喜んて迎へて下さるてせう、が一度醒めて新生涯に入る可く自由を得た私が又舊の生活を繰返すのは餘りに弱いぢやないてせうか、歸りませうか否、新らしい方面に進み掛つた自己を捨てなければ成りませんもの。ては父樣を捨てませうか、いえ〳〵たつた一人の親てす、嗚呼如何したらいゝてせう、每日悶え〳〵て身體も心も疲れ果てゝ了ひました。

「おやせなはりましたな」と人は云ふ、

あゝ私は何故醒めたのてせう、永久に覺醒せずに元のまゝの何も知らない乙女て居たう御座いました、吁。

●●●●●十月十八日。K君からも松茸が來る、國からも松茸が來る、松茸が衝突した、K君の注文で松茸飯を焚かせる、S君も來る　松茸一式の晚饗を始める、松茸の土瓶蒸をやる、その後ち土瓶の底が漏るやうになつた。K君、東京の人は松茸の喰ひ方を知らぬと怒る、S君も同意す。（酔茗）●●●●●十月二十一日。午前十一時、西村朝日太郎生る、朝日太郎とは乃父酔夢君が自ら命名した名だ。●●稲子、學校から遠足に行く、目黑まで行たさうだ、おむすび六つ、玉子燒二つ、林檎二つ、密柑二つ、皆食べて歸る。（酔茗）

初めて丸髷に結ふ



杉浦翠

實家の姉樣が去年產んだ峯子に對して、私は叔母に當ると云ふので私の事を叔母樣と呼ばせる。さあおばさんに抱つこをなさい。叔母さんおもりをして下さい、などと當年廿歳の未だ肩上とらぬ私に對つておばさん呼ばはりは餘りにぢゞむさい。一言云はれる每に若い頬を刀で殺がれるやうな氣がして私は身を顫はした。「姉樣今からおばさんだけはよして下さい」と切に哀願の結果、兄樣の頑固を屈服させて、姉さんと呼ばせて嬉しがつたのは去年の事である。一年越えて私は妻となつた。

隣家の花田樣のお嬢樣は私に四歳違ひの今年十七、友達としてもさある可き年柄なのに、私の事を小母さんと呼ぶ。忘れもしない先達花田樣へ御挨拶にゆくと實踐女學校の校衣を着たとし子さんが。母樣お隣りのおばさんが……と私の來意を取次いだのを覺えて居る。

それから後は一言混りにおばさん／＼を連發なさる。何となく若やぐ胸に壓迫を感じたが、妻となつて見れば仕方がないと、暫時辛抱して居ると習慣とは可笑なもの、何日の間にか聞くに馴れて、此頃は怎うかすると、小母さんと被入いなどゝ自分からさしも嫌つた詞を平氣で名告るやうになつた。背の丈も髮の長さも五寸と違はぬとし子さんをばいとゞ小娘のやうに思ひ做

して、自分では一角世話女房の積。生家の乳母がいつのまにか奥様と呼び換へて居るのにも、平氣で返事をして居るのだもの、知らず〳〵の内に、斯うして娘といふ象は葬られて仕舞つて、今は怖ぢず憶せず、妻と言ふ冠を戴く身となつたのである。

夏の盛りの日には女の帶の廣きを疏んじ、男の髮の短きを羨んで命とする化粧をさへ汗のためには怠つた。女の肌を燬き髮を焦した炎の神も金風に追ひ迯られて麗顔うらゝかなる秋姫が領とはなつた此頃。猫も丸う肥れば、暑さに負けて居た女の髮も一時に毛脚を健にして、姫の讃美の努力ともいふやうに息する毎に延びてゆく。私の髮は綠を増した。

萩が白く葉を返す冷やかなる朝、思はず衣紋を掻き合せて、脊にも羽織を欲しくなると、今まで輕いのと油氣のないのを特色として結んで居た、さら〳〵の廂髮では何だか物足らない、飽き足らなくなつた。もう少し重い厚味のある物を頭に載せて見度い、況してこんなに毛髮が増たものをと私は思つた。

コバルト色の空に眞綿のやうな雲がポカリと浮いてるのを見ながら私は街を歩行いて居る。乾いた道は白く見えぬ程の埃が白足袋を染める。氷屋の葭子は古びて店には新芋が堆高い。呉服店も太物や銘仙がかゝつて冬の仕度である。往來はネルの人羽織の人袷の人、種々雜多な服裝ではあるが、各々ある希望に生きるといふ色が見える、私はふと小間物屋の前に足を止めた。黒の暖簾を潜ると女の血を唆るやうな化粧品の匂が芬とする、幾筋も〳〵流のやうに下つたリボンの華やかさにも、眼がとまらず、唐突に『あの手柄と丸髷とを見せて下さい』と私は云つた、其聲が自分の耳に響くと私はハッと胸に動悸を覺えた、生れて以來數多い詞の内で、こうした言葉を使つて物を買ふのは始めてゞあると思つたのである。如才ない番頭はたゞ一片の手柄を買ふにも彼や是やと有たけの數を出して見せた。赤にしやうか桃色か牡丹かと色種々なる華やかさに眩暈されて迷つて居る。黒い髮に赤い色では双方とも強い極端だから調和がないだらう、和かみがなからうとたぢろいだが始めて結ふのに眞紅な色を用ひぬのも殘念だ、他の色は幾歳になつても懸けられやう、今こそ是を懸けねばと、不調和のものに痛い執着。迷つて居ると、若奥樣方には矢張り赤が一番お可愛らしくつてと、番頭が云つた。そのお可愛らしくつての詞が痛く我意を得たので、即座に赤い絞と決定て仕舞つた、

外に必要な品も取揃へて私は暖簾を出た。明い戸外の色が私の顔を照した目眩しい位だ。澁谷の學校の女教師が黒い服着て赤縮れた髪を束ねて淺黒い小皺のよつた顔をして通る。あの人は生涯髷になど結ふ事か出來ないのだらうか、などゝ今日に限つて異様な同情を喚び起した。街の曲り角に五六臺の辻車が客を待つて居る。一人の車夫がお孃さん參りませうと聲掛ける。私は前後を顧みたが私より外に女は通てない。をや〳〵私の事を……と、思はず髷形を抱へてゆく身は笑を洩した。午後からは頼んで置いた髪結が來た、聾だと云ふ事て四十許の女だ、私は庭に面した座敷に鏡臺を据えてその前に座つた。澄み渡つた顥氣は室内に漂うて、まだ貼りたての障子の紙の眞白く新らしい箪笥は木の香を匂はせて、大きな鏡は、キラ〳〵光る。聾の髪結は口數尠なに私の後に立つ。パラ〳〵ピンが零れて束髪は壞されると房々と髪は双肩に蔽ひ被さる裾引いて疊に觸るあたりさら〳〵と云ふ。梳れて切る〻一筋にも絲のやうな音を立てる。一筋毎に脈管が傳はつて生きて居るやうだ。髪結さんの手は器用に働いて居る。鏡の面の自分の顔を見ると、硝子の明い反射を受けて暗い影を止めぬ。私はそと頰を摘んで見た。から自分の顔ばかり見て居るのも馬鹿らしいので、私は私の上に映てる髪結さんの顔を見る。眼は下を向いてる。生際の拔けあが



秋ゆく日　紀伊　梓田みつ子

つた大きな額に太い皺がよつて居る。鼻が低くく、元結を締める時に口のあたりの筋肉を屈めて醜い骨相をする。皮膚の色の蒼黑く濁つて居ること。如何にも徒勞の色だ。私は思はず自分の色と鏡の面で比較して見て、自分の若さを歡び誇つた。

笄を挿すのに痛い思をして居ると、急に頭に壓力を覺えるは髷が丸く載つたのである、それを見ると思はず私は胸がどきめいた、嬌羞、歡樂――。人に見られないでも自づと頰が火照る。髮結は此處が肝心だと云つたやうに指先に熱を籠める。漸く出來上つた。「よくお似合遊ばす」と髮結はお世辭を殘して踊つた。私は髮搔きをとつて髷を搔いて見ると、妙に手が顫へる。人の髮でも接觸つて居るやだ。濃い髮に油の芳香、一絲亂れぬあでやかさ、我ものながら勿體ない氣がして、妻になり得たといふ感を新に刺戟した。何だか嬉しい胸には蜜を湛えてるやうだ。私は暫時鏡の上で自分を客觀して視た。合せ鏡をして後を見るとくつきりと、漆黑の髮を映して、映る映る庭の芙蓉が、綠の葉が松の木がゆら〳〵搖れて地も動く敷石が浮く。丸髷の脊景に庭の草木が明るく色鮮に映つて居る……奇麗だこと――。

痺れた足を立て、私は緣の柱に凭れた。烈しく感情を弄したあとの疲勞ともいふのか、たゞ茫乎して庭を眺めた。今度は頭が重い割にネルの單衣ではあまりに裾が輕い氣した。衰殘の屍のやうな茄子が捥げて葉影に熟つて居る。紫蘇も實つた。靑薄は漸く穗を出し初めたが、未だに房を捌き得ずして紅絹のやうな糸は、包葉に半ば括られて居る。それに隣した萩は花重く小枝を垂れてほろ〳〵と音なく零れる、虫が鳴く。櫻の病葉、芭蕉の破れ、何れもこの庭の萬象が靜寂の裡に呼吸をして居る。秋の聲だ。結び上げて後毛纏はらぬ襟元の冷たさを覺えた。（九月二十七日）（入　賞）

十月三十一日。日曜、朝から來客絕えず、初めに來た人は江戸時代に生れた人で、いろ〳〵面白い世間咄をする。次に森川癸村君來る、歸らうとする處へ川路柳虹君來る、夕方まで語る、東京の湯屋へ行く、此處は郡部だけれど東京までは一歩だから、急がない時は東京の湯屋に浴る。夜、未來の醫學博士と、以前の『文庫』の誌友と來る。

十一月一日。或る雜誌に或る人達が女優を攻擊してゐる、けれども女優を攻擊する根本の理由を見出すに苦しむ、果して虛榮か、果して墮落か、他日の成蹟を見た上でなければ判斷は出來ぬ、芽生の間から是は不良な樹だといつて引拔かうとする人達の大膽さに驚かざるを得ぬ。（醉茗）



未來の博士達の爲に

秋山欣子

八月三十一日、けふは皆様御歸宅の日、御座敷だけもきれいにして御まちしませう、つて母樣に申上げるとあゝどうぞさうしておくれ、私はなんか晩のものゝみつくろひでも、」と仰しやつてお朝膳を離れなすつた流し元さつぱりと洗ひ淨めた私は、白絣へ水色繻子帶キリッと締めて、雪白の前垂れ、グイと裾をたくしあげてまづ香川樣のお室からお掃除に取りかかる。本箱の隅、机の下殘る隈なく采配をやつて、さら／＼つと箒を走らせるうちにも、堪へられぬ程人懷かしさがこみあげてくる、無理じやないこんな廣い家に母樣と二人限だもの、思へば死といふは目前の寸の暗闇に潛んでゞも居るのか、今宵皆樣は御無事でおかへりになつても御歸省の時、元氣よく笑ひながら送り出し遊ばした父樣や兄樣は——あゝ寂しい、けども今晩からは又と思ひ直すと急に胸がわく／＼しだして、こんからかつた頭腦の中を、小麥肌キリヽと詩人めいた香川樣の爛々燃えるやうな明眸、中學切つての勇辯家高城樣の鮮かな唇、默言て人の意表に出る事をやる原樣の眞黑な顏、確りした腕を組み烈しく身を搖ぶりながら空を仰いで笑ふ癖をもつた河原樣の、いかにも一年坊主らしい顏やがでつちやにかけまはつた、自然に微笑れる噴井戸の淸冷い水でキユッ／＼と雜巾をかけ、足を洗つて室の眞中に悠々とねころんでみた。

三竿ばかりの日が青疊へ快く滑つて、高野槇の薄白い葉裏て初秋の風がさら／＼と鳴る。

畑から母樣が莞爾して出ていらしつた、ほつそりした腕に竹籠をもちかねる態て、片手には野菊が一束、「これ香川樣の御机へ、」とお出しなさる、香川樣は亡兄樣

と全級且親友、母樣のお目にはその人とも映らう、默つて頂いて白磁の瓶へ投げ挿にした、その儘座りこんで凝と見て居ると、夢のように淡いむらさきの花瓣から冷たい露が頰にこぼれる。

夜、歸つていらしつた、何から先へお話していゝか分らない、夜嫌の河原樣が匆々食卓を庭へ運び出してしまつた、昏れやらぬ若草色の空に、薄朧の月が匂つてぐるり輪をなした六人の顏には嬉しい〳〵赤味が漂つてゐた。香川樣は一杯のビールにもう特有の意味深い眸を輝して、「ねえお母樣、お父樣は被在なくとも健君は居なくとも、「また〳〵五人といふ兄弟が園村の家に頑張て居ますからね、」と賴もしやかに落付いて被仰る、皆目を見合つて默止した、「五人の兄弟――あゝ、」お母樣は口の中でくりかへしなさる、

翌日からまた朝が忙しいからと思つて、めざましを枕元へおいてゐる。

一日、目醒が鳴るか〳〵とうつら〳〵してると、微にどこかで車井戸の軋る音が聞えた、ハッと飛おきて目醒をみるとかけた時間より四十分斗り早い、眠いとは思つたが、父樣がよく被仰た、「目が覺めたら夜半でもおきるもの、必ず其德はあるぞ、」との訓を思つてこゝが我慢のしどころ、ついと立つたが又中腰に母樣はとみると、痩せた白い頰をこちらむきにすや〳〵と眠つて被居る、そろ〳〵蚊帳の裾をかゝげて忍足に勝手元の引窓を明けると、紺碧の曉天に天の川浪仄白く冴えてきしやごをまき散らした樣に星が凉しく閃めいて居る、何度か水を增減して研ぎあげた米をサラ〳〵ッと入れる、火を直して序に一寸お釜を覗いて、お味噌をする、葱の皮を剝く、と、ご飯がふく、まあよかつたと胸撫で下して雜巾をお釜のまはりへまきつけた儘、二三度立つたり居たり、あお父樣さへ被在つたら瀧に暇をやる樣な事もなかつたに、併しあの四人、未來の博士達の爲だと思返せば却つて心がはづむ、あつ焦げくさいやうな蓋を取つてみる、ツブ〳〵穴があいてゐる、もう大丈夫――急いで火を引いてお鍋の下へ移す、七輪へ細いのを入れてお鐵瓶をかけけむい眼をこすり乍ら下戸を明けると、河原樣が編シヤッきりて素跣足向ふ鉢卷の草引姿がついと目に入る、「まあ河原樣！」目をみはると振りむいて「なあに鐵血男子てさあ寒熱なんかあ感じませんや、」つて相不變無鐵砲な、「けれども河原樣、兄樣をごらんなさい風邪が因て[illegible]たわ」「ウンだけど、だけど、」と詰つて圓い顏を四角

にしたが「だけどおやない全不養生しないて頂戴よ、」と追かぶせると、「ん、だけどーまあい丶や後の文句つい忘れた、高城兄様に任せる」つて逃げちまつた、剛情なところが頼もしくもあると氣にはかゝりながら水を汲んで歸ると、母様がチヤンとお膳立しといて下すつた、香川様が野菊をいぢり／＼出ておいてなさる、私は何かしら滿足といふ感がした、河原様はキチンと紺絣の筒袖をきて一番先「母様お早う御座い升、」といつてのける、さつきの事なんか知らん顔、憎いとは思つてもなぜかにらむ目はだめ、いつても「姉様のにらみは毛程も利かんね如何となれば其眦が下の方へ釣上つてるが故に」つて笑はれるから今日はにらむのを止して其代りそつと思ふさまつねつてやる、それでもどこまで剛情なのか平氣てチユウ／＼おみをつけを吸ふ。原様例の通り盛に召上る、云草が面白い「僕あ宏君（河原様）の様に杓子壓迫はせんからな、」「其代數でこなすといふんだらう、つまり歸着する處は同不健啖家さはゝ」すかさず高城様が引たくつてしまふ皆ドッと失笑す、「一月ぶりてよこんなに御飯が美味いのはと、「母様が實際珍らしく召上つた、私も嬉しい、ドヤ／＼出て被居る後姿をみてゐると歩き方からしてそれ／＼性格を現してるか



あみもの　兵庫　中川みさを

ら面白い、小股てグツ〳〵と河原樣が驅けぬける、本包を左手へ大事さうに抱えて稍うつむき加減の香川樣が高城樣は大らかな胸を張つて烈しく右手を振るのが癖最後の原樣は恬とした態度、大股にむくり〳〵行く、こんなても兎に角離れ〳〵にはならずに四角の柳の木をまがると、あとはふと朝の白い光が殊更目を射ていはうやうない靜寂を味はせた、けふは一日張物、夕方糊の强いのをバリ〳〵と剝すのが快かつた。夜は皆樣早くおやすみ、昨晩のおつかれでせう。

二日、朝から掛つて母樣の羽織を漸う仕上げた、手早く夕飯の準備整へ五時近くなると門の圓葉柳の陰へ椅子を出して母樣と涼み乍ら皆樣の歸をまつてゐる、父樣の同僚、師範の萩谷先生が暑そうに歩いて被居る、「およ り遊ばせ」と申上ると「日曜にはぜひ伺ふ、」つて其儘いつておしまいなさる、あんなに父樣とは仲がよかつた方だけれど日曜には眞に來て下さるかしら、此度の日曜てあの方の眞價も分るだらう、など〻思つた。向から佳い奥樣が來る、よく見るとお美輪さん、狹い市交際場裡を聯隊副官夫人て切て回つてるそうな、素來ハイカラ樣だつたから母樣仕込の私とは卒業までも机を並べてゐながらいつもお互に遊ばせ言葉許り出してゐたつけ、ひよいと頸をあげると遠目ながら偶然見合つた何物かに壓迫られる樣ふら〳〵し乍ら門脇へかけ込だ落着ぬ胸を抱いて龍膽の花株の間にしやがんて、矢鱈に花をもいだ、むしつた、「露さーん」お母樣のこゑに、ハツと我に反つていくと、寂しくお笑ひなすつて、「又かえ、あの美輪樣がね、お目に掛りたいけれどこれから婦人會主催の慈善演劇にいかねばならんから殘念だがと、仰しやつてこれ、」と一葉の寫眞を出して「今出來てきましたからあげるつてね、」「‥‥」默つて受取つてみる、母樣も頸をおよせなさる、後から氣元よい靴音がして「いたいつ」ふりむくと河原樣が笑つてる、「ぶつたわね、畫をかいてあげないから」輕くにらむとすぐ閉口した顏それでも口だけは「何い〻さ一人て立派にかくね母樣、」と甘へたが寫眞をみつけるといきなり横取つて、「やあ上野のおてんば！」いひ〳〵破いちまつた、「あれ河原樣」母が押へる、四人が手を打つてかけ出す、らんぼうなと思ながら落ち散つた顏だの手だのを拾つて室へ歸ると、香川樣が包む樣に微笑ながら、「今そこて逢つたんですよ全く虛榮心なるもの〻權化とも見るべしですね、」「宜敷君が筆に上して痛棒を加へよだ、」ヅボン取ながら高城樣がい

きまく、そんな言をいふ熱烈な顏をみると不思儀笑れる、母樣はむづかしい顏をなすつて、「何卒そんなこと言つて下さるな、他人は他人自分は自分てすからね、」とぎれ〳〵に被仰る、と河原樣が、御免下さい母樣、僕が惡う御座いました、「いふなり頭をピタリ疊へつけたが、其儘私の手から寫眞の片々をとつて兩方からくつつけてみる、あまり無邪氣なので怒り役の母樣まてが失笑してしまつた、おいしく夕飯を濟まして机に對つた私、私は心から今の境遇に滿足する、四人の兄弟が早く〳〵檜舞臺に活動するのを見たいといふ念許がむら〳〵と起つた、一日の反省をする、お美輪樣にも逢へばよかつた、何とか思ひなすつたらう、せめてものお詫、やぶけた美しい姿を叮嚀に紙に包んで香箱へ秘める、それをしまはうと立上つた私の眸には澄んだ月影が氣高く〳〵うつつた。（入賞）

夫の愛を疑ふ若き妻の苦悶

うつせみ

それては御機嫌よう、お早く御歸り遊ばしてと勇ましい御門出に泣顏見せまいと猶る、涙をじつと袖に包んで御後影の見えずなる迄、門に立ちつくす、何も知らない車夫の健脚を誇り顏に韋駄天走り、早くも旦那樣をさらつて行つてしまつた。ふと我にかへると、春まだ寒き如月の今し白みかゝりし曉の風は、ネルの寢衣に羽織を引つかけて居る此の身の肌をさすやうお寒い事さぞお車の上てはお寒い事だらう、御風邪ても召さなければよいがと心に念じつゝ、部屋に歸れば、まださめやらぬお寢衣も其まゝ、あな懷かしとヒシと計り抱きしめ、御うつり香にキッスした。なるものなら御一所に行きたいつていへば、海員の妻が何だ、そんな女々しい事をいつてどうするつて、それはもう充分に覺悟して居る私だけれども、嫁いでから僅に一月になるやならずて、もう御別れなのてすもの、そして親類中から爪はじきされる、あの私の口からはいひ難いが意地惡の姑樣の、御機嫌を伺ふ計りなら何でもないが昨夜初めて伺つたあのお靜さんが、十年も前から旦那樣を戀して居て、子供の四人もありながら、未だ、忘れる事が出來ないのてすつて、私は是を聞いた時、驚きと恐れとて滿身の血も凍るかと計り、あやうく倒れる處を、夫の手に支へられた。あな淺ましきお靜さん

それてこそよめたり三十三にもなつて、いつも〳〵年がひもない若づくり、十からちがふ私よりも派手ななりをして、此間も暇乞に來た時も泣いて〳〵私は不思議に思つた、いかに小學校時代からの親友だといつて、旦那樣は先方は何でも此方は何でもない只妹と思つてくれといふから、妹と思つてやるといふ迄だ萬一の事があれば、夫こそ法律上の罪人じやないか、しかし愛の點に於ては立派なものだぞつてやつぱり御心があるのだ。あゝ口惜しい〳〵、今迄は我物と計り或つて居たに、我が身に受くべき愛の半分は奪はれて居たのかと思ふと、無念の涙はハラ〳〵ととめ度なく寢衣の袖をぬらした、何處が立派でせう、夫ある四人の子の親となりながら、妻ある者を戀するとは、私のやうな武士的教育を受けた者には、そんな不德義な人とは同席するも汚はしいと思ふのに、ヤレ女のモデルとか、理想的な女だとかおつしやる旦那樣が今更恨めしい、馬鹿々々しい、あんな不德な人を。しかしあゝいふ動作が御氣に召すなら、一生懸命でまねませう、身には錦をまとひ、眞珠入りの首掛鎖で飾つても婦人の價値といふものはゼロだ、若しも私がお靜さんならば十何年も思ひこがれて居る程なら、結婚する處かとくに死んで居るか尼になつて居るものと、あゝ罪な人御主人つてどんな方だろう。こんな事を考へると何だか心細くなつて、それからそれと空想はつきず、朝食も喉には通らない、十時御出帆としいへばもう直だ、今頃はどう遊ばしてだろう、と立ちつ居つ何も手につかず、部屋に閉ぢこもつて夫が愛てし鸚鵡を相手に心ゆく迄、戀しき夫が上を思ひつゞけて、身は臥戸に橫はれども、いかで〳〵心の休まるべき、眼は愈々冴え渡り、心は益々澄みぬ、折から吹きすさぶ木枯しも身にしみぬ、あゝまた風だ、今頃は何遊ばしてだろう、少しは思ひ出して下さるだろうか、あゝ昨日は今頃樂しかつたのに、

風ふけば浪や立たむとかりそめのゆめ結びかねつ
けふもきのふも
心あらば立つにさわぐな浪風よせこが旅路の夢な
やぶりそ

趣味におはれて無趣味に暮して居る中に、早萩の上風も身にしみて庭の紅芙蓉は匂ひこぼるゝ計り、私の好きな秋が來たと共に、片時も忘るゝ間もなき夫の歸朝も愈々今日となつた。姑樣の手前も恥しい程落付て居

られない、風呂も湧いた、花も生けかへた、塵一つととめずはき清めた座敷には、旦那樣のお好物山と積んて、久々て共に樂しき食卓をかこまうと、姑樣の例のいやみもものゝ數かはと、姑樣は先にすまして頂く。一日千秋の思ひつて此事だろう、今か〳〵と往きつ戻りつ、まるて玄關から門の間をお百度ふんてもまだ堪へがたきまゝに、庭に下りるとガラ〳〵響く車の音、扨はと思ふと嬉しさに身も狂せん計り、顏がほてつてしかたがない、をどる胸をヂッとをさへて、玄關に馳せ出る、あな嬉し〳〵此の時の心地はとても拙き筆紙にはつくす事は出來ない、誰でも己が夫はかくも戀しいものかしらん御風呂を召せといへば、いやと只一言御飯をといへばもうすまして來た、早く和服をと急ぎめしかへて、何れへか御出ましになつた。あゝ我は驚きぬ、さぞ淋しかつたろうとか、留守中心配だつたろうとか、何故仰ては下さらないのかいかにつらく悲しき事あるとも優しき御一言を伺つてこそ、滿足して消すべきに、かくも御心變らせられやうとは思はなかつた。私の心も察し給はて、口惜しさに溢るゝ淚は頰を傳ふ。小氣味よしと計りの姑樣のお顏見るも中々に腹立たし、泣く〳〵お洋服を疊みかくれば、あゝ恨めしきかなポッケットの中、厚い〳〵彼の女の手紙はひそんてあつた開封してあるを幸に罪深けれど許させ給へと讀み下せばあゝもう、私は堪へられません〳〵重ね〳〵我が小いさき胸を傷める事の多きよ、おゝ惡魔!!!!思へば〳〵はかなき我運命にもあるかな、もう私は決心しました。不德極まる此の哀な人達を、もゆる眞心て正道に導きませう、されど〳〵そはなか〳〵にむづかしい、萬一我が願の叶はぬ其時こそは、私とても武士の娘、生きて此の世に恥を晒さんよりは、潔く葉末の露と消えませう。言ひてかへらぬ事ながら、靜の小田卷くりかへし昔を今と樂しむ事あらんには、いかに嬉しかるべきに、思ふまじとすれば千々に亂るゝ我が胸と知るや知らずや細々と鳴く鈴虫の音も我が身をうたふ心地してヨゝと計り泣き伏した、戀しく懷かしき我が君は今は何處におはすらん、こんなに情なくされても私はまだ懷かしい、こんな思をする位なら滿足に滿足して居る七月前、肺病にてもなつてお優しかつた旦那樣の御手に抱かれて死ねばよかつたものを……。

嬉しさを表はす和洋の御馳走

榎原幸子

八月一日

東京の早稻田大學に入つてゐらつしやる兄樣がお歸りに成てから早二十日ほどになる、高女に通つてゐる妹は五六日前から休暇、一人東京に居のこつて、高の入學試驗に蒼くなつて居た弟の武夫も、昨日の朝發表になつた合格者の中に、自分の名を見出したので得意滿面、大威張で今日の午後二時四十分の直行列車で歸京した、我こそさきにと相競ふて集る少壯の青年が、多く失望の淵に投躑される最高學府の關門を無事に通過して來たのだもの、本人の得意は如何ばかりてあらう、父上母樣の歡びは更なり、姉の妾でさへ何となく嬉しさが身にしむ樣てあつた。今日は親子打ち揃ふての晩餐會を催ふす事になつた、家内許りだからお献立もお料理も一さいお前達姉妹に委せやうと母樣が仰る側から兄樣がおしる粉に金時にお芋に南瓜なんていふ御馳走は御免だよとからかふ、どうせさうよ、それにお團子にお萩にあんかけもして上るわと妹が負ず口をいふ。いいから默つてこちらへお出よと臺所へ引つ張つてきてお献立の相談を始める。お献立は、一、鯛スープ鯛フライ附合せパセリ、三ロールキャベヂ、四胡瓜サラダ、五プラマンジ紅茶、水菓子ときめた。コンフラワーや胡椒バタ、玉子なんかはあるからスープに入れるお豆腐と、パセリと挽肉と胡瓜、パンや牛乳の買ものを松に云つけて淸ちやんと二人は白前掛してお料理にとりかゝる。

ロールキャベヂは葉を一枚一枚はがして、うで水にとつておき、挽肉にパン屑を交ぜ鹽胡椒にて味をつけたものを先きにうでたキャベヂにて卷き、糸てしばつてバタてため、一時間程スープで煮こむ、プラマンジはコンフラワー大匙二ッ程に砂糖四十匁ばかりを合せて牛乳一合半と、少量の水を加へてそろそろとき、火にかけてどろどろに煮えたる時香料を加へ、型に入れて冷し二ッにわけて一方へ、紅とか靑とかの色をうすくつけて　二段にながしてもよい。其二ッはお淸ちやんに賴んて、あとは妾が引うける。

て自分は流しもとに立つてまな板の上に中鯛をおいて霜の樣にきらりと光る出刃をとる、鱗がバラバラと黄

金の片々のやうにとんて、目が生生してる、近頃に見ぬ鮮魚だ、鱗をちらして三枚におろし、頭と骨は適宜に切つて強く塩をしておき、身の方は一人前一切づゝの大きさにして薄塩しておく。湯を沸立て、前の骨と頭を入れよく煮たてゝ裏漉にして、つゆは再び鍋に入れておく。骨に附た魚の肉をあまり細かなくらぬほどバラバラにとり、皿に入れ、別に豆腐の賽の目に切つたの中で煮立てゝ浮上りたるを見て掬ひあげ、水をきつて魚とともに皿に入れる。露は食卓に供する前再び煮たてゝ塩の不足を入れ、醤油を二三滴おとして色をつけ前の皿につけることにしておく。それから先きに薄塩した切身に、うどん粉をまぶし、玉子をぬり、パン粉をつけ、ヘットて揚げて油をきつてパセリを附合せる、そこてスープとフライが濟んだからサラダにとりかゝる、松がもう胡瓜の皮をとつて種子を去て、きざみ塩て揉て酢につけてしぼつて居る、ゆて玉子の黄味ばかりを鉢に入れ、其中へ砂糖カラシ塩胡椒を入れてよくねりまぜ、酢にて少しづゝゆるめとろりとしたる時に酢を入れるのをやめて、胡瓜にかけ、白味を細いあられに切つて胡瓜の上から振りかける。それて自分の受持のお料理が濟んだから、食卓をお座敷へ持出して純白のテーブルクロスをかけ、京燒の一輪ざしに夏菊の一枝、ナイフフオーク、スプーンを兩側に、ビールサイダー、果物籠を中央に程よくならべ、緣側へは裏庭の鉢植二ツ程しつとり水を注いて持出しておき、食堂の支度を濟して、再び臺所へいつて見ると「姉さん自分が先に出來たと思つていつてしまつてひどいわ、キヤベヂがこげついてよ妾知らないわ」と淸ちやんプツプツ云ひながら、ポツと顏を赤くして鍋をおろして居る「火が强かつたのてせう、殘つた汁はソースの代りに上からかけるんだから、スープをたつぷり入れゝばよかつたのに」鉢や、お皿や、鍋や、俎板や、ごちや〳〵になつた臺所を片附て、順に持出す樣にして食卓につく。

焦げついたロールキヤベヂ、酢のきゝすぎたサラダ、ちと如何はしい出來てあつたが、父樣も母樣も少しものこさず召し上つてくださつたので、鬼の首とつだ程嬉しい。

八月二日

お晝過ぎに五條の姉樣が入らしつた、姉樣もう長男の俊雄が五ッ、實家心失せぬといふわけてもあるまいが、お互にいつまても他家の人と思へぬ、昨夜の樣な

水入らずのまどゐにも姉樣が居られないのがもの足りなく思はれたが、今日こそは親子兄弟一人も殘さぬ一家の團欒、お料理はまた自分の役、今宵は純日本式で姉樣の好物の、おすし鯛のうしほ、鱠のあらひ、うま煮、冷素麵といふお献立、お料理法は書いておく程でもない平凡なものばかりだが、出來上つて食卓へならべると、海老と玉子と海苔と三色盛り合せにしたおすし、ガラスの簀に雪の樣に白くなつた身をならべたあらひ色の配合がわれながら美くしい。姉樣が大層きれいに出來てねと仰ると、食べて吃驚ぢやお氣の毒樣だと兄樣の例の惡口。「ですから兄樣には上ませんわ」と淸ちやんはだまつて居ない食卓の周圍にはお皿がごちや／＼とすき間なくならぶ。僕のは餘り少ないやうだなんて弟が慾ばる。母樣が昨夜のやうなのより、やはり私はこの方がいゝ、今夜は皆加減よく出來たとほめて下さる。西洋料理も上手に出來たのは甘いですがな、幸や淸などのやるのは生つかじりだから寧この方が食べられるんですよ。なんて、兄樣どこまでも人をほめない方だ、文學者なんてあんなに、あらさがしばかりするものかしら。とはいへほめられやうと識られやうと憤らうと泣かうと恨みは殘らぬ親子兄弟語りつ笑ひつ互に心地よげな顏と顏とを見まはし見交して笑ひ聲の絶えぬ夏の良夜、風靜かに庭の小ささを吹いて、新月、やわらかい光りをなげる。

地方を巡廻する裁縫講師の表裏

蔦枝

九月十一日、福田さんが余り御勸め下さるので行つて見たいと思はぬでもないが、例の氣の狹い御師匠さんまたどんなにか機嫌が惡いだろうと思つて、決し兼ねて居たけれど、先生が文學士だといふ事を聞いてから急に出て見樣と決心したのは昨日の夕方であつた。學校を終へてからは田舍の事とて氣のきいた集會とてもないので是が始めてだから、種々樂しい空想をえがいて松本さんを御誘ひして先生の御宅へ行く、二十四五の奧樣が二ッ位の女の子を遊ばせて居る前を通つて二階へあがる、八疊と四疊の障子の破れた汚い二階だ。此處が會場と聞いた時には聊か驚いた、ズッと並んだ講習生を數へると僅十七人、こんな事かと驚いて居る

まに先生が在らつしつた、私の豫想は見事外れて五十近いお爺さん、聲だけは若者の樣な聲だ。今日は肋骨被布の縫方、先生は皆に教へておいて表紙に貸本の印のある小説を讀み〳〵時々面白い話をなさる、「自分は短期講習を開く爲八年間旅行をして居る、東京を出る時屹度十萬の弟子をつけて見せると友人に約束したが、最う二千程で其の數になる、自分はたゞ事業を社會に貢獻する事が



おちば焚き　和歌山　かづ子

出來ればそれてよい、地位も名望も要らぬ」と。私は金錢の外胸中何物もないといふ御師匠さんとくらべて實にたのもしく思つた。

小學校の生徒がど、やどや歸り出したと思ふと、いきなり「お父さん」と先生の傍に來た坊ちやんがある、先生は武坊〳〵としきりに機嫌をとつて被在る、僅一日で皆は最早先生と親密になつた。

九月十四日、少し後れて行くと皆樣御揃ひで何だか考へた樣な顏、何故だらうと思つたら二十分の間に女子の務を簡單にかけとの事、ほんの思

つたまゝを簡單に書いて出す、先生の曰く「自分が歸京すれば旅行記を發行させるが其の中に女子の務のいゝのも入れる筈である」と。肴屋が通る聲がしたと思ふと奥樣が階下から「旦那樣御肴はどうですか」と聲を御かけなさる、先生は「よし」と仰有つたきりとん〳〵梯子を降りて被在る、しばらくすると薬村さんと先生が私の名を御呼びなさる、何かと思つて行くと、「今一週間講習を延期する事にするから生徒を募集して呉れ、——無論自分も近村に運動員を出して驚く程多勢な生徒を募集して御目に掛けるが——、就いては此家も十七日以後屹度あける約束になつて居るので、此先尚貸して呉れとは言行一致を守り自分にはどうしても云はれないによつて、あなたの名義で借りて呉れ、然うすれば家賃は生徒の負擔である」と、私は責任をもつて承諾した。

福田さんと一しよに大家さんに行く、わけなく承諾して呉れたが話好きなお婆さんなか〳〵私等を離さない藤田（先生の姓）先生の奥樣もあれてはなか〳〵御辛いてせうね、といふのを前おきにして語る所によると、あの奥樣は後妻で小學校に行く坊ちゃんとはなさぬ中、それにまだ二十にもなる坊ちやんもあるとか、「中學校にても御通ひなさるのですか」と福田さんがおきゝなさると、「どうしてあなた、それがすこし足りないものですからね、毎日朝早くから活版所にいつて夜になつてからお歸りなさるのですよ、」奥樣は初婚だと仰有いますのにまあお可愛いさうな」、とさも一大事でも報告する樣な口調、いつまで聞いて居ても限りがないから、いゝ加減にきりあげて歸る、成程これで武坊ちやんが奥樣に寄りつかない理由も解つた。

九月十六日、今日は小兒改良服、ミシンをもつてゐる人はもつて來いとの仰せて、早速店員に持つて來させる、熱心にした故か二時頃迄に出來あがると、先生は天竺で御自分のシャツを縫つて呉れと仰有る。餘り有難くもない事だ。先生は葉村さんに限つて報酬として美しいものを敎へてあげると、それならばほんとにうれしい。ミシンの音がやかましいのでよくは聞えないがなんだか武ちやんの泣き聲が聞える樣だ、先生はと見るといつのまにか降りて被在つた樣子、先生の大きな聲はミシンを動かしてゐてもよく聞える、「お前は私があれ程よく云ふ繼子の育て方を忘れたのか、武坊が惡いなら何故いつて聞かせてくれぬ、それに叩くも宜いが場所も考へないで頭なんか叩いていけないぢや

ないか」、奥樣の聲は小さくて聞とれないが泣いて被在る樣子、「私は此間聞いた「奥樣は初婚‥‥」を思ひ出して氣の毒でたまらなくなつた。

九日十八日、新らしい申込者が今日迄に、六人とは心細い、其の六人も皆私等が募集したのだ、先生の運動員は如何してるのか一向便りがない其の六人の中足の不自由な人があつた、先生は「遠慮なく足を延ばしてお座りなさい」といつて、「此前四國で講習を開いた時知事の令孃だといつてこれも足の不自由な人が來た、自分はそれを知らなかつたものだから、足をなげ出して居る無禮を怒つたら、翌日知事からといつてビールが一ダース來た、我々はどれ丈秘藏娘や不具娘を引張り出したものかわからない」と仰有る、口惡の中村さんは「先生は法螺吹きよ」と仰有つた、私も此頃然う思はぬでもない、午後先生は〇〇市にむけて御出立、汽車で五時間もかかれば行ける所だ。

九月二十一日、午前十一時先生の御歸宅「一日〇〇市に居て二百人程の生徒を集めておいた、當町がすむとすぐ〇〇市に行く筈だ」、と仰有つた、先生は今日は大變に機嫌が宜い、私が可愛い人形をもつて居たら「俊」と奥樣を呼んで「うちの孃にもこんなものを買つておやりなさい」といつて入らしつた。

皆が十錢宛出した金で半月分の家賃を差引いたら二十錢殘つた、先生は武ちやんに煎餅を買つて來させてしきりと食べて被在る、歸りに家賃を拂ひに行くと意外な事を聞いた、「葉村さんの家は財産家だといふのに、菓子一箱も持つて來ないつて先生が仰有つた」と。

九月二十四日、いよ／＼申込者は一人もない、講習も今日が最終日、先生は明日御出立といふのに、生徒を三人も紹介した福田さんとシャツを縫つてあげた私とに、報酬があると仰有つたので待つて居るけれど何とも仰有らない、私等の方から言ひ出すと「今時間がないから讀めば解る事だからあとから郵送つてあげる」と仰有つた。

九月三十日、先生御出立の日から今日で六日、まだ何の沙汰もない、大家のお婆さんの所にきゝに行くと、〇〇市には被在らないで近村に入らしつたとの事、私は「欺かれたのだな」と思ふと何ともいへぬいやな氣が爲出した、そして先生の言行一致もあてになつたものぢやない、お師匠さんと少しも撰ぶところはないと思つた。

スヰートホーム

うめ子

【廿三日】「まア、大層お似合遊ばします事」と婆やは濡手を拭きながら、後に立つてじつと見詰めてゐる。そのさも感心したと云ふやうな顔付が丁度鏡に寫るので、思はず吹出してしまう。「いやアな婆やよ、其樣な顔して。て似合ふ事？初めてだから何だか重くて落付が悪いわ」と結立の髷の頭を一寸振つて見る。白牡丹から出來て來た透彫の平打を後に挿して合せ鏡すると、眞黒な毛に渦卷絞の緋の手柄も初々しく、ふつくりと出た鬢や髱の具合我ながら見惚れて仕舞うやう。少し根が下り加減な髷も、束髪にばかりしてゐたのとは違つてぐつと意氣だ。

四時――旦那樣の御歸宅も間がないので、其儘鏡臺引寄せて顔を直す「此頃は血色が悪いじやないか」と度々お氣になさるのを思ひ出したので、紅皿取つて薄り頬にはいて莞爾すると、鏡の面にも靨が浮いて頬が一入染つた。もう今迄のやうに襟をつめて着ては長い髱がうるさいし、第一後が油で臺なしになつて仕舞うから、胸を寛げて一寸衣紋を拔いて見る。何だか極が悪い。必然旦那樣お驚き遊してよ。不意だから。でも此前唐突にお髯をお落しになつて喫驚おさせなすつた御返報に丁度いゝ。

お書齋も茶の間も綺麗に片付いた。掃き清めて庭に箒目美しく、夕日の名殘が紅葉を染めて、遲れ咲のダリヤが獨り淋しい庭を彩つてゐる。柱に椅つてあてもなく空を仰ぐと、もう秋も最中、虫ばんだ櫻の葉がはらはらと舞うて來て、音もなく軒端の蜘蛛の巣に引つかかる。あゝ母樣は如何して被在るだらう、只一人娘の私を手放してさぞお淋しからうと思ふと、そゞろ戀しさにほろりとする。――なんだつて私は此頃此樣に心弱いのだらう。矢張身體のせいかしら。

【廿四日】今日は旗日といふので婆やを相手の臺所はなか〳〵賑かだ。蒸籠で蒸した糯米を搗くやら胡麻を磨るやら。

「どうぞお加減を御覧遊ばして」とお小皿に小豆の煮たのを持つて來た。

「あ、丁度いゝわ。も少しお砂糖が少くつてもよかつてね」といふと、

「おやまア左樣で。何時もよくずつとお加減がしてご

ざいますんですよ。此頃奥様はお甘いものがおうけにならないやうで被在るから」
「さう、じや旦那様に見て頂からうかしら」と云てると
「襷懸の白前懸なんて大仕懸だね――。やア襟のかゝつた着物なんか着ていゝ世話女房が出來た」つて丁度顔をお出しになつた。
「まア。それよか一寸これを御鹽梅して頂戴な」とお小皿を出すと、
「何だ鹽小豆を食うやうだぜ。これも綾さんの日記帳に書いてあつたのかい」
「よござんすよ、たんと仰いまし。婆や、いゝから其お砂糖を皆入れてお仕舞」
「ふゝ、豪い勢だ」なんて。それでも今に五皿も六皿も召食る僻に。
午後は生憎の雨、旦那様は忙しいお調物で、夕御飯が濟むとお書齋にお籠りになる。何時までもお側にゐてはお邪魔と、密と部屋に歸つて縫懸の裁縫を出す。何といふいゝ柄なんだらう、見る毎に振ひ付きたいやう、早く仕立てゝお着せして見たいと思ふと、自然針の運が捗取つて、もう前襠も付け上つた。袖さへ付ければよいのだから、今夜はどうしても縫上げて仕舞うなどゝ考へて居ると、お書齋では鐵瓶の沸る音に交つて折々ページを繰る音がする許り。婆やも居眠てもしてゐるか、家の中は胸の呼動も聞える程もの靜かだ。密々襖を開けて覗いて見ると、御目は御本に注がれながら、右手は隙なしにお側のバナヽ、ケーキに、左手は黒い八字髯に。でも甘黨で被在るから嬉しい。密と閉めて又針の手を運ぶ。雨の音が烈しくなつて來た。
【廿五日】秋の日を背に受けて旦那様は草花のお手入れに御餘念がない。私は鋏を持つて來たり如露に水を運んだりして御側に助手を務めて居ると、「郵便！」と門が開いた。大急ぎに枝折戸開けて玄關に廻ると、何時の間にか婆やが受取つて縁側の方へ廻つて居る。
「良人、誰樣からだと思召して？極、親しい方よ」
「瀨川か」「いゝえ」「では吉山」
「あら、東京の方ばかり仰るんですもの。お國の方にだつてお親しい方いくらもあるじやございませんか」
「面倒だ、早くお見せ」
「お母樣からよ」
「さうか、又孫の顔が早く見たいなんてよこしたんだらう」なんて急に悠然構へて被在る。
「早く御覽遊ばせな」

「手がよごれて居るから後でもいゝや。見たければお前が開けて御覽」
「じや拜見してよ」急いで封をきると、
「お國の御隱居樣からでございますつて」婆やまでが床しがる。
「あ、(婆やが居て呉れるから離れて居ても誠に安心してゐる。若い方々だから何分賴む。)との御言傳だよ」
「まア勿體ない」と老の心弱くも淚ぐむ。ほんに可笑しい位律義な婆やだ。段々讀んで行つて、
「ね、良人、例の栗の夢、つてあるのは何アに」と伺ふと、にこ〳〵遊ばしながらお覗きになつて、
「御母樣はね、身内に子供が出來ると何時も栗の夢を御覽になるんだ。だから此度も大きな栗を拾つた夢を見たが綾子に出來はしないかと仰るんだ」
「おやまア」つて婆やつては横から口を出して、「私もどうも御姙娠に違ひないと存じましたのですよ」
「綾さんさうかい、さうなら一寸診察て貰ふといゝね」なんて眞面目な顏をして被在る。男の方なんてよくあゝも澄して居られるものね。私は餘り極が惡いから聞えない振をした。

不思議の早起

江森美子

眞實に長屋でないから可いけれども母樣が時々被仰るほど、私は大の寢坊で每朝〳〵、美子明るくなつたから、お起よ美子、〳〵と、幾度起されても、なか〳〵に眼が覺ず、時によると寢むいのにと、ふくれる事さへあるのに今日は番外の内の番外、雞よりも早く起て家内中を驚かして終つた。何日になく昨夜は二時頃から、ひよつと、寢そこねて、夜明には、未だなか〳〵間があるから、是非、もう一夢安らかに結ばうと、つゝぷして見たり、仰向て見たり、色々にすればするほど、目は益々冴えて、神經は益々高ぶるばかりはては、今まで苦と云ふ事を、知らずに育つて來た自分がかつて、考へて見た事もない未來を想像して見たり其れから、其れへと思想が走りまはるので、もう〳〵たまらなくなつて床の上に起直つて、ランプの心を少しばかり出して机の上の女子文壇を取上げた。他の事を思ふまい思ふまいと字の上へ心をそゝいで讀んで行くうちに、時計は靜かに四時を打つた、何うせ寢ら

れないから、起て終はらと一人言、言ひながら雨戸を一枚そうつと開けると「是れはお孃樣おめづらしい、お早う御座います、いかゞ遊ばしましたか、せつかくのお天氣が變らねばよう御座いますがと、言ふ樣な顏をして松や檜が朝露の中にかすんで居る。

顏をあらつて、飽くまでも、淸々しい空氣にみちた、靑葉の影を逍遙したが其の心持のよかつた事名刀て、



小春　陸奥　井上よし子

こう心身の汚れを切りさられたかの樣、私はもう言ひ知らぬ曉の壯嚴に打たれて了つた。

今朝は私の代りに小夜が寢坊したものだから朝の御飯を食べたのは九時頃でもあつたろう。其のにぎやかさつたらなかつた。笑ひの種、話の種と、なつたのは、私の今日のとつぴもない、早起の一件てあつた。お口の惡い兄樣はしきりと、私の顏を見て

居らしつたが。實に今日は不思議な日だ。寢坊黨を以て名高い美樣が四時打てすぐ起きるとは、實に不思議明治四十二年九月四日は美樣にとつては、年代紀、忘れがたき日だと、妙な風に破仰たので、私が一寸はらを立つて、「其んな事言はなくたつて、可い事よ、明日からきつと、毎日四時に起きるから可い事よと言返した。兄樣は早速立つてお居間から大切にして被居る琵琶を持て來て、私の大好な石童丸を、自ら彈じて、美しいお聲で歌つて下すつた、其れが終ると兄樣は微笑ながら、私の顏を見て、美樣明日も早く起る、と又聞かせるよ、と其琵琶をかた手に下げて表の方へ行かれた、又杉山樣の所へでも行らしつたのであらう、私は兄樣の後ろ姿を見上げて、どうしても二人とは得がたいゝ、兄樣だと思つた、

午後從姉の英樣が遊びに居らしつたので、今朝しの丶めの空を見上げて作つた句を手帳のはしへ走り書して渡すと英樣は思ひあり氣に「今朝早起して作つたんてしよう、よく出來てね、私はきつと兄樣が行つて話したに、ちがいないと、思つたのでまあもう兄樣が上つた事」と聞くと英樣は輕く笑つて「今朝居らしつて、美子が今日は四時に起たつてお話しなすつたから、たぶん然うだらうと思つたの、」と此度は英樣が笑ひながら手帳を出したので、見ると歌が書いてあつた。

盆と養蠶と重なり合ふ

千鳥

八月十三日、晴、わが故郷の邊にては陽歴より一月おくれて年中の行事をする例にて今日が盆の初なり、されど今年は秋蠶飼ひし故盆もなか／＼に忙し。早く朝飯終へ原へと桑摘にゆきながら墓參せんと、線香、樒附屆などもつて途中旦那寺へよる。近所のお婆さん二三人墓參に來てゐたり。今日は下男下女の二人ふえたれば桑摘思の外早く終る。歸り、弟はお精靈樣迎ふるため門前に砂盛つくり胡瓜、茄子などの馬もつくる、兄は座敷の片隅に机二つ並べその上に杉戸横へ花蓙しきて新に佛棚をしつらふ。蠶に桑くれて午飯、後一時間晝寢。母と下女の髮結ひて後蕎麥の仕度にとりかゝる、餘りに柔くこねすぎて母より小言云はる。兄、下男など庭の掃除に忙し、紺屋、豆腐屋などより掛取に來る、入浴して迎火をたく。麥殻炎々として燃へたちたれば母は鉢に入れし水、手もてふり澆ぎ茄子の賽

の目に切りたるを火に投げかけ合掌す。お向のお爺さん眞裸にて出て來り「静かなお盆て御座います」と聲かけらる。早そこゝに火燃へ始む、幼き娘等線香もちてこゝの砂盛にあげん、かしこの砂盛にたてんと走りあるく白浴衣の可愛き姿何となくなまめかし。夜。分家の伯父棚參に來る。去年逝きし妹の雪ちやんの白木の位牌、蠟燭の光に映じ、線香のゆるき煙にとりまかれたる、まざ〳〵と在すがことしとやら寐際に蠶に桑くれる。

八月十四日、晴。早起順六の畑へ皆して桑摘にゆく、細き流に沿ふて行けば鈴虫、松虫、きり〳〵す、水を挾みて鳴き、彼方に波濤のうねりの如く横ふ大山、双子山の連山の上に富士朝日に映じて紫に見ゆ。家より下女呼びに來りしかば歸る、裏庭の枝垂柳の下に舂を据ゑ下男餅つき始む、一舂は母餡轉餅につくり、一舂は母に教はりながらのしておく、いびつにして母に笑はる。餡轉餅の朝飼にて、蠶に桑くれてゐるところへ大嚴寺よりお棚經に來る、一昨年中學に入りしと云ふ若き和尚樣なればお經よみ給ふ聲細々としてはにかみ給へる風情なり、梨むき水に冷して奉る。薄き帷衣に着替へ團扇片手にお賽錢もつて母近所へお棚參にゆく

午近く仲居よりおレンちやん。おマサちやんの姉妹來訪、二人は三年前より親戚なる横濱壽町の相模屋呉服店へゆき居たるが藪入なれば昨日歸り來れるなり。大柄の透綾の揃に繻絆と繻子の鯨帶しめ、髪は束髪の艶よきにおレンちやんは白色のおマサちやんはオリーブ色のリボン、奈何見てもお孃樣姿なり、座蒲團出し團扇すゝむれば「どうも恐入りますホ、、、」と輕く微笑む樣子スッカリ横濱ッ子に成澄し給へり。此の頃相模屋のお店はなか〳〵の繁昌にて、只今は龜の橋の鶴屋と競爭の有樣、萬事三越風のデパートメントストアとかにて何品にても賣捌き、その中おレンちやんの方は小間物店をおマサちやんの方は玩具店を受持たるなりと、お客の取扱ひ方について種々面白き話聞き、お酢文字つくりて御馳走す。三時頃仲居より蝶髷の文ちやん『遊びにお出てなさい』と迎に來られし故、髪とかし衣物着替へ共にゆく、家は蠶にてむさくろしければとて裏の笹籔の中の涼臺へ案内せらる、栗の木の程よく四本あるに丸太くゝりつけ上に竹ならべ薄縁しき下は小流れチョロ〳〵とゆく、見るからに涼しさうなり。先刻まで村の子供等遊びゐたりしと見え上には大鼓、笛など散ばつてゐたり、それ片附け三人膝つ

き合せ白玉の馳走になりながら四方山の話に時のたつを知らず、夕景歸宅この夕裏の地藏堂に盆踊ありと云ふ故見にゆく、十二三を頭に五つ六つ位の村の小娘等紅き簪、桃色の襷なんどして、手には締太鼓などうちならし圓く輪をつくり、中に音頭取一人をきて廻りながら歌唱ふなり、やさしくすき通る樣な音頭取の歌聲きけば「長いな長いな兩國橋や長いな、お駕籠て行こかお馬て行こか、お駕籠もいやよお馬もいやよ、十七八に手をひかれ手をひかれ」われも亦曾ては盆踊せんと簪よ襷よと母なやませし事ありしに、その頃の無邪氣なわが心はこの十數年が間の憂き目、わびしき目に乾干びて今は黑き皺さへ生じぬ、思へば恨めしの年よ！月よ！日よ。

八月十五日、晴。今朝は赤飯なればこれに松もどきの汁をへてお精靈樣へあげる、昨夕より盆並び始めたる故今日は桑摘休み、そのかはり今日一日てお精靈樣がお歸りなので、お素麵をゆて新芋をほりなんどしてもてなしに忙し。午近く下女のアサ宿下にゆくと云ふに髮結替へてやる、婆やより女ぶりが十倍も上つたと云はれて顏赤めゐたり、午飯後母より『宿下は一日限だから早く行つて早く歸つてお出て』と云はれ新らしき單衣新らしき下駄にお小遣つゝんてもらひ、ニコ／＼しながら皆に禮述べ仕度して出ゆく後には未だお給金の殘をもたしてやるのを忘れてゐたのを思ひ出し急ぎ後追かけ順六に至る、早お女郎淵のこなたをゆくところなり、アサよ！アサよ！、と四聲よびたるに初めて氣づきもどり來る、無くなさぬ樣に固く注意して渡す川の彼方を一里ゆけばそこに彼女の家あり、家には懐しき母あればとて急ぐなるべし、未だ十三なのにうい女、可愛い女と誰やらの句の『藪入のさびしく戾る小道哉など、思ひ出し獨微笑みつゝ見送る。午後、父と兄は碁を圍み、弟は水泳ぎにゆく、母と二人ゆるりと晝寢。夕景皆して庭に水をまく、凉しき庭には桔梗の紫美しく咲くを見る。夜分家伯母來りし故庭に緣臺出して天の川の白きを眺めつゝ更くるまて話しつゞく十一時近く送火をおく、今夜て盆はお仕舞明日はお閻魔樣の日なり。

診察室の三日間

藤井みどり

十月七日　晴。

井口さんのお留守中、私が代理をする事になつた。瀧縞のお召に着替へ、處方箋とインクスタンドを持つて椅子に倚ると、何だか改まつて鳥渡島田が恥かしい。お父様は緩い手術着を召して、煙草をふかし乍ら新聞を見ていらつしやる。謎のやうな煙の行衛を見送ると神代杉に百合を畫いた油畫の額の邊でふつと消えた。百合が活々として來る。と思ふと、卵黄色の壁紙も、引絞られたカーテンの薄紫の陰も、何時にない鮮に眼に映る。窓の外には萩が咲いて、桔梗が咲いて、菊が咲いてる。中でも鈴生りに生つた――能く百舌鳥が來ては突つく――柿が一等美しい。透き通るやうな紅の實のチチブ臺に上る日を思つて、這度は隣室を覗いて見た。未だ八時には間が有るのに、最う安藤さんは忙しさうにスリッパを引摺つて、順々に眼を洗つていらつしやる。一人二人と數へて見て、亦窃と椅子にかけると、「支度は好いかい?」と笑つてベルをお押しになつた。二十前後の色の青い瘠せた男が入つていらした。頭ばかり厭に光る。今時彼麽椀冠にしてるのは、田舍者に定まつてると思つてると、もう診察が濟んで聽診器を外しながら、「臭剝二、〇　苦丁四、〇重曹二、〇單舍八、五水一〇〇〇〇、日三。」と小聲に早口で仰有る。臭剝と言ふ字が分らぬ。急けば急く程書けないので眞赤になつてると、お父様が指て教へて下すつた。漸との事て藥局へ持つて行つたら、坂さん厭に顏を見る、つんと澄して遣つた。續いてヘベリンとビリンを間違へる、撒汞が書けない。一日中散々汗になつて。兄様が三度、おつちやんが二度、覗きにいらつした。お父様、「明日から單衣にお成り。」と仰有る。母様に特別にシユークリームを戴いた。

十月八日　曇。

診察室のお花を南天に活け替へた。夫から藥局へ行き坂さんを追出して置いてリモナーデを呑む、私は冬でも冷たい物が大好き、もう少しの所を遂々めつかつて了つた。今日は昨日程まごつきやしない、ゆつたり構へ込んでお父様の肩越しに觀察する。此邊は場所柄故藝者が澤山來る。苦虫を嚙み潰したやうなお父様と藝者――襟のかゝつた衣服に、無紋の羽織がひどく氣に入つた。午後ゆかりさんがいらした。珍らしくローマに結んで、常盤お召の二枚袷、流水に鈴蘭をあしらつた絞り風の縫繡が堪らなく好い、これが此間『切られ與三』をやつた紀久の助かと思ふと、欺されたやうな氣がして、凝乎と格好のいゝ前髪を見た。明後日が初

日なので潰れた咽喉を心配してらした。置土產の繪番附を見て「しがねえ戀か情の仇」と口の中で唸つて、「眞個にゆかりさんはお奇麗ですねえ。」と申上げると「羨しいかい？」と仰有つた。「まさか。」とは言つたものゝ、實際の所、內々は大に羨ましい。眼をつぶつて、姉樣のお友達時代のゆかりさんと思つて見た。肺尖加答兒だつた山口さんが、遂々いけなかつたので、死亡診斷書を書く、何だか氣味が惡い。お父樣も注射器をおしまひになりがら、「初めから見込の無かつた患者でも、愈々となると誠に厭なものだ。」と仰有つた。さう言へば近頃はお葬式が多い。全く厭だ。直ぐ仙吉に持たして遣る。安藤さんは、「しかし、病人は我々の飯櫃ですからなア、密柑の靑い中にうんと稼ぐ事ですよ。」と笑つてらつしやる、のんきな方、何時になつたら髭らしくなれるだらう。夕方七つ位の男の子が、額を切石で切つて來たら、お父樣何處かへ不意に雲隱れ。何故あゝ氣がお弱いんかしら、可笑しい。私なら怎麼大手術でもして見せる。で、取敢ず安藤さんが血止めして、外科の武山さんを敎へて上げた。今日は兄樣、一度覗きにいらしたゞけ、敏坊を肩車に上せて來て、赤ンベーをなさせなすつた。窓外を見ると、一面にどんよりと灰色した中に、柿だけが眞赤ににじんで居る。「霜が降りますね。」と誰かゞ仰有つた。

十月九日　晴。

今日は土曜故お父樣は午前限りで何處かへお出まし、一同好い事にして診察室へ集りテーブルを圍む。兄樣におつちやんもお仲間入りて家族合せをしてる所へ、バットを擔いて三上樣がいらした。「敏坊が負んぶつて待つてますよ。」と言つたら「フヽン」と仰有つた。時折膝小僧の顏出す制服の上から、ネンネコで負つて下さる元氣な方、進まぬ兄樣をぐん〱引張り出してお了ひなすつた。三時には茹栗が出た。坂さん「斯麼小ぽけな栗よかも、西京燒の方が餘程好い。」と言ひながら手品使のやうに召上る。おつちやんが見惚れて大笑ひ。安藤さんは患者が絕えないので、思遣りがないと不平たら〱スリッパを引摺つてらつしやるから、私が交代して上げた。怪しげな手附きで、誰にも彼にもコカインの一點張りなので、皆樣がクス〱お笑ひになる。漸と一段落ついた所へ、克己さんが本包抱へた儘入つてらした。御自分ては勉强が過ぎたせいだと仰有るけど、如何だかあてになりやしない。

清らかな山寺住居

ひで子

八月二十四日、晴、五時過ぎ起床、手早く寢亂れ髪をかき上げて、母屋の方へ歸つて見ると、お嫂樣もう起きて入らして、茶の室のお掃除していらつしやる、何だか極りが惡いのでそつとお座敷の縁を廻つて、井戸の傍にいつた。洗面後、庫裏の阿彌陀樣の所をお掃除して、本堂に詣つた。ふと尊い御姿を仰ぐと前に立てゝある白蓮が、五六枚散つてゐる、お香の煙が、すうーと眞直に昇つて其果はぼんやりと夢のように消えて仕舞ふ、今、朝風が吹き入つて御燈が、二三度ゆらいだ。私は一日のうち、此時程心に樂しさを覺える事はない、靜寂の中に只一人、御佛の御名をとなへる時は、汚れの世とは、ずつとはなれてゐる樣な氣がして、不平も不滿もなく、我ながら清い生活だと思ふ。

朝餉の後、髪を結つて洗濯物にとりかかつた。よく晴れた日だ、洗濯物を竿にかけて上向くと、まぶしくつて仕方がない。

午後裁縫してゐると、玄關の方で電報！、と大きなこゑ、竹やが兄樣の所へ持つていつたらしい樣子なので、何所からだろうとむねとどろかしていつて見ると、臺灣の兄樣からてある、あゝ又例のだろうと思つてそつとお兄樣のお顔を見上げると、おこつた顔して荒々しくお立ちになつた。お父樣のところてお聲がする、何となう氣になつてたまらない、後てそつとお父樣に伺つて見たら、又お金を百圓ばかり送るようにといつて、よこされたのだそうな、まあお兄樣は今頃如何なすつたんだろう、ほんとにあきれて仕舞ふ、此年の春も二百圓お送りになつたのに、それに聞けばあちらでも、三四拾圓は收入のあるんだそうだけど、お手紙上げて聞いて見ようか知ら、まさか妹の身て意見がましいことは言はれないし、吁こんな時にお母樣が死なないていて下さるといいんだけど、あゝ又愚痴になつてしまつた、何も皆運命とあきらめてゐたのに。

三時頃誰か詣つて入らした、誰方かしらと思つて一寸耳をかしげると、忠海から大多和樣てある、聞けばたづ子さんが御死去になつたとやら、まあ驚いた、始めは夢の樣て如何しても信ずる事が出來なかつた、優しい人てあつた、親切な人てあつた。私が學校に入學した始めから、好くして下さつたけ、三月に歸る折、

お家へ寄つた時、御病氣ではあつたけれど、未だそんなにお惡い樣子は無かつたが、矢張りお命が短かくお生れなさつたのだろう、お別れの時、しみ〴〵とお話しなすつたお言葉は今も尙耳に殘つてゐるけれど、色々とお身の上話しをなさつた後、「何も運命ですわ子、私よくなつたら、一度生れ故郷の入野へ、歸つて見たいと思つてゐますの」と、おつしやつたが、まさか今日懷かしいと、お話しに成つた故郷へ、骨となつて、小さな壺の中に入つて、お父樣のお手に抱かれて、お歸りになろうとは、思はなかつた。

ふと下の方を見ると、門の傍の白萩が二三日前、咲いたのにもう散つてゐる、矢張り若い命は、散り安いと、思ふと何んだか悲しい樣な氣がする。

八月二十五日、晴、昨日に變らず好いお天氣である。隣村にお葬式があつて、お父樣と明道さんとは、九時頃出て行かれた。

お暑くつて、さぞお困だろうと思ひながら、お裁縫を始めた、しばらくすると、「御免下さい」玄關の方で優しい聲、誰方かしらと、思つてゐると、竹やと何か言つてゐらつしやる樣子、そうーと蔭から、のぞいて見ればまあ花子さんだつた、「アラ花子さん、お上んなさいな」といふと、美しい飾りつきのお靴の紐を手早く解いてお上りになると、すつとお立ちになつた姿、華美な銘仙飛白の單衣に、濃い海老茶のお袴、白絽の襦袢の襟を、キユツと、きつく合してゐらつしやる、艶の好いお髪を庇にして、白い輕そうなリボンは夏虫の羽か、ほんに見惚れるような美しさ。いつ迄もあの立姿を見てゐたい、「私ね明後日、學校に歸りますのよ、それでお別れに參りましたの」おつしやる、又三四ケ月の間お別れするのだから、二人共話しが、はづんでお歸りに成つたのは、午後の四時過ぎだつた、〇〇女學校も、來年でお卒業とやら、私しなんぞはお傍へお寄りつかれはしない、年中埃まみれになつて、臺所を我世界としてゐる樣な女と、比べられもしない、此頃は學校通ひの暇々、お琴を習つていらつしやるとか、勿體ない事だが花子さんが羨ましい、オヤオヤ又いつの間にか、虛榮心の奴となりかけたと、見える、ふいと氣がついて、又急ひで裁縫にとりかかつた。

夕方六時頃お父樣と明道さんとはお歸りになつた、お兄樣は昨日から他所へいらして、お留守、常よりも寂しい、早くから床に入つた。

九月中旬

野崎洛子

九月十三日、強雨、月曜日
昨日の夕がたから降り續けた雨は、今朝になつてもまだ止まないで、パラ〳〵と柿の葉に當つて、ポツ〳〵うるさい。時々、冷いまで涼しい風が、スラ〳〵と自分の顔を拂つて行く。自分は顔を洗つた儘で、ぼんやりと、柱にもたれて、雨に見惚れた。何となく頭に感想が湧いて來た樣だが、何を考へて居るのか、わからない。つまり、自分を忘れて居るのではないか。感想の初めに起つた想か終りに起つた想か、わからないが「戀しい人」と云ふものを思つて居る。無論自分ばかり戀しく思つて居つて先方の人はどうかわからない。戀しい人―は一昨日東京へ歸つた、自分は田舍に殘つて居る、恥められる樣な氣がする、自分も東京へ行つてみたいやうな氣もする。何だか頭が分解らるゝやうだ。此處はいつも通る野路だ。秋草が雨に打たれて、うなたれて居る、野の奥の方で秋を唧つ虫が啼いて居る。小川の邊りへ來た。朝行く時は大變水が濁つて居つて、底に生へて居る草が見へなかつたが、もう名も知れない白い、小い、花までがよく見える。人生もかうかと思つた。小川も「強雨」がなかつたら、いつもの清い流であつたろうに、自分も何かにおはれて、居ないだろうか、路の眞中に大きい水溜りがある。歸りの女生徒等は嬉しさうに水を渉つて行く。自分を見ると忽ち御辭儀した、何處迄も可憐なのは少女だと思つた。自分にもあんな美しい時代があつたろうか。

十四日、好天氣、火曜日。
前の晩夜更ししたので、今朝はまだ夢心地で寢て居る、赤子の泣き聲を聞いたが變に頭が重かつた。眼を開いてみると、太陽がさし込んで晴れ渡つた好天氣である。何となく氣が勇む、それに頭も痛まないやうだ。一人で朝飯を濟まして學校へ行つた。自然に氣も晴れてくる。友人にも嬉しさうに話す。家へ歸つてみると東京へ歸つた福子さんから手紙が來て居つた、大變氣焔を吐いて居る。福子さん自身新思潮にふれて居ると云ふて居る、成程福子さんは觸れて居るかも知れない流行の束髮に結んて、流行の衣裝て、哲學の書や、英語の書を讀んで居る、自分はこれが新思潮にふれてるとは云ひ得ない。福子さんは自尊心が高い人である事

は土地の學校に居る時から知て居たが、まだ治らないのだと追懷してみた。返事を書かないて、寢についた。

十五日、曇、水曜日。

餘り氣がふさぐもんだから、學校を休んだ。今日は職員會議がある日だが、自分なんか居ても、居なくつても同じものだと思つたからてある。自分は小さい時から憂欝な性だつた。神經質になると云はれた事も記憶へて居る。居間の障子を開けて、雲を見て居つた。黑いやうな、白いやうな、何處見ても蒼い空の見えない幾重にもなつた雲が動かない。工場の煙突から出る薄黑い煙が雲のやうになつて續いて行く。蒼白い顔の母が見舞はれて、「お前そんなに惡いのなら、醫者に診てもらつたらどうてす」と云はれたが行く程てもないと思つた。午前十時頃自分が卒業た女學校から手紙が來た。それは校友會て雜誌を發行するについて、何か有益な事を書いてもらいたいと云ふのてあつた。自分は一寸見て机の抽出に入れた。學校を休んだと云つても學校の事を調べやうとも思はなかつた。午後五時過ぎ同じ教員仲間の野村さんが訪問ねてくれたが、思はしくなかつた、野村さんは虛榮心に富んだ、外面計の人ていやにハイカラがる人だ、「嫌」と思ふ人に逢ふと嫌な氣がする。夫でも日記丈は書ずに居れない。母に早くお寢みと云れたから、八時頃は蚊帳の中の人となつた。

十六日、晴、木曜日。

今朝はいつになく早く起きてみた。下女と一所に勝手の事を手傳つた。今日は曇るかと思つたら午前の六時頃から晴れ渡つた。父さんは眼が痛むとか云つて起きなかつた。郵便局へ通ふ嬌子と云ふ、いやに澄ます、きざな人と一所に學校へ行つた。校長が縣廳へ出頭したので何となく嬉しかつた。四年女子級受持の黑田さんが休んだので私が代つて補つた。家へ歸つてから久しぶりて公園を散歩してみた。遊ぶ人が居なくつて何となく淋しい、糸取の女工らしい女が二人てひそ〱話しながら歩いて來る。自分はロハ臺に休んだが何も秋の自然美について新しい思想も起らなかつた。日の暮れた時分家に歸つて行つたが、勉強しやうとも思はなかつた。自分の知らない四十位な氣の良さそうな旦那？が父と頻りに話して居る、母も一所に居た。何だか自分に關した事らしい、「緣談」だと思ひ付いた自分は嬉しいやうな氣がした、だけど自分は結婚しやうとは思はない。一生獨りて苦しんて死にたい。こんな事を考へながら自分の居間に戻つた。

雨につけ風につけ

三宅つゆ

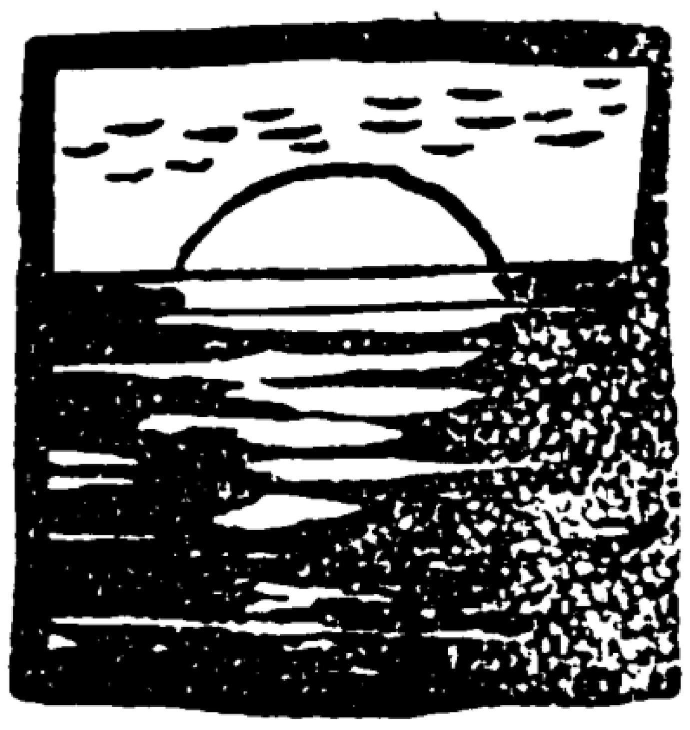


御手紙有難う。よくこんなに長く書いて下さつてね。皆の様子が目に見えますよ。離れては便が何よりの樂、待つて〳〵待ちぬいて居りましたものを、嬉しかつてよ今日は。ほんとに有り難う。父樣も被入るし母樣も被入るし妙ちやんも居るんですもの東京を忘れるひまがあるものですか！雨につけ風につけ今頃はと思はぬ事はありませんわ。皆樣御丈夫のよし安心致しました。妙ちややん九月から御さげよしたんですつて？ぢや今なあに？マガレツト？それともローマ？近い中に新らしい髪で一枚うつして送つて頂戴な？御願だから……こゝでも一同元氣に暮して居ります。私も大分なれましたの、でも上り列車の汽笛をきくと家に行きたくつて〳〵胸がむづ〳〵しますわ。さうね。私の此頃の生活は家に居た時とさまでのちがひは無いのですが心柄の差が新らしき思想と湧いてすべて〳〵變りし時代の始と思はせます。家に居た時はこれだつて希望も理想もありましたけれど、實地にあつては郷に入つては郷に從への格言尤もだとつく〳〵思ひあたりました。人にすれるのは極惡いとてすが、人に錬れるといふとはどうしても入用ですよ。物の云ひ樣働きのしぶり皆丸い玉子も切り樣で四角といふ如なわけですよ。夫から親類間の交際これが中々馬鹿に成りませんの。いゝと思つてしたことでも惡く思はれたり、一寸した言葉尻をとられたり、から迄むづかしからうとは思つてませんでしたわ。四季折々のおくばり物などもよつぽど注意しなくつちやあね、親類のとしより連がよればさは

れば、あすこの嫁がどうのこゝの嫁がかうのと新らしく家庭に入つた無經驗のものをやり玉にあげるんですもの。時々は口惜しくて堪らないこともありますの。足りないからだと我身を攻めちやゐますけれどもねえ。他人に對しては威張つてならずあまり卑下してならず、威ありて猛からずなどとは云ふに易くして行ふに難してすわ。家庭にあつては料理これは妙に人の心をよろこばせます。裁縫は尤も〳〵大事ですわ、仕立る人は隨分骨折つてしたのも、他からは出來もしない人迄批評しますもの。惡口されても何とも云はれず、もしよく出來れば氣むづかしやてもなほせるものですよ。家に居た時、もう少しかう云ふ點に注意して置けばよかつたと後悔してゐますの。貴女ももう十八、やがてはかうなる身の上、私がいゝ手本てすわ。マーチてもひく間に少し家庭について注意する樣に遊ばせよ。かう成つてからくやまぬ樣に。まだ、私等は幼稚園の生徒同然よ家庭の中ては。學校時代に考へた樣なそんな單純な自由のものぢやないのてすもの。是からまだ〳〵むづかしい事に出逢ふてせう。追々妙ちやんの參考になることを申しませうかね。もうコーロギが鳴き出しましたわ。裏の柿がそろ〳〵色づいたてせう。もう妙ちやんと二人て大きいのを〳〵とゐつて竿てちぎるとは夢の外見られなく成りましたねえ。あの時代が戀しいわ。時節柄風を引かぬ樣用心なさいよ。手紙は毎日ても欲しいの。又頂戴！さようなら。（天賞）

切なき胸を姉樣に

原田滯子



お姉樣！私し本當に如何致しましやうねえ、もう少さい胸が一つぱいになつて、あゝ何から申上げてよいやら…………。あの今日ね、夫の使で役所まで參りましたの、實は病氣で四五日欠勤してますので郵便物が來てる筈だから取つて來て呉れつて云ひますので。それから繪葉書四五枚と重さうな封書が一つありましたので、私は道々葉書の繪を見て差出人の名を讀みましたら如何しまし

やう。封書の裏には麗々と君子さんの住所姓名が筆太に記されてるてはございませんか。私は只エッと口の中て叫んだまゝ郵便物を袂に入れて道中考へました。役所宛に來てるのですから夫が始めに出さなければ、韓國に居らつしやる君子さんが此の地に來てる事御存じの筈はありませんものね、それだと夫は今迄五ヶ月の間、私には秘して文通して居たものと見て差支へありませんもの、左樣思ふと私し口惜しくつて今迄何事も知らずに、只はい／＼と服從して來た事が腹立しくなつて何とも云得ぬ厭な／＼感が湧いて來ましたの。宅に歸つて封書を葉書の中にはさんで枕許に置きましたら、直にそれと見て私の顏色を讀まうと、鋭い瞳を向けました時は思はずハッとしましたの、造りつけた樣な底氣味の惡い笑顏して私の方許り見ますので、私はそつと座をはづして何所に行きようもないので狹い庭を、往つたり來たりして心て泣き乍ら身の行く末を考へましたの。

姉樣も御承知の通り、君子さんの事だつて私が知つた時はもう遲うございましたものね、無垢な乙女を身動きの出來ない樣な戀の深淵に連れ出してから、過去の罪を懺悔するなんて。今思ふと男子は卑劣ですわ、其の時だつてこれは過ぎ去つた事ですから何卒せめないて下さい、僕の過去の罪を赦して以後貴女に對する私の言行を見て居て下さい、犯した罪のお詫には口にする丈の事を實際行つてお目にかけます。なんてほんとにずう／＼しい。それを眞に受けて一緒になつて泣いた私も大馬鹿者ですけれど……。未だお前は年が若いから靜かにお考へなさいよ、急がなくつても大丈夫ですからね、つてそれとなく御注意なすつた姉樣の御言葉が、機遲れた今沁々と身に染みました。君子さんだつて相許してらした仲だそうですから、何時過去の戀が實現されるか計られませんもの私には良人に對する信仰がなくなつて終ひました。今始めて覺醒した樣な心地がします、私もまだ十七ですから以後心の持ち樣一つて、如何とも成れそうですから一思にすべてを捨てて里の方に歸らうかとも思ひますけれど、眞の母樣が死くなられた家に義理ある母樣の御世話になるのも苦しいし、父樣はあんな氣質の方ですしね私し全く如何していいか分りませんの、これても人の妻てふ叫びの許に全てを犧牲にして潔よく運命に服從しなければならないのでしょふか。義人あるなし一人もあるなしとそれは全能なる神樣がお仰つたのですもの、凡夫なる私の信仰の弱く且つ淺いのてす、何卒姉樣妹のふむべき道を明らかにして下さい、そして淸き美しき恩に滿ちて日を送る事の出來ますする樣、姉樣の聖なるお祈りを願ひます、（地　質）

お花の先生へ

酒向とし子



先づ〳〵先生の御健勝何よりも御嬉しく存じ上候、其後は意外の失禮を重ね今更何と御詫の申上樣これなく候

實は私事前以て少々心臓病の氣味これありしとみえ去月八日のたそがれ尾籠ながら喀血あまた致し候て皆々はもとより私もいと驚きて、一時はこれはヽア―御親切に御敎を仰ぎし御花の御稽古も水の泡となる事かとひたすら悲しみの涙に暮れし日もこれあり候ひしが、御かげ樣にて醫藥の効しるく、日に全快に趣き候へば、他事乍ら御安心下され度候、猶二三日前より庭のそゞろ歩きも少々許され候て、優しき七草にとんぼの遊びも面白く見らるゝ樣に相成申候、筆とる事も書讀む事も、乃至は口きく事までも禁じられて、全く半めくら半唖の有樣にて過し候ひしが、心にては日々のやう活花を致し居り候へばこれまた御安心を願ひ候、中元の御禮にも祖母なりともまかりいづる筈に候ひしを、これまた折あしく持病のぜんそくを強く引をこし候て、今に服藥致す次第にて、心ならずも失禮の段あしからず御許し下され度候。

扨昨日の事、庭の隅にもはや蝶の訪れもなき哀れ倒れ勝の藤ばかまを見出し候故、此まゝにくち終らせんもあたらふびんに候へば、せめてもの清らけき水に餘命をつながせんものと、そと手折て早速と筒に天地人を氣どらせ候處、うれしや燒きもたゝきも致さぬに水のあがり活々とまたも小蝶のたづねを得させんかとばかりに相成りて、私のよろこびは申迄もなく、祖母始め一同まあお前がそんな事出來るやうになつて結構だと打よろこび呉申候、これも御花の心得あればと否々先生の御かげてこそやつれしお花も餘命を樂につなぎし事と今更感じ入り申候、それにつけても思ひ出すは彼のかきつに候へ、今小三十日も致し候はゞ御稽古事も許されんかと思ひ居り候が、其頃にてもまだ咲くものに候や、何故かうも好むかきつに、ゑん遠き事かと思へば、そゞろ腹も立ち申候のみならず、あのお花も

あるにこの御花も咲くにと思へば、いよ〳〵心あせりてむしやくしや致す胸の苦しみ、あゝ先生よはとかり乍ら御推もじ下され度候。

迯に筆は氣まゝな事に走り候が、いづれ遠からず祖母事參上、ゆる〳〵御禮申上べく候へば、悪しからず思しめし下され度、時節柄御自愛專一に祈り上候。

先は失禮の御詫までかしこ（入　賞）

病みて姉の許に

鹿兒島　み　ゆ　き　子

姉様、毎日如何して暮していらつしやいますの、父様も母様も兄様もお變りがなくつて？寛ちやんもお丈夫？、何卒皆様お體を御大事にして下さいね、世に病身なの程辛く悲しい者は有りませんよ、お母様初め夫は元より召使にまで入らぬ氣兼ねもしなければならず其上苦い藥は飲むお金は入る、殊に此様な田舎に居るものですから悪るい時には八里の峠を馬車にゆられて鹿兒島迄出ませんければなりませんの、それ迄にして而して根つから本復るんなら張合も御座いますけれど少し快いと思へば又直きに悪るくなるんですもの、自分乍ら自分の身に愛憎が盡きて皆様にお面目ないやらお氣の毒やらで一人でやきもき致して居ります。せめて實家が近くてともあれば汲めどもつきぬ母様姉様のお情にすがつて少しは私の心の安まる日も御座いませうものを。夫れはもう夫は蔭になり日陽になり慰籍めてくれます、慰籍めてはくれますけれどもお母様の前奉公人の前として私は如何にして其厚情にすがつて居られませう。

此地へ參つてからもう三年になります、其間には大低の方は都會へ御轉任になりまして私共の様に三年も四年も此處に居る方は九州の方かさもなければ御家族の多い方許りで被入ますの、人様が都へ被入る毎にあゝ私達はいつ迄此處に居るのだらうかとつく〴〵思ひますのよ、生れ落ちた時から賑やかな町中で育つた身ですもの、まして人に優れて心弱い私に偏屈な村人の機嫌を取つて淋しい片山里の住居等どうして一年と堪へられませう。全く此秋には轉任に成ろうか來春には少しは繁華な處へ行かれ様かと只夫れ許り宛にして其日〳〵を送つて來たんですが、こちらへ參ります時持つてきた空氣草履も指輪も僅た一度、初めて皆様へ御挨拶に伺つた時致した許ですの、土地と同化しなければ不可いつて。噫、いつ私共は都へ近づかれるんでせう、此様な事私の口に出すべきでないと思つて默つては居りますものの、つく〴〵情なくなつて來て猶病氣に障りますの、でも此頃はそう悪い方ぢや無いんですから御安心下さい。來月は門司鹿島間も全通致しますつてね、自分で自分の身を如何する事も出來ませんのですもの。噫姉様、私は、淋しい〳〵思を抱いていつ迄も〳〵此處にこうして辛抱しなければならないんでせうか、時節の來る迄と云ふ言葉も最う〳〵聞き古してし

まひました者。時雨がして木の葉が悉皆な落ち盡してしまつたならば嘸今から思やられましてよ、あ、歸り度い姉樣私は本當に歸り度いんですよ、歸て而して此世に僅た一人の姉樣のお袖にすがつて飽く迄泣いて見度いんですよ、此手紙はね、御心配なさると不可ませんから何誰樣にも内密にして置て下さい。只氣の弱い妹が知らぬ他國で他人の中へ打交つて身にも心にも堪へ兼ねた思を書いたのだと思つて讀んで下さい。早々もお體をお大事に。今も後の山からホホと梟の聲がしますのよ。

旅先より妹へ

あきはぎ

京都は嘗て一週間許り滯在しました、左樣ね私が此前行つたのは丁度花江さん位の時だつたのよ、久し振りて何もなにも面白かつたのですよ、でもね一行中の清英さんがいやに歷史きちがひてお寺ばつかり引きまはすのよ、これには大こまりしました、今は鵠沼に居ます、明日鎌倉に行つてそれから葉山のお光さんのところに一寸行つてそしてすぐ歸ります、伯母樣はじめ國子さん清英さん皆樣お丈夫よ、私もます／＼元氣、歸つたら澤山お土產やらお話やら山と持參しますから樂しみに待つていらつしやいな、每日學校？、此頃は九時始りになつたてせうね、牛込の驛夫は相變らず面白い事云つて花江ちやんを笑はすの？私の縫つて置いた矢がすりの袷をお着なすつて變な縫ひ方だつたでせう我慢なさいね、歸つてから袖の元祿形はすぐ直して上げますから、竹やになんかいぢらしてはいけませんよ、此間の繪葉書着いて！面白かつたてせう、花江ちやんちつともお手紙下さらなかつたわね、でも可い事よ、もうすぐ歸りますからね、今居る處はねすぐ目の前に江の島が見えるのよ、鵠沼つて思つたより可い處よ、いつか花江さんと行つたわね、あの烏帽子岩、あの岩もよく見えますの、清英さんが今日行こうつて云ひ出したのよだからも一度行くつもり、今日は浪が靜かだから先の時みたいに醉つたりしやしますまいよ、清英さんも國子さんも花江ちやんに宜しくつて、花江ちやんお父樣お母樣によろしく申上げて頂戴ねもうすぐ歸りますからお手紙は別にさしあげませんつて、私の留守に麻布の保子樣がいらつしやらなかつて、もしこれからでもいらつしやつたらね此次の日曜日にお待ちしてますつて申上げて頂戴ね。運動會の準備は出來て？車輪行進は上手になつたてせうね、今日清英さんが早く支度しろつてやかましいのよ、國子さんはお風呂でなか／＼だと思つてこれ書きかけたのですけれど、あんまりそばで清英さんに急き立てられるからもうよしませうよ。いづれまた逢つたらお話ししますわ、皆にもよろしくエス（犬の名）にもタマ（猫）にもよろしく、柿が早く食たい、栗も大分落ちたてせうね、ぢやあ左樣なら、おからだ大切に、

母の許に

福岡　登馨子

野の樣、山の景色に秋の色の見ゆる時となりました。私もう每日の樣に歸りを待つてをります。どうしても、父樣と弟相手ては、身のまわりのお話も、時の流行のお話も出來ませんので……。御用がすみましたら一日でも一時間ても早くお歸り下さいませ。

今年の夏休みには夏物も冬物も、すつかり濟ます意氣込てをりましたがどうして、片手には雜誌などを開いての仕事てございますので捗りませんてしたこと。それても思ひ掛ない、家政の勉強の出來ましたのが、仕事より何より嬉しうございます。鳥渡、煮物致しますにも、一々鹽梅見なくては心配てございますよ。此間など、御飯の出來が惡うございましたので、蒸籠て蒸しましたが勝手が惡いとは思ひながらも、まづよく出來ましたのてそれはまあようございましたが、前の小川で洗ひます時ふと氣がつきますと、飯の臺を反對にしてをりましたので一人て眞赤になつた事や、朝漬の宿を攪きまぜる事を知らずに、蟲に出來られてうろたへた事もございます。又七夕に赤の御飯を炊きました。見樣見眞似に炊き方の注意も忘



炊事　　京都　岸田富美枝

れないで、自分ながらよく炊けたと存じました。賞められましたので又炊きましたのが失敗の源で、二度目は、御飯としては前のに比べますと、餘程上出來でございましたが、肝腎の鹽を忘れてをりました。三度目はつい分量が多過ぎましたため、恥かしくつて出せない樣なのを炊きました。（蒸籠てむしたのは此時）。一度ならず二度三度迄此塵でございましたので、もう懲々してよく注意致してをります。

一つ二つの事てさへこれてございますから、萬事はお察し下さいまし。家政學は學問よりずつとむつかしいと、しみ〴〵思ひますと同時に、もう暫く此失敗を續けさせて戴きたいと存じてをりますの。

四五日前前川さんのお祖母さんがゐらつしやいましてて、母樣御不在の事や、私のまご〳〵してゐるのを見兼ねて、洗濯物位縫つて上げようと仰つて下さいましたので、ホッと息つきました。アラまあ、自分に嬉しうございましたので、大切な事を忘れてをりました。其時はね、旨しいお鮨を戴きましたし、中元には立派な下駄を下さいましたの。一度お禮に參りましたけどもね、母樣からも宜しく仰つて下さいませ。

眞實は何時お歸りなさいまして、暫くお目にかゝりませんのですもの、何度も申しますが、御用のすみ次第、一日も早くお歸り下さいませ。かしこ。

私の新世帶を

土佐　しげ子

誠子樣、私の新世帶をきかせてくれつて、餘り人には談されませんが、あなただけに、そつときかして上げますから、たれにも〳〵お洩らし下さいますな。それに此手紙は、實は良人にかくれて、內證て書いたものですから——見られると笑はれますもの、先夜もお可笑うございますよ、「花さんも大分、大人振つて來たやうだね」つて、突然こんな事申ますの。土鍋て焚いた、水臭い御飯も、それがいつそおいしいやうに思はれますの。

毎日〳〵のご馳走の心配も並大抵ぢや有りませんわ。靑物買ふとも大分上手になりましたよ。第一はづかしくなくなりましたもの、靑物さげても平氣で町が通れますし、洗濯板さげて平氣て電車に乘りますもの。

井戸の水を汲み上げるもゑらくなりましたよ。お魚切る手が、あやしいつて、冷やかしては、良人も切つてくれますの、まな板は飯事も同じですの、誠子樣、新世帶の人となつた私は、たすきがけてせつせと働いて居りますの、そのかはりに私の手のきたなくなつたのは隨く斗りてすわ。

誠子樣、製圖してゐる良人の側に、蚊をおい〳〵座つて居る私を想つて見て下さいな。

空想時代に思つたよりは、實際になつて見ると、違つた事は大層大いやうてすが、けどもそれ以上の樂みは深いものてすわ。

朝はあとかたづけや掃除や雜巾がけに、いつも十時迄はかゝります、晩は三時がなりますと、夕飯の支度にかゝります。たつた二人くらしても隨分忙しいものですの。朝はかけたやうに五時に目がさめますから、不思議ですわ。それでもね、奥樣々々と、云はれるのが何となくいやな氣持も致しますの。誠子樣新世帶つて、思つたよりは、存外忙しいものですの、私は今も、おかずを煮いく、これを認めて居ります、まだいろく良人の友人などについての談も、新世帶のお話も澤山ありますが、又つぎに致しませう。左樣なら

山里より都の友に

西多摩　三ヶ島芳子

とみ子樣、先日上京の節は、お忙がしいのにあんなにゆつくりと、方々へお連れ下さつて、私はほんとうに愉快でした、あれから又少し用事が出來たものですから二日伯父の家に泊つて、一昨日この地へまゐりましたの、實は朝出かけに、電話をおかけ申したのですがちやうどおでかけになつたあとで殘念でした、

とみ子樣私はほんとうに田舍へ歸るのがいやでしたもの電車から下りて新宿の停車場へ入つた時には、何だか都會から追ひ出されたやうな氣がして、一時間半も待つたのですが、伯父に送つてもらつたものですから待ち遠どころか、一刻千金の思といふのは、かういふことかなど思ひました。いよく汽車に乘り込むと一人も知つてる人はなし、これから又友だちも何もない山の中へ行くのかと思つたら、往きには外ばかり見て、もう中野、大久保と喜んだのが、歸りにはまるで反對、前の人の背中をぢつと見たまんま。立川まできてしまひましたの、乘換と氣がつきましたので急いで下りて、向側へうつらうとしますと、もうこの邊の山がぐるつと近づいてをりますのよ、青梅線になりますと、客も少いし車室も少さくなりまして、それであの日には乘客も僅でしたから、がつたりともしずに、三十分ばかり待つてをりますと、レールの近くて悲しさうな蟲が鳴き出したのですもの。あまり淋しいから西日のあたるのもかまはず、鎧戸をはづして外を見てをりますと、やうく運轉し出しましたの、しばらく花も紅葉もない松原や畑ばかりぐるく廻つてゐますうち、いつか汽車は林の中へ入つたのでしたらう、窓下にはまつ黄色なをみなへしが數限なく咲いてゐましたのは私はもう何ともいへない心地がして、どうかしてこの優しい風姿を、あなた樣にお目にかけたい、ごーしよにあんなところを歩きたいと、家へ歸るまで思ひつづけてゐましたの。多摩川の堤からはじめて、俥の休んだ林々の秋草、何つて申し上げませんよ、見古してすが今月の女子文壇をお送りいたしますから、二十七ページの『武藏野の秋草』といふ所を御覽下さいましそして御都合が出來ましたなら、十五日前のうち、青梅町までおいて下さいませんか、ちやうど親類の金剛寺へ用

事が出來まして、明日から私もあちらに行つてをりますから。青梅ならお望で日返りにもできますし、お泊り下さればなほよし、座敷が廣いから幾人御連れになつても決して差支へはありません、この地まではそこから三里もあるのですから、栗の御馳走位てはお呼び申されませんが、こん度は汽車から汽車で、おいでになられる所で、お待ち申してをるのですから、ぜひねーそれては失禮いたしました、さよなら。

軍隊にある兄の許へ

京都　八木せい子

殘る暑さも未だ至酷退却いたしませんが、兄様には頗る壯健て御勤務の由、何よりお目出度く存じます。宅の方も皆々無事てすから、何卒御安心下さいませ、さて昨日は御手紙並に寫眞二葉正に入手いたしました、父様は兄様から御手紙が參る度小遣かと苦笑遊ばします、然し私は嬉しい樣な氣がして、繰返し拜讀いたします、何分御入營後始めての夏季なり、加之本年は特別の酷暑と來て居ますから、おつらいのも無理はございません、私等家に遊んで居ましても、暑くて／＼たまらないのですもの、增して演習行軍などにお出でなさいましては、其御辛勞山々お察し申ます。然し、男子として國家に盡すは義務でございますから、何卒其本分を全うして、來年の十二月には天晴上等兵に昇進し、御除隊あらん事を祈ります、然し乍ら、百萬の敵を物ともせぬ鬼大將も、氣候を防ぐ砲を持たぬ、と云はれたと云ふ事てございますから、充分御自愛御自重遊す樣御願ひ致します、兄様には、先月一週間大阪泉南郡へ水泳にお越しなさいまして、選手の競爭に、見事第一着をおしめ遊ばしました由、皆々大喜びてす、お祝ひ申ます、永い間武德會へ通はした甲斐があると父様はほゝ笑んで被入い升、何となく私迄肩身廣い心地致します、お寫眞に兄様が馬に打ち乘り、海水を目して第一着遊ばす光景しかと判りませんが、鼻のあたり、確かに兄様とお見受け致し升、今一葉のは、皆樣が海濱て日中の勞れを忘れて樂しき御酒宴の有樣さも御愉快そうてす、皆樣同し樣なお顏て、誰が誰だかさつぱり判りません、家内中打寄千度拜見した後下の町の伯母樣にもお見せ申し、只今はレースの寫眞掛けに挾み床に飾つて有り升、豐は先月迄武德會(水泳)へ日々通つて居ましたが、此月から休會なので此頃は加茂川へ泳ぎに行升いくら父様が危ないから止めとお叱りなされても聞かばこそ、兄様が一等だから僕も一等とるんだと勇んで居ます、私は暇に兄樣のシャツを編んで居ます、尙靴下も編む心算てす、出來次第早速御送り致します、それから肝腎のお小遣ひね父様にお賴み致しましたら、本月分はとうに遣つたのだが、今度は大分えらかつたさうだし、水泳の御賞美として、金五圓特志を以て送ると仰有いました、左樣御承知下さいませ、兄様のお小遣丈けても貯えて置けばいゝ着物が　山出

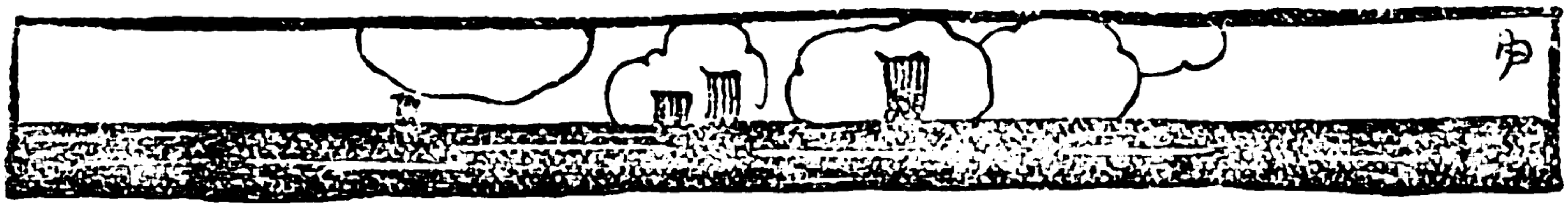
來ると私は口ぐせの樣に云ひ升のよ、豊は、兄樣は澤山の小遣だ、僕等月にたつた五十錢だと眼を圓くして居ます、軍隊から出る僅かのお錢でさへ、貯金して國許の親や弟妹に送る人が有るさうですから、何卒御如才はございませんでせうが、成可倹約遊ばし、父樣や母樣に心配をかけぬ樣くれ〲もお願ひ致します、其代り愈々御除隊の曉にはいくら成とお遣も遊ばせ、（御自分で儲けて）甚だ失禮な事のみ申上誠に相澄みません、何卒〲御許し下さいませ、此搔餅少々（鬼に煎餅）ですが御送致し升から御笑味下さい、まづは御返事まで　さよなら、

何でも第一着の　兄樣へ　　妹より

嫁がんとして迷へる妹に

牛込　平塚白百合

いよ〲此の二つの内と定まつてしまつたのですつてね！、それで靜さんは木内樣の方がと内々ではとのお話し。それは兄樣のお友達でもあり、ご交際もして御氣質も大凡知れた方ですもの其の方がと思はれますけれど、まだ〲あなたの目は若いかと思はれますよ。やつぱりこればかりは舊式でも何でもお父樣方の方がそれはたしかよ。第一、佐方さんご存じでせう姉さんのお友達の、あの方なんかもうそれは〲相愛の人もうらやむ中でしたのに、僅一年計であゝいふ事になつて、今では袴姿の淋しいお姿、小さい生徒を相手に覯念してゐらつしやるやうなものですがね！それといふのがつまり一時に熱してしまふとつい兩方から隔て、……隔てといふとちと穩當でないのですけれど、夫婦でもやはり夫婦の禮儀がありますの、それがかけてしまふのですわ、そこで皆戀した結婚は終りが完うされないでしまふのですよ。だといつて私は決して木内樣が惡い方だとは思はれませんの、けれどどちらかといへば○○さまの方が私はよいかと思はれますよ。御樣子のよしあしはもう若いうち限り、……少し冷淡なやうにかたい人だからどうも……ですつてそれそれがよいのですわ、男のくせにあいそやニコニコ主義は男らしい男には大の禁物。お母さまも、靜が木内の方に氣があるらしいし、お父樣のやう一こくの事もこればかりは私の物ぢやないからいへないし、私もまよひぬいてゐますよ、といつてゐらつしやいますのよ、ね靜さんよく心をしづめて考へてごらんなさいな、熱してゐる時はとかくその方のよい處ばかり見えるもの、姉さんもやつぱり經て來たのですもの惡い方には進めはいたしませんからね、よく考へてご自分の幸福の上にも幸福のやうにね、ぢや皆樣によろしく、ご返事まつて居りますよ。



妾が心の告白

筒井みち子

妾は近頃、變な心になつてなりません。

あなたは甚だ幸福ですよ、貴女の身の上が羨ましく思はれるなどと云ふ方がありますが、少しも妾には快く感ぜられない、のみならず、妾には愛情が誘きたと云ふのでしやうか、凡てのものが毫も戀しくないので、何を見ても、聞いても一向無趣味であります、お友達が、あれは何々學校の好男子だとかの會話をなさると、それが却つて憎くらしくなるのです。

かやうに妾の心は社會から壓迫さるゝように不安を感じます。しかし朝の散歩や讀書には熱心なので其壺中の天地には樂しみ得られるつまり社會に交渉のある事が心と背馳するのです、這麼所から考へて、或は精神病の發動機でないかと案じられます、若し之れが事實としますれば、外面何の不足もない今日の順境の裏面には既に逆境に入る悲しい現象の潜める事を暗示さるゝのであります

昨日も色々の事が心に浮びましたが、其の結果小さな妾の心に恐ろしき斷案が下されました、同時に又其れが妙に未解決のやうにも思はれるのですと申すのは斯うて御坐います。

先づ女子は必ず一度は嫁かなければならないのである、良縁あつて行くのは當然ですけれど、兩親のお話して、都合によれば、當人が厭だと思つても、親の權利と云ふ、恐しい固い命令のやうな壓制づくで來ますれば、弱き女子の意見が通りません遂に只だ先方が儘になるのでしやう、是れが今猶ほ殘つて居る因襲ですが、如何に先見の明あるお方でも、更に知らない夫の氣質を見抜く事は出來ないのです、十中の八九までは遂に不知の夫を親の爲めに持つのでありきす、だから日本婦人は離縁が多いのです、て自由結婚は或は女子の一生を救ふべき止むを得ざる一方かとも思ひますが妾はそれも厭なのです、て妾は一生獨身でそうして大恩受た御兩親に其萬分の一なりとも酬ゆる心であります。から考へは致しますが、どうも物足らない、少時しますと心の底から何か湧き出るやうにいや〳〵さうでない、女子は確に理想の夫を持つべきの義務があるとの考へが起ります。

斯くて妾の心は全く二派に分れて何れにも決し

ないので、只だ朝は散歩して大なる自然にあこがれ、家にあつては讀書作文に思ひを寄せて居るのみてあります。

どうぞ此の迷へる告白を致しました妾の心を誰れか正道に導いて下さらないてしやうか（地 賞）

母のつとめ

青葉女

人の上に立つ樣な奥樣が「何てもかまわず小供の欲しがる物をむやみにあたへる母親が世の中に澤山有りますすそれはまことに恐ろしい事ても有り、その子もあはれなものてす、宅などては、弱い子供の胃腸を害さない樣に、毎日きめてビスケットをあたへて居ります」などと誇らしげに語る人が往々有りますなる程一應は尤もの樣にも思へます、然しその子になつて考へて見ますに、いかに身の爲めとは言ひながら、さう毎日〳〵ビスケットばかりては飽きましやう、從つて、他の子達の喰べるのを羨ましがつたりなんかいたさないとも限りません、かうなるとつまり母親が子供の樂しみを大いに殺ぐわけてそれこそまことにあはれなものてす

たとへ、いろ〳〵な他の菓子ても、確かな店て賣つて居るものて、消化の良い物て甘かつたなら與へた方がよからうと思ひます、却つてその方が胃の働きを確かに爲し得るだろうと思ひます、母たる人は此邊を深く考へて欲しう御座います。（人 賞）

無邪氣なれ

伊豆 加藤爲子

無邪氣とは讀んで字の如く、邪氣のないので、故意に蠻カラを裝ひ、また時と場合も顧ず洒洒として談話する如きを目して、人も無邪氣といひ、自身も得意になつてゐる者がありますが、私の曰ふのは之てはムいません。

よく人が「無心てあつた幼い時が懷しい」と申します。一應最もな事てはありますが、併しよく〳〵此の言を味つてみるとどうも同情はしかねます。幼い時は無邪氣てあつたから懷しいといふのてせうが、何故消極的に遡つて歸らぬ昔を懷しがるばかりて進んて積極的に現在の今日を無邪氣て暮さうとはしないてせう。天眞爛漫なのは人の本性てす。決して小兒の時代に於て盡くるものてはありません。

先頃朝日新聞に實業家廻りの記事がありましたが、當代知名の士でありながら自身の道樂――とまあいつておく――を堂々といつた人は、實に少數でした。好きだといつても言分がましいことをいつたり、曖昧な事を云ふ人もありました。何故でせうか。畢竟これは、何か批評されは爲まいか――などゝ云ふ事を慮るからでせう。情けないことではありませんか。彼の歐米人などは此樣な問ひに答へるに、きびくくする程はつきり飾り氣なく、併も得意らしく話すさうです。元より各々性質の相違はありますが、要するに無邪氣といふ點が大に有らうと思はれます。

無邪氣は一種の活氣であります。而も永久にわたるものであります。この活氣が惜しいことに、我々同胞には不足してゐます。といふと、或は怪まれる否、批難するかもしれませんが、誤解してはいけません。成程わが國民は活氣の民である。殊に近年に至りて長足の進歩をして、一等國に列したのも、この犯すべからざる活氣の爲である、といふに誰れも否定することは出來ません。併し一歩退いて客觀的に觀察したらどうでせう。

果して、今、戰役後當時の意氣がありませうか。

私は斷言します。悲しいかな日本人は一時的の活氣はあつても、永久的の活氣はありません。指して老成し易い國民といはれるのも故なきではありません。

御覽なさい。隠居の弊風は依然として殘つてゐるではありませんか。老人は樂をするもの、子供の世話になるもの、と思ふて獨立自營、一生自ら働いて生活するといふ活氣がなく勿論社會制度の相違、習慣などはありますが――其れ故青年時代に生活問題の爲めに苦しみ齷齪と成功を急ぐので、從つて小利口に流れ易いのです。これが日本人の一大欠點でムいます。

然し一度翻つて吾々日本人は今どういふ地位に在るかを考へたなら、個人が徒に小成功に甘んじてはゐられますまい。どこまでも大膽、所謂「大器晩成」を期さなければなりません。これにはどうしても永久的の活氣がなければなりません。されば、私は此の點に於ても大に無邪氣なれと御勸め致します。

無邪氣なれ。無邪氣なれ。常にこの心でゐたならば、どこまでも自己を欺かず、向上心は發達して、泰然として、永久の目的に向つて進むことが出來るのでございます。

感じたまゝ

伯爵　佐々木とさ子

日本の婦人には、時々物々に對して明らかに自分の思ふ所を言ひ表はすことが出來ぬ人が多いやうに見受けられます、その癖内證話をしたり、蔭口を言つたり、所謂井戸端會議と云つて、市中の譯もない出來事や、近所近邊の内輪話をして、大切な時間を費すので御座います、これは、我が國では昔から言葉少いと云ふて

とが婦德の一として大變尊ばれてゐましたから、それが遂には誤解せられて只何時も默して物を言はぬが善いやうに思はれたのかと存じます、斯うなつて來ますと、性來感情的な主觀的な女性のことですから、人前で物を言はぬと云ふ一種の壓迫の反動で陰口を言ふ内證話をすると云ふ風になつたのでありましよう、して以上は習慣の上から見ました一源因で御座いますが、又一方には大なる原因があります、それは、



落葉かき　十勝多田秋子

時々遭遇する物事に對して明晰な判斷力が缺乏してゐると云ふことであります、平常では隨分彼れ是れとお饒舌する人が、一朝大事に際會しますと、一言も言ふことが出來ませんと云ふのは、事の是非曲直が判斷が出來ませんから、あれこれと思ひ乱れて遂に

默して仕舞ふのであります、ですから今後の私等若き婦人は、出來る丈眼界を廣うしまして、健全なる常識を養成すると共に、理性の發達を圖り、一朝有事の際にも、彼れは彼れ、是れは是れと、公正な、明晰な判斷が出來る頭腦を作らねばなりません、これをするには、井戸端會議をして、無益な時間を費すのを避けて交際を廣くし、見聞を廣くすると共に、自分の思ふ所をハキハキと云ひ表はす習慣をつけ、一方には眼界を廣くして、社會の狀態を知り、智識を高め、理性と相俟つて健全なる常識を養成せねばなりません、斯くしてこそ始めて、寡言が婦人の一美德として尊重されるので御座いましよう。

自分の位置について

岐阜　篠田とみ子

世の中には隨分、自分の位置といふ事を忘却して、そしてあられもない方へ曲り道をし、辛苦をする人もあれば思はぬ悲しみをうける人もあります、私はこんな理想を持つて居りますの、抱負がありますのとそれはそれは、大法螺大風呂敷を廣げたがる人があります。何てすか何もそんなに言はずとも、賓さへお上げなされば、人々が信用するおやありませんかとつい言い度くなる、それは其思ふ通り言ふ通り、事が成功すればまだしもてすが、到底そんな人には滿足といふ結果は現はれて來るものおやありません、鹿であれば鹿の務めがありますもの、獅子のまねしようとするのは初から間違つて居ると思ひます、早い話が若い女の人たちに或家から、結婚の申込みてもあつたとしてごらんなさい、やれ理想に合はないの、商買屋はいやだの、財產が少ないのつて、小言ばかりいひます、或人は自分の位置を忘れてしやべり過ぎて、夫の顏に土をぬつたり、或人は自分の位置を忘れて遊び暮し遂に家財道具を賣り飛ばして先祖に耻をあたへたり。あげてみますれば澤山あります、何事にも向上心の強い人間ですから、成可くは理想だつて高くするが宜敷い、けれども度は程度内外甚しからざる、といふ處を撰んで戴きたいのであります。

獨身の婦人に就いて

富山　布本こま子

少し妾の僻見かは存じませんが今どきの御婦人方が教育が少しありますとなまじ良人などが居るより氣樂に一人暮しが良いと思ふてか獨身の方が前よりも多い樣に思ひます。

其の原因は多くある樣てすが次の方等が最く多くあてあらうと思ひます。

一寸僞文學にかぶれて塵の世の中だとか、又人心たのむべからずと言ふて淺墓にも自分一人て獨身にきめて田舍に引きこむ方なぞも有る事は妾も現に見ました。

又教育のある方などが結婚する男子の方の理想は資格

の高いのを欲して居られ持つて來る縁談をあれも之もと言ふて居る中に自然と縁が遠くなつて獨り身となら丶人も有る樣に見えます、

又一時の出來心で獨身て居るのは良い、生れた許りの處女の姿を一生持ち續けて一人て良い生涯を送ろうと言ふて取てくる縁談も一人てぶち破り親心も考へないてやる人もあるのてす。

て獨身て居られる方も澤山をられ樣し又獨身で居なくてはならん方も居られるてしよう、て妾はあながち靑春の女が獨身て居られるのは惡いと申すのてはありませんが又宜い事でもないと思ひます

殊に妾は婦人として結婚の出來ない片輪な方ならともかく、立派に結婚の出來る方が結婚もしないのみか又神の命令の女子の天職を盡されないとは餘り感心した事てはあるまいと思ひます

若い中こそ獨身が何んともない樣ですが老いてから獨身をした事を悔ゆる時などがあると言ふ事てす。

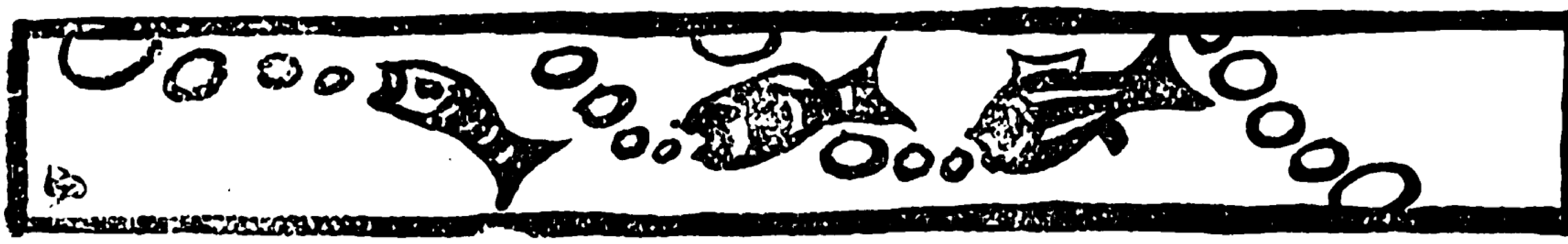
てありますから日本中の姉上樣方は萬一獨身て世を渡らうとするならば萬事身上の人の指敎になり又自らは良くよく考えてから行ふ樣にして決して輕はづみな事をせん樣に願ふものです。

虛榮と煩悶

山田静野

近頃妙齡の婦人て、しかも高等女學校卒業、或は何某の卒業と言ふ立派な肩書のおはす方に、煩悶の寂寥のと、田舍者の我々には耳新らしい事を仰在る方が多く有りますが、私は高等の方は皆幸にして新時代の敎育うけた申し分の無い方計りと信じて居ますに、甚だ其の意を得ません、皆我子の爲めには身も忘れて、專念幸福祈る親御に對しても濟まぬ事てはありませんか、身は家庭の花と咲いて、いつも春風吹いて百花笑ふ家庭の主婦と成る人が、稍もすれば柳眉を蹙めて如何にも悲しい事か、煩悶の有るらしく見えますが、其御顏に掛る曇りの原因の何たるかを問へば失禮乍ら氏なくして玉の輿に乘り度い、黃金の殿堂に住み身に美服を裝ひ何々の夫人と言はれたい、權門知名の方と肩が比べたいと言ふ、所謂虛榮てはあるまいかと存じます、もし虛榮ならば早く覺めて欲しい、虛榮は實に婦人の身を過まらせる惡魔てす、一朝この虛榮の夢さめた時の後悔は如何！虛榮の犧牲となつた我友等は僅か五尺の軀殼く所なくして、後悔の念は身を害し、遂に石より冷たき遺骸となつて地下に眠つてゐます、虛榮は實に大切な人の一生を亡ぼします、

更に敎育は何のために必要か、申す迄も無く人物を作らん爲めでせう、然るに何ぞや、敎育ある婦人の自から身を過まるとは何と言ふ歎はしきことか、希くは今後の敎育受ける婦人は少くとも女士道的に、一身を捧げて他につくし、困難逆境と戰つて身を過まらず、小にしては我家庭のために、大にしては婦人界世間に、不言の中に敎訓を與へ模範を示す下田、棚橋、三輪田女史の如き御婦人の出て、無學賤が女の我々に模範を示されんことを希望して止まない次第て御座います。



戀

○　上総　御厳前輝子

にくむべき君にはあれど春の夜を笛など吹きしことをしぞ思ふ

○　大阪　わたつみ子

あらはしぬかくしぬ君がみ言葉を千々に解きては千々にほぐしぬ

○　大　野口たつ子

我はもや君を得しより春の野のうら若草のもゆるに似たり

○　仲仙道　野崎啓子

野は枯れぬ夕日はさびぬ君老いぬ榮へしわが世の戀はうすれぬ

○　筑後　梧桐知登子

幾萬の黒髮の中の一條の落つるが惜しとこの日おもひぬ

○　日本橋　つれ子

うたおもふ時の如くに我心あこがれ行かば如何にうれしき

○　秋谷

君と我と知りにし日より夜もすがら日もすがら泣き悶へてありぬ

○　大分　一法師入重子

胸の野は霧ふり心露おきぬ悲しさせまり涙落る日

○　南多摩郡　福島操鏡子

夫にせむ仰せの儘に従はむ戀の終りとなりにける哉

○　日向　山田いつ子

大河あり泣きもつかれてたゞずめるわかき二人の前を流るゝ

○　静岡　根岸鐐子

風吹きてしづかに靑き月夜とはなりぬ君のみしのばるるかな

○　茨城　鴻巣梅子

飼鳥のかごに廣野を戀ふること自由を想ふわりなき日なり

○　阿波　西野いさを

春盛ると君に語りてほゝゑみぬおん眉あひのひそむを見むと

○　本郷　すてきく

こゝろよしいと美しきそらごとを眞にうけて笑む男子を見れば

○　奥　硲井奥竹

よき匂ひよき薫りしぬ君がはだ君が心にわれは戀しぬ

○　甲斐　網野やす子

ゆくりなく出逢ひし君の本意なくも只面伏して語りたまはず

○　美作　香本公子

はれやかに何のやましき心なくながめし月の夜は安かりし

○　奈良　中富よしみ

今にして悔いぬ恨みぬもろ共に幸食み合ひしそのおろかさを

○　京都　隅田れい子

なぶられし一と日は暮れぬ灯の影は今宵嫁く身にいやかゞやきぬ

○　京都　若葉

華やかの性をかくして寂しさを欲りする故の苦しさならん

○　遠江　樽松信子

若き人の香りに醉ひてわれしらず顔あかめたる夜のあつまり

○　磐城　繁子

人も皆我が如消しとばかりに取りかへされぬ誤ちをしぬ

○　京橋　くに子

捨てゝ行きし人にしあれど今一度すがりて行かばなどゝ思ふ日

○　伊豫　かへて子

ある時は何を思はす唯君ににたる人だに見たく思ひぬ

○　三重　瀬木入重子

つゝめどもつゝみもあへぬいにし日の夢の想ひに獨りゑみつゝ

○　近江　新いく

よろこびのある日をかぞへ悲みのある日をかぞへ夢のごと生く

○　横濱　泉子

夕暮れはえんの柱に手をもたせ物思ひする少女子にして

○　美濃　篠田欣子

わが心きみこふるにはひまあらむ宵に相見ば心はたりぬ

○　山城　木の花

あく迄も強きことといふ君にしてかくあらんとはしらざりしかな

○　熊本　友田光子

此の思ひ只一言に晴るべきをあまた淋しき事のみを云ふ

静岡　浩子

○忘れむとやみをすかせばまぼろしに君の笑顔のあざやかにして
福岡　はぎ

○思はるゝ身にもあらぬを思はるゝ心地に在りて三月やせにき
大阪　荒川那美子

○明かに僞なるは知りつゝも實とおもひて心しづめぬ
大阪　田中れん子

○こうろぎや淋しき夜半を窓によりすゝり泣くにぞ文などたまへ
丹後　瀧内文子

○君と居る日と母と居し安き日と何れがよきとある日おもひぬ
名古屋　片野琢子

○實か神かしらずこよひも我耳にあやしき事をさゝやきに來ぬ
神戸　田中落葉子

○あゝ十七愛ある君が御言葉を疑ふまでの我れとはなりき
越後　波奈子

○わが胸の百千の鳥の餌となる心地こそすれ君みえぬ今日
佐賀　交野小萩

○拾本のこより結びて乙女らは緣結びとて興じてありぬ
あせむ

○われと我が胸のさゝやき興がりてひそかに獨り野を行きかへる

自然

榮城　牛谷きい子

○見よ空の大日輪の色きばみものひそまりて世は凋落す
伊豆　加藤爲子

○向つをに夕日かぐろひはろ〳〵の大野になびく遠芒かな
本郷　外山秋子

○河口に泊まれる船の帆の上を眞白き鳥群れて過ぐ
大阪　順子

○小石路荷車きしる音あつき眞晝を額に氷して居ぬ
千葉　春枝

白き鳥かなしき聲し岩角に一羽啼くなり海の淋しさ
相州　香眞達子

○獨り居の窓にあめしぬコスモスの細葉にかゝる雲のしめりよ
信濃　山口破鷺子

○伽羅の油つけしや花葵の袂くたれ髮の強く香りぬ
讃岐　衣輪すゑ子

○棟高き造り酒屋の奥ふかく太き柱に秋のつめたさ
兵庫　祥子

○こゝろもちうす紫のえぞ菊に白き日のさす秋晴の朝
土屋　四季

○さうびの香ほのにかほれる朝雨の窓少し開け對ひて語る
三重　小宮あさの子

○毒盛りし我血を吸ふと秋の蚊のほそき聲して迫りくる哉
靜岡　鈴木小ぎく女

○あゝ淋し今宵は何故かコゥロギの只ホロ〳〵と泣くばかりなり
兵庫　夢子

○ましろなる蓮折らましく手を伸べば緋のハンカチの水にこぼれぬ
京都　田中よし子

○紅罌粟の燃ゆるが如き花むらに小さき人あり歌よみてあり
なてし子

○光浮く眞晝の海の舟の上花の樣なる雲たゝよいぬ
きよ子

○小さき虫の死骸守りてこうろぎはかすかになくよ萩のとぼそに
伊豫　よし枝

○朝わがみほのぐらきかな水瓶の底に鳴く虫影と聞きにき
横濱　臼井道子

○御顔にそゝぐ濁水の滴りのピアノの音にも似る朝氣なり
濟翠

○縫ひをへぬ袷に心せかれたり鵜たつ日よりしぐれのみして
攝津　坂上かめ子

○天つ姫百人きたりしら玉をわすれて歸る花ぐさのつゆ

手紙

野 す ゑ



前橋から、姑と義妹が東京に遊びに行き度いとの手紙が來た。それを讀んでお久は厭な顏をした。

夫の繁は朝飯が濟んで緣先で新聞を見て居たが

「何とあるな」

「東京見物に來るんですとさ」

「ぢや見せてやるさ。一月位居たつて、先のやうな事はあるまい」

「………」

「ナアお久」

それでもお久は默つて二つになる千代子に乳を押し付けて居た。

二三日過つた日曜だつた。

「お久。前橋に返事出したか」

「いゝえ」

「何故出さない」

「だつても貴方。今、困るぢやありませんか、三十圓位の月給でさ、貴方は毎日お晝に御馳走取つてらして、千代子にだつて、是から寒くなるのに着物はありやしませんよ。貴方の羽織も買はなくてはならないし……私だつて袷の鳥渡した絲織位のを一枚欲しいのですものね……。

貴方は東京にいらして御存知なかつたけど、前橋に居た時だつてお仕着せ一枚下さりやしませんよ。靜ちやんには銘仙だの何だのと拵へて遣つても私には木綿のゴツゴツが渡る。萬事恁麼ですもの。眞個に隨分辛かつたわ。此度だつて來られた顏ぢやありやしない。手は不足だし、費用は要るし。困りますよ」

口を尖らして居た。

「ウム……けどな。ぢや母さんには少し千代子でも見て貰つてな。靜には縫物でもさせるとしたら宜いだらう」

「貴方がたつて會いたけりやそうなさいましよ。貴方の家ですものね――」

冷やかに笑んだ。險のある目が釣つてた。

「お前もそしたら鳥渡は樂が出來やうかと思つて、――何アに都合が惡るけりや、最少し延ばした方がよいだらうと斷りや宜いさ」

お久の顏を覗くやうに恐々云つた。

ぢや呼ぶとする、と極めてお久は、千代子の眠つたのをそつと寢せつけ手紙を書き出した。

繁は帶をしめ直し帽子を取つて

「鳥渡出て來るよ」



かへろ　陸奥竹野秋子

「又ですか」目が光つてた。

「……ム、ぢき歸る」逃げるやうに出て行つた。

手紙には夫も此頃交際にかこつけて、あそぶやうになつた。それが爲め銀行を怠け勝になる。私の諫め言なんかは聞いて下さらぬ。親でなくては駄目だから來て充分小言を云つて下さい。千代子も大きくなつたし、これもお目に掛けたい。東京も大變開けて觀る所も多い。私も家事に取り紛れて見物らしい見物もしなかつたから今度は是非お供しませう。東京の女學生には靜ちやんも悔りなさるだらう。一月程ゆる〳〵逗留して下さい、その代り手がなくて充分の事は出來ないからお守もして貰ひませう、お茶漬も食べて頂きませう。ですから氣兼なさらないで……とそれはちやほや書いた。書き終へてから舌をペロ

りと出した。

それから急に簞笥や行李を整理始めた。東京に出てから拵らへた着物は一つの引出しに寄せて、其處斗りは何時でも錠を掛けて置いた、質屋の受取り、實家の母にやつた手紙の書き反古や、實家から來たのも其處に這入つて居た。

古い手帖が行李の足袋の中から出た。お久は讀んでみた。

眞個に辛い厭だ厭だ。今日も又さう思つた。然う思つて荷物を片付けて見た。出るのは何時時分がよからう?! 朝皆が起きない內か。夕涼みの振りしてか。なんと考へる。と又お腹の子を思つて、遂に鈍る。けれど私の出たあとて夫の困却る樣子や、近所の人等がまあ其麽に辛かつたか、其麽姑かと呆れる顏や。內の騷ぎや、目に見へる樣て痛快に思ふ。決行しやうか……(九月〇〇日)

なんとある。「紀念だ」お久は獨り他人の弱點を握つた時のやうに愉快な顏してた。

それから又、坐蒲團の小便に形のついてるのを洗つたり。汚れた掛蒲團に其儘半襟を掛けたりした。

それて五六日は過ぎた。

けれど其間には千代子を背負つちや、近所に出掛け姑の惡口や小姑のアラや、出鱈目に吹聽して廻つた。

（人賞）

暗い家

淺草　小池弘子

弟の勝は脚氣になつたので、神戸の商館から歸つて早三月餘りも過ぎた、

日の經つのは餘つ程速いものだと、今朝母が云つた勝は毎朝裸足で裏の野徑を步くが日課の一つてあつた。その間は座敷にごろ〳〵寢て計りゐた。

今朝は裸足て出て行つた儘未だ歸らない。もう逐付九時だらうに……。

南から照る秋の日が母屋の床へ射し付けて、新らしい山水の軸が光つてゐた。

銀行から給仕が幾度か自轉車て馳せ付けて父を呼びに來た。父は一時間餘りも前に家を出られた。私は何となく胸騷ぎがしてならなかつた。

取付！　重役！　無限責任！　破産！　此麽愚にも付かぬ空想が頭腦の裡を往來して、淡い不安を感じずにはゐられなかつた。

母は平氣で「又何處かへ立寄つたんだのよ。」と云つてゐた。
「意氣投合のお方だと、あんな沈默家でも、何時までとなく話が續くさうだからお可笑いものだね。」と云つた。
從弟の孝が、九時何分の汽車で來る筈だので、私は停車場へ迎ひに行つた。何うしたのか孝は來なかつて素戻りをした。そのかわりに町の姉のお豐が、今年三つになる「綾」を連れて、來てゐた。
この春から躰の工合が惡い〳〵と云つて、十幾町しかない里まで來るのが稀だつた。
母は「綾」が可愛くて可愛くてならなかつた。
お豐の夫は、八時に出勤するので、それからは留守だつた。それを見込んで毎日のやうに母は行つた。そして「綾」を連れて歸ることが間々あつた。
お豐が今日來たので、私は珍らしいことだと思つた
母は「綾」を連れて表へ出て行つた。
お豐はころりと横になつてホッとした。つと立つて庭をジロ〳〵眺めてゐたが、けだるさうに又ころりと横になつた。
母が何か買つて來たのを横になつて見てゐた。
「お前宅はどうしておいてだの?。」と心配したやうに聞いた。
「お隣りに賴んで來た。」
「お隣りも豪い厄介だねえ。」と母は輕く笑つた。
まあまあまと「綾」は母に向つて、手に持つた菓子を見せた。お豐はけろりとした眼付で見て、淋しい笑を浮べた。
私は餘つ程瘠せたなと思つた。顎は角だつて、眼には何處となく寂しい色が漂うてゐる、それに髮は出掛けに撫で付けた樣で、鬢の毛が亂れてゐた。窶れた姿が沁々と感ぜられた。
「お母さん!。」突然姉は何事か思ひ付いたやうに云つた。母は平氣で「何だね」と云つてゐた。
「お父さんは銀行の方は全休みださうですねえ。」
「毎朝宅を出て行くんですがな。」
「それが銀行の方ぢやあないさうですつて。」
「えッ…何處へ行くんだらう?。」と驚いた顏を姉に向けた。
「大鹿の店ださうですつて。」
「大鹿!大鹿つて現物仲買屋じやあないか。」
「えゝさうです。」

「眞逆其麽こともあるまいがの。」と打消してゐた。
「お母さんは何でもそんな疑のない心だけど、それが本統てす。私も始め聞いて疑つてゐたところが、昨日夫があの店て見たつて云つてゐましたよ。それに皆から聞んてすもの」
あんな仲間へ入つたらもうお仕舞だと私は思つた。
父は毎日四時頃には歸るので、それから過ぎは、奥の間で、ごそ〳〵と獨り書齋骨董をいぢくつてゐた。
それが唯一の樂しみだつた。
一月程前からはもう四時頃に歸ることは稀だつた。
そして夜晩くかへる時に限つて、乾度熟柿臭い香がした。
姉の云つたのは事實であらうか。よもやと私も疑つてはゐるが、もし事實だつたらば父は今自暴自棄の態ではあるまいか。そうすれば銀行も、この家も危いものだと思つた。
「銀行の方も工合がよくはないつて本統てしようか」と姉は話を續けてゐた。
「眞逆！」と母は疑つてゐた。何處となく暗い憂愁が浮んだ。
「一遍何とかお母さんから云つたらいゝでしよう。」
「いえ中々妾だちの云ふことを取り揚げる人ではないからねえ……」
「それでも後で取り返しの付かなくなつてから駄目ですから。」
「その破目になるに定まつてゐる……。」母はもう泣いてゐるらしかつた。
裏口からヒタ〳〵と音がして勝が歸つて來た。
フと耳を澄まして、「誰か來てゐるか」と、私に聞いた。「姉さんだ。」「ふん。」と忙しさうに井戸端へ行た。
そして危い腰付で水を汲み始めた。
下駄を爪先につゝかけて勝手口へ入つた。
「腹が空いたろう。」「空いちやつた。」と云ひながら戸棚をガタピシ開けた。
「勝か？」と母が云ふ聲がした。默つて飯をムサ〳〵と喰べてゐた。
「勝、破産になつたらどうする？」。突然私が云つた。
「どこがあ。」と顧つた「うちさ。」
「なつたつてかまふものか、今に俺がもとの資産を作つて見せる。」と云つて箸を置いた。
「銀行がいけないかい」。「そうじやあないけれどもなつたらさ。」

「其麽こと待つてゐてたまるかあ」。と云つてプイと母の方へ行つた。
母と姉とはまだ話をしてゐたが、勝が行つたので騒しくなつた。

外出前

岩代露草

妹等夫婦の手前、良一が三つの聲を聞いてからは、子供をつれて、約三里の道を實家までは少なからぬ難儀てあつたので、盆正月をのぞいてはめつたに行くことがなかつたが、十六になる末の妹が病氣だときいたので、義妹の温泉行を幸ひ一日のひまを願ふて見た、
「久し振りだあ、およしと居ねいこつたから夕方早く歸るとして一日いつてくるがいゝ」といつにないやさしい夫の言葉にお小夜はにはかに仕度にとりかゝつた。
「はゝゝゝやつぱり嬉しいと見えるな」と夫の機嫌よく笑つて居るのを後に、これかあれかと多くもない着物を出してながめてたが、義妹とおそろひに買つた白地の單衣が、二十六といふ年で六つになる子供の母である自分には少し若すぎはしまいかと、今年になつてからは一度も着たことがなかつたが、「義姉樣はちつともおそろひのを着なさらねい」と先日云はれたのを思ひ出して「これにしやうかしら」とそれに着かへた。
「良！良…」お小夜は黒繻子と紅色のちらほら見えるメリンスとの合せ帶をきつとしめあげながら、強く光線を投ぐる芋畑の方にむいて高聲に呼んだ時、作男の長吉が大きな顏を生垣のかげからぬつと出した。
「長吉そこへらに良一が居らなかつたかい」
「へい先程隣の店て遊んてたつたが…」と汗ばんだ手ぬぐひでつるりと顏をなでながら腰をかゞめて膝まで下した手の指が馬鹿に太い。
「先程…あれから一度かへつたんだよ」とお小夜はぢれつたさうに庭下駄をはいた。
「何處へいつたんだかなあ」と芋畑を一めぐり、生垣を外に隣の裏から聲かけた。ガタンゴトンと裏川の水をひいて米をついて居る水車のひゞきが聲も消えやうとひゞいて來る。米ぬかにまみれた障子が半動くと毛のちゞれた、あから顏の内儀が例の如く不きように腰を折つてものめづらしさうにお小夜の頭から足の先まて見下した。
「良さんかい、先程まで店て遊んてあたつたつけが：：ちよつと見て來るべい」と店の方に立つていつたが

居らなかつたのですぐもどつて來た、お小夜は歸さわに「實家に病人があるもんだから」とあいそを云つて側道から表に出て店から入つた。

白かべの家といへばふるく名主をして居つただけに村では知らない人もない程であるが、その父も失くなり、母も四年許り前に赤痢でなくなつてからは、家の中がなんとなく寂れて來た、後に殘つた良作は妹のお由と二人寂しく暮してたが、或人の世話で二十四の時にお小夜を娶つた。それから高い白かべの土べいはくづされて其かはりとしてこじんまりした店がひろげられたのである。兩側の棚には燐寸、草履などが行儀よくならんで、他に筆墨から半紙まで一通り學校用具がならべられてある。小學に行く通りだけに朝夕には、小さなお客が店いつぱいに立つのであるが、今は夏休で店は至つてひまである。

「あんた良一が見えぬつて」

つくねんと黑光りする戸棚の前に座して居る夫の良作の側にお小夜は腰かけた、汗ばんだ肌着の香りがかすかに香つて來る、「取りかへてからまだ五日きりなのに男は汚れが早いものだ、まあ洗濯は明日にしよう」とこんなこと考へながら良作の顏を見上げた時ひげ無茶な口が動いた

「良が見えねい、……もう六つにもなつてらあ、置いてつたつて泣くめい」だるさうに搖つて立ちかけた、

「でもあれや後がねいだからやゝなんだもの、それにわしが居ねいとあんたが困りますべい」と一寸外を見た時、三浦屋の娘の蝶つ子が、粋氣な銀杏返しにぬきえりすがたでついと前を通つていつた。

「それだあやつぱりつれて行くがいゝだ」と良作は、なす畑の方を見て來ると云つて出ていつた、

正月から一度も行かねいだもの親父樣が坊の顏も見たかろうしやつぱりつれて行かうと、良をさがして來てくれ」と裏に行かうとした長吉をよびとめた、長吉は無言で南の方へ走つていつた、お小夜は出流れ茶に湯をついでがふ／＼と飮んで居る。長吉は歸つて來た

「良は居たつたかい」投る樣に障子越しに聲かけた、

「さがしたんだけれど……」

「おらねいのかい」「はあ……」「ちよつ仕樣がねいな」

十時、十一時、晝になつても良一は歸つてこない子思ひのお小夜は如何しても良一を殘して行くことは出來なかつた、塵つぽい三里近くの國道、村の入口の桃色ペンキぬりの小學校、一森を越して藁ぶきの自身の家

こんなことを考へてぶつ〳〵いひながら着物をぬいてしまつた。
「晝飯も食はねいて何處にいつてらあ」とぽんと縫ひかけの單衣をほうり出した。午後の二時といふ日光が少しまわつたばかり、お小夜は腹立ちまぎれに家を出て見たものゝ心配が七分「きつとお咲さんの家へいつてるかも知れないと大急ぎで土橋を渡つた、
「手ぬぐひが落ちたよ」と大きな聲、ふいと後むくと「ヤあ……見たあみがいた……」子供逹がばら〳〵はやしたてゝ木かげにかくれた、お小夜は口惜しそうに齒がみをした。
夏草の丈のびて晝がほの花あはれな垣の所には茫やりとお咲か立つて居た。
「おやさうですかい、良さんは見えなさらねいよ」と七月のだるそうな體がいたくやつれて見える、
「咲ちやんはいつ出來るの」「はあ十一月だよ」「もう三人なんだもの……」「きつと又男だよ」「わしは女の方がいゝがね」「はゝゝ」お咲は笑つてうつむいた。
お小夜はがつかりして家の前に來た時、良一はぼんやりと立つて居た、「良！今迄何處あるいてたんだ、晝飯も食はねいて……」實家にゆかれなかつたのと、あつちこちあるきまはつたつかれてふら〳〵と石につまづいた、良一は驚いて柱のかげに身をすくませ樣として菓子袋をばつたりとおとした、
「なにいそれは、誰れにもらつたんだい……」良一はしく〳〵泣き出した、「他のつ……他の叔父さんだい」
「叔父さん、どんな人だい」とお小夜は此度はやさしく問ふた、「あのう……大きた人！」「眉の太い青い顏の人かい」「あゝ」母の機嫌がなほつたと見て良一は泣きやんだ、
開いた菓子袋の中から走りがきの文字、お小夜はぶるぶると身をふるわした、佐原鐵次、終生お小夜の胸から取りのぞくべきことの出來なかつた人、かつては初戀の人と呼んだるなれど……古い記憶は走馬燈のやうにくりかへされる、此方が捨てた人、最後に逢つた時のあの顏、お小夜の顏は眞青に變つた、良一は眼をこすりながら菓子をかじつて居る。
「叔父樣が其菓子をくれたのかい」「あ……」
お小夜は見もせてびり〳〵と紙きれを破つてしまつた、
そんな汚ない菓子なげつちまへ」ぽんとほうり出した、泥中に落ちた紅白の菓子は流れもせてたゞよふて

居る、良一は聲高く泣き出した。

成らぬ縁

神田 新村基子

お琴は母との約束通り、一寸頼まれ物が有るから、夫を見て來ると云ふ口實で、直と其座をはづして了つた。横丁を出てぢき、左に折れると、既うぱつと明るい人形町通だ。

煎豆屋、古本屋、古着屋、おでんやと、眩ゆい夜店の燈り丈でも、陰氣な山の手にゐるお琴には、大變な保養だつた。夫に、空氣枕を賣つてる人の口上が、餘り、可笑しいので、其處へは暫らく足を佇めて、始終微笑んで、聞いて居た。

大森館の活動寫眞の前にも立つた。雜賣の群集にも紛れてみた。而して、其處等中を、華やかな、自分勝手な、空想に耽り乍ら、足に任せてほつくり歩いた、私がさうして、首尾よく其地位に成たら、先生は、友達は、夫から、親類の者は……………

恁う考へると、もう堪らず面白く成て來て、現にもう其地位に成り濟ましたかの樣、愉快なのだ。

お琴は丸顏の豐かな頰に、深い笑窪を刻ませ乍らいつか、元來た道を辿つた、武田の家近いのに、始めてはつとして盗すみ足に進み乍ら、今更覺える脚氣の氣味の重たい足を、眤と据ゑ、中の樣子を伺つた。

武田と云ふは、お琴の義姉の實兄で、健さんと云ふ人、去年開業醫の免狀を取つて、お艶さんといふ、美しい奥樣がある。が未だ開業しない。

母は又、つまらない、孫共の惡戯咄しの最中で、什うも、未だ、彼話は始めぬらしい。

厭だなあ、矢つ張り聞くのか、引つ返さうかしら。今避けたのが、何にも成りやしない。

お琴は獨り舌打して、踵を返さうとしたが、如何にも足が病めるので、又思ひ直して、眉を寄せ乍ら這入つて了つた。

「あれ、既う行つて來たの」

母が、目敏く透してみて、急に調子を變へて

「あの今晩伺ひましたのは」と小聲に成る。

既う、仕方が無いから、柱のかげの方へ、成るべく燈りを避けて、座つて、一寸挨拶した。

「おやお早いこと、人形町でしたか。」

と二人に云はれて、意氣地ないお琴は、ひやりつとし乍ら「えゝ」と僅かに、答へた。

「あの昨日、琴が伺て参りました、お登喜の縁談でムいますが」

と、夫から、母が、登喜も、廿七に成てるから、二度目位は、覺悟だとか、我儘者だから、そんな所が願つたりだとか、それに商法には、大分氣もあります故仕度などは、もう御承知の、迚も御相談には、なりませんけれど、若し／＼夫れさへ、先き樣て、お關ひないと仰言るならばと、親父も、かた／＼申しますなどくど／＼と並べ立てゝ、終ひに是非お世話をと賴む。

自分に一寸、咄した位を、此麽に、家中が氣乘がして了つたかと、何だか卑しまれるやうな。

且に、姉が、緣遠くて、如何にも、困つてゞもゐたやうて、みつとも無くて仕方がないなど、もうお琴は、厭な、厭な、氣がするのだ。

が、心の奥の奥は、いゝ口だ、什うかして纏め度いと思つてゐる。

若しさうなつたら、怎う、あゝと色々な想像まで、して了つた。

お茶を入れてゐたお艶さんは、此時急に、向き直つて、此方へとも付かず。健さんへともつかぬ口調で。

「あの何てした。今日、私が一寸前を通りましたらね。雇人任ちや迚もつて、悉皆引込めてゐた商品が、又急に、並べ立てゝあるんてせう。什うしたのかと訊いて見ますとね。留守居が出來ましたつて云ふんてすよ夫れても、どんな留守居かと思ひましてね、お賴みのお嫁の口に、怎ういふのがと、話しかけますとね。いやどうも、御親切に色々有がたうムいましたが、其嫁かてございましたからと申すんてせう。」

お琴はどぎりとした。無茶苦茶に不快だ。

「ぢや出來たんてすね」母も慌てゝ、口を入れた。

「惜しかつたてすな、そんなら、も少し、早くお知らせすれば宜かつたてしたが、あんまり望ましい口とも思はんもんてしたから」と健さんが言譯する。

夫から母も、氣拔がしたのか、無人をつけ句に急に暇を告げた。「惜しかつたねえ」

母が、外へ出るなり云ふのを、お艶さんにても、聞かれはせぬかと、お琴は、振り返り／＼、返事も吳れず、稍暫らく、すた／＼と歩いてから、

「緣よ、緣だもの、仕方が無いわ」

と、いら／＼した調子て言つた。

而して、什麽して怎うだらうと、姉の不運に、泌み／＼腹が立つ。



○平賀玉子
朝顔や寄宿の庭の古釣瓶（地賞）

○黒澤美江子
雨漏りの疊干したり鳳仙花（人賞）

足拍子涼しき人の謡かな　攝津　阪上飜子
白菊に銀瓶の水そゝぎけり　同
張り板の日蔭になりぬ鷄頭花　新潟　八田敏子
雨の日の踊櫓の侘しさよ　同
朝霧や石切る人の落葉焚く　備中　篠原しけ子
掃き捨し菓子に少るを蟻の群　同
茶の花や一坪程の墓の垣　群馬　和香子
細切れに炭屑に今朝霜白し　同
彈琴や折戸覗けば菊薫る　東京　飯塚綾威子
源氏名の傘干す庭の桔梗哉　同
はら／＼と落る銀杏や秋高し　丹後　梅垣文子
乳貰の女の語る夜寒かな　同
灯を置いて客もてなすや虫の庭　大和　崎山春子
鹿鳴くや案内記讀む奈良の宿　同
みそさゝい納屋の小柴にかくれけり　豐後　一法師八重子

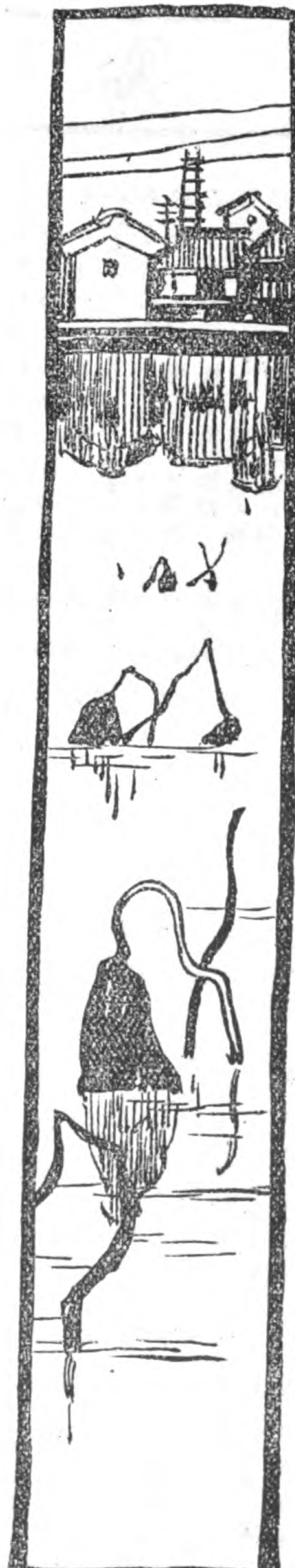
次の間の灯影流れ入る火燵かな　同
柴の戸や天長節の菊の酒　伊豫　きよう子
丹精の菊をリボンでくゝりけり　同
稻妻や燈臺守の家見えて　備中　小見山春子
黒蝶や野ばらの花のくづれ落つ　同
朗かに金柑畑や秋日和　和歌山　かたばみ

冷やかに枕刀や横はる　相模　とよ子
辨當の竹皮のころ花野かな　大分　佐藤みどり
朝寒の縁に遠燈と布袋かな　大阪　片山絮子
米の水ゆくてに秋のこぼれけり　秋田　高木秀子
柚子の香に秋重れぬ奥の庭　福井　竹尾房子
山鳴くや酒肆に灯る霧野町　岡山　森貞子
寢てる兒を覺ました蝿を怕みけり　大阪　野口たつ子
鎌倉に銀杏の秋や一人住む　奈良　松下梅子
火事場あと絲鹿の子の切れ見出しぬ　土佐　桃の花
枯枝の木より落ちけり秋の風　山口　醍井奕津子
菊の香や初産祝ふ姉の家　兵庫　政子
琵琶法師初卯の日とて呼ばれけり　下關　濤子
稻刈つて電信柱つゞきけり　大分　渡邊つや子
水寒き神苑の鵠や人による　春水
鐘つけば鐘より落ちる木葉かな　東遠　吉田俊子
かうろぎや妹の赤い下駄の下　靜岡縣　鈴木小ざく女
眞直に柳のたれし暑さかな　埼玉　早川翠
榾の火の影衰へる壁かな　大阪市　木村花子
鈴鹿かくれ多度またかくる夕時雨　名古屋　服部德子
宵月に白藥の陰黒きかな　和泉　金田香雲子
今朝の秋漣皺む湖の面　福井縣　明星

七夕に書くや己が句故人の句　愛知縣　さぶり
引き競ふ入日の前の鳴子哉　近江　辻嵐子
水の上をキリキリ廻る蜻蛉哉　春江
落鮎や花のしづくの落る川　尾張　竹谷しづゑ
しだれたる夕顔の葉に赤蜻蛉　信濃　丸山鮮子
產の紐秋知る雨にときてけり　相模　登浪迷子
讀さしの源氏に添し團の月　名古屋　片野琢子
風も無き二百十日の船出哉　神戶市　難波いせ子
絕版の書を市に得ぬ秋のくれ　京橋　くに子
天主閣と向きあふ窓や秋の月　神戶市　田中落葉子
洗濯の前髪なぶる柳かな　入木せい子
柿落葉落葉屋埋めて冬近し　香蓮子
暮の鐘撞待すみて僧一人　愛知縣　村松とし
こほろぎの聲細りけり井戶の端　萩香
行く秋や蟲も虫なく神の庭　新潟　三留浪子
秋雨や安かに船の入港す　佐渡　草村靜枝
秋淋し鶏はあちらむいたまゝ　草村靜夜
隣の家に比丘尼病む日や秋の風　京都　田中よし子
天の川出水の引きし夕べかな　佐渡　仲川敏子
今捨てた茶殻の湯氣や虫の聲　岡山縣　さつき雨
茸狩眼下に城を眺めけり　牛込　早川のぶ
土の香の身にしむ秋の日和哉　常陸　春野朝子
夏痩の梅干つゞく朝餉哉　山口縣　河村しづ子
壺の底給の菊も匂ひかな　伯耆　佐々木かほる
小說もよみつくしたる夜ながかな　日暮里　鏡子
瓦き衣の裾に夜風の寒さかな　宮崎　大本かほる
飛び入りの男危し辻相撲　京都　隅田れい子
古井戶や草吹く風に蟋鳴く　兵庫縣　麥子
草花ににじむ給の具や秋の朝　長崎　伊知子
手にたへぬ柿の二つや秋の空　熊本　捨尾花
寒空を琵琶法師ゆく京の町　京都　白百合

測量の旗赤白や渡り鳥　相模　たき子
夜學からもどれば柿の塞美かな　靜岡縣　植松誠子
馬蹄に蝶々とまる秋日和　豐後　上野百子
物思ふ顔秋風のなぶり吹く　名古屋　多計子
菊咲いて張物板の日和かな　長野　飯沼はる枝
糸瓜忌に野葡萄の房捧げけり　靜岡　鈴木弘子
秋櫻溢るの君にさゝげばや　兵庫　祥子
乞食共月見てはやす河原かな　愛知　秋月
秋のかやあゝ夜はつらてすごしゆ　茨城　淵巣梅子
鎌入れぬ萩原殘る冬田かな　茨城縣　大高はる子
縁談を立聞く宵やきり〳〵す　水戶　孤子
のる駒の鼻息白し霜の馬場　橫濱市　吉川香都子
小春日に小さき猫の欠伸かな　京都　井上澄子
洗濯の水かはきけり線の先　播磨　紫水
今朝の秋人樣々の病氣かな　呉市　川口花枝
毒々し黑き胡蝶に追はれけり　三重　小宮あさの
茸狩や身仕度をする姫二人　三重　瀨木入重子
親も子も同じ氣嫌や酒莚　愛媛　近藤とも子
海の夢ゆらゝに月を見る夜かな　岐阜　篠田とみ子
川霧の流れてくるや今朝の秋　會津　白雪
百舌鳥鳴くや胸すが〳〵し秋の朝　美濃　篠田きん子
この秋は妹が身ばかり思ひけり　麻布　花子
目に障る物なし須磨の秋の月　京都　すみれ
銀杏ふんで靜に歌をおもひけり　山城　木の花
秋立や雲かゝりけり遠木立　韓國　なでしこ
山深く鹿の鳴く音や眠す　靜岡　鈴木とも子
朝寒や日當へまはす籠の鳥　岡山　近藤賀久子
朝寒や森の煙の薄白き　丹後　竈內文子
明月や待ちたる宵は月のうち　岡山　田中佳枝
六波羅に鞠の會あり秋初め　大和　矢來信子
濱近く地曳の聲や秋日晴　紀伊　田中富美子

晴れの日が近くなる



九月十七日　夜に入つて天候は一變した。今朝は起るよりしと／＼降る秋雨！「秋が來た」の聲は既に聞いて居るが昨日の樣な氣紛れな、お天氣が在るので今日は更に然う感じた。程なく袷に冬衣杯と洗ひ張に折目の立つた、心持好いのが欲しくなると何となく氣忙しいが雨の日は私の心は落ち付いて、物皆、可懷しく身に沁みて嬉しい。六疊の障子際で私は一日針を運んだ。前は山また畑、雨の庭は櫻の落葉がして隅の方に秋海棠がうなだれて咲いて居る。淋しい物想ひに疲れ

更衣

て何か新らしい刺戟にふれ度い。て雜誌を見たが讀書は、一層淋しさを加へた。淋しさは絶えず心に或るものを描いた。それは、黒い雨除けを着た配達夫が雨の門を足早に這入つて來て郵便！と今にも云つて來はしないかと、あゝ戀しき人、都の友、繪端書或は封筒の樣迄想ひ描ひて、止まぬのである。十時も過ぎて、其は待ちぼけの失望に終つた。心は落ち付いた。何うして慰めやう、鏡臺をひつくり返へして、リボンや友禪の美しい切れなど落花と散らした。中には戀の紀念や文

からもある、私は贈物が好きてある、單に奉書の紙に包むて水引を掛けた意を好む殊に美しい切れ抔を包むて其の紅や紫が白紙に透いて見えるのがよい。之れ等を眺めると、丁度其時の樣が想はれて、たゞわけもなく樂しい。凡べて現實の方が意味が深いと、不圖想つた。此の頃の私は詩歌に飽いたのか机を離れて、美しい襦袢の袖ても、縫つた方が樂しい樣て在る、弟が學校から歸つて來て、想ひ出した樣に雨の中を柿もぎに行つた、頭から雫をたらしながら歸つて來て懐から漸う色付いたのを、七つ八つころ〳〵轉した早速皮をむいて見ると、澁はよく抜けて居た。母と三人緣に出てたべた。

九月十八日　雨は音を添へた。少し急ぎの裁縫が在つて、想ふ事も無う半日は過ぎた。待たねば日頃待ちに待つ雜誌は來た。母は降り續く雨にほと〳〵倦むだと云つて機を下りて葛湯を作つて呉れた。私は薄暗い長火鉢の側て母と二人其をすゝつて居ると、何だか七ッ八ッの少女の頃を想つて戀しう悲しかつた。母の髮や顏に老の影が迫つて居た。四時には立つて臺所へ行つた。夕べの膳の上には、秋茄子の野趣深いもの。日は淋しく暮れた。父と同年の老人が話して歸つた。村の小學校の先生の艶聞が評判だとか後て聞いたら父は語らない。ても私は他から來て居る若教師と、女生徒や女教師やを、想ひ描いた。父は寢ながら煙草を吸ふとて、燐寸をする音が頻りに聞える、お天氣の故か濕つて居て付かないのを、もどかしがつて、私達に迄早く寢る樣にいら〳〵仕ながら云つた。外は雨の音と、虫の音とが交々多忙ければ忙しい樣に規律は立つて行つて想ふ事もなく物事に紛れて、過す幸福を切に想ふた寢る際にふと！今日は夫れて在つた、一日の業を果した安らかさが嬉しく今夜は寢むられるて在らう。

九日十九日　雨又曇。起ると、雨止みがして居た。久し振の樣な氣持て外に出て見ると向ふにも二三人背戸に出て立つて居る、雨て道端の、さゝやかな流に水が増して通りへ小川の跡が美しく出來た。前の粟畑の鳴子が疲れたらしくたをれ懸つて居るのと衰へた虫の音とが、さも雨續きの、あしたの樣だ。母は正午頃機を下ろした。

蠶飼から桑の世話迄獨りて仕て、織り上げたものは子等殊に私のが多い之も然うだ。其れを私は蠶飼など聞く計でも厭て、桑の中から、尺取虫が這ひ出したり抔、想ふてもぞつと爲る。皆、母の手一つて、然かも

好むて爲る、私は手傳仕た事が無い、能く罪にもならないと、私は出來る丈、嬉しい顔を見せた。柄が氣に入らないかと母は、私の顔色を伺ふのて在る。雨止みを見て、母は畑へ、おさつをさぐりに行つた。家のは初めてだ。縫ひ物を終つて後は暇てあつた。母の慈愛と人の愛情と双つは得られないものて有らうか？家を出る日は最早二週を出ない、淋しい庭に向つて柱に倚つてうら悲しい胸を抱いた。

九月廿日　雨ー最早飽きた。昨夜から俄に歯が痛むて今日も續いて居る。正午頃ます〳〵痛か增して、發熱迄する、苦しい實に苦しいのを田舍には、歯科醫さへ別に無い。只空しく新聞の廣告で、ケレオソート液や今治水を、見て居る計。冷水を含むて飛び上る樣な痛みを忍むてわづかに後の冷えるのを待つのて在る。昏々として眼を覺ました時歯の痛みは薄らいて昨夜からの疲れに寢むたのて在つた。夜燈下の團を蚊帳の中から見て、無事の淸福の價尊きを切に感じた。病は青春を食みつくして了ふ。

廿一日晴　秋晴の朝開け放した、座敷の疊が青く冷たい光を帶びて居る、私の寢た跡にピンが落ちて居て此れも冷めたく光つて居た。歯は忘れた樣に癒つて昨日が夢の樣だ、井戸へ洗ひ物に行つた。そこへ寺のお嫁さんも水汲みに來た。「よく降りましてね」「ほむとにね」「でも水が多くなつて汲むに大變樂に成りましたわね」「然うですよ、てら木の葉が一杯」などの言葉が交されて、お嫁さんは手桶を下げて行つた、汲み込むだ盥の中にも柿の葉が浮いた。彼方此方の堤や草の中に彼岸花の赤いのが多く見え出した。農家て糀を、ふかす時に。重箱下げた人が寺の門を出入する、彼岸の入りて在る、昨日一日寢て人戀しさの切なるを、覺えて今日は、半紙三枚へ細かく手紙を書いた。庭には、秋海棠や秋草が咲いて居るが今は、それも封じ込むのに飽いてる。自ら投函に行つた。村の晝は、靜だ、長閑な、秋日和に老人が子供を遊ばせて居る、麥つきの音もおだやかに……然かも若い者の遊び歩いて居るのを許さない。里人は、私の事を「病人か！」と云ふて在らう。さも無ければ村に若者て遊むて居る者は無い恐らく一人も居ない。自然の制裁が此の靜な平和な、沈默の中に物の胸を刺すては無いか。私は早く行く可き日を待ち焦れた。然して支度を手近から初めるのて在つた。

二十二日　晴れ、行く日の用意に袷を縫つた。私は母の心を、能く知つて居る。母の子を想ふに、餘り病的て在る。私は母と語るのを止めて、只慰めた。自分の幸福を、祈つて呉れるのを信じて、行く日は、決した。皆悦むて居るのに憾母計は……夕空晴れて、久し振りに九日計の月を仰ふいだ。（八寅）



舞臺に出る迄と出たる後

香時

七日。しとしとと軒端をめぐる玉水の音。あゝ又雨かしら、だが私、秋の雨大好き、昨夜は総てがおそかつたのでなんとなく寢足らぬ氣がする、東の雨戸を開けると昨夜から降つたらしくい小川の水が大分增して居る、岸の野菊の美くしい事、山際のお寺の處までも薄紫に煙むつてゐる、野菊ケ原とでも云つたらよさそう。八時頃皆そろそろ起きて來る、下では宿の小母さんの大きな聲が聞える。御飯が濟むと狂言方が稽古を知らしてくる。今日は前が曾我に、切お半長の帶屋の虎御前と後がいやな母親を引きうける、おひるから雨が上つたので子役の政ちやんと化粧紅を買ひに行く小間物屋て政ちやんのリボンを見立てゝゐたら、姉さんそれより此方が好きだなんて、ビラの簪をいぢつてゐる。歸つて床山へ遊びに行つたら政ちやんが先刻のをお母さんに見せて喜んでゐる。果は今晩さして出ると云つて、お前は犬坊丸ぢやないのといはれ、つまらぬ顏をしてゐた。

　夜樂屋風呂で白粉を流してゐたらオゝ寒むと、仰山相に立女形の峰ちやんが入つて來た、切の帶屋でほんにいゝ世話女房だつたわと云ふと、貴女のも心配してたが、わりに惡がきいてよ、なんて大笑ひ、道理で梨子のしんが飛んで來たもの。

　八日、一番太皷に目明く、枕元を見ると五時、又うつうつするとがやがや聲がするので驚いて起きたら八

時、仲よしの峰ちやんが見えんので立役の花枝さんに尋ねたら早から散歩だつてまあ……降らねばよいが御飯がすんで樂屋髷に結ひ合ふ、反古の新聞の女優募集が目につく、囃子の小母さんが座中惣出で受驗にいつたら如何でせうなんて、又大笑ひ。今日は布引に切油屋、前を休んで伊勢音頭のおこんをする。部屋入り前町のひいき筋から座中へ金封を下さつた。三番が鳴る久しぶりでゆつくり日が暮れてから小屋入りをするつもり、土橋の上に立つてゐたら政ちやんが己れが取つた己れがとつたの元氣な聲が聞える。行く。昨日よりは天氣だのに見物が少ない樣子。化粧も終へて濱島田に水色縮緬の掛け物、黑地に千鳥を水にあしらつた裾模樣の舞臺着で、團扇片手に鏡にうつしてゐたら、下廻りの人が手紙と寫眞を持つて來て呉れた。時間が無い故寫眞を見る、思ひきり出た前髮に何とやら卷、セルの單衣の意氣なのに綾浪織の夏帶、肩から掛けた金の細ぐさり、まあ五分のすきもない當世風の道子さん、お美くしいこと、皆集り合ふ。はねと共に見物が浪立つ、歸つてさきの手紙を讀む、いつもの樣に細々と、涙が出そう、道さんばかりだもの、榮えた昔も今も變らずに女役者風情を友として下さるのは。窓を明けると向ふの仕打ちの娘さんが琴歌を小聲に唄ふてゐる、あゝ私だつてもとはとつひぼろりとなる。うしろでお俠な蝶吉さんが女學生だなんてなんだ、今も私が外で見物の歸りを見てゐたら、いやに氣取つたのが二人、聞えよがしにいやですねえ女役者なんて、同じなるなら私だつたら未來の劇壇を背負つて立つとか何んとか、そりや私達はつまらぬものさ、だが心までもいやしいとは云はさないつて。あゝ理想も何も心のまゝになれば此んな苦勞はせぬものを、身は浮草の旅から旅へ、明日は次の興行地へ行くとの事である。(入 箕)

學生時代より家庭時代に移らんとする間の薄き愁

臼井道子

七月何日

何だか斯う好い匂ひのする朝の氣の中に、帶なしの

寢衣姿の女を方々に見ながら、太田の山へ行くてゝいらの田舍風の景色はすつかり氣に入て仕舞た、野朝顔と螢草とを土手の草の間に見出して摘む、歸り道につくと「おミッチャンお遊びなさい」と歌の樣に言つて七つ位の桃色の洋服が、ビッタリ閉たさゝやかな竹の門をたゝいて居ると「まだ寢てるよ」これは又男のだみ聲「さう」と矢張歌の樣に云て溝のふちをぶら〳〵歸へ



劍舞　　青森　稲垣かほる

る後姿が可愛かつた事。旅なる敏樣から御端書が來た、高野山に居らつしやる「高野は淸い靜な處、私はもう此山を下りまいかと思ふ」たつた一人でさすらひの其境が羨しい。頭痛がしていけない、前額部に小さいワクでもはめて、キユッとしめられて居る樣、ビリ〳〵痛むけれど、お祖母樣のせまい御胸をさはがせるのが苦

しいから、江戸櫻ははらずにおく。今日は成丈書見をさけ樣と思て、財布を縫ふきれは入つ橋の松葉形の美事なのが丁度よくあつた、白い處へ字を入れたら面白かろふと思て、白玉姫や常夏をさがしたけれど、思ふ樣なのがなくて止める。泣菫は私も好き、暮笛集が讀んて見度い、泣菫々々とよくおつしやた峰尾樣を思ふ、どうして居らつしやるか、私とはたつた二月程のお交りだが、此まゝにして置ては中絕えるには定て居る、此頃にお手紙でも出そうかしら。夕方お祖母樣の傍でお裁縫をして居ると、又敏樣から、奈良に行らしつたとの便り私も行たつけ、若草山は好い山、神々しい木立の下を鹿にまじつて歩きもした。夕食には何も造へないで、お埜のお芋とお茄子てすまして置く。夜祖母樣と出る、野毛坂を下り樣とすると、眞正面の中天にうす絹をきた圓い月、灯の美しい街を右に折れて行くと、もうすつかり雲を離れた黄色い圓形が、水色の中へポッカリ浮た。空は一面の銀砂子、月を左に、行く手の空にはおごそかに湧き立つ雲の色。歸て夕刊を見ると、雨の宮樣のとが出て居たので、ふと、昔の樣な元氣な父樣は、もう見られないのかしら……と斯んなことを考へて仕舞た。

九月何日

ふと目を覺すと、子の神樣の太皷の遠音。宵宅一日雨に濆した昨日の朝は、矢張覺束なげの雨催ひ、お花もお提灯も出されやしない、斯うと知つたら提灯掛をつまらない造へさせるのではなかつたものを。お豆腐屋へ味噌漉持て出かけ樣としたら、何も御前がと母樣に止められた事もあるし、昨日は又、お煮豆買ひにと下駄をはいたら、何卒それればかりはよしておくれよと祖母樣が袂を取てのたつての御歎願。今に自分の家になつたら何でもするはと、密に笑む、と暗かつた行手に一道の光明でも見出た樣に、急に目の前が明くなつた。縫ひかけの竹の袷も今日は出來樣、中庭に向て襟をつけて居ると、急にはだ寒い淚を誘ふ或物は、私の頭を胸をつゝんて仕舞た、何とはなしに心細くて、暖い人の膝へかぢり付ても泣き度い日、私には辛い秋が最早來て仕舞たのだ。炭やの引越したあき家で、おはやしが初まつた。陽氣な音、私をよびさまして呉れる笛の太鼓も笛も、却て亡國の悲哀でもこもつて居る樣に聞えてならない。と前の家て江の島をひき出した、さびしい音、どうしてもお琴は秋のものだと思ふ。格子がガラッと開いて郵便！飛んで出ると神谷町の兄樣

の御文、必と左樣よと云ひ合して見ると、案の丈御安產の御報、御生れになつたのは御男子「母子共至極肥立も順當」二十三て三人の御母樣ですもの、姉樣は御えらひ。海老茶の御袴召じてよく麻布へ行らしつたつけ、彼の頃は、私も未だ三年位て、紅葉と小笹にかこまれた洋館の書齋て、苦知らず學て居た時分、彼のまゝ榮華が續いたなら、私と云ふ者の未來はどうなつたかしら、貴いしかも短い一生を、價値ある物にさせ樣の御心から、神樣が連れて來て下すつたのが此麓、そゝり立つ險阻な峠をよぢよく〵とおつしやつては下さるけれど——おゝ左樣だ三日は加藤先生の御演說日、又新しい空氣を吹き込んで頂かう。

九月何日

優しく訪ふ女の聲に出て見ると、野毛からお勝がお使に來た「今日六時から下田先生の御演說が御座いますすが如何ていらつしやいます」と、板敷に白い指を揃へると、島田に結だ銀絲がゆらぐ、是非御供をと願て置く。蟲が知らしたか何心なくふと見ると、土間に濡れて居る姉樣の優文字、まあひどひ郵便屋さん、いつの間にと、とんだ人まて恨まれて、夢中て封を切た、拙い作が文壇に出たと云て、斯うして喜んで下さるのも姉樣ばかり、「暫くは本をかゝへて離せませんてした思ひがけ無い名があつたので、お胸をどらせなすつたろふ、姉樣の、御机にすいつけられて居らつしやる處がほんとに、見える樣、神樣の御胸が其處に、必とあつたのは相違無いけれどもとにかく此世の中て、人と人とが兩方から結び付た姉妹に、どうして私等の樣なのが又とあらうと思てはいつも〳〵心から感謝して居る、五時頃から支度をして野毛へ行く、久樣は御風呂に召して居らしつた、それから御化粧の間が大さわぎ、御ぐしは今日はマガレット、茶色の幅廣をピンと結んて、御器用に御化粧なさるめいせんの綛を召した處は、小づくりの、どう見ても十五六、ましてこれがつぶし島田にしぼりの浴衣と云ふ時の、久樣とどうして思へ樣、シヨボ〳〵雨に蛇の目が六つ並ぶ。御演說が始まる迄には、かれこれ一時間程待て椅子に付いて例の御束髮例の御被布、御寫眞てこそ度々なれ、今日が初對面、まして女傑は、目前三間とは離れない處に居らつしやるのですもの、私の胸はをどらずに居ないひくく共、明瞭な御話ぶり、力あり、興味あり、且有益なる御話をうかがつて、野毛へ歸たのは八時頃。電燈まばゆい西洋間て、露營の夢のピアノにうと〳〵とし

て長椅子によつた。

保養がてらの別莊住居

政子

九月十日。庭の萩が咲き亂れて居る、今日は亡き母樣の御命日だから、一枝折て御寫眞の前に供へ線香を立てる。立ち登る煙りの中から見ゆる、慈愛のこもる御目附きつとしまつた御口、ぢつと見て居ると政子とやさしき御聲も聞え相て有る。生れて二年やそこらでお別れしたのだから、お顏を知ろう筈はないが、此通りで有た樣な氣がする。乳母が來た、マアお孃樣よくなさいました草葉の蔭からお母樣もさぞお悦びて御ざいましようと言ふ。乳母や妾の母樣此とほりだつたのへエ其とほりでしたとも、そして御やさしい方て御ざいましたな、女中達が病氣で休んで居りましても、貴孃勿體ない、お手づからおかずなど拵へて食べよと言つて下さりますので、昨日參た佐助爺なんか神樣の生れ變りだと申して居りました。そう、今なら可愛がつて下さるだろうネ。それは貴孃申すまでも御ざいません今度の御病氣だつて一番に成て御心配なさいます、と言さして涙含んで居る、妾も悲しくなつた、母樣の有る方が羨ましい、十年の命を五年にちゞめても、母樣と一所に暮したらいゝと思ふ。

午後、お父樣御留守て淋しいから蓄音器をかけて居ると、兼が近所の人が二三人聞かして呉れと言て來て居りますと言ふので此方へ通す。今日は雨が降るので田圃は休みだそうな、後四五枚仕て居る内に聞手は增して十四五人になつた、緣にずらりと並ぶ、皆感心仕て居る、ほんまに不思議なもんやな、そうよな、こんなラッパから人間の聲が出るなんて三味線も笛も、どんな事仕たあるんやろか、去年妾がお祭の時に聞たのは耳に當てゝ聞くのやが、こんなによくわからせなかつた、と目を丸く仕て餘程珍らしい樣だ、始めはほんの二三枚の積りだつたのが、遂々三十五枚皆仕てしまつた、御かげて手に豆が出來た、夜八時頃父樣妾の注文の西洋菓子を持て歸られた。

九月十五日　裏の葡萄棚へ行て見る房が四五寸程も下がつて粒も大きく朝日を受けて紫の露が滴りそうて有る、一ツもぎつて口へ入れるとお旨いので、早速

母屋へ歸て籠をさげてつみに行く、ブンブンと蜂のうなりを聞きながら一心につんで居ると、だしぬけに、ヤアお早うと言ふ、見るとすぐ前へ兄樣と正夫樣が立て居る、兄樣の肩には寫眞器が有る、マア少しも知らなかつた何所から御這入りになつたの、何處て此處からさ、と見ると成る程垣のやぶれた所が見える、マア隨分亂暴だわネそして早くから出かけなすつたのネ、そうさ四時に起きたんだ、政さんの樣に寢坊じやないよ、と妾が知らないと思つて、妾が家に居た時は起しても中々起きて呉れなくて困つた、皆さん此方お出てなさいと座敷の緣に蒲團をしく、正夫樣今日は何地らへ、飯山の方へ行きます、政さん一ッ寫しませんか、エ、有がとう又今度に仕ましよう。



朝　　陸奥　釜澤てひ子

午後、田村ドクトル來診、別に變つた事もなし、ほんとに妾の病氣も長い事だ、此頃では醫者に脊の方見せるのも馴れきつて仕まつた、獨り居室て小說讀んで居ると今日は玄關に聲がする、たれも出ないので行て見ると八ッ位の女の子が美しい白百合を持て立て居る、此間は有りがたう、是母さんが上げますと云ふ、蓄音器の禮だ、田舎の人はていねい

なと思ふ、御菓子を紙に包んで持たすとニコニコと歸て行た、夕方兄樣達御歸り、食後茶の間で父樣もまじつて詩やら謠やら調子はづれの琵琶やら、天狗の集合とて賑やかだ。私が兄樣の琵琶たら新內の出來そこない見たようネと言ふと、馬鹿言へ政さんの琴より上手だなんておほゝ、七時を打たので父樣と二人兄樣達を停車場まで送て行く、歸りに勸商場へ這入りリボンを買て頂く。

九月十六日　朝四時頃表の戸をトントンたゝいて電報電報と言て居る、父樣も妾も驚いて起きる、電報は橋本からで姉樣に御産が有たのだ「ダンシ、アンサン、オヤコブジ」と有る。父樣は夜が明けるのを待ち兼て一寸見て來ると仰て、イソイソと出て行かれた、それも其筈初孫だもの。妾が、可愛だらうネ早くだいて見たいわと言たら乳母やつたら、貴孃も早く丈夫になつて御嫁づきになると直ぐ御出來になりますよ、そしたら乳母が一番にだかせて頂きます、なんて色々な事を言ふ、妾未だ何所へも行きや仕ないのに、氣の早いのにも程が有る子供なんか出來や仕ないだろうと思ふ

午後。昨日賑やかだつた故か、今日は格別淋しい、橋本の家では今頃と思ふと、何だか、自分一人島流しにでも逢つた樣な氣がする、兼が手紙を持て來た、本宅の御母樣からだ、ほんの義理一ぺんの見舞だけ、何う仕てこんなに冷やかなんだろう、繼母てば皆あんなものか知ら淋しくて淋しくて、仕方がないので、乳母に兼、太吉に近所の子供二三人よせて裏の芝生て鬼事する、兼が鬼になつて、何う仕た拍子か、すべつてころんだ時はおかしかつた。夜珍らしく花子樣御出てて久しぶりに二人琴をひく、妾は苦しくなつたので中頃から止めた、明るい洋燈にてらされ、ほんのりと色づいた頰、活々と輝く目、細い澄んだ聲て唄いながら、ひいて居る花子樣こそ人生の花だと思ふ、妾なんか虫のついた花だ、折角今迄延びて來て是からと言ふ所で虫がついたり仕て、たとへなほつても完全な實は結べまいと思ふ、九時父樣歸られ大きくて丈夫相な子だ、と仰つた。



縁談期に入つた心の動搖

曉子

二十三日、くもり、昨日からの要ハ袴十時に漸く出來上つてすぐお臺所へ下りる、涙が出て仕方がないとて今朝眼醫者へ行かれた母樣、涙管の手術をしたとて、車でおかへり、中の間へお休みになる。

午後この二三日の忙はしさてとり散らした二階中のお掃除をする。お床の山桔梗ももう萎れかゝつて居るけれども、楓樹一本軒にせまると云つた樣な今の住居どうする事も出來やしない、今の縁談がまとまつて、嫁つたなら、その廣い邸內へ下女を相手に花を植えて野菜を作つてなどゝとりとめもない事計り思ふ。雜巾がけをと水を汲んでる所へ光子さん謙ちやんをつれておこし、久々ぶりとてうれしくて、お茶のさめるのもかまわず、心ゆく計りはなす。話は大方文藝の事でもちきり、文士の生活難など云ふ問題も出た。「私も頭惱の整理さへ出來れば何か書けるのてせうけども…………川上眉山の樣に抱負計りが大きくて遂に書かないで死ぬるのじやないかしら」と光子さんは仰つしやる。文章家てなつて居た光子さん、二十五の秋をお子かゝへての未亡人とはあまりお氣の毒な話してある。くれ合を叔母樣の宅へゆかれるとて乳母車だけ殘してお立ち出て、あとて見たら謙ちやんが唾つけてあけられたと云ふ指穴が障子に澤山あいて居た。朝からつけてあつた單衣を一枚洗濯して、お夕飯をすませ、趣味をよんでる所へかへつてらしたので、夜出た事もない身が平常着のまゝそこまでと一しよに家を出た、ゆく〳〵牛乳屋と云ふものゝ感想をきいて見る。光子さんは古いホトヽギスにあつた記事を引き出して非常に汚ないものだと仰つしやる、私はまた大變詩的な牧場の樣なと計り考へて居たので、いさゝか失望しかけて來た。立町の角まで見送つたが雨はふり相てあるし、何時まて行つてもはてしがないので、お祭りの日を約して、歸路についた。堀端の大寺の榎の木のもとまで來ると冷たい雨の雫が額にポタリ、歸つたらもう衣類はビショ〳〵初枝は本を投げ出したまゝスー〳〵とうたゝねをして居た。

二十四日、雨、秋季皇靈祭なので初枝千枝要弘皆宅

に居る。朝の用事終つて机に向ひ、家庭日記の事考へて見たけれども——此間の朝散々〳〵に心配した上句心晴らしにもと琴會に行つてはからず誌友の百合枝さんとお心安くなつてうれしかつた。一日の事をかこうとしたけれども、日は經て居るし、それに心がふはり〳〵と牛乳屋の方計りへとんで居るので物にならなかつた、初枝は傍で自分の八二重の帶をぬひ乍ら「姉樣は一人でニコ〳〵笑つたり、此頃は餘程如何かしていらつしやるよ」と云ふ。

夕飯の支度にと下へおりて見たら、千枝ととなりの雪枝さんと二人で私の西洋白粉をベタ〳〵に顔中へぬりつけて得意然と、表へ來る人形つかひのうたをまねて居る、それが又餘りに上手なので小言も云はず笑ひ出して終つた。夜に入つても雨はやまぬ、初枝が日記をつけたまゝあけ放して湯に行つたので、罪な事とは知り乍ら少しよんで見る。

もう同級であつた人も半分以上は嫁つてしまはれた高井さんも秋津さんも、もうお妊娠中だと云ふし、松木さん合井さん藤崎さんももう近くにお嫁入り遊ばす相な、あゝ私は何時まで家に居なきやならないのだろうか、やがてオールドミスと笑はれる日も來よう、

まだかいてある、私は一讀驚ろいて終つた、ことし十七この四月に女學校を出た計りの、無邪氣らしい子供の初ちやんが、まあ！私たら二十一の春まで學校に居たけれども、それでも嫁ぐと云ふ樣な事は思つた事もなかつたが、この頃の女學生は油斷がならないなど思ふ。それにしても私が何處かへ嫁かなきや、初ちやんが出られぬのは知れた事、寧そ牧場をして人の所へ嫁つてしまはうかしらなど思ふ。父上と弘は例によつて將棋に餘念もない、私は其側で今泉さんへ結婚のおよろこび狀をかいた、昔の閨秀今は巡査の細君といふ尚殘れる人の身の上を判斷して見た、しらず私の運命は…………、今日も夢の樣にくれて終つた。

二十五日、はれ、城山の峽から朝ぎりが立ち上つて居る。愛と弘がボートレースにゆくと云ふので竹皮包二つ拵るつて針箱の蓋をあけるともう八時、今度新に染めにやつた幔幕をぬひかけたがとかくに針が亂れがち、母樣の髮結ひに來たおときさん、私にお島田をと云ふけれど、私は嫁にゆく時だつて日本髮になどは結ふまいと思ふ。

ひるすぎ從妹のすみさん、愛ちやんを下女に抱かせ

て御無沙汰たづねて來る。何時見ても美しい事と羨しい晩のお菜は私の好きなお浸しに燒魚、「初ちやん皆さんのお給仕して」と云ひすてゝ二階へ上つた。干物を入れようと物干に立つたが又も日の落ちゆく空計りを見入つて居て、お母さんに呼ばれてビックラした。食後二階のお床の前に横はつて讀めもせぬ軸の字計り見作ら、父樣は今頃あの地てどんな事を調べていらつしやるだろうかなど、いろ／＼の事を思ふ。もしか血統なども正しくて嫁くと定まつたならばなど思ひはてしもない。注意してきけば營所ては盛にラッパの稽古をして居る。師範學校てはオーカンが宅の離れては初枝の琴のおさらへ、堤ては虫の聲々さへしきりに聞えて居るけれども、それらは唯風が耳元をさぐる樣に感ずる計り。フイと起き上つて窓をおすと外はよい月夜、光を浴びた師範校の白館の前をゆく葬ひの灯影がゆら／＼と並んて濠水にうつゝて、はては松の木立にかくれてしまつた。氣も向かぬが締切日に間がないので妹と向きあいて原稿かく。母樣が長持から絹夜具を出していらつしやるのてお客樣は何誰ときいたら、かつて昔一時は、我家の人てあつた父上の生みの母なる人が久々て尋ねて來ての窮狀の訴へ、氣の毒故一夜ても大事にして上げたらとの母樣のおはなし、私も、いろ／＼世話をやいて上げた、でも明日祖父樣とあはれたらと、何だかおだやかならぬ心地もする。私は女なるもの〻運命を思つてついて淋しい心もちになつてしまつた。あゝ明日は父上がお歸りなさる筈。

母と兄に仕へて淋しさを紛らして行く

筆子

二十二日。好いお天氣、でも何處となく秋らしくなつた、兄樣は社に、母樣は既うせつせと綿入物をお始めになる、母樣つたら、奈何して這麽にお働きなさるのだろう、それだのに私はまあ、何もかも母樣にかづけ、天晴學者顏して机に向つた限り、横の物も竪に起さぬ橫着さ、人樣には、善く御勉强なさいますねと、云はれるけれど、省みれば耻かしい。女子文壇に投書しやうと思ふのだが、漠として更に纒つた感想が浮ばない、這麽時に限つて、時計のセコンドが耳蒼蠅く、

全て急性な時の力に追ひ立てられる樣に。

十一時、日は少し廻つて、窓から一杯に照りつける庭のコスモスが搖めく上を、秋の蝶が力なく飛んで居る、如何も上逆せがして、カッと頰がほてり出す、さあ睡くつてたまらない、此間お清さんに進められ、三崎座なんかで夜更しゝたもんだから……未だあれが祟つて居るんだわ、さういへば、あの大詰の幕に、鐘樓守の娘か、手負ひになつて鐘を撞き、息の下から戀人の名を呼びつゝ、落入る處が實に善かつた、無論狂言ぢやあるけれど、彼娘に今死ぬる際迄、滿身の愛を以て其人を信賴し、生より死の刹那、無意識に戀しき名を口にしながら、心強く死んだのだろう。もし戀をするなら私も此位熱烈なのが仕て見たい、けれ共私見たいな冷靜な人間は第一、單純な戀すら仕得ないのだ、何故かう私は、事物に對する感じか鈍いのだらう、神經が如何か仕てるのぢやないかしら、何だか心細くなつて來た、信樣は逐々臺灣へ行つて了ふし……彼人には、我ながら冷淡であつた、何だつて、あゝ、つんけんしたのだらう、一葉女史の經つくゑの樣に「ある時はありのすさびに憎かりき」の方と見える、別れてあとは手紙でも遣つて見やうか、馬鹿なッ私、今日は餘程どうかして居る。向ふの蕎麥屋で三味線を引き出した、偶と耳を澄すと小意氣な聲で「……流れ次第は風次第梶を枕に湊ぞへ」時に取つて、淋しい歌だなと思ふ。

夕方、滅切冷やかになつた。兄樣が晩酌の一杯遣つて被入る處へ、清水樣がお見えになつた、一人莞爾々々しながら「昨日稻毛へ行つてね、冴え〴〵した月夜を二人で松林を歩いて見たまへ、人生の快樂此處に盡せりだ」なんて盛んに千代子さんとの、中を吹聽なさるんだもの、「清水樣、御馳走樣」笑ひながら母樣に一本やられて「やア」と頭を搔きながら「君も妻を貰はんぢや可かんぜ」とてれがくしを仰る、「うむ、僕はまだ這奴の方が可愛いからな」と兄樣は德利を指してお笑ひなさる。内の兄樣は、お酒を上らないと、仕事が出來ないつて……。九時過ぎ清水樣はお歸り、奥樣をお待ちになつてから、妙にそわ〴〵して被入ること、格子をあけると、權現樣の杉林がカッキリ浮んで、いゝお月夜！だか清水樣は生憎お一人て、お氣の毒樣。何處だろう木犀がぷん〴〵と匂ふ。

二十三日、晴、裏の崖に赤い草花が一つ咲く、早朝、長久寺へお彼岸のお使ひ、方丈樣は御不在だつた、萩寺の方を歸つたら、まあ、花は悉皆色付いて居る、思

はず門内の、花より花を分け行くと、未だ露が、はらはらと散る、鐘樓の邊の白萩は去年より一層盛りてある、「白萩や露一升に花一升」私は白い方が好きだ、木戸から若い御納所さんが出て來て、「御這入んなさい、構ひません」と笑つてるから、氣まりが惡くなつて、そこ／＼に出て了つた。家へ歸ると、母樣御召を着換て被入る「鳥渡神田へ……、大變手間がとれたね」と仰るので、あゝ惡るかつたと氣がついたが「遲くなりました、遂ひ萩寺を見て來たので……」と有體に申上ると「そうかい、そりやよかつた」と勿體ない、一言もお叱りなさらなかつた、伯母が亡くなつてから、從姉の處へ度々被入る、私が母樣を愛する範圍を從姉が侵しはせぬかと、少しく氣になる、今日は机に向ふのはよした、茶の間で萬朝を讀んでると郵便と聲がした、おや逢原さんから、赤さんがお出來なすつたつて、まあ、坊やだつて、坊チャンの御自慢ばかり、この春お目に掛つた時なんぞ、眞赤になつてろく／＼お話もなさらなかつ



郊外　　下總　小堀としこ

た癖に、お子樣を持つたら、大相お得意で被入る、例の心持首を傾げて莞爾なさる、お顏が見えるやう、同時に丸髷――玉の樣な赤さん――が想像される。けれど私は、矢張わけもなく結婚てふ名を耻かしがる。その時代がなつかしい、かうあから樣に仰るのは、ちと厚面敷い樣に思はれた、表で何か云つてる、魚やだつて？「何があるの」と聞けば「今日は、鰺にせいごに、鰹の一盥……」面倒臭いから斷つて了ふたら、大變母樣が遲いので、さあ困つた、お惣菜の仕度をころり忘れた、さぞ兄樣はお腹をすかせてお歸りなさろふに……。暗くはなる、虫の音は地に滿つる、あゝ先刻買て置けばと、悔んだつて始まらない、仕樣事なしに戶を閉めて、根津に出掛けた、夜見世が立つので往來は、ざわついて居る、角の呉服店につるしたメリンスが白熱瓦斯で異彩を放つてる、カンテラの油烟と燒鳥の匂ひが漂ふ、魚多て、とびの切身を買つて馳ける樣に歸つた、思へば、うたかたの水泡と消えた四年以前お孃樣〳〵と氣嫁とられたこの身が、今からして、竹の皮さげて步るくのかと、遂ひ胸が一ぱいになつた、人間の禍福は料り難く、春の花は忽ちに秋の紅葉と散り果つる、例は萬々承知しながら、奈何したものか心細い。兄樣の前にお膳を持ち出しくど〳〵と言譯すると、「ヤ、お前も魚が燒ける樣になつたね」なんて冗談を仰有りながら、あの鹽物で元氣よく召上つて下すつた。

母樣がいそ〳〵と御歸りなすつた、何かいゝ事があつたと見える、「お歸んなさいまし」と云つた私も、思はず笑顏になつた、寂寥なりし胸は、いつかあたゝかい慰安を覺えた。あゝ母子三人、こうして水入らずが一番だ、もう考へまい、思ふまい、人を怨まず、我も泣かず、面白可笑しく暮すやうに心掛やう……。

周圍に連れて大人びて行く擧動

愛子

三日、今日の國語の時間程辛らかつた事はない、あの深見さんの意地の惡るいのは今日に始まつた事でない、いつもの事だけど、けれど今日程厭やだつた事はない何を根に持つてのあの仰せ？、若しも私が級

長になつたのがお氣に召さなかつたのだつたら……
……あゝ私は濟まない、私には全く此役が不適當なのだ級を統べて行く丈の學力は私にない、それと知つて居ながら、いくら先生がおつしやつたからと云ふても何故私は此役を受けたのか、何故斷らなかつたか、全く皆樣に對して濟まない早く三學期が來ればいゝにと云ふても私でも矢つ張り人間だもの、深見さんのなさる事が怨らめしい。
家へ歸つて、深見さんも餘まりだ、いつか屹度怨をかへしてやると母樣に云つたら、
「お前には時計にほつてある字が見えませんか」と云はれた、
「敵を愛せよ」、私は此語を忘れて居た、
吁々私は誤まつて居た、深見さんを一圖に怨らんだのは私の心が足らないから、
時計にほつてある文字に對して私は深見さんを怨らんではならない。
私は此言葉を以て、此私の誠心を以て屹度深見さんの心を和らげて見せやう、誓つて柔らげて見せやう、深見さんても決して心から惡い人てないのだから、
「敵を愛せよ」此語は私に取つて唯一の良師、良友！

五日　朝郵便受にある郵便を父樣の處へ持つて行かうとすると、其中に私宛て水色の封筒の手紙がある、男見たいな手て兄樣にしては書き方が違つて居る、裏へかへすと只若葉と許り、宛名は確に私！こんな手紙を私一人て開くといけないと思つたから、父樣の前て開くと、私は吃驚した、何んだか厭やな事許り書いて終りに〇〇町にて〇〇〇敏夫と書いてあるのだもの、腹立たしいよりも情なかつた、こんな事を書いて送られる程に私がだらしなく見えるかと思つて。
丁度其處へいらつした母樣に見せると何も云はずに私の顏を見て、「お前は此誘惑に勝つ丈の心がありますか」と云ふ樣な眼光をしていらつしやるのだもの、腹が立つて堪らない。
私は必ず此誘惑に勝つて見せる、これ位の事に誘惑されて堪るものか。
十日、福田の叔母樣お越し、相變らず利一さんのお嫁さんの事許り、叔母樣の愚痴も久しいものだが、叔母樣が惡いのかお咲さんが惡いのか、叔母樣のお話しを聞けば成程お咲さんが惡いらしいし、お咲さんを見れば其樣に惡い人てもなささうな、何方が惡いのやら。
私は兩方が惡いと思ふ、こんな事を私が云ふのは生

意氣だらうが、兎に角叔母樣が今少し我儘をお直しなすつてそしてお咲さんが最つと優しくしてお上げなすつたらと思ふ。

叔母樣は叔父樣に早くお別れなすつて、氣が少し癖んで居る處へ、年をお取りなすつて、氣が短くなつていらつしやるのだから。

嫁と姑との間は六つかしいものと聞いたが、眞實にそうだらう、實の親子の間でも折々は氣まづい事があるのだから、別して他人の事だもの。

夜母樣に此事を云つたら、お前も大分大人になつて來ましたねと笑はれた。

十七日、日曜だから久し振りでお祖母樣のお墓參りをする、ゆるゆると立ち登るお線香の煙りをぢつと見て居ると、お祖母樣の姿がまざまざと目に浮ぶ。

私を眞實に可愛がつて下すつたが、私は餘りお祖母樣が好きでなかつた、私の爲になる樣にと折々苦い言葉を出されたのが幼い私の耳には餘り快く響かなかつたから。

今其言葉をようく味ふて見ると…………

……濟まなかつた、濟まなかつた、

「ある時はありのすさびに辛らかりき
無くてぞ人は戀しかりける」

て今更何と云つても仕方がない、もうこんなに冷たい石になつて居らつしやるのだもの。

平常よりも丁寧にお念佛を云つて墓地を出た。

巖龍院の門の處迄來ると石段の上に座つて居た年を老つた――丁度亡くなられたお祖母樣位ひの――女の乞食が、どつか痛いのか胸の邊からお腹の方を撫でながら、憐れみを乞ふ樣な眼光で私の顏を見た。

弱々しい、骨と皮と許りで血も何も枯れ盡くした樣な身體をして、骨だらけの手で撫りながら、聲を出す氣力もないのか默つて居て私を見上げた時には、堪らなくなつた。

急いで其側へ寄つて、始終懷に持つて居る寶丹とゼムと、そして紙入にあつたお金とを、半巾に包んでソツと其手に渡した。

其時の婆さんの顏、何とも云ひ樣のない。

どんよりと曇つた眼からハラハラと涙を溢して、無言の儘に額を大地にすりつけた、私はこれ以上此婆さんから禮を受け樣とは思はぬ、身體を大切になさいよと云つて其處を立ち去つた、暫らくして後を振り向くと其婆さんは此方を向ひて手を合して居た。

私は何んだか恥しかつた、僅か許りの恩みに對して婆さんの感謝が大き過ぎるから。

けれど大變心は愉快だつた、あれ位ひのお金はちつと氣の利いたリボンを買つたら直消えて仕舞ふ。リボンは只一時の飾り、直に古くなつて仕舞ふし又それを買つても左程役に立たない、同じお金でも今日のは役に立つたと思ふ、大層に云へば、人一人救けたのだから、今日は大へん愉快だつた。

子供を連れたお客様

篠原しげ子

八月十四日、朝寢床で目が醒めると奥の八疊の方でコト／＼バリ／＼と音がするので、いきなり蚊帳の外にとび出して見ると、すは大變、昨日ちやんと張つて仕掛けて置いた刺繡臺の上に小猫二疋、親猫と三疋、上つて狂つてる。ニラツと大聲に叱つてやつたらトトトト！と一目散に逃げて了つた。見れば上に掛て置いた紙は引き破つて了つて、鷹の翼を半分程縫つて居た絲も爪に引かけたとみえボロ／＼に亂れて、ピンと張つて居た繻子はだら／＼にゆるめて、中くぼにして、おまけに一面白繻子の上には猫の毛が一ぱい附着して居る。私はあまりの事に腹が立つて腹が立つてたまら無いから鋏を出してつり絲をブチ／＼臺からはづして終つた。母様に云ふとそりやお前が惡い、昨日夕其臺を釘に掛けて置くか、又立てかけてよけて置くかすれば良いのに、其儘にして置くから猫は面白半分に狂ふたのだと仰る、眞に其通りだ、私が惡かつたと大に後悔した。

八月十五日、兄さんの友人の岡さんが來た、先に珈琲を出した、次にお茶菓子の饅頭を鉢に一ぱい盛つて出すと、じきに食ひ上げて了つて、此度はビスケツトのカンの口を切つて二人して大方ボリ／＼食ひ上げて了つた、其してわい／＼冗話許りして歸つた。

同十八日、親友の文子さんが遊びに來い／＼と二度も手紙をよこしたので、今日は一つ行つて見ようと思ひ立つて、着物を友禪のに着替へて内を出た。道でよち／＼汗を流して馬糞をかついで來る男に行き逢つた。厭な臭氣をかゞされた。文子さんの家に來て格子戸を開けるとチリンと鳴る、奥から走り出られたのは文子さん、おやまあよくお出で下すつた、私毎日待つて居

ましたのよ嬉しいわと手引きされて裏の十二疊の座敷に通された。こゝは裏の方から何十町も連なる稻田の風がそよ〳〵吹いて來て非常に涼しい、お菓子にカステラを頂戴する、友人の事やら何やら話はつきない、午頃になつて文子さんの母樣は莞爾〳〵しながら膳を持て來て、まああなた今日は珍らしい物を差上ます、此は私の國元鹿兒島から此間わざ〳〵一斗送つて來た粟なのです、其て粟萩を拵へました至つて珍らしい品です、何卒召上つて下さいと云はれる、文子樣も口を揃へて、私は粟と云ふもの此邊で畑によく見た事はあります、黄色い大きな穗がぶら下つて居ました、未だ一度も食べた事は無いのです、珍らしい初ものを頂戴します、と云つて箸を取つて食べた、キナコの良い匂ひがして砂糖がよくきいて居たので大變お旨しい澤山頂戴した、午後四時頃私は暇を貰つて歸つた、道すがら何だか氣が暢とした樣で心地よく知らぬ間に私家についた。

八月廿日、朝、野山に女郎花をとりに行つて海邊に近い細道を歸つてくると、常夜燈の所にゆかたを着た若い男が居た、其前を通り過ぎる途端プーンと香水の匂が鼻を打つた、はゝ海水浴の客だなあと私は思つた、歸つて女郎花を床に活けた。

同廿一日、大石の姉上が敏夫をつれて來た、敏夫がよく這うようになつて愛らしい。御飯の時敏夫は茶碗を一つ投げて割つた、裏の八疊で皆な姉さんの珍らしい話を聞いてるとゴトンと大きな音がした、いそいで行つて見るといや大變、敏夫は何時の間にか床に來て私が昨日活けた花瓶をはねかやして、水は一ぱい床の上にうねつて居る、敏夫は紅葉の樣な手でピチョ〳〵其水をたゝいてる、敏夫何をしたんだい、と叱つてやるとキャッ〳〵と笑つて忽ち姉樣にすがりついた、もう此通りちつともゆだんが出來んのですから、と姉樣が仰る、皆あきれて終つた、私は女郎花を拾ふて掛花にして花瓶も花臺も押入に藏めて了つた。

同廿二日、岡崎樣から使の爺が中元の進物品を持て來た、爺は聾で何を云つてもへエ〳〵と辭儀許りする歸つた後で今の爺は三十ペンから辭儀したなあと云つて大笑ひした。夕方如露を以て庭の盆栽に水をやつてると、隣の武夫さんが走つて來て、しげさんあの海水浴に來てる女子大學出の西原先生ね、あの人、色が眞白かつたのが此頃眞黑になつてるのですよ、本當に銅を見た樣だから御覧可笑いんですよ、と云ふやいなや

早や小走りに歸つて終つた、まああれだけの事をわざ〳〵云ひに來てくれたのかと可笑しかつた、今日は眞に可笑い日だつた。

同廿八日、姉樣が歸ると仰るから私は土産に、巻鮓をした、母上がたべて酢がきかずに砂糖がきゝ過ぎたと仰る、私は此なのがすきよと姉さんが仰る、ので私は嬉しかつた、敏夫が車に乘てから此方に向いて手を振つて居る愛らしい姿も次第に遠ざかつて遂に氏神山の陰にかくれて終つた、あゝ淋しくなつた、でも此からはお菓子のこぼれも落さず、掃除をするのに良い、靜かになつたと一安心した。

半分引ちぎつた羊羹の進物

佐分華影

九月二日、二月振りに針箱を出して見て、まあ驚いた、中をしらべると鋏子は赤錆が一面に付いて、あの位つる〳〵としたのが、ざら〳〵と持ても氣持が惡い好く切れない、針は針山から出て居る所から錆て拔きも刺しも出來ない、抽斗の中はすみ〳〵蜘蛛の巣がはつて居る、糸は結ぼれて、有つた筈の糸巻が何處かへ飛んで形もない、斯うも怠けたか知ら、夏は造花を作りますからよく作れましたら一本差上げますと、前話しをお友達に爲て置いたが花一片も染まつて居ない、明日は〳〵と思て居る内に桐一葉に秋立ちて清潔に掃除して、私の袷を縫ひ初める、些とも手が運べない、一尺も續けて縫ふと手がけだるくなる、絹物なので手がごつ〳〵して思ふやうには行かぬ、袖を縫つて居るとお母樣が來て、もう丈を八寸に爲なければ不可ぬ、長くても彼れ是れ一尺九寸位にしなければ、と情けない事、今迄二尺袖許りて、まれに八寸五分位のは二三寸も短い樣な氣がしたのに、今度は一尺八寸とは私はまだ少女の心在て居るのに、母さんが避暑に行つて被行る時に、こつそりと暑いけど縫つて置けばよかつたに、まあ袖は一番後にして身から着手らう。

九月三日、今日は一の宮の市、朝から町が賑々しいお父さんが逝かれてから家は、無職なので靜かだ。活花にする樣な花は無いかと町を行く花屋を見て居るけれど、好いのがない田舍は詰らない。袷を縫ひ上げ火

熨斗をかけ押をして、ホッと一息。窓によつて空を眺めると秋暑くとか云つてるのに、早や空は高い樣な、白い雲がずん／＼と西へ／＼と行く。

座敷の方から、お母樣の聲がするお客樣は誰だらふどうも男の聲らしい。昨日小咲さんから戴いた二本入の羊羹の菓子折出して切つて呉れとお母樣が被仰る、流元で蓋を取て見て私は驚いた、二本入の羊羹が、一本は滿足して、一本は半分ばかり引きちぎつてある、餘り無慘な有樣だから母樣を呼んで是を見せた、小咲さんも工業學校卒業なすつたからは禮儀作法位御存じだらふ、奥樣だつて東京の女學校卒業生だもの、いくら何だつて知つて斯んなことはなさるまい、進物は餘程氣を付けねばなるまい、併し或は奥さんが半分召し食つたのを知らずに小咲さんが一年振りに物々しげに持參なすつたのかも知れぬ、熨斗の忘れてないのがまだ好い、いつかも琴の先生がお菓子の惡くなつたのを戴いたからお返しゝたとか被仰つた、其時にそんな馬鹿な事がある物かと思つたが此工合では何とも分らぬ。又雨が降り出した、朝は晴れて午後は雷が鳴る、夜は雨、夏など三十何日目に雨の降り初めた時は珍らしくつて外へ出たかつた、用もないのに傘なして裏へ出て顔を濡らしたが今では嫌になつて仕舞つた。

九月四日、電報と呼ぶ聲て靜けさを破られて、直ぐ受取に行く「此れ貴女の家へでは有りませんか」と渡すから見ると一ミやサブりとして片方はイトと書いてある、親類にも知人にもイトとか云ふ姓名はなし、佐分とても本家初め三四軒あるので、家ではないと返した。あゝ驚ろいた、其れてもよかつた、家ぢやなかつたし出す人も氣をつけなければ不否ぬ、まだ胸がドキ／＼とする、何故私は驚くか知ら、あの江濃地震以來神經が何うかなつたか知らない、石など重い物を乘せた車が通ると地ひゞきがするので、地震かと驚いたり夜半でも寐坊の私も少しガタ／＼と云ふと直ぐ誰より早く目を醒すから不思議、濃尾の大地震の話の出る毎お母さんがお前は地震の時に死んだ婆さんの生れかはりだと被仰る。まあひどい、生れかはりなら若い方だと思ふのに婆さんと被仰るので辨解して笑はれる。午後私の物悉皆キチンと整へ樣と本や編物日用品人形など一種づゝ爲る心底だつたのが、ゴチャ／＼出して了つたので、何から手を出して好いやら眞中で持ち飽んで居ると、妹が來て「小姉さん此の人形頂戴な」と京人形を指さして居る「厭／＼此れはお母さんが、京

都からのお土産です物可愛い〻御殿女中だわねえ」「ては此れ」と小さい人形用の茶道具々「何うしようか知ら」と考へて居ると姉さんが來た、さあ大變と、散亂ばつて居る少し許りのものを風呂敷てばつとかぶせたが見付けられて了つた「まあ千代さんまだ其んな物を持て居ますね」と「其れて私に頂戴と云つてるのに下さらない」と此こぞと思つて妹が云ふ。何故皆して大人にして仕舞ふだろふ、私は何だか悲しく變な心地になつた。

朝顔の葉も色が變つた、秋海棠が哀れ深そうに笑つて居る、あゝ夏もあの山の向ふに行つた。

一月一日より八月三十一日まで

さくら子

一月一日。(前略)行つて見ると、折りよく竹井さんも來て居られた。(竹井さんと云ふのは二三年前女子師範を卒業して、目下とある小學校に奉職して居なさるのだが、今は休暇で此處へ遊びに來て居なさるのだ)三年程見なかつたので、まるで他人の樣に私には思はれたが、然し竹井さんは親切に私の卒業後の方針に就いて訊いて下さつた。て私も別に隱す事もなく、父は先づ小學校へでも出さうと云つて居ると話すと、竹井さんも喜んで、てはきつと私の學校に來て下さい、と云つて下さつた。(下略)

二日、昨日の竹井さんの事を父に話すと、父も非常に喜こんで、今一度確かに御願ひに行けと、云ふのでまた態々一里もある親類へ行つた。竹井さんは快活て、然も何處となく尊大な處がある。私はあんな人になりたいと思ふた。

八日、第三學期始業式の當日だ。もう三月もしたら皆卒業すると云ふので、各自に定まつた己れの方針をなんのかんのと誇らしげに言ひ振らして居なさる、が私は誰に問はれても、未定としか答へやうがなかつたては御目出度うですか？等と冷やかされたりもしたが、それでも小學校の敎員になるなんて云ふ勇氣は毛頭出なかつた。

二月廿九日　卒業後の方針に就いて、校長さんの宅に相談に行く番が私に廻つて來た。耻しくてならなか

つたが思ひ切つて云つたら、校長さんも案外心よく聞いて下さつたので嬉しかつた。

三月二十五日、待ち設けて居た卒業式は來た。樂んで居たのではあつたが、女學生時代は今日限りかと思ふて、仲のよかつたお友達等の事が思はれて實に悲しかつた。思はず涙を落した。

四月十三日、四月の五日以來、十六里もある此の地（竹井さんの居なさる學校の所在地）に來てから毎日〱待ち疲れた、私の辭令は漸く今日着いた。尋常科代用敎員月俸十二圓とある。恥しい樣な然も嬉しさに堪へない思で其の日は暮れた。

四月十四日、今日は私が先生としての第一日である此の間までは先生に敎へられて居て、早や今は敎壇に立つて居るのだ。何だか急に大人化した樣な氣がする。然し多くの生徒から憚りもなく大聲で先生！先生と呼ばれると、少々具合が惡るかつた。

十五日、夜、私の爲めに心許りの歡迎會だといつて校長さんの宅で茶菓の饗應があつた。行つて見ると、もう皆さん揃つて居らつしやつた。池田さんと云ふのが（去年師範を出なすつたお方で優しい風の方）が發起者だからつて、竹井さんにもさせないて一切の應待をして下さつた。私は嬉しいよりか寧ろ恥しかつた。

二十五日　今日と云ふ日は、實に惡い日であつた。と云ふのはどんな都合だつたのか、一言の豫告もなくそれこそ出拔けに竹井さんが轉任なさる事になつた。私は非常に悲しかつた。其の夜は本當に泣いたが、もう仕樣がなかつた。私は別れない先から、もう孤兒ともなつた樣な氣がした。

二十九日、昨日の別れも辛らかつたが、今日獨り學校に來て見ると、まるで西洋へでも放り出された樣な氣がして、思はず、運動場の隅でしつ〱と泣いた。

五月三日　餘程こばつて居たが、とうどう今日も泣いた。郷里が懷しくて〱。

五月五日、今日竹井さんの後任者が來た。代用敎員で、三月に〇〇中學を卒業した許りなんださうだ。小柄な眞面目な中學生としては珍らしい男だ。

八日　何うしたものか、今日も非常に悲しかつた。泣きはせなかつたが、例の運動場の隅で竹井さんや家の事を思ふて打ち萎れて居た、と池田さんから內證相に一通の手紙を貰つた。それには、私が泣いて居る處を見たと云ふ事や、悲しまないて置いて吳れと云ふ事や、學校の事に限らずすべての事に就て不便な事があ

つたら相談相手になつてやらうと云ふ事等、親切さうな事許り澤山書いてあつた。私は今までにも、池田さんが優しい御方であると云ふ事は見拔いて居た。また人格が非常に高い御方だと云ふ事も竹井さんから聞いて居た。私は非常に有り難く、懷かしい味を感じた。

六月七日、今日池田さんから、下宿のよい處を周旋して貰つた。然し内證でだと云ふ事であつた。

七月一日、今日はじめて池田さんが宿に遊びに來て下さつた。外の先生方は何度も見えるが池田さんはまだはじめてゞ、私非常に嬉しかつた。學校の仕事にも大分明るくなつた。もう悲しいことは少しも無い。餘程面白くて、なんだか毎朝學校に入るのが嬉しい樣になつた。池田さんが一人來て居なさる處へでも來ると最もうれしい。

七月十五日、池田さんが十九日立て十四日間程近畿地方へ學事視察に出なさる事になつた。として見るともう休暇後即ち九月でなければ會ふ事は出來ない。私はまた悲しくなり出した。然し竹井さんの時の悲しさとは、何處か違つた處がある。私の心には何處かわからない。

十八日、夜の九時頃池田さんが宿に來て下さつた。二度目だ。何かと思ふと思ひ掛けもない、妻になつて呉れんかともう憚る處もなく云ひ渡された。流石に私も赤くなつた。どちかと云へば贊成の方なので、耻しい乍らに假契約をして了つた。池田さんは若し家庭が許さなかつたら自由結婚期まで待つとまで言はれた。

八月廿五日、(前略)噫!!!思ふて見ると七月十八日の夜は私に取つて記憶すべき日であつた。戀と云ふべき戀は此の時がはじめて、爾來池田さんを思ふの情は日增に增して來た。が全然父母には秘密にして居た。處が今日は、不圖も池田さんからの親書を嚴しい父に見付かつたが最後、美しい溫い甘い私の初戀ははかなく破壞されたのみならず、家名を汚すノロケ者だと會す目もない程叱られた。噫ほんとに…………(下略)

八月三十一日(前畧)宿に歸ると直ぐ今度は私から池田さんを問ふて事の次第を懇々と話して涙乍らに斷りをした。(中畧)處が流石は池田さんだ。僕も男だと立派に斷念して下さつた。が私しはどうも承知がならなかつた。考へると池田さんが憎くもなる。



最近の日記

三宅花圃



昨夜郊外へても遊びに行きたいナア、と次男が壁訴訟を耳にとめて、寐る時は御天氣ならば向島の方へでも連れて行かうかと考へながら、子供のはき物の揃はぬ事を思ふ、長女と次女は沓ても次男のは少さくなつてはけなくなつて三女のも同じく少さくなつてしまつた、三女は折々所在ない時や、遊びにあきた時は沓子〳〵とせがむ、事の多い家の中は無くてならぬ物の外はちよつと手がまはらぬ勝ではあるが、どうかしてかういふ時の爲にそろへて置いてやればよかつたなどと思ひながら、さぞ子供達が明日はよろこぶだらう、蒸汽へ乗つて行かうかと思ふに、子供達の笑顔が目に見えるやうに思ふ〳〵、いつか寐てしまつたと見えて、一二度夜中目がさめてから今朝夫の起出づるに目をさまして、思ひがけない雨になつたの子、と寐返りをしてもぐり込んて、また目をふさいてしまつた。毎

朝夫は私より早く起出て新聞を寐卷のまゝて讀れる習慣になつて居る、神經衰弱とかいふ病でとかくあちこちと故障のある體をいとつて近來朝寐の特待をあたへられて居るのをよい事にして、マヂ〳〵と新聞を見て居らるゝ橫顏を床の中から見て居る、と新聞を讀んてしまへば起してやる、今一寐入りゴーと寐んねなどと近頃段々と物柔しくならるゝ夫はいつも笑談をまじへておつしやる、ある人の依賴をうけてこの間骨相家が夫の相を見に來て、あなたは角の多い人だが、二角とれてまだ二角のこつて居ると言つた事をいかにも腹の立ちさうな時に、笑談をまぜて小言をおつしやる每に思ひ出してなんだかお氣の毒な樣におもふ。今朝もセルの御召にほころびの切れて居たのを思ひ出して其お小言の出ぬうちと飛起る、折柄納豆〳〵といつもの聲が聞える、先年京都の小母上が納豆は旨しい物とおつしやつて泊つて御出の時に買つて上げて御賞伴をした事があるが、ちよつとおもしろい味のものだと思つた、この間中子供連が避暑中の朝の淋しさにこの聲を聞つけて買つた事がある、夫の兄上もお好であつたとて、夫も二三粒は食がる、今朝は買つて見やうかと思つて呼ばせる。長男は床を疊みながら諏訪の湖へ行つた夢を見たといふ、どんなの、と聞けば、坪井の小父さまと御一所に諏訪の湖へ石器を堀りに行つたら、棺のやうなものに堀りあてゝ、中からコンナ風の土偶が出たとて滑稽な風をして片手をあげて見せる、それてもとう〳〵島だといふ事て、小父樣の方の說がいけなかつたの、といひ捨てゝサッサと便所の方に行つて仕舞つた正さんは夢がお好故この夢も咄したら興がつてゐらつしやるだらうと思つて居る、と私は起出る前から床の中にもぐり込だり何かしてゐた次男と三女がなんだか身の廻りにまつわる。手を引つれて兩親の寢てお出の部屋に行つて見ると、いつも早起の母上がまだ寢て居られる、まだ寢て御出のはづの父上が、早や湯殿て嗽の樣て、どうした事かと、伺がへば、又サ、とおつしやる、昨宵到來の鮎をめし上り過ぎて、少々下痢の氣味だとおつしやる、いつもの御癖てはあるが、

此夏の大病のために少し何處か弱く成られたのではないか、と思つて氣色をうかゞへば、何、もう直におきるとおつしやる、別段にひどく惡い事もなささうなのに安心する、長女も時候の故か幾年間寢た事もないのに一昨の朝は突然三十八度八分の熱が出て午後より下り今日は全く快よいとて、學校の同窓會に行かうといつて居る。

總べて何事にも拘束される事の御嫌な夫は何處へ行かうなどゝいふ事を先刻からきめて置くのがどうも窮屈さうに見える、御嫌のやうですネといへば、何そんな事はないとおつしやるが、どうもさう思はれる、今日向島の方へ行きませうといふのも、一昨日實はきめておきたかつたのでも、マア／＼とひかへてある、雨の音で、今日は散歩もだめですネ、といへば、何さうでもあるまいとおつしやるのが、子供達がウス／＼樂しんでゐる向島行に同意して御出のやうにも思はれる、けれども、雨は中々止みさうにもない、例の納豆や昨日煮て置いた牛肉や、ドライドビーフなどにヲートミールとパンの朝飯をすます、朝飯の時に、今朝水を浴びて御出の暇に大急ぎてほころびを縫つて置いたのをよい事をしたと思ふ、何事にも無頓着のやうで人の缺點は先きに氣のつく夫は思ひがけない事を私より知つて御出の時がある、朝飯と夕飯は時を長く取る咄しがはづむと折々は面白い眞似をして私を笑ひこかせるのが御上手で、これは夫を知つて御出の人が存外に思ふだらうとおもふ、今朝は別段に面白い御咄もなしに仕舞つて、長女の髮の前髮を取つてやる。

下婢を多く使ふとどうも子供が意氣地がなくなる、これは自分の惡い經驗でよく分る、成人するとともに下婢を減らして子供は自治の方針を取らせる事として髮も無論一人で結はせる、宅の子供は一寸そこらに例を見ぬ程の澤山の毛でことに長女のが多い、休日にはよくとかして前髮をよく取つてくれといふ、とかせばキット毛のつれるのを痛とて澁面をする、まだ朝飯後の茶も飲まぬに飯を置くがすぐと、緣端へ行つて、充分體のよくない長女のために蒲團を敷いて髮をとかしは

じめる、三女は始終袖にまつはつて居て、アラお祖母さまがお足の方にかけてらしつたお蒲團よといふ、ヲヤ〳〵それは、私はたゞ此處において置いたのか、とおもつて御免遊ばせ、と他のと敷かへて座らせる、今日は痛いのを餘程がまんをする、結ひしまふと後には次女がニヤ〳〵と笑つて頭を前へ出して居る、あなたのもかへ、と笑つて前髪を取つてやる、三女も其處に亂れ髪て居るけれども、まづ、お茶でも飲んでからと思ふ其中にも長男のために洋服やが來て今朝きめた地合をあれていゝかしらなどゝチヨイ〳〵



氣にかゝる、魚やが來る、八百やが來る、魚やと八百やは二人て來る、豆腐や青木堂、菊や、金子、鳥藤、などと午前は座る暇が無い程であるが、向島へ行かね事となる、と今朝はよほど物を爲ねばならぬ、と思つてよい加減に臺所まで自分は出ずに机の前へ來る、下婢はいづれも永く居る、一人は十三斗の時から來て八年ゐる、何か聞にくると、これこれと言ひつけておけば、どうやら辨じる、机の上を片づける、机の上には昨日一日用事があつて來ても見なつかつたので何かなし山なして、子供のお遊物や、何や、かや、雑

つてゐる、側から片づける、と返書を出さねばならぬ書狀が十通ばかりある、出產の報知とか、自分の子供の上京についての相談とか、かき物の催促とか、在宅時の問合せとか、小包の到來物につけての添手紙とかいふので、心にはかゝるが、先づ他の事を先きにと思ふ、机の側に引とき物が風呂敷に包んである、二三日あと、一日續ぎ物をしても中々まだ〳〵しきれぬ、此年の夏は母の病氣の爲、いつも老人子供の留守の中にする仕事がみんな殘つて自分達は避暑に行かないで、あれこれと思つた事がはづれてしまつて、みんな机の側に集合をつけてゐる、見ると氣がわく〳〵する程せはしない。其處へ小母さまはと側の恒方が來た、一寸物をかきかけやうとした時故、折がわるいと思つたが此恒方は兩親もとくになくなつて、私のやうな者でも便りにしてくれる、夫の甥で三十といふに子供氣のはなれぬ無邪氣な性で、幼ない時からたよりにされて居れば、此方でも此休日にもう起きたかしらんなどゝ、一寸家がはなれて居るので顏を見ぬと氣にかゝる、小さい字をかく筆がありますかといふ、筆の箱を出して遣るとみんなダメだといふ、夫の爲にとつて來た唐筆の大事なのを見つけてこれがマアいゝといつて、さやからとつたりはづしたりしながら、五圓の新紙幣を小母さんに見せやうと思つて持つて來たといつて袂から出す、ネ、數字が大きいのでせう、なんだか可笑しいナア、今日は向島の雲水へ佐々木さんが招んだから行く、それはさうと長沓にウント金をとられたなどゝ自分の事をズツト並べ立て咄す、イヤミのない、ほんとに子供らしい人だと思ひながら、デモいつか一人立つて沓でもサッサとこしらへるやうになつた、とあらためて口髯のある顏をしげ〳〵と見る、ネ、デモ僕は小母さんも御存じの通り、ほんとに沓はよく保つ方ですネといふ、エゝあなたはそんなに沓をはかなかつたが、長男なんぞは、よく惡くしますヨといふ。子供の十時のおなんぞに、また戶棚まで取りに行く手數を思つて机の向ふに置いておいた豆菓子を旨い〳〵といつて食べる。コイツアうまいやとニコ〳〵する、子供も頂戴

＼々々と口々にいふ、なんだかそこらがゴタ／＼する、恒方がかへる、次男と三女は鼻を鳴らして居る鳶でも飛ばしてお遊びなさいと紙を遣ると鳶を折つて、二人て鳶の戰ダゼなどゝ一時は騷いて居る、母さま、この鳶は飛ばなくなつたとか、なんとかいつて、度々くる、其中に少し聲が聞えぬと思ふと、ワアと三女の泣く聲がする、子供の泣聲にも種々ある、これは痛くもない事を何か爭つてないて居るのだ、とハッと思つた心が靜まる、案のじやう小兄樣が金槌で骨の上をぶつたといふ、小兄はあとからかけて來てウソをいつてらア、たゞ一寸あたつた斗ダイといふ、妹の方はいたづらかた／＼父の机の上をブラッシユで掃いてもうケロリとして居る。

日記は折にふれてはよい參考になるが、何か出來事のあつた時とか、主人の留守の時のほかは書いた事がない、日記をかけと雜誌社からいはれてふと書く氣になつて、さつきから五六千枚斗りある葉書の和歌の選や、明日土曜日の詠草やら、家事の何やかや、氣に掛り乍ら、今日の秋季皇靈祭の日のを書いて見やうと書き出して居る、先刻から室内散歩やら書見やらして御出になつた夫は机の側に倚りおはして、モウよして、とおつしやる、何かして居る、とキットモウよしテ、をおつしやる、何んでもしすぎるから體にさわるとてやかましくおつしやる、モウやめ／＼、何をして居るとおつしやる、日記をかいて居ます、今こんな事がはやるのですチといへば、そんな物をかいて、ばかの骨頂だとおつしやる、納豆の事もかいてあります、といへば、いよ／＼骨頂だ、落語家がいふじやアないか、あなた方は御承知のない事で、此方がたは御承知の事だなど、とおつしやりながら、恒方の爲に子供が持つて來た霰煎餅をたゞ一つつまんで食つた、間食をせぬ夫にはめづらしい。モウ御午飯の頃だと思ふ、とほんとに自家の小事故を書きつらねたり、われおもしろの人姦ましい手前咄しは、さだめてばか／＼しくもおもはれやう、自分も實にばか／＼しいと思つて、まだ朝飯後お茶も飲まず、其くせ夫には紅茶もあげたしいつもの嗽のお湯もあげながら、自分の事は、かまけて髮もとかさぬのが、可笑しくもなつて、あはたゞしく筆をなげすてゝまづ湯殿へ立つて行かとう思つた。



大塚楠緒子

十月一日

朝早くから女中を連れて、三越へ買物に出かける、日毎に風が冷たくなる、夜の物の薄いを感じる、窓の下で蟋蟀が忙がしさうに鳴く、どうしても靜としては居られぬので、子供の冬着を出して調べて見ると、好かつた積のが小さくなつて着られぬのがある、メリンスをぽつ〳〵と蟲が喰つて、穴が明いて着られぬのもある、どうしても買はなければ濟まないので、今日は四人の子供の物ばかりを求める事にして早くから出かけた。

三越は今日から寄せ切れの賣り出しを始めたので、往つて見ると、もう寄せ切れ室は人で充滿だ、迚も私の様な意久地の無いものには寄り付かれさうもない、遠慮も會釋もなく、人を突き飛ばしたり、人の持つて居る物を引奪つたり、人の中へ割込んだり爲なければ、迚も、よせぎれ室の得色たる、その安い格好な品は手に入りさうもない、自分は隅の方で、いひわけに、一反二反人の弄り散らした反物を手に取つて見たが、後から押されて倒りさうになる、横から割り込まれる、息が詰りさうで苦しいから、斷念してしまつて、辛と群衆を押し分けて室の外へ出て、ほつと息をついた、息をついて思つた、體力の强いものでなければ價格の安い物は買へないと。

よせぎれ室は懲々して、實用切れの部で、一つ身三つ身四つ身に成りさうな品を見立てた、買物を濟ませて、其邊を見て廻ると、長襦袢、帯、半襟、柄の好い御召縮緬などが、眼の醒めるやうに鮮かに陳列してある。陳列して有る品と同様の品を着飾つて、買物に來て居る貴婦人がある令孃がある、美しい物はやつぱり美しい、美しい物はやつぱり欲しい、何歳に成つても着物は欲しい、欲しいと思ふのが女の情である、餘り

衣裳に凝るのは惡いが、又餘り搆はずに配合も何も無茶苦茶に爲てゐるのも味がない、然ういふ人は必定萬事に無趣味な女であらうと思ふ。

十月二日

新小說を讀んだ、アンドレーフの小說は、奇拔な描寫を能くも斯う細く書いたものだと思つて、興に驅られて讀んだ、新聞の三面記事には、此樣な事件はザラに有る、何の詰らないと、それは、誰れしも見過さうが、斯う巧に描かれてあると、多少人の心を動搖させないわけには往くまい、新小說は必定發賣禁止に成るであらうと思つた。

十月五日

二人の子供は學校へ往つた、末の兒は乳母に負はれて庭に居る、すみ子は感冒を引いたので乳母に連れさせて醫者に遣つた、少し家の中の靜な此間にと思つて、二疊の間に立て籠もつて机に向ふ、この家では二疊が私の書齋兼理裝室である、簞笥、手だんす、書物箱、鏡臺、小さい机、琴、繪絹、一切置いてある、それても未だ自分の膝を容れる場所がある、勉強は出來る、氣が散らなくつて隨分好い、と言つて置く。

さて、書きかけの小說を書かうと思つても、何ういふものか今日は氣が乘らぬ、厭になる、棚から手當り次第に本を取つて見ると、近松の世話淨瑠璃、それは止して又取ると臺所重寶記、漬物の條を少し讀んでゐると、臺所の水音が喧ましく聽え始める、玄關で鈴の音が爲る、取次に誰れか出たかしら、臺所の煮物は焦げ付きはしまいかなんど丶思ふ、迚も小說を書くやうな思想は整りさうにないので、あとは一日、小切れ類を弄つて日を暮らして仕舞つた。

十月六日

今朝は餘程風が冷たくなつた、髮を解かすと、櫛へからまつて大分髮が拔ける、秋髮と言つて秋は女の黑髮の拔ける時節だといふ、木や草の葉ばかりではない、秋は女の身には悲しい筈だ、黑髮の少なくなる程心細い感じのするものはない、それは男の知らぬ心持である、成仁する子供の髮の毛の、ふさ〳〵と濃く長

くなつてゆくのは嬉しいが、我髪の減るのは流石に心細い、我兒に分けた丈それ丈、親の肉躰は消耗されてゆくのである。

中央公論を讀む、小說は三つとも面白い、藤村のは、自分の兒の亡くなつた時の事を思つて、殊に同情を以て讀んだ、荷風の歸朝日記を讀むと、それほども歐羅巴は面白い所かと思つて、一寸往つて見たい氣が爲る、活動寫眞で見たり繪て見たりするバレーを踊る舞妓などの顏が浮ぶ。

十月七日

三時になると、子供が學校から歸宅つて來る、歸つて來る時分に煮えるやうにと、時刻を量つて、火鉢に鍋をかけて栗を煮る、栗を煮ながら食臺へ帳面を置いて、例の小說の書きかけを考へる。

「これほどに彼の方を迷はした事は、わが處女の誇である。」

斯う一行描いた時、乳母と使に往つたすみ子が歸つて來る、此子が歸つて來たら、もう最終だ、鉛筆を見たら必定呉れろといふ、鉛筆を遣ると帳面も呉れろといふ、遣つたら夬れこそ、帳面の上は縺れた蜘蛛の巣の様なものが出來て、小說も何も滅茶苦茶になるから帳面と鉛筆を早速隱して仕舞つて、花咲爺の本を出して話を爲て遣る。

燈火の付く頃から、雨がしよぼ〳〵と降り出した、夜になつて四人の子供も寐て仕舞ふ、女中部屋も靜かになると、家の內は寂とする、何時も此時刻に成ると思ふ、嗚呼、今日も濟んでしまつた、と。

十一月四日。朝から太陽のありかは分つて居ても光がない、灰色の雲はだん〳〵濃くなる、葵橋の畔で伊藤公爵の國葬の行列を觀る、座石を一つ見付け出して、自分一人其上に登る、僅に五六寸地上より高いだけだけれど、人間の身長は極つて居ると見えて、群集が下に見えるから爭はれぬ。行列果てゝ永田町を人の流れる方へ流れて行くと、獨逸公使館の前で北原白秋君に會つた、一緒に語りながら丸の內に入る、日比谷の方は人間の關で通れさうにもない、鍛冶橋で白秋君に別れて、社に着いたのは正午前、程なく雨降り出す。

十一月六日。夕方千駄木から歸る途て、足が重くて〳〵歩かれぬ、女の足にすら及ばぬ、何うしたのだらうと考へて見たが、多分脚氣だらうと自覺した、聊か意外の感があるけれど、確に歩き難い、脚が重い、辛うじて家に歸つた、明日から麥飯を喰はればならぬかと觀念する。(醉茗)



與謝野晶子

十月一日

麟が泣き續けたので寢られぬまゝに夜が明けてしまつた。もう六時であらうと思ふが私はがつかりして麟を蒲團の上から叩きながら一燭光の電氣燈を眺めて居た。下女のふきがいつも私のする二階の掃除に上つて行つたが聲をかけなかつた。二十分程して私は麟を抱きながら隣室へ光を見に行つた。熱が無いから學校へやることにしませうと夫に云ふ。顏を洗して新らしい冬服を着せた。お辨當のおかずは玉子燒と煮豆である。私は朝から女子文壇の歌の殘りを見た。上手な人のが下から出てくるのを樂みにして見て居たがどれも昨日見たのよりは惡い。麟を岡崎先生の處へ伴れて行つたときが十一時半頃に歸つて來た。病氣は氣管支炎であつて、少し手遅れのやうに仰やつたさうだ。私は前日の雨が恨めしかつた、一昨日あたりに二月分程の藥價を拂ひに行くことの出來なかつたことがさらに恨めしかつた。

二日

昨夜も夜中に四五度起きて吸入をさせたり濕布繃帶を替へたりしたが、麟の容體は宜しくない。床を二階へ移してその傍でスバルの森先生の小說を讀んで私は泣いて居た。半子さんと云ふお子は滿六ヶ月ださうてある、麟は明日て滿七ヶ月になるのだ。光が半どんで晝前に歸つて來た。御飯を食べて居る時豆腐屋が下女を一人伴れて來てくれた。銀杏返しに結つた紺絣のよく似合小女である。二十一であるさうだ。二階が寒くなつたので四時頃にまた下へ麟を降した。夕方代診さんが來てくれた。右が惡るかつたのが左の後へも少しうつつたさうである。先刻から七瀬と八峯の聲がかれてきたやうに思つたが、寢ると直ぐ咳が出だして熱も高くなつて來た。森先生のお宅の歌會に行つた夫は十

一時過ぎに平野樣と一緒に歸つて來た。下女をもう寢させたので私は臺所へ行つてココアを造へて二階へ持つて行つて、その序に平野樣のお床を取つて來た。それから七瀬と八峯にも吸入を懸けた。

三日

麟はますます宜くない。今日は日曜で講義の日である。二人の女の子は朝になつて熱が少し醒めた。小さい三つの寢床の中に座つて居る私の心は暗い暗いものであつた。今日は源氏の代りに別に上古史の話をしてくれたさうで、夫は八時半から十二時まで一人で話しつづけたので苦しさうなのが氣の毒でならなかつた。待ち兼ねた岡崎先生が三時頃に來て下すつた。顏を見るなり、

「やあ惡い。」

と仰つしやつた。私は涙が零れた。今度は左が非常に惡いさうである。兩方ではとても辛抱が出來まい。可愛さうなことであるがとお云ひになつた。私の一番小さい金絲雀は死を宣告されたのである。今夜か明日の夜明が危いと云つてお歸りになつた。幸に下女が二人になつて居たので、先生の云ひ付けになつた手當や設備は直ぐ出來た。夜になつてから晝間見た都新聞の歌を淸書してくるやうに夫に云ひつけられて、私は寢て居る麟を夫に頼んで二階へ上つて。暫くしてふきが二階へ上つて來て私の傍でわつと泣いた。私は默つて下へ降りた。夫は先刻隣室へ移させた七瀬の寢床で吸入を懸けて居た。

「麟は死んだのですか。」

「さうか。」

二人は一緒に麟の傍へ寄つたが、小さい人はまだ息をして居た。

「寐て居るのだ。」

と夫は云つた。

「お起し遊ばせよう。」

と云つてふきは泣き入つた。夫が抱くと麟は細い聲て泣き出した。夫はそれから手紙を書いて江南樣を呼びに上げた。江南樣はその車夫と行き違ひに家へお出

てになつたが何も御存じない。櫻田倶樂部へ活動寫眞を見に光を伴れて行かうと思つてお出てになつたのださうだ。私の家はこの始末であるから驚いて妹さんを倶樂部へ送つてお出てになつた。私は勞れたものと見えて麟の傍て何時の間にかうとうとと眠つて居た。ひよつくらと其處て江南さんが歸つて來て座つておいてになるのを見た。



四日

夜あけまでに吸入を四回懸けた。瀉布は一時間毎に替へた。私は麟は死なないと云ふやうな氣がするのである。夜明にも何事もなかつた。カンフルを飲ますと昨日よりもはつきりとした目を明けて其處らあたりを見廻した。昨日よりは氣分もしつかりして居るやうなと私が云ふと皆もさう云ふ。江南樣も泣き聲が昨夜とは變つて來たとお云ひになつた。夫の弟の修さんが見舞に來てくれて、大丈夫だと云つて居た。岡崎先生が待ち遠でならぬ。江南さんは大學の歸りがけにコスモスの花を七ちやんと八峰ちやんに

と云つて買つて來て下すつた。五時に先生がお出になつた。昨日とは反對に顔を見ると直ぐ。

「やあ宜くなつた。」

と仰つしやつた。診察をして下すつて、惡い所が大分とれたとお云ひになるのを聞いて私は初めて安心した。二人の女の子も今ては宜いやうてある。

五日

麟はだんだんと宜いやうてあるがまだ少しも笑はない。私は四日程も夜はろくろく寢ないので今日は眠い。麟をふきに頼んて二階へ床をとつて寢やうとしたが、秀と七瀨が傍へ入つて來て騷ぐので眠られずにしまつた、それから二六の歌を見た。夫が横町の三軒目の家が空いたから見に行かう、日當りが好いかも知れぬと云ふので、下へ降りて見ると丁度入峰も麟も寢て居たので、私等二人は小供を二人伴れて外へ出た。ふきが戶田邸の横に好い家が空いて居たと云ふのてそれを先に見に行くことにした。行つて見ると貸家てはないさうだ。光がまだ縮の襯衣を着て居るのを心苦しく思つて居たので、夫と別れて東明館へ入つて四十五錢の綿ネルのを一枚買つて、またもとの入口から出て來た。七瀨の顔を見ると目が二皮目になつて居る、顔色もよくない、私は何故伴れて來たのてあらうと胸騷ぎがして、秀に包をもたせて七瀨を抱いて來た。ニコライの中を通る方が近いので阪を一つ上つて横の門から入つた。秋の薔薇が處々に淋しい顔して立つて居る、いちはやく紅葉して居るのも薔薇の葉である。人は一人も入つて居なかつた。横町の家はもう見に行かなかつた。

六日

夜中から七瀨の樣子が變つて來た。朝の光て見ると顔が土のやうな色になつて居る。息がひいひいと聞える。熱はまだ出ないて身體が氷のやうに冷たい。ふきの姉から今月の中頃に暇をくれと云つて來た。光は今日は學校のパンを食べると云ふから、銅貨を六錢紙に包んて鞄へ入れてやつた。每日新聞社へ歌を送つてそれから私は麟を負ぶして七瀨の傍に居ると、中央新聞

の女記者の方が見えたが、話することを今日はお斷りした。私が見て居ると潮がさして來たやうに七瀨の顔が急に赤くなつて來たので驗温器をはさませると熱が四十度ある。丁度岡崎先生が來て下すつた。七瀨は輕い肺炎ださうてある。腸も惡いさうてあるから胸からお腹へかけて一尺程の濕布繃帶をした。今日は午後の講義のある日てあるが私はまた休まねばならない。それて私の分も代つてくれる夫は曉星學校の夜學を休むことになつた。私は七瀨をすかしながらちよくちよく臺所へ行つて晩御飯のお菜を造へた。芝蝦の天麩羅と豆腐の八杯汁と、それから夫には鮭の酢のもの、子供にはおさつの煮たのを造へた。

七日

夜中に七瀨を一時間毎に起して殆ど全身を冷水て濕布繃帶するのが可愛さうてならなかつた。それても夜明まて熱は四十度を下らなかつた。麟が床の中て父樣の方を向いて笑つて居る。夫はこの子が好だ好だと云ひ續けて居るので七瀨が氣にならないのてすかと私が云つた。好い身躰をして居るのだから安心をして居ると夫は云つた。明治書院の鈴木さんが見舞に來て下すつた。晝前に七瀨は平熱に復つた。午後七瀨が寢た間に私は少しばかりものを書いた。八峰は起きたがつて仕方がない。夕方代診さんが見えた。吸入はもう日に三度位懸ければ好いさうてある。

八日

七瀨と八峯の床を西向の六疊へ移した。麟のも持つて來た。明けても暮れても吸入を懸けるので病人て居る子はどれも顔に重曹が白く化粧したやうに付いて居る。河井さんが見えた、七瀨が喧しいので御挨拶だけして來た。午後急に思ひ立て針仕事にかゝつた。七瀨と八峯のちやんちやんを二枚夕方までに縫ひ上げた。小供連が寢てから羊羹を切つて下女に分けてそれから二階へも持つて行つて夫と茶を飲んだ。夫は原稿を書いて居るのてその時もものは云はないのてある。私は中央公論と新小說と歌舞伎を下へ持つて來て代る代る讀んだ。藤村さんの芽生を讀むとまた急に私は不安を

覺えた。光も漫性の腦膜炎ではないかなどとも思ふ小さい人が狂氣のやうになつて死の方へ進んで行く有樣がいかにも憐れてあるので私はまた森先生の金比羅を讀んだ時と同じやうな涙を潤した。夫が二階から降りて來てもう二時だよと云つた。私は寒くて寒くてと云つて居た。

九日

私は昨夜妙な夢を見た。本郷の方から逢初川と云ふ川の岸を傳つて歩いて來て、暫くして私はその川にかゝつた橋を渡つた。其處には城門のやうなものがあつた。それを入ると三條通だと云ふのである。角にある家が私の堺の家であるさうだ。天神樣のお社のやうな家である。立札が立つて居るので見ると新葉と書いてある。弟を呼んでこれは何かと聞くと、狠の葉で柏餅のやうなものを造へたが臭くてたまらなかつた。その餅のことであると云ふ。話を聞いただけで狠の葉なるものゝ臭味がひしひしと私の頭に感じた。夢の中では狠の葉と云ふものの印象がいかにもはつきり私に分つたのである。今日は八峯を起してやつた十二三日ぶりに私は髮結に髮を結はせた。寶亭の前から電車が見えぬ程赤とんぼが澤山飛んで居るとふきが云ふので見に行きたかつた。午後夫の羽織の繼ぎを當てた。私が仕立替るのなら好いが、ひよつと死んだらその後で後のものが仕立替が出來るやうになど思ふとものゝ哀れてあつた。夫は三時頃から光を伴れて生田さんへ上つたが八時頃に歸つて來た。それから小供に吸入をさせながら夫と二人栗を食べた。

十日

起きて暫くすると雨が降りだした。八時半から十時半まで私は源氏の講義をした。おとなしくして居た褒美に大橋さんに頂いたワッフルを子供達に分けた。お晝は大根と油上げの煮たのと、蒲鉾の煮しめと、栗の金とんとを造へた。昨日繼を當てた紬の羽織を夕方までに縫ひ上げようと思つたが岡崎先生がお見えになつたりして、とうとう日が暮れた。七瀨は起しても好いとお醫者樣に云はれたので大よろこびて居る。湯に光と秀の二人より入れないのがもの足りない氣がした。夫も少し風の氣味てある。夜になつて江南さんが見えた。二階へお菓子を食べに來いと云はれたので行つた。江南さんがお歸りになつてから羽織の衿をくけてしまつた。夫に吸入を懸けたが思ふやうに藥が出なかつた。



岡田八千代

十月十六日、

もう火藥庫の森の青葉が、木によつて少しづゝ色が變つて來た。まだ霜は降らないのかしら。前向ふの家のダリヤが此頃になつて又俄かに花が咲き添つて來た。

午後、K畫伯の奥様とN彫刻家の奥様と三人連れ立つて散歩に出る私としては珍しい。空は高く高く眞青に晴れて、もう下の田の稻は黄色く實り重つて子供が三四人帽子も冠らず稻子を追つて居た。三人は何處といふ當もなしに畦道に可愛く咲いた野菊や赤のまんまや、溝蕎麥なんぞを摘み乍ら歩く。火藥庫の森に添つた土手には尾花が見渡すかぎり亂れて、畑には大根の葉の若くて綠の色の美しひ事。

綿打場の瀧を一寸眺めて向ふの土手へ昇る。日盛りは歩くと汗が出る程日がまだ暑ひ。赤土道の辷るのを踏みしめ踏みしめて昇る。上はずつと廣く四角に櫻を植えならべて、遠く眺めると春は全く霞が引くかと思はれる所で、間々の畑にはまだ拔き殘した茄子が、紫に、麥がもう一寸に延びて居た。此處で淺黄の服を着て腰に網を下げて鐵砲を擔いだ銃獵者に出逢つた。

三人は又畑の端に一群茂つた尾花を分けて汽車道へ出た。月見草の苗が幾つも幾つも出て居て、萱が所々草の中から生へて居て實がなつて居た、此所で又最前の銃獵家に逢ふ。獵が無いのと土地不案内なのとで、一ツ所をぐる〱廻つて居ると見える。汽車道に添つて暫く行くと踏切りへ出た。ビール會社の横の新道をずつと行くと二人連の書生が囮の百舌鳥を持つて土手の方へ行くのに逢つた。

十月十七日。晴。

今日は上野の展覽會を見に行かうと思つて居た所、直き御近處に越して來られたHさんと言ふ矢張り油畫

を描く方の所の新宅開きに呼ばれた。前の二人の奥さんとも一人西洋木版の開祖Gさんの奥さんを誘つて出掛ける、今日も夫は〳〵こんな奇麗な空氣の中へ溶けて終ひ度いやうな好いお天氣。美術家仲間に評判のIさんの御宅の奥さんを御誘ひすると赤ちやんがある故行かれぬと言はれるので女連四人は男連に先立つて行く。主人は私が家を出る時着物を着かへてる癖に、菫を植ゑかへるとかで泥だらけになつて居た。其序でに薔薇に貝殻虫が着いたのを見附けたので大騒ぎ、其所へ彫刻家のNさんが誘ひに來て居られながら同じやうに土へ蹲踞んで終はれたので、お先へ御免蒙つて出掛けて終ふ。

小兒科醫の川瀬さんの前を通ると昨夜盗賊が這入つたとか言ふので、奥さんが西洋間の窓から束髪の頭を乘り出して庭にお見舞らしい何處かの令孃と大きな聲て快活に話して居られる。此處の御子さん方は皆通常ても洋服て可愛らしい。

其處の生垣を通り越すと今呼れて行くHさんの御父樣の今度新築の本宅なのだ、入口の枝折の屋根は古萱を集めて葺いてあつて、上に一八が植ゑ込んである、片開きにした扉に、主人が手製で、「庵の月あるじを問へば芋掘りに」の句が浮彫になつて居る。其處を潜つて飛石傳ひに這入ると、小ぢんまりとした玄關の障子がヒタと締つて寂として居る。お年役にGさんの奥さんが案内を乞ふと、主人の奥さんが直ぐ出て來られて此方へと言はれる。疊廊下を通つて座敷に入ると其處は九疊敷で床の間には浮世繪の横幅が掛つて、萱、野菊、薄などが投入れにされて隅に置いてある。天井は杉の朽木を張つて、木目木目の破れに繻珍、更紗、吉野などの古風なのを張り込んである。厨への通ひに縄暖簾を下げて、竹縁傳ひの茶の間は床の間附の六疊て、眞中に紫檀の長火鉢を置き、引寄せて飾り棚には湯柄杓やら一りん差に一寸した花の挿したのが無造作に載せてある。前栽はや〻だら〳〵下りになつて居て、小笹蕗などがわざとらしからず植えてある。ほんとにもう此樣な家に住んだらどんなにか氣がのび〳〵

するだろうと思はれる。流石は新橋に有名な割烹店の主人の本宅ほどあると思ふ。此處の家の一番末の娘さんは六ッでマセコさんと言ふ、よくも〳〵思切つた名をつけたもの と嬉しくなつて終ふ。夕方に樂焼の遊びがある。風は少しもなく綿打塲の蒸湯の煙が杉の梢に靡て眞横に薄すりと半絶えがして居る。誰れかゞ全て日本書のやうだと言ふ。マセコさんの兄さんの多門ちゃんがやァ三日月が出たと言ふ。



キン釜の火がやう〳〵起つて眞赤な炎を吐き出した。皆なの顔が赤く奇麗に見える、光景が一寸似てるので和田三造さんの煒熛の噂が盛んに出る。皆々の署名やら書やらを描き込んだ素焼の壺が段々と飴色に照りがついて來る。やうやく火を退ける段になる、なか〳〵熱くて長火箸では堪らないのを順々に廻して何でも三ッづゝ火を狹み出さなければならぬと言ふ憲法が出る。幸ひに女達は見物丈て許される。丁度來會した趣味の西本さんの火の出しかたが少し活

潑過ぎるので危い〳〵と人が逃げる、此方一人洋服なのが不思議なのか、Hさん處の力と言ふ犬が頻りに吠えた、力と言ふのはHさんが鏡花愛讀者なので風流線の中から取つた名なのだが、知らない人には分らず、Kさんなどはビキと聞きちがへて英語かと思つてどう云ふ意味だと聞かれる、Hさんが黒旋風ですと言はれたのでいよ〳〵分らずじまひ。

十一月三日。例の東京の床屋で頭髪を無造作に苅り、例の東京の湯に入る、青山の大通りは天長節の人出て、稍もすれば電車の進行も妨げられさうに見える。私は其混雜した通りの湯に入つたのであるが、表の混雜に引きかへて湯屋の靜けさ、一人も浴客がない、午前十時頃の朧い日影は天井の硝子越に、湯槽の中まで射して、ざんぶり飛込むと水道の水柔かに身を溫める、後ろの板張には油繪の背景が描いてある、山もある、木もある、湖水もある、其湖水と湯槽とが連つてゐるやうで、外に人が居ないだけ心持が自然化する。表の賑かな天長節より、朝湯に一人浴つてゐる私の天長節の方が有り難いやうに思つて、今日の佳き日を祝福しながら裸體で廣い流しに踊つた。頓て靜かな原宿を歸つて來ると瀏亮たる軍樂の聲が練兵場の方から響いて來る、分列式が初まつたのであらう。午後T君來る、溫室(?)を掘る、一時間にして出來上る。T君南葵文庫に行く、私はかつらを連れて近所の花屋へ遊びに行く、ダリアコスモスなど未だ盛りに咲いてゐる、紅梅色した西洋草花一鉢を求めて歸る、オキザリスといふ名ださうだが本名か假名か未だ調べて見ない。（醉茗）

長谷川志ぐれ



暗の夜更にひとりかへる渡し船、殘月のあしたに渡る夏の朝、雪の日、暴風雨の日。趣はあつてもはなしはない。並の日の並のはなしのひとつふたつが、手帳のはしに殘つてゐる。

一日のはげしい勞働につかれて、機械が吐くやうな、重つくるしい煙りが、石川島の工場の烟突から立昇つてゐる。佃から出た渡船には、職工が多く乘つてゐる。築地の方から出たのには、佃島へかへる魚賣りが多い。よぼよぼしたお爺さんの蜆賣りと、十二三の腕白が隣りあつて、笊と笊をならべ、天秤棒を組あはせてゐたが、お爺さんが小僧の、不正な桝を見つけたのがはじまりて

こんな狡いことをしてゐる、よく花客が知らずにゐるな。と言つた。

俺は山盛りに賣るからよ、爺さんはどうする。と面白さうにきいた。

俺か、俺は桝に一ぱいならして賣るのよ。

へん、客がよろこぶめい。賣れるか？

賣れねえ。

乘あひの者は一時に笑つた。例の通り船頭が口をだした。

小僧、三十錢から賣つたつて、家へは二十錢も、もつてけへるめい、なあよ。

それはいけねえ。家て母親が當にしてゐるのだから、ちやんと持つてかへつて、二錢ても三錢ても心地よくもらへ。

十五錢ありや母親は好いのだとよ。十錢買喰ひをしても、よけいに取れるから割が好いやな。と、も一人の船頭が言つた。

二錢ばかしの小遣なら、爺さんのやうに十錢も稼いてをかあ、なあよ。

違ひない。と皆はまた笑つた。小僧は笊に殘つてゐたすこしばかりの蜆を、河の中へ底を拂つてあけてしまつた。お爺さんは掌に河水をすくつて、笊の底に乾ききつてゐる貝へかけてゐる。傍の若い者が調戲つて

爺さんなよく毎日殘つてゐるな、もう腐つてゐるだらう。河の中へ歸しておけよ、なあまたもとになるのだ、勿躰ねえぢや困るぜ。と

鰯がはいつて來たな。と沖からはいつて來る漁船を見て、一人が言つた。

兄い、寺は何處だい、御苦勞だな。と棹をいれながら、船頭が挨拶をした。

寺つて言へばよ、をかしいことがあるのよ。坊主なんて辛いことをするぜ。尤も俺達も亂暴にや違ひないが、去年よ小石川の寺院てよ、初さんところの葬式の來るのが遲れるつていふので、前へ行つてゐた者が一盃やり始めたのよ。すると誰かが外で、其處いらには

珍らしい新らしい鰯を、見つけたといつて買つて來たのよ。買つてくる奴も奴ぢやねえか。たまらないや一盃機嫌だから、御本堂も何もあるものか、よからうと言ふので燒出したのよ。すると和尙め、よい匂ひですな、なんてやつて來やがつて、旨い漬物を、よろしければおかはりをなさいましと來たのだ。どうです和尙さん御一所になつては、と言ふとな、結構ですと言やがるんだ、厭になつちまうぢやねえか。其處てすつかり仲間になつてやつてしまうとな、佛を持つて來たのだらう。すると皆が妙だ、妙だ、變な匂ひがするつて、ヘッする筈だあな、線香て鰯の匂ひを消さうと思やがつて。和尙が燻したてるのだもの、たまらねえ。

呆れてしまうな、何宗だい。

何宗だか、俺の家の寺ぢやねえもの知らねえや。

親鸞様は矢ッ張り豪いな。

さうともよ。末世を見通しなされたのだ。あれほどのお方て妻帶をなすつたのは、御自分の豪いのを知つて、後の坊主どもが、とてもそんな堅つくるしくしてゐられめえと、わざと御自分がみんなの爲に、ああなすつたのだとよ。豪いな、眼があるのだ、有難い話ぢやねえか。

あしたの紅顏夕べに白骨となる。ほんとだ、まつたくだ。南無阿彌陀佛と言ひたくならあな。

お前の家は何宗だつけかな。

本願寺だ。――當りますよ、大當り。と聲を張あげた。

雨の日に、年をとつた勞働者が二三人、寒さうに顫へながら、少さな聲てこんな咄しをしてゐた。

金華山て何處だらう。

さうさな、ありや美濃だらう。

さうか、そこいな、大きな鯨が出て、大砲の彈丸を三發もうけたが、とうとう船に四人乗せたまま呑んでしまつたとよ。

はなしだらう。

さうてないのだ、信實だとよ、新聞にあつたのだらう。

船と人が四人？そんなに呑めるものかな。呑めるだらう、何しろ巨い鯨に違ひない。ても美濃は山國だらう。

さうかな、ちつとをかしいな。

山國にしておけよ、俺の家の息が、なんても船乗りになつてゐるさうだ。

さうか、知らなかつた——碌なことはないなあ。好いことはきかせねいや。伊豆通ひの滊船が、滊笛を低く呻吟らせて通り過ぎると、その餘波ゆられて、ゆらゆらしながら

金華山は美濃だ、美濃はたしかに山國だ。

さうならお咄しだ。と言捨て共に去つた。





國木田治子

十月八日。金曜日。

今日は曇つて、最早冬のやうな寒い風が吹く。小供達は「寒い〱」と火鉢へ寄つて來て、「虎ちやん、そんなにがん張つては私のあたる所がないわ」などゝ相變らず喧嘩を始る、てんてに勝手な事を言ひ合つて居るのを聞いて居ると、ピヨ〱とひよつこが鳴いて居るやうな氣がする。

ぐず〱して居る虎雄を、みどりが早く學校へ行けと急き立てる「みど公の世話燒きめ、だまつて居ろ」と憎まれ口をきゝながら出て行く「アラ、虎ちやんが又帽子を忘れていつたよ」とみどりは帽子を持つて虎雄のあとを追ひかける。貞ちやんは鏡の前に立つて、リボンの結び方を氣にして居るので、「また始まつた」

と、叱ると、あわてゝ「行つて來ります」と出て行く。朝の仕舞ひをして机にむかふ、一行書いては癈し、二行書いてはまた後が思ふやうに續かないので、又始から書き直したり、反故ばかりこしらへて居る。

みどりさんは、何時もの通り机の側へ玩具を持つて來て遊ひ始る、一人言を言つたり、流行歌をうたつたりする、ずん／＼書ける時には左程邪魔にもならないが、書ない時には氣が散つて仕方がないので、「うるさいね、」と言ふと、「ハイ」とみどりさんは返事をして、急にしよげて仕舞ふ、「ねエ、みどりちやん少し外へ行つて遊んでおいでな」と優しく言ふと、「だつてお友達が今居ないのですもの」と言ふ、「ではそつちのお座敷でお遊びな」 じやア何んか頂戴な」とねだり事を始る、「御用がすむだらね」「じやア後できつとね」と念を押して次の間へ玩具を運むで行つて、此度はまた「チョンキナ／＼」など、前よりは一層大きな聲で歌ひ始る。歌ふみどりさんは無心でも、聞いて居る方は何んだか可哀そうに成つて來る。夫の死後は小供達が可愛いと言ふよりは、可哀そうだといふ思ひが前に立つので、餘り叱らなかつた所が、段々我儘が增長するので、此の頃は隨分ひどく叱り付ける、其の度に小供達は「母さんの顔が此の頃は段々こわく成つて來た、私達が言ふ事をきかないからなのか知ら」など、言ふやうに成つた。

書くのを中止して、みどりさんを連て向ふの內へ行く、今ちやん(妹)は病氣で寐て居る、時ちやん(妹)は臺所の障子の張かへをやつて居た。母さんが見えないので「母さんは」と聞いて見ると、「用達にいらしつたの」と時ちやんが言ふ。日に幾度となく行つたり來たりして居るのだが、それでも母の見えない時は何んだか、ものたりないやうな氣がする、自分は四人の小供の母でも、自分が母に對する心は幼少い時と少しも變らず懷かしい。

毎日電報の小說から雜報まで隅から隅まで讀むで仕舞つて、「みどちやん、お宅へ歸らうか」と言ふと少女雜誌の畫を見て居た、みどりさんは「エヽ」と直ぐに

賛成して立ちあがる、

自宅へ歸るとみどさりんは、何んか喰べものは無いかと、方々を探し始めて、茶箪笥の引出しから柿を一ツ探し出して來る、それをむいて遣つて居る所へ、大學病院へ入院して居る妹の所から、午後退院すると言ふ知らせが來る、「母さんはね、又病院へ行くからおとなしく待つて居るのだよ」と言ふとみどりさんは、おとなしく頷いた。時ちやんに髪を結つて貰つて、出掛る仕度をして居る所へ母さんも



歸つて來る、母と一所に家を出る、

病院へ着いたのが一時ごろ、暫く病院に居て歸りは西片町の沼浪さんのお宅へ、退院のお知らせやら、入院中お世話に成つたお禮やらに行く、御主人は伊勢に御旅行中、何時も變らぬ優しい奥樣のおもてなしに、つい浮か〳〵と話し込むでしまふ。電燈が點いたので驚いておいとまする、

家を出る時、病院から沼浪さんへ、其れから大久保の吉江さんのお宅へ廻つて來る積りだつたので、今更のやうに大急ぎで指ケ谷町から電車へ乗

る、水道橋から甲武線に乘り變へて大久保の停車場へ着いた時には最早すつかり日が暮て居た。車が無いのて淋しい大久保の通りを、後から追ひ立てられてもするやうに、いそいて歩いた。冷たい風が顔にぶつかるやうに吹いて來る、木の葉がサアーと鳴つて、何んとなくもの凄い、町住居をして居る人が適に此樣所へ來合せたら、思はず足がすくむだらうと思つた。

自分には此の冷たい風も木の葉の音も、薄氣味が惡ひながらも懷かしい、と同時に悲しい〳〵思ひがごた〳〵と浮むで來るので、知らず知らず足取りも鈍くなる。

急に入用なものが有つて、吉江さんへ拜借にあがつたので、「此夜は直ぐおいとまします」とコートも着たまゝて、暫く弓子さんの可愛らしく、段々生長くなられて、最早いたづらをなさるのを見ながら、吉江さんや奧樣とて話しをする。歸りは吉江さんの弟さんに新宿の電車の終點まて送つて戴だく。

通り掛に中村屋のお良さんの所へ寄る、相變らず優しい温かそうな目てむかへて下さるので嬉しい、お良さんは産後まだ體がしつかりしないと、青い顔をして何んとなく元氣がない、早く全快てくだされば好いとつく〳〵思つた。十分ばかり話して歸る。

自宅では最早みどりさんは寐て仕舞つて、貞ちやんや虎雄が妹達と、カルタを取つて居た「サアお寐々」と小供達を寐かして仕舞つて、筆を取り始めた。

九日。土曜日。

可いお天氣なので朝のうち洗濯をして、お晝少し前に家を出て、哲二の病氣を見舞に行く。哲坊の病氣は大分全快つたらしく、元氣よく遊むて居た。自分の顔さへ見れば哲坊は直ぐ脊なかへ回つて、戸外へ出てくれとさいそくする。哲坊が嬉しそうにこ〳〵笑ひながら自分に抱れる度に、哲坊は自分を何んと思つて居るだらう、と何時も思ふ、今日も歸りに一所に行くのだと自分にかじり付いて離れないので、脊負つて出掛る。柳町の停留所てやつとだまして、乳を呑ませるお杉さんに哲坊を渡して電車へ乘つた。

宅へ歸ると留主に神田のお美代さんが見えたと言ふ。逢ひたかつた。

十日。日曜日。

日曜では有るし、雨も降るので七時頃起る、小供達は金毘羅樣の祭禮へ行くと昨晩樂みにして寐たのが、雨なので大失望、

終日、何んといふ事なしにまご〳〵して暮す、

十一月九日。前夜來輕微なる發熱の爲め、終日蒲團を被つて臥した、牛乳と、紅茶と、生姜湯と、パンと、飲料ばかり澤山に取つたものだから腹が膨張する、何の爲に熱が出たのか自分に分らぬ、風邪を引いたやうにも思はぬ、或は脚氣の所爲かも知れぬ、併し終日臥てゐたお陰で脚の重いのは非常に輕くなつた、一日で脚氣が癒れば結構だがそんな事もあるまい。元來自分は蒲柳の質であつて、其蒲柳と云ふのが字義通り柳に雪折なしで大した病氣に罹つたことがない（但し最近七八年間ほどは）、けれども熱は年に二三回必ず約束したやうに發作的に起る、其度に衰へたとは思はぬ、斯う筋肉の組織が其度に新しくなるやうに思ふ、熱が出ると未だ自分にも若い血が通うて居るなと思ふ、併し今日の發熱の仕方は甚だ因循で氣に入らぬ、明日は平常に復するだらうと信じて眠る、夜數次夢醒む　（醉茗）



荒川澄子

十月十日、雨、

今日の日曜には、夫に留守居をして頂いて、芝の義妹の内から神田へ回つて、お姑樣の御機嫌も伺つたり、お義姉樣のお產後の樣子も伺つたりするつもりでゐたのに、起きて見ると細い〳〵雨が降つてゐる。ほのあかるくなつて今にも止みさうになるかと思ふとまた暗くなつてスーイ〳〵と落ちる。そのたんびに行かう、よさう、とまご〳〵する。十時十一時になつてもまだ霽がり切らない。これでは何時迄もはてしが無いから、よすにきめて、夫の書齋から近刊の小說を持出して先づ八千代さんの『恐怖』を讀んで見る。千萬遍繰返した構想を、只少し新らしい描寫でやり直したに過ぎないものだつたのでがつかりした。私はいつも、

閨秀作家のものを讀むと、その餘りに男子の作物との逕庭がひどいのを情無く思ふ。せめて仙子さんでも『徒勞』位の腕て、ずん〳〵進んて頂いたならばと、心から思つた。『北米の花』は『出世間』を面白いと思つた。

木の葉散る〳〵
木の葉散る夜の更けゆきて
草を枕にころび寐や
露にぬれたか――
露にぬれたか秋草の――

秋のたそがれ、公園に近い、とある道ばたて、伏目勝にこんな歌を歌ひ乍ら、マドリンを彈いてゐるイタリヤ少女、――讀む人の心を淋しい思に耽けらせずにはおかない。

午後、お隣の別莊のお上さんに髮を結つて貰ひに行つた。座つてゐて、すぐ目の先の肱掛窓から眺めると、廣々した畠におさつがよく茂つて、畠のぐるりにはコスモスがゆら〳〵かに咲いてゐる。まだ霧のやうな雨が舞つてゐる中を、何處かで彈く『みだれ』が夢のやうに聞えて來る。

『私はねえ、』とお上さんはキリ〳〵と根をしめて、啣えた元結に口をもぐ〳〵させ乍らいふ。

『娘の時分にもお琴を習はふつて氣はちつとも無かつたんてすよ。常盤津をね、』

チヨキンと鋏で元結を切る。

『それに踊を習ひましてね、おさらいの時なんぞ根のぐつと高い島田に結つて、振袖の着物を着て、扇子をから腰にさしましてね、店の若い衆を供につれてよく行つたものでしたつけ。』

びんをふはりと出して

『いかゞ？』と後から鏡を覗き込んだお上さんの顔は、すつかりそゝけて、皺がよつて、目が窪んでゐた。

根が少し引ばれて痛かつたが、遠慮して默つてゐたので、結つてしまふとたまらなく痛む。前髮を大きく取つて、少し出してつぶし、鬢を上へかいて荒い櫛目

を立てた。結び立ての光る髷には赤い手絡が氣恥しいやうに際立つた。

『御苦勞さまでした。』長いたぼが氣になるので、首を長くしながら私は會釋した。

明日はどうでも校了にしなければならぬといふて、夫は原稿を書くに忙しかつた。

更けても雨は靜かに雨戸を打つた。

十一日、雨、

今朝、七時が鳴つてから一寸といつて床につかれた夫は、十時が過ぎてもまだ眠つてゐらつしやる。書齋に行つて見ると、廿枚餘の原稿がとぢ



られて机の上に載つてゐる。あゝ、出來上がつたのか、と思ふと自分迄がせいせいする。朝飯が十二時頃になつた。九時より早い朝飯は滅多にないが、今日のやうなのも亦珍らしい。

いつか戸籍調べに來て、ふとした話から、女子には高等の教育はいらない、女つていふものは一躰ートとお尻をすえて話込んで行つた巡査がまた調べに來た。今日は女中の原籍調をして行つた。

午後、藤井さんの奥さんが坊ちやんを連れて遊びに來られた。目、鼻、

口、一つ〳〵はつきりと彫付けたやうな顔だちの方だ。旦那樣が海軍なので、半年毎にあちこち變つて歩くのださうだ。年内にはまた横須賀へ行かれるのだとのとて、『ですから始終荷物の支度ばかりして居りますんですよ。』と落着いた心持になれないといつて居られた。私は幾つかの行李に繩をかけては、南の港へ行つたり、北の國へ旅をしたりする人の慌だしい生活を思つて見た。その女中が物差の目一つ知らないで『時計の十分と物差の一尺と同じでせうか』と聞いたり、着物の襟巾をはかれと云へば、一寸と九寸御座いましたといつたり、廿二にもなつて、まるでお話のやうなんですよ。實にもう女中を叱るのが毎日一役で御座います、としみ〴〵こぼしていらつした。

入違ひに篠原さんの奥さんがお出になる。これも女中の事だ。家のがどう我慢しても使へないから、先日のお話のをお世話を願はれませんかと仰有る。最初話があつてからもう暫く經つから、どうなつたかよく分らないから本元の品子さんの處へすぐ葉書て問合せる。全く女中位むづかしいものはない。一家の主婦に取つては、女中の善惡が大問題だ。内ではいゝのを置きあてたと思ふ。

今日は工場へ廻られたので、八時過に御歸宅だつた。校正刷が出來て、今朝の原稿がもう刷り込まれて居る。今月の雑誌は一寸賑かだと思ふ。

明日は池上の御會式ださうだ。こゝからは程近いので、團扇太鼓が遠く近く、東から聞えて西へ消えてゆく。

夕方から雨は上がつて、どんよりしたまゝ夜に入つた。虫の聲が降るやうだ。

十二日、晴後雨、

こなひだ、國の嫂さまが來られた時、とぎ出しの長火鉢をつく〴〵眺めて『よくまあお手入が届くと見えて綺麗に光つて』と云はれた。一寸した事だのに曾て一度も艶布巾をかけた事もなく、うつちやり放しにして置いたので、傍に聞いて居た夫に顔を眺められるやうな氣がした。それてけふは火鉢から茶簞笥からすつ

かり整理して布巾をかるけと、顔が寫るやうになる。それからは毎日かけやうと思つた。

久しぶりのお天氣て、何處の物干も俄かに賑はつた。池上は定めしひどい人出てあらうと、女中と噂をしてゐると、三時頃から降り出した。雨にびしよ濡れになつて別荘のお上さんが歸つて來た。裾を端折つて手拭をかぶつて、『やれ〳〵飛んだ目に逢つた。』と表から騷いてゐる。

『眉山全集』の三卷を始めから三ッばかり讀んだが後はもう意地にも讀む氣にならなくなつてよした。秀湖さんの『新秋』ては何時か雜誌て一度讀んだ事があつたが『新綠の悲哀』などは心をしみ〳〵させると思つた。

雨の中を團扇太鼓の音が盛んに聞える。法華の信徒が雨に濡れ、泥をあびながら一心になつて太鼓を叩き〳〵、闇を縫つてゆく姿を思つて見た。



尾島菊子

九月十七日

嫌に蒸暑い日、汗は出ないがぢり〳〵脂肪が滲み出る。家が餘り愛宕山に接近してお墓の中に建つてるので、晝間藪蚊が盛んに出る。線香位て追附かないから蚊帳を吊つた。其中て母と二人裁縫してゐたら八百屋が來て頻りに笑つた。午後『婦人界』の爲めに三井慈善病院を訪ふ。增田醫學士優しく案内して被下る。三階の綺麗な應接室て少時お話を聽く。それから病室を見廻る。普通醫の診察を求むるとの出來ない窮民等は結構な寢臺の上に眞白の蒲團を被て寢てゐる。熟々有難いとだと思つた。私なんか萬一大病でもしたら此樣處の御厄介にてもならなければなるまいと思つて、門を出てから幾度も〳〵振返つて見た。夕方までに早速

原稿十枚許りに、書き上げる。徳田さんから手紙が來た。

十八日

新聞を讀んで了つてから椅子に掛けて弟の卓子の上の本立を覗いてゐたら「エッツプ」があつたから引出して少し讀む。子供の時分から幾度も讀んだ本であるが今は如何にも怪しい。直ぐ飽きて今度は「How to do Business」と云ふものを引出す。タイプライターをやつた頃讀んだ本で割合に容易いけれど誠に面白くも何とも感じない。午後金港堂へ寄つて昨日の原稿を小谷文學士に渡す。東海林文學士に紹介された。小谷氏は丁寧に、東の海の林と書いてしやうじと讀むのです、と敎へて被下る。變つた名を一つ覺えた。其足で直ぐ徳田さんへ行く。奥さんはお湯に被入つて不在、先生は昨夜少し夜深かしをしたからと云つて机の前に寢んで被居つた。談話は私の子供時代に移る。先生は熱心に耳を傾けて被下つた。軈て奥さんのお歸り、毎時もながら嫣然に心持の好い奥樣である。歸ると云つたのを止められて遂に晩餐の御馳走に預る。比目魚のお作身、鱈の煮付、蛤鍋といふお料理。先生はチビ〳〵飲みながら「一杯如何です」と盃を被下る。干して奥樣に渡す。一穗さんと瑞子さんは悦んでお先に箸を取る。話の序に「私なんか何時になつたら何うと云ふ希望もありませんから、考へて見ると生きてるのが詰まりません。」と云つたら「私等だつて然うさ、何の目的もなく斯うして書いてるのだもの、寧そ今の中に死たいね」と被仰つた。奥さんは不思議さうに驚いた眼をお上げになつた。私は默つて俯向いた。曇つてゐた空は劃然晴れて星が出た。八時に歸る。途中電車の中で眼を眠りながら夢現に先生の言葉を繰返して見た。何だか淋しくなつて涙が零れた。

十九日

朝早く琴の師匠に行く。萬朝の「女流文學家」に恥かしいとを書かれて少々赤面した。秋の雨は霏々として窓外の石塔の上に降り濺ぐ。梧桐の葉は處々枯れて落ちる。机に向つて小說「墓の人」を二三枚書く。兵

隊が遊びに來た。折角の日曜を雨て打壊したと云つてお汁粉の會が初まつた。お團子丸めに臺所へ出る。甘いの甘くないのと云つて皆て賑かに食べる。小猫は悦んて戯れついてゐた。兵隊が歸ると入れ代つてM氏が妹さん二人伴れて來訪、葡萄と梨をお土産に頂く。見ても〳〵美しいお嬢樣、十六と十八の可愛い盛りである。二人ともお揃へのセルの單衣コートて態てお歸り。夕飯後お湯に入つてると又お客樣、今朝神戸から歸つたといふT氏、此春生れた孫を



伴れて來たから見に來いとのこと。母は微笑んで、「てはいよ〳〵お祖父さんにお成りなさいましたね」と云つたら「否々お父樣のお父樣ぢや、此樣若い男にお爺さんなんて可哀想に……」と例の滑稽た所作をして手を振る。相變らず元氣の好いお爺さんである。騷々しい一日であつた。

廿一日、彼岸の入お墓詣りがぽつ〳〵來る。和合院のお母さんは樒とお線香を持つて雨の中行つたり來たり忙しい。箕輪と云ふ人B氏の紹介とて來る。「浮世タイムス」と云ふ初めてお目に懸つた雑誌に

劇評を書いて呉れと云ふ。「私は劇と云ふものに付いて未ださう研究も致してをりませんし、第一書く程の評なんか出來ませんから。」と斷る。雨は益々盛んに降る。「甚い雨になつて來ましたな」と此人傘の用意がないらしく、二時間餘り六年洋行してゐた話なんかして歸る。晩にＢ氏來訪、箕輪といふ人の話をすると、「もう來ましたか、早い男だな」と呆れなさる。某婦人が近來頻りに私の事を惡しざまに捏造して吹聽し廻ると聞いて心持が惡くなつた。然しこれは六月頃から耳にしてゐるのであるが、彼婦人も段々癖見が出るのだらう、女と云ふ者は年を老るに從つて根性が曲るものだ。「墓の人」二枚半書いて寐む。小猫何時の間にか寐床の中く入つて來る。

二十二日

昨日の雨は名殘りなく霽れ渡つて小春日和の麗朗な秋の日になつた。午前に電燈會社へ女事務員の狀況を參觀に行く。會計課長に歡迎されて正午迄居た。執務中の寫眞撮影して送ると云ふ約束して歸る。午後蒲團の綿を入れる手傳ひをしてゐると、お墓で誰やら拍手を打つてゐた。思はず噴き出した。紫色の煙りが彼方此方に立上るので、藪蚊は一齊に家の中へ襲擊して來た。和合院で讀經が初まる。森として靜な日であつた。山から木の葉がヒラ／＼と舞ひ込む。晩に今日の原稿の服案だけ作つて寢む。

廿四日

お仲日とてお國風のお壽もじを拵へて近所に配る。叔母、母の從妹夫婦など來りて大賑か。此日遂に筆執らず。雨小歇みなく降る。

廿五日

此間から神經衰弱と云はれて醫藥を服してゐるが、未だ頭腦の加減が快くない。鬱陶しい天氣だ。墓場の雨なんか體の工合の快い時は詩的だとか何とか云つて悅んで居るが　病氣の時は實際自分まで地の下へ引込められるやうな氣がする。病床の中で西鶴全集を讀んでゐたら何時しかうつら／＼眠つて、幾度かお晝飯だと云つて母に喚起された。それでも喰べないで頭を堅

く縛つて寢てゐた。「正德三癸巳年」と彫りつけた大名の立派な石塔を眺めてゐると、欝蒼と茂つた愛宕の森から時々ぱら〳〵と豆粒を卷いたやうな雨が零れる。お師匠さん許の琴も今日は遠く聞える。物淋しい此秋の空に雨の音を聽きながら越し方を追想してゐると、つく〴〵現實の悲哀を感じた。夕刻起きて机の前に座る。德田さんへ手紙書いて出すと行違ひに端書が來た。

廿六日

朝七時琴に行く。歸ると山口縣の高等女學校から往復端書が來てゐた。知らぬ女教師だと思つて讀んで見ると、十四五年逢見ぬ鄕里の人であつた。あゝ夢！まるで夢のやうである。此間の萬朝で私の近況を知つて懷しさに堪へぬ、美しく書いてある。此人のお母さんは昔私の家に廿年餘奉公してゐたもので、農家に似合はず子供に教育を授けた。嘗て娘が女子高等師範に在學の事も薄々洩れ聞いてはゐたが——噫浮世の變遷！今は主從轉倒してゐる。私は暫し無限の感慨に打たれた。早速返答出す。「東京」といふ雜誌舞ひ込む。「文士の噂」に私の惡口が出てゐる。事實無根のことを書かれては全く迷惑な次第であるが、此樣ものを讀んで悅ぶ人があるから可笑しい。

十一月十日。諸友の一人の或る令孃が新婚しられた樣子で、其報知を得た、多少の感慨が洩らしてあつた。女は何うしても結婚せねばならぬ、藝術を愛する人だからとて藝術と結婚する譯にはゆかぬ、矢張男子と結婚せねばならぬ、それを一しよにする人は甚だ賴母しくないと思ふ、全然別のものとして考へを持たねばならぬ、結婚したからとて直ぐ藝術を捨て去らねばならぬと云ふ理由はない、結婚後にも藝術は存在する、趣味は養はれる、それを直ちに結婚と云ふ一つの變化が起ると「女子文壇」とも他人になつたやうにふりむかぬ人がある、女子通有の心持に然う云つた處があるらしい、例へば前の齋と、次の齋との間に「此間十年相立ち申候」と云ふ札を立てるやうなものだ、結婚と云ふものはそんなに心細いものだらうか疑はしい。（醉茗）



應募の日記に就いて

▲今度の家庭日記は諸嬢が日記に全力を擧げられた丈あつて、集つた數に於ても、成蹟に於ても近來稀に見る盛觀でした、選者は其數の餘りに多さに驚き、多大の犧牲者を出すに忍びず、他の各欄と讓り合つて、許す限りの紙數を日記に割きました、それでもなほ紙上に發表されたのは十人に一人位の割合てせう。

もと／＼日記のことてすから、他の小說とか詩歌とか云ふもの丶やうに、創作とは違ひますから、一つ一つ其作物に就いて評論する必要を認めません、文學上の見地から見て、必ずしも優勝てないものても、事件が面白かつたり、場所が意外の處てあつたり、事實が同情すべきことてあつたら、要するに現代の婦人生活の一面を窺ふに足ると思つた作を選拔しました。

第一等の吉田さんの作、第二等の蒲原さんの作、第三等の若杉さんの作、斯う三つは單に事件だけてなく文章も好いと思ひました、文學上の價値も充分に推奬するに足ります。

かへてさんバーゲンデーは都會式の敍事文としては最も興味がありますけれど、筆は少し輕佻てした、之と似て杉浦さんの丸髷に結ふ記事は、思想に深いところはありませんけれど、上品てした、才氣と云ふよりも人格が現れて居て床しいやうに思ひました。秋山さんの作は達者に書いてあります、斯う云ふ境地も現代の婦人には逐々深い交涉を持つて來るてせう。花子さんの女學生の日記は最も無邪氣て、羨ましい境遇てす。之に反して、名なし草さんの食客の日記は氣の毒に感じました、此作には女の弱點を僞らずに表はしてあります。更衣さんの作に似た內容は幾許あつたか知れませんけれど、選者は遂に之を採りました。香時さんのは女優と云ふのが珍しいのと、眞面目てあつて、懷しい處もあるやうに思ひましたから、入賞に加へましたそこて此等の作それ／＼特色があつて、次第を附けるのに迷ひましたけれど、考へた上て左の通りに等級を附けました。

●第一　お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ　吉田紫花（德島）

●第二　草生水日記　蒲原早蕨（越後）

●第三　開放したる心の扉の記　若杉小夜子（東京）
●第四　同じ女と生れながら陰と日向の違つた身の上　名なし草（信濃）
●第五　憚る處なき女學生の境遇　花子（東京）
●第六　初めて丸髷に結ふ　杉浦翠子（東京）
●第七　大呉服店のバーゲンデー　かへて（東京）
●第八　未來の博士達の爲に　秋山欣子（常陸）
●第九　晴れの日が近くなる　更衣（神奈川）
●第十　舞臺に出づる迄と出たる後　香時（丹後）

各欄の批評

▲和歌は相變らず盛んでした、山村さんの作は例の如く異彩を放つてゐます、伊達、梅本、原田の三人のお作は格別大した優劣を見ません、只原田さんは前回に比して、多少遜色があるやうに思ひました。秀逸以下の作にも、戀と自然とに分類した中になか〳〵好い作がありますから見落してはいけません。

▲美文の最上位を占めた菊池りう子さん（萩花）の作は實に眼を眩せしむるほどの花やかな作で、繪にしたら人を艶殺するものでせう、若き血汐を湧かしめる作物です。ゆり子さんのお目見得も、場所が場所だけに人を引きつけます。雪降るまでは、自然を見る眼の忠實なるに敬服しました。其他美文には此と云ふ程の傑作も見當りませんでした、多くは日記の方へ寄つたのでせう。

▲小説の第一位『壓倒』は應募中の白眉に値することは十分である。現はれた事象は時間も短く單純で、描寫も亦單純でありながら、其中に又自から深い奥行きが隱見される、畢竟複雜な内容を有する人生其のものが如實に出て居る。是れ丈けの題材の捉え方が既に並み〳〵のお孃樣達の業とも覺えないが、かく短く書き縮めた無駄の無い筆致も感服に堪えない「硯の乾いた所に種々な樂書をし乍ら」聞くとも無しに二階の『壺阪』を聞ゐて居ると云つたやうな無意義に見える事象の奥に何事か來らんとするものを暗示するやうな見方などを考へると、何となく不安な心持が起る、と同時に天才の人か修養の人か、いづれにしてもこの作者の畏るべき（獨歩白鳥の臭は依然ぬけないにしても）材であることを異とせずには居られないのである。

次位の『門の柳』は前者に比べると數等落ちて見える、とは言へなか〳〵しつかり書いてあるが、かう云つた類型は既に是れまで無かつたでも無い、自然人物も類

型的て、是れぞと云ふ個性が發揮されて居ない、養育院送りの前夜の塲など、今少ししんみりと書くと、讀者も「初めて親と云ふ感じがひし〳〵胸に應へた」と云ふお種の心持にほだされたてあらう。第三位の「手紙」は達者な筆だが、少し投げやりの氣味もあつて、たゞ其れまでと云ふ感なきを得ない、しかし如何にも有りさうなとて、現代の中流生活の細君が夫に對し姑に對して懐く心持等がよく見える。姑へ心にもないおべつかの手紙を書き終へてから舌をペロリと出したなぞは感心しない書き方だ。其他の佳作としては尤も「夕飯」を推す、廿八の齡から四十五の現今までひとり娘を女の手一つで育てゝさゝやかに暮す母親と娘とが、是から夕飯と云ふところへ叔父が突然泊めて呉れと云つ來たので、有りたけの飯で濟ますつもりで夕餉に向つて居るところを書いたもので、格別のとは無いのだが何となく考へさせる、面白い、次の「養女」筆は餘り廻らないが、弱々しいお初の性格や、煮え切らない養父の底氣味惡さ等が暗示的に（尤もこれは不用意ながらだらう）書かれたのが案外佳かつた「暗い家」も類型がある「外出前」はヂミな筆だが讀むに從つて味が出る、しかし終の方はくつ付けたやうだ、お小夜の今日艶書なぞ貰ものゝ樣には受取れない。「成らぬ緣」は餘り明白に過ぎる「叔母の家」は捨て難い筆致がところ〳〵あるが、何か點睛が缺けてる樣だ、物足ぬ、「伯父樣」一寸面白い「小作人」は寫生文式によく書けて居る。

應募の作品はだん〳〵よくなつて、一般の標準が高まつて來るので、佳作であつて載せ切れなかつたものも尚ほ多くあります。總じてどこもよく書けて居るのに感心せずには居られない、諸孃が推移はげしき文壇の現狀に注視を怠らず、よくも其の呼吸を呑み込んでゐるのは頼もしきよと思ふ、しかし感服は感服として亦苦言を呈せざるを得ないのは、餘りに流行と云ふ一事に重きを置いて、各自の個性を輕んじたり感情の發露を矯めたりしても不可いのである、感情一本調子で行くもので無いと素よりてあるが、さりとて現實暴露だ實際生活だと云つて、自己の周圍に緣遠きものに倣ふは、ロマンチカルな空想を逞ましくするのと何の異る所も無い、先進大家の努力のあとを見てもさうはして居ない、模倣圖で成功したとすれば即ち失敗だ、選者は不肖と雖も、其作品に現はれて居やうが潜むで居やうが、諸孃の努力の存するところは十分買ひたく思つ

て居る、要は自己の分限を自覺した眞實の作品を出して貰ひたいのである

▲詩は前の增刊から見ると又下落した、殆んど上位に取るものが無い、全體の上に惰氣あふれ晦瞑の狀態にある、實に慘憺たるものであるこれでは詩壇は絕望である。さて『月光の下』は應募中僅かに見るべきものでした『心の野』『夕の沼』共に何の印象も殘らない、『もがりの夜』斯う詩が散文に墮ちてはいけない、一體に詩がダラ／＼となつて散文化するから生命を失つて仕舞ふ。それと共に一つは感情を取扱ふすべを知らぬ詩を作らうとする、まづ流行を見る、單なる感情の詩を作る時でないと、斯う考へる、て其模倣に落ちる、出來損ふのは當然である、諸孃よ、諸孃が美文を作る時は感情の燃ゆるがあるに任し、詩を作る時はその情を强ゐて何處かに追ひやつて了ふとしては駄目である今回は又平素投稿する人にして來なかつた向もある、眞面目に立ちかへつて傑作を寄せて下さい、さうしてこの燒野の原の樣なところから新らしく靑々の春草の萠え出づるよを希つて止まない次第であります。

▲書簡文は通じてます／＼進境が見えて來ます、進步と云つても珍らしいものが增すわけでは無い、たゞ書簡の眞義が發揮されるのです、勿論それには技巧の問題も伴ひますが、根本は生活上に於ける知識、交際上に於ける常識と云つた樣なもので問題とする處は新陳の如何ではなく、其書簡の氣品とか貫目とかゞ優劣を判する標準となるのであります。文體も今日では殆んど口語體になつて來ました、これを見ても今の生活の上に口語體の文章がいかに適せるかゞ分る、と云つて文語體も決して惡くはない、要は作品其のもの、如何に存する、口語體でも上つ辷りのもあれば、文語體て眞情の出るのもあります、今度の一等『雨につけ風につけ』は家庭を持つた姉から妹へいろ／＼實驗して得たことを訓へたもので、筋から云へば今までにもあつたが、力のある情の籠つた筆であります、第二位の『切なる胸を姉樣へ』は奇拔な見處で、又ありさうな事でした『お花の先生へ』は候文でしたが、實に暢達な筆て行き屆いて書けてあります、其の中に女性の柔みが見える、『病みて姉のもとへ』の中の『此秋は轉任に成らうか云々』に田舍の生活が見え、『旅先より妹へ』の『牛込の驛夫は相變らず面白い事云つて云々』に都會生活が覗はれる、こんなのが書簡文の生意の存する處です。

▲論文は他の諸欄に比して甚だしく遜色がある、此の不成蹟は今回ばかりでは無い、勿論論文と云つても徒らに佶屈聱牙な文字ばかり多い舊論文や、新聞の社説の樣なものを諸孃に望まうとするのでは無かつたが概して理路の通つた論文らしいものを見る能はざるは殘念でした、しかし其の代りに一面感情を披瀝した告白文等に於いて優るところがある、今回の如き其方面に於いて女性特有の點を發揮したのを見出した、其中にも第一位の『今の女』は水際離れた逸品で、質から云つても量から云つても慥かに本誌近來の白眉である其質が叙情的ではあるが、啻に一身のみに止まらず、多くの女性を代表した堂々たる大文字なる上に於いて傑出して居ます。『妾が心の告白』は一二等を下ります、『今の女』よりも猶ほ主觀的な叙情文で、獨合點に陷つた點もあり文章も稚氣を脱しないが、又『今の女』とは別樣な而も根本方面を伴らず大膽に告白した處が人を動かします、『母のつとめ』は短いが痛快な文字です、かゝる實際的な方面に着眼する時は隨分好き題材は多からうと思ひます、『無邪氣なれ』『感じたまゝ』はこの次に位しますがいづれも概括的抽象的で特異の點無きを惜みます。思想上の事を論ずるのもいゝがどうかすると卓上論になるから、直ちに實際や材料や引例を豐富にした具體的議論の方が確實でもあり、有益でもあり、人をして首肯せしめやうと思ひます。

▲俳句に就いては何等云ふべきところも持ちませぬ進歩もなければ退歩もない、唯類句が頻々として出るのが煩はしいばかりだ、地賞人賞いづれも格別な句では無いが、共に一寸言へさうで言へないところを言つたと思ふ。其他特異の點と云つても認め難い、俳壇そのものが大して變らない如く本誌も變らないのであらう。

▲日記其他の各欄に入賞になつた方へは豫定の通り賞品を差上ます、發送は一月初旬にいたします、此旨御承知を願ひます。

雜報

●東京だより　東京は十一月に入りて社會的出來事多く候、先づ天長節の目出度き日に次いで、翌る四日は伊藤公の國葬とて天地蕭條、秋雨そゞろに新愁を加へしめ候、五日は又も陸軍大演習とて、天皇陛下那須の平野に行幸遊ばさる。九段には招魂祭ありて花火の響空に轟き、其間には英國のキチナー元帥の入京あり、米國の前大統領ルーズベルト氏亞弗利加の象狩に於てあやまちありしとの誤報傳ると、更に其れは誤りなりしとの正誤の號外出るなど、世の中はなか／＼忙しく候、此間に在りて長夜蘭燈の下、靜に書卷に親まるゝわが誌友諸孃の淸福は欣羨の外なく候、以上。

誌友諸孃の寫眞を望む

我が『女子文壇』の誌友は日に月に增加してゆきますが、此增加してゆく愛讀者諸孃のお寫眞を是非頂きたいものです、婦人は何んな方でも寫眞を持つてゐます、持つてゐる方はお友達にも見せるでせう、誌上のお友達にも見せて下さい、本社は只其紹介の勞を取るのです。其外お持合せの盛粧せる婦人、貴族名士の家庭、女學生の動作、各種紀念會の餘興、世に現れざる名所舊蹟、又は風俗の寫眞などをどし／＼お貸し下さい、寫眞は用濟次第お返しいたします。

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番　（服部製本）

○定期發行分　▲▲▲▲毎月一回（一日定期發行）

一册（一回分）　定價金拾五錢：郵税一錢五厘　計金拾六錢五厘
三册（三月分）　同前金四拾三錢五厘：同四錢五厘　計金四拾八錢
六册（半年分）　同前金八拾四錢：同九錢　計金九拾三錢
十二册（壹年分）　同前金壹圓五拾六錢：同拾八錢　計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲▲▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一册（一回分）　定價金貳拾錢：郵税一錢五厘　計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）　同前金三拾八錢：同三錢　計金四拾壹錢
四册（壹年分）　同前金七拾貳錢：同六錢　計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部▲▲▲▲▲▲十六回

四册（三月分）　定價金六拾三錢五厘：郵税六錢　計金六拾九錢五厘
八册（半年分）　同前金壹圓二拾二錢：同拾貳錢　計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）　同前金貳圓二拾八錢：同二拾四錢　計金貳圓五拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁………
上等	一頁廿五圓	半頁………
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓

部數多く有効に比し無類の割安　一行四拾錢

〆切　毎號十五日前

特約取扱　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社　○神田　博報堂

明治四十二年十一月十二日印刷
明治四十二年十一月十五日發行

定價金貳拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式合社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話［本局六〇七番］　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂